大阪市東住吉区所在

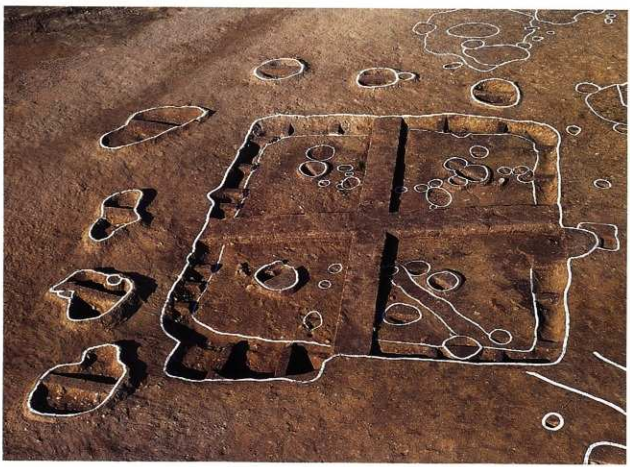
大和川今池遺跡（その5・その6・その7）

－大和川河川改修事業に伴う発掘調査報告書－

２００３年２月

財団法人　大阪府文化財センター

大和川今池遺跡周辺航空写真（南から）



（その５）竪穴住居（南から）

（その６）方形区画溝（遺構30）（南から）

（その６）方形区画溝（遺構30）遺物出土状況（東から）

（その７）187流路内牛骨・土器出土状況（南東から）

（その７）第３面水田面（西から）

序　　文

大和川今池遺跡は、堺市・松原市・大阪市にまたがって所在する遺跡です。

本発掘調査の契機となった大和川の河川改修事業は、洪水から地域住民の命や財産を守るためのものであり、昭和12年以来、継続的に行われています。

現在、私たちが見る大和川の姿は、1704年（宝永元年）に中甚兵衛らによって付け替えられたもので、それまでは、現在とは大きく異なった景観をしていました。

これまでの調査では、難波京朱雀大路の南延伸上となる「難波大道」と呼ばれる古代の官道跡が発見されている他、古墳時代から中世に至る各時代の集落跡や生産遺構が見つかっています。また、周辺には『古事記』や『日本書紀』に登場する「依網池」、「依網屯倉」の存在も想定されており、古代から交通の要衝であり、開発が進んだ地域と考えられます。

今回の発掘調査では、鎌倉時代から室町時代頃の屋敷跡や区画溝、さらに奈良時代末から平安時代頃の集落跡と、水田などの生産遺構を検出しています。また、出土した遺物の中に人面墨画土器や模型カマド・甑、墨書土器や牛骨など、「祭祀」にまつわるものが含まれていることも興味深いものです。さらに、円筒埴輪や、形象埴輪も数多く出土しており、周辺に古墳の存在を想起させるところです。

これらの成果は、大和川今池遺跡およびその周辺地域の歴史的景観を復元するのに欠くことのできない貴重な資料と言えます。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり、多大なご協力を賜わった国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所、同所堺出張所、大阪府土木部南部流域下水道事務所、大阪府教育委員会をはじめとする地元の皆様に深く感謝すると共に、今後とも文化財行政により一層のご理解とご協力を賜わりますよう、お願い致します。

平成15年２月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は大阪市東住吉区矢田に所在する大和川今池遺跡（その５）、（その６）、（その７）の発掘調査報告である。

2．調査は大和川河川改修事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが発掘調査を実施した。

3．調査体制ならびに調査期間は以下の通りである。

大和川今池遺跡（その５）　平成11年４月13日～平成12年３月31日
南部調査事務所　所長：瀬川　健
調査第１係　係長：松岡良憲、主査：村上富喜子、技師：杉本清美、岡本圭司

大和川今池遺跡（その６）　平成12年３月15日～平成13年３月10日
南部調査事務所　所長：瀬川　健
調査第１係　係長：松岡良憲、主査：村上富喜子、技師：杉本清美

大和川今池遺跡（その７）　平成13年３月30日～平成14年３月29日
南部調査事務所　所長：瀬川　健
調査第１係　係長：松岡良憲（平成13年３月31日まで）　橋本高明（平成13年４月１日から）
主査：村上富喜子、技師：杉本清美（平成13年３月31日まで）
技師：佐伯博光（平成13年４月１日から）、専門調査員：松尾　実

大和川今池遺跡（その８　整理作業）平成14年３月20日～平成15年３月10日
南部調査事務所　所長：瀬川　勉（平成14年３月31日まで）　渡邊昌宏（平成14年４月１日から）
調査第１係　係長：橋本高明
主査：村上富喜子、技師：佐伯博光、専門調査員：大庭みゆき

4．報告書掲載の遺構写真については各調査担当者が、遺物写真については南部調査事務所　主任技師立花正治が撮影した。木器・金属製品の保存処理などについては当センター中部調査事務所　主査：山口誠治、専門調査員：仁田恵子が担当した。

5．岩石の同定および埴輪に含まれる砂礫の同定は、奈良県立橿原考古学研究所　奥田尚氏のご指導を得た。

6．（その７）出土の動物骨は、大阪市立大学大学院医学部研究科第２解剖室　安部みき子氏に鑑定および分析をお願いし、ご指導を得た。

7．調査に際し、種実同定を（株）川崎地質に委託し、その成果を本書に掲載した。

8．編集は佐伯が行った。

9．現地の発掘調査において、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所、同所堺出張所、大阪府上木部南部流域下水道事務所、大阪府西部下水道組合、地元自治会の協力を得るとともに、関係各機関ならびに下記の方々のご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

福宜田佳男（文化庁）、塚口義信（堺女子短期大学）、広瀬和雄（奈良女子大学）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、松尾信裕（大阪市教育委員会）、岡本武司（松原市教育委員会）、西口陽一、岩瀬　透、阿部幸一、竹原伸次、宮崎泰史、小浜　成、藤田道子（大阪府教育委員会）、尾上　実

凡　　例

1．発掘調査に伴う地区割及び測量・実測は、平面直角座標系第Ⅵ系による国土座標を基に行っている。また、本書で表示している北は、座標北を指す。

2．測量・実測における標高は、東京湾平均海水面（T．P．）を用いている。

3．調査地区は、大和川の下流側から順に（その５）、（その６）、（その７）と呼称している。なお、平成11年度に（その５）を、平成12年度に（その６）を、平成13年度に（その７）の発掘調査を行った。

4．本報告書では調査区ごとに節を分け、調査成果の記述を行った。

5．遺構番号については、調査時に付した番号をそのまま使用しており、遺物等は別にして原則として遺構番号（アラビア数字）の後に、その遺構の種別（溝、土坑など）を付している。なお、遺構番号のない遺構（たとえば南側川など）は、その限りではない。また、遺構番号は調査区ごとに１から遺構番号を付している。

6．遺物番号は、調査区ごとに通番で表しており、本文・挿図・写真図版の遺物番号は一致する。
なお、写真のみ掲載している遺物は（その５）では422～465。（その６）では、424～442。（その７）では、500～537である。

7．平面図・遺構図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールを表示している。

8．遺物実測図の縮尺は原則として１／４であるが、必要に応じて異なる縮尺を用い、その旨をスケールで表示した。

9．地層の土色及び、遺物観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』1999年版　農林省農林水産技術会議事務局慣習・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

10．引用・参考文献は、各章や節の末尾に記した。

11．遺物の観察・器種分類・記述に関しては、須恵器では大阪府教育委員会発行『陶邑Ⅲ』を、奈良～平安時代の土器では、古代の土器研究会編『都城の土器集成１～３』・『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』を、中世土器では中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』・菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集―文化財論叢』を用いた。

目　　次

序文
例言
凡例
第1章　調査に至る経緯と経過……1
第2章　位置と環境……3
第3章　調査の方法……9
第4章　調査成果
　第1節　（その5）調査成果……11
　　1　調査の方法
　　2　基本層序
　　3　調査成果
　　4　小結
　第2節　（その6）調査成果……107
　　1　調査の方法
　　2　基本層序
　　3　調査成果
　　4　小結
　第3節　（その7）調査成果……235
　　1　調査の方法
　　2　基本層序
　　3　調査成果
　　4　小結
第5章　まとめ……301
第6章　考察
　1　大和川今池遺跡出土の石器の石種とその産地
　　奈良県立橿原考古学研究所　共同研究員（奥田　尚）…303
　2　大和川今池遺跡出土の埴輪の表面に見られる砂礫
　　奈良県立橿原考古学研究所　共同研究員（奥田　尚）…306
　3　大和川今池遺跡（その5・6）発掘調査にかかる種実同定
　　文化財調査コンサルタント（株）　（渡辺正巳）…308
　4　大和川今池遺跡（その7）出土のウシについて
　　大阪市立大学大学院医学研究科　（安部みき子）…315

図　目　次

図１　大和川今池遺跡位置図……1
図２　大和川今池遺跡周辺地形分類図……3
図３　大和川今池遺跡周辺遺跡分布地図……4
図４　大和川今池遺跡既往の調査地位置図……6
図５　調査区位置図……9
図６　地区割り図……10
図７　（その５）調査区位置図……11
図８　調査区南壁断面図……13
図９　第１面・第２面（１：400）……16
図10　第１面・第２面遺構断面図……17
図11　第１面・第２面包含層出土遺物……18
図12　第２－ｂ面（１：400）……19
図13　第２－ｂ面遺構断面図（１溝　他）……21
図14　大河川出土遺物①・西側川出土遺物……26
図15　大河川出土遺物②……27
図16　大河川出土遺物③……28
図17　大河川出土遺物④……29
図18　大河川出土遺物（瓦）・西側川出土遺物（瓦）……30
図19　第２－ｂ面包含層出土遺物……32
図20　第３面（１：400）……33
図21　第３面３井戸・５溝出土遺物……34
図22　第３面３井戸・５溝平・断面図……35
図23　第３面92井戸平・断面図……36
図24　第３面92井戸出土遺物①……38
図25　第３面92井戸出土遺物②……39
図26　第３面309・310井戸平・断面図……40
図27　第３面土坑・流路断面図……41
図28　第３面建物・構列配置図（１：200）……42
図29　第３面建物１・２・12平・断面図……44
図30　第３面建物３・４平・断面図……45
図31　第３面建物５・６平・断面図……46
図32　第３面建物７・８・９・10・11平・断面図……48
図33　第３面建物ピット・構列断面図……51
図34　第３面建物ピット出土遺物……52
図35　第３面包含層出土遺物……54
図36　第４面（１：400）……55
図37　第４面掘立柱建物ａピット平・断面図…56
図38　第４面南側川・東側川断面図……58
図39　第４面南側川平面図……59
図40　第４面（南側川内）遺構301・302遺物出土状況図……61
図41　第４面（南側川内）遺構303・304・308遺物出土状況図……62
図42　第４面（南側川内）遺構312遺物出土状況図…64
図43　第４面（南側川内）遺構300・301出土遺物…66
図44　第４面（南側川内）遺構302出土遺物①…67
図45　第４面（南側川内）遺構302出土遺物②…68
図46　第４面（南側川内）遺構303～312出土遺物…69
図47　第４面（南側川内）遺構313～321出土遺物…70
図48　第４面南側川内出土遺物……71
図49　第４面南側川内出土遺物（瓦）……73
図50　第４面わだち跡平面図……75
図51　第４面わだち跡断面図……76
図52　第４面包含層出土遺物……77
図53　第４面黒茶層出土遺物……78
図54　第５面・第６面（１：400）……79
図55　第５面遺構断面図①（322溝・324溝・327溝他）……81
図56　第５面遺構出土遺物①（322溝・327溝、遺構325　他）……82
図57　第５面遺構断面図②（353溝・354溝・357不定形土坑・358溝　他）……85
図58　第５面遺構断面図③（402溝状土坑・415溝他）……88
図59　第５面・第６面遺構断面図④（158溝・160溝　他）……90
図60　第５面遺構出土遺物②（337井戸・322溝・遺構325　他）……90

図61　第６面竪穴住居平・断面図……94
図62　第６面竪穴住居内ピット断面図……95
図63　第６面竪穴住居内出土遺物……96
図64　第５面・第６面包含層出土遺物……97
図65　石器……98
図66　縄文土器・弥生土器……99
図67　（その６）調査区位置図…… 107
図68　調査区南壁断面図…… 109
図69　第１面（上）・第２面（下）…… 112
図70　耕作土地区画検出状況図…… 113
図71　１井戸・勘溝a・b・c断面図 …… 114
図72　１井戸出土遺物…… 116
図73　第１面・第２面包含層出土遺物…… 116
図74　第２－b面 …… 118
図75　第２－b面２・17・390井戸平・断面図
……120
図76　第２－b面３・５溝平・断面図 …… 121
図77　第２－b面遺構断面図 …… 122
図78　第２－b面遺構出土遺物 …… 123
図79　第２－b面包含層出土遺物 …… 124
図80　第３－a面 …… 126
図81　第３－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図① …… 128
図82　第３－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図② …… 129
図83　第３－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図③ …… 130
図84　第３－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図④ …… 131
図85　第３－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図⑤ …… 132
図86　第３－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図⑥ …… 133
図87　第３－a面方形区画溝（遺構30）断面図…134
図88　第３－a面方形区画溝（遺構30）内建物敷石平・断面図（１：50） …… 137・138
図89　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物①　…… 139
図90　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物②　…… 140
図91　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物③　…… 141
図92　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物④　…… 142
図93　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑤　…… 144
図94　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑥　…… 145
図95　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑦　…… 146
図96　第３－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑧　…… 147
図97　第３－a面13・410井戸出土遺物　…… 149
図98　第３－a面13・14・410井戸平・断面図
……150
図99　第３－a面28・29自然流路断面図 …… 151
図100　第３－a面遺構断面図① …… 152
図101　第３－a面遺構断面図② …… 153
図102　第３－a面遺構出土遺物 …… 154
図103　第３面…… 155
図104　第３面掘立柱建物配置図…… 156
図105　第３面建物１平・断面図…… 157
図106　第３面建物２・４平・断面図…… 159
図107　第３面建物６・15・５平・断面図…… 161
図108　第３面建物３・16・17・18平・断面図
……163
図109　第３面建物12・13・14平・断面図…… 164
図110　第３面建物７・８・10平・断面図…… 165
図111　第３面建物９・11平・断面図…… 166
図112　第３面建物ピット断面図…… 167
図113　第３面建物ピット他出土遺物…… 168
図114　第３面15・491井戸平・断面図 …… 169
図115　第３面491井戸出土遺物① …… 171
図116　第３面491井戸出土遺物② …… 172
図117　第３面491井戸出土遺物③ …… 173
図118　第３面492・495井戸平・断面図…… 174

図119 第3面492・495井戸出土遺物…… 175
図120 第3面遺構断面図…… 176
図121 第3面包含層出土遺物…… 177
図122 第4－a面 …… 179
図123 第4－a面畦畔・不定形土坑・北河川断面図 …… 180
図124 第4－a面わだち・足跡平面図 …… 182
図125 第4－a面包含層出土遺物 …… 183
図126 第4面・第5面・第6面…… 185
図127 第4面南側川（遺構500）遺物出土配置図 ……187
図128 第4面南側川（遺構500）断面図 …… 188
図129 第4面南側川（遺構500）護岸他断面図 ……189
図130 第4面南側川（遺構500）内土器出土状況図① ……190
図131 第4面南側川（遺構500）内遺物出土状況図② ……191
図132 第4面南側川(遺構500)内出土遺物①…193
図133 第4面南側川(遺構500)内出土遺物②…194
図134 第4面南側川(遺構500)内出土遺物③…196
図135 第4面南側川(遺構500)内出土遺物④…197
図136 第4面南側川(遺構500)内出土遺物⑤…198
図137 第4面相当面遺構断面図…… 199
図138 第5面相当面遺構断面図①…… 200
図139 第5面相当面遺構断面図②…… 201
図140 第5面相当面遺構出土遺物…… 202
図141 第4・5面黒茶層出土遺物…… 203
図142 古墳平・断面図…… 204
図143 古墳・第6面出土遺物…… 205
図144 石器…… 206
図145 石器…… 207
図146 石器…… 208
図147 縄文土器・弥生土器…… 209
図148 形象埴輪（その5出土）…… 210
図149 円筒埴輪（その5出土）…… 212
図150 朝顔形埴輪（その5出土）…… 213
図151 円筒埴輪（その6出土）…… 214
図152 断続ナデの各技法［中島 1992］…… 220
図153 断続ナデ技法の細別…… 221
図154 断続ナデ各技法の実測図…… 221
図155 試掘調査区位置図・断面図…… 225
図156（その7）調査区位置図 …… 235
図157 東西土層断面図…… 237·238
図158 南北土層断面図…… 239·240
図159 141溝・70溝・148溝断面図（上） 第1面上面 平面図（下）…… 243
図160 第1面…… 245
図161 140井戸平・断面図 …… 246
図162 163溝・70溝・8溝・1溝断面図 ……249
図163 4井戸・50井戸・76井戸・94井戸平・断面図 …… 250
図164 5井戸・6井戸・132井戸・188井戸平・断面図 …… 251
図165 第1面上層他出土遺物…… 252
図166 70溝・141溝出土遺物 …… 253
図167 70溝出土遺物…… 254
図168 1溝・148溝・163溝出土遺物…… 255
図169 8溝・86溝出土遺物…… 256
図170 3井戸・4井戸・5井戸・9井戸出土遺物 ……257
図171 6井戸・11井戸・50井戸出土遺物…… 258
図172 50井戸・76井戸・132井戸・133井戸・147井戸・151井戸・188井戸出土遺物 ……259
図173 140井戸出土遺物 …… 260
図174 第1層出土遺物…… 261
図175 第1面上層他・141溝出土瓦 …… 262
図176 1溝・8溝・70溝・141溝出土瓦 …… 263
図177 3井戸・50井戸・76井戸・132井戸出土瓦 ……264
図178 182土坑平・断面図 …… 265
図179 第2面…… 266
図180 127土坑・126土坑・155溝平・断面図‥ 267
図181 182土坑・149凹み・第2層出土遺物‥ 268
図182 水口3・4断面図…… 269

図183 土器3出土状況図…… 270
図184 第3面…… 271
図185 161流路断面図 …… 273
図186 161流路内土器だまり平・断面図 …… 274
図187 出土牛骨の部位…… 275
図188 187流路内牛骨平・断面図 …… 276
図189 153流路出土遺物 …… 277
図190 153流路出土遺物 …… 278
図191 161流路出土遺物 …… 279
図192 187流路・161流路出土遺物…… 280
図193 161流路出土遺物 …… 281
図194 161流路出土遺物 …… 282
図195 161流路出土遺物 …… 283
図196 161流路出土遺物 …… 284
図197 161流路・190流路出土遺物・土器3‥ 285
図198 第4面…… 287
図199 第5面…… 288
図200 193溝断面図 …… 289
図201 187流路・190流路断面図…… 289
図202 192土坑・193溝・196溝・凹み・第5層出土遺物 …… 290
図203 192土坑内土器出土状況図 …… 290
図204 竪穴住居の位置と試料「D」採取地点…310
図205 南側川（遺構500）の位置 …… 311
図206 南側川（遺構500）断面図と試料採取位置…313
図207 出土牛骨部位…… 316

写　　真

写真1　大和川今池遺跡周辺（1948年）…… 8
写真2　種実化石顕微鏡写真…… 314

表　目　次

表1　遺跡分布地図　遺跡名一覧……5
表2　既往の調査地・刊行図書一覧……7
表3　（その5）出土遺物観察表①…… 102
表4　（その5）出土遺物観察表②…… 103
表5　（その5）出土遺物観察表③…… 104
表6　（その5）出土遺物観察表④…… 105
表7　円筒埴輪観察表（その5）…… 216
表8　円筒埴輪観察表（その6）…… 217
表9　大和川今池遺跡出土円筒埴輪のグルービング……219
表10　（その6）出土遺物観察表①…… 231
表11　（その6）出土遺物観察表②…… 232
表12　（その6）出土遺物観察表③…… 233
表13　（その6）出土遺物観察表④…… 234
表14　（その7）出土遺物一覧表①…… 293
表15　（その7）出土遺物一覧表②…… 294
表16　（その7）出土遺物一覧表③…… 295
表17　（その7）出土遺物一覧表④…… 296
表18　（その7）出土遺物一覧表⑤…… 297
表19　（その7）出土遺物一覧表⑥…… 298
表20　（その7）出土遺物一覧表⑦…… 299
表21　（その7）出土遺物一覧表⑧…… 300
表22　大和川今池遺跡出土の埴輪の表面に見られる砂礫……306
表23　大和川今池遺跡種実組成表…… 313
表24　動物遺体の出土表…… 316
表25　上顎骨計測表…… 316
表26　下顎骨計測表…… 316

図 版 目 次

図版1　第1面・第2面
1　第1面　鋤溝
2　第2面　鋤溝
図版2　第2－b面
3　大河川全景（南から）
4　大河川断面（東から）
5　大河川　石鏃出土状況
6　大河川　石臼出土状況
7　大河川　石臼出土状況
図版3　第3面
8　第3面全景（南から）
9　3井戸・5溝（東から）
10　92井戸（西から）
11　309井戸（南から）
12　310井戸（南西から）
図版4　第4面
13　第4面全景（南から）
14　第4面東側全景（南から）
図版5　第4面
15　（南側川内）遺構301・302全景（東から）
16　（南側川内）遺構302全景（南東から）
図版6　第4面
17　（南側川内）遺構303・304・308　埴輪出土状況（南東から）
18　（南側川内）遺構303　埴輪出土状況（南から）
19　（南側川内）遺構304　埴輪出土状況（北から）
20　（南側川内）遺構308　埴輪出土状況（南東から）
21　（南側川内）遺構308　埴輪出土状況（東から）
22　（南側川内）遺構307・314　土器出土状況（東から）
図版7　第4面
23　（南側川内）遺構312　土器出土状況（南東から）
24　（南側川内）遺構313　土器出土状況（東から）
25　（南側川内）遺構315　土器出土状況（西から）
26　（南側川内）遺構316　土器出土状況（北東から）
27　（南側川内）遺構317　土器出土状況（南から）
28　（南側川内）遺構318　土器出土状況（南から）
図版8　第4面
29　わだち跡全景（南から）
30　わだち跡（南から）
図版9　第5面
31　第5面全景（南東から）
32　第5面全景（南から）
33　349溝断面（西から）
34　352・353溝断面（西から）
図版10　第6面
35　竪穴住居（南から）
36　ピット6－1柱穴断面（南西から）
37　ピット6－2柱穴断面（南西から）
38　ピット6－3柱穴断面（南西から）
39　ピット6－4柱穴断面（北西から）
図版11　出土遺物（1）
第1面　包含層、第2面　包含層、第2－b面　大河川
1　第1面　包含層、第2面　包含層
2　第2－b面　大河川
図版12　出土遺物（2）
第2－b面　大河川・西側川
3　国産陶磁器

4　輸入陶磁器
図版13　出土遺物（3）
第2－b面　大河川・西側川
5　近世遺物
6　中世遺物
図版14　出土遺物（4）
第2－b面　大河川
図版15　出土遺物（5）
第2－b面　大河川、第1～2－b面　包含層
7　第2－b面　大河川
8　第1～2－b面　包含層
図版16　出土遺物（6）
第3面　92井戸・3井戸・5溝・建物1・包含層
9　92井戸
10　3井戸・5溝
11　建物1
12　包含層
図版17　出土遺物（7）
第4面　南側川
13　（南側川内）遺構300～303・307・312・316・318・321、南側川
14　（南側川内）遺構302・303
図版18　出土遺物（8）
第4面　南側川・包含層・黒茶層（整地土）
15　（南側川内）遺構302・南側川
16　包含層
17　南側川
18　黒茶層（整地土）・包含層
19　黒茶層（整地土）・包含層
図版19　出土遺物（9）
第5面　遺構、第6面　竪穴住居
20　第5面　157・160・161溝
21　第5面　322・327溝
22　第6面　竪穴住居
図版20　出土遺物（10）
第5面　遺構、第4～6面　包含層
23　第5面　363土坑・399溝・402溝状土坑
24　第6面　包含層
25　第5面　322溝
26　第4～6面　包含層
図版21　出土遺物（11）　石器
27　石鏃・石鏃未成品・剥片
28　スクレーパー・楔形石器
図版22　出土遺物（12）　縄文土器・弥生土器
29　縄文土器
30　弥生土器
図版23　出土遺物（13）　形象埴輪・朝顔形埴輪
図版24　出土遺物（14）　円筒埴輪
図版25　出土遺物（15）　瓦
図版26　出土遺物（16）
第3面　92井戸、第4面　南側川、鋳造関連
31　第3面　92井戸
32　第4面　南側川
33　鋳造関連
図版27　第2面・第2－b面
1　第2面　鋤溝（東から）
2　第2面　1井戸（南から）
3　第2－b面　2井戸（北から）
4　第2－b面　3溝（西から）
5　第2－b面　3溝（西から）
図版28　第3－a面
6　第3－a面全景（南東から）
7　方形区画溝（遺構30）南側（南から）
8　方形区画溝（遺構30）西側（南西から）
9　方形区画溝（遺構30）北側（東から）
10　方形区画溝（遺構30）セクション1断面（東から）
図版29　第3－a面
11　方形区画溝（遺構30）　軒平瓦出土状況（北東から）
12　方形区画溝（遺構30）　青磁碗出土状況（西から）
13　方形区画溝（遺構30）　鬼瓦出土状況（南から）

14　方形区画溝（遺構30）　瓦質土器出土状況（東から）
15　方形区画溝（遺構30）　備前擂鉢出土状況（北から）
16　方形区画溝（遺構30）　土器出土状況（南から）

図版30　第３－a面・第３面
17　第３－a面　根石１出土状況（南から）
18　第３－a面　根石７と木１出土状況（北東から）
19　第３－a面　14井戸（東から）
20　第３－a面　410井戸（南から）
21　第３面　491井戸（東から）
22　第３面　491井戸　曲物検出状況（東から）
23　第３面　492井戸　銭出土状況（南東から）
24　第３面　492井戸　銭出土状況（北西から）

図版31　第４－a面
25　第４－a面全景（南東から）
26　足跡（東から）
27　わだち・足跡（南から）

図版32　第４面
28　南側川（遺構500・504）全景（北東から）
29　南側川（遺構500）　西側セクション（西から）

図版33　第４面
30　南側川（遺構500）　西側セクション断面（西から）
31　南側川（遺構500）　西側セクション断面（西から）
32　南側川（遺構500）　墨書土器出土状況（北西から）
33　南側川（遺構500）　墨書土器出土状況（北東から）
34　南側川（遺構500）　土器出土状況（南東から）
35　南側川（遺構500）　土器出土状況（西から）
36　南側川（遺構500）　土器出土状況（北東から）
37　南側川（遺構500）　埴輪出土状況（東から）

図版34　第６面
38　第６面全景（南から）
39　古墳（北東から）
40　古墳（東から）
41　古墳周溝（505溝）内　土器出土状況（南から）
42　古墳周溝（505溝）内　土器出土状況（北から）

図版35　出土遺物（１）
第１面　包含層、第２－b面　２井戸・３溝
1　第１面　包含層
2　第２－b面
3　第２－b面　２井戸
4　第２－b面　３溝

図版36　出土遺物（２）
第３－a面　方形区画溝（遺構30）

図版37　出土遺物（３）
第３－a面　方形区画溝（遺構30）

図版38　出土遺物（４）
第３－a面　方形区画溝（遺構30）

図版39　出土遺物（５）
第３－a面　方形区画溝（遺構30）

図版40　出土遺物（６）
第３－a面　方形区画溝（遺構30）

図版41　出土遺物（７）
第３－a面　方形区画溝（遺構30）
5　第３－a面
6　方形区画溝（遺構30）
7　方形区画溝（遺構30）

図版42　出土遺物（８）
第３－a面　13井戸・410井戸
8　13井戸

9　410井戸
図版43　出土遺物（9）
第3面　491井戸
図版44　出土遺物（10）
第3面　491井戸
図版45　出土遺物（11）
第3面　492井戸・495井戸
10　492井戸
11　495井戸
図版46　出土遺物（12）
第3面　建物7・268土坑・ピット・包含層、第4－a面　包含層
12　建物7
13　268土坑
14　263・214・269ピット
15　第3面　包含層、第4－a面　包含層
16　第4－a面　包含層
図版47　出土遺物（13）
第4面　南側川（遺構500）
図版48　出土遺物（14）
第4面　南側川（遺構500）
図版49　出土遺物（15）
第4・5面　黒茶層、516自然流路、第6面　古墳周溝（505溝）、縄文土器・弥生土器
17　第4・5面　黒茶層
18　第5面　516自然流路
19　第6面　古墳周溝（505溝）
20　縄文土器・弥生土器
図版50　出土遺物（16）　石鏃・石槍・石槍未成品
図版51　出土遺物（17）　二次加工のある剥片・楔形石器・剥片・石核
図版52　出土遺物（18）　円筒埴輪
図版53　第1面
1　橋脚下南側1全景（北から）
2　70溝・141溝・148溝（西から）
3　橋脚下北側全景（南から）
図版54　第1面
4　148溝　瓦器椀出土状況（西から）
5　橋脚外全景（南西から）
図版55　第1面
6　4井戸（南から）
7　5井戸（西から）
図版56　第1面
8　6井戸（北東から）
9　8溝（南から）
図版57　第1面
10　50井戸（北から）
11　76井戸（東から）
図版58　第1面
12　76井戸　編み物出土状況
13　86溝（北から）
図版59　第1面
14　94井戸（南から）
15　132井戸（北から）
図版60　第1面
16　140井戸　方形木枠・土器出土状況（東から）（1）
17　140井戸　方形木枠・土器出土状況（東から）（2）
図版61　第1面
18　140井戸　方形木枠・土器出土状況（東から）（3）
19　140井戸　方形木枠・曲げ物出土状況（東から）
図版62　第1面・第2面
20　第1面　188井戸（西から）
21　第2面　橋脚外全景（西から）
図版63　第2面
22　橋脚外全景（南西から）
23　橋脚下北側全景（西から）
図版64　第3面
24　橋脚下南側1全景（北から）
25　橋脚下南側2全景（西から）
26　橋脚下北側全景（南西から）
図版65　第3面
27　橋脚外全景（北東から）

28　153流路（北から）
図版66　第2面・第3面
29　第2面　182土坑　土器出土状況（南から）
30　第3面　161流路内土器溜まり（南から）（1）
図版67　第3面
31　161流路内土器溜まり（南から）（2）
32　187流路内牛骨・土器出土状況（南から）
図版68　第3面
33　187流路内牛骨　頭骨出土状況（西から）
34　187流路内牛骨　肋骨等出土状況（東から）
図版69　第3面・第4面
35　第3面　187流路内牛骨　肩胛骨等出土状況（南西から）
36　第4面　橋脚外全景（南から）
図版70　第4面・第5面
37　第4面　橋脚下南側全景（西から）
38　第5面　橋脚下南側1全景（北から）
39　第5面　橋脚下南側2全景（西から）
図版71　第5面
40　橋脚外　西半部全景（南西から）
41　橋脚外　東半部全景（南から）
図版72　第5面
42　192土坑内弥生土器出土状況　遠景（南から）
43　192土坑内弥生土器出土状況　近景（北東から）
図版73　出土遺物（1）
図版74　出土遺物（2）
図版75　出土遺物（3）
図版76　出土遺物（4）
図版77　出土遺物（5）
図版78　出土遺物（6）
図版79　出土遺物（7）
図版80　出土遺物（8）
図版81　出土遺物（9）
図版82　出土遺物（10）
図版83　出土遺物（11）
図版84　出土遺物（12）
図版85　出土遺物（13）
図版86　出土遺物（14）
図版87　出土遺物（15）
図版88　出土遺物（16）
図版89　出土遺物（17）
図版90　出土遺物（18）
図版91　出土遺物（19）
図版92　出土遺物（20）
図版93　出土遺物（21）
図版94　出土遺物（22）
図版95　出土遺物（23）
図版96　出土遺物（24）
図版97　出土遺物（25）
図版98　出土遺物（26）
図版99　出土遺物（27）
図版100　出土遺物（28）
図版101　出土遺物（29）
図版102　出土遺物（30）

第１章　調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯（図１）

大和川今池遺跡は、1977年に行われた「大和川下流南部流域下水道今池処理場」建設に伴う試掘調査で認知された遺跡である。遺跡の範囲は、松原市天美西を中心とし、堺市常磐町から大阪市東住吉区矢田に至る、南北約１km、東西約1.45kmに広がる。

当遺跡の発掘調査は、1978年～1980年にかけて、大和川今池遺跡調査会による調査が行われ、1980年以降、松原市教育委員会と大阪府育委員会による発掘調査が行われている。

本書に収録している大和川今池遺跡（その５）（その６）（その７）は、遺跡内を流れる大和川の河川改修事業に伴う発掘調査である。

当遺跡内を流れる、この大和川は流域面積が1,070km²、氾濫区域内の人口は約400万人、資産は約69兆円にのぼる。このため、一度水害が発生すれば、昭和57年８月の台風10号及び台風９号崩れの低気圧による氾濫に見られるような、甚大な被害につながる恐れがあるため、国土交通省では水の被害から人や資産を守るため、河川改修事業を行っている。

大和川の河川改修事業の先駆けとなったのは、昭和６年に起こった亀の瀬の地滑りに対して行われた、昭和８年からの大和川応急工事である。その後、昭和12年に内務省（当時）による直轄事業として、

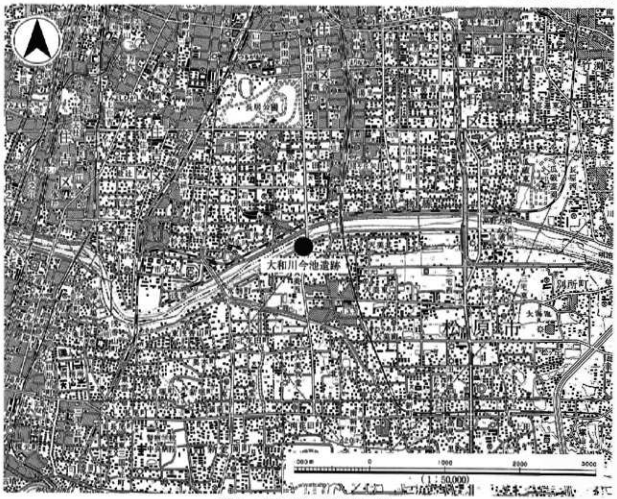


図１　大和川今池遺跡位置図

本格的な改修工事が始まった。

昭和41年には、新河川法に基づいて「大和川水系工事実施基本計画」が制定され、さらに昭和51年には「工事実施基本計画」を改定し、安全度の向上を図っている。

以降、計画的に改修工事を行っているが、平成７年度に堺市常磐町３丁から松原市天美西を経て、大阪市住吉区矢田に至る高水敷部分が改修工事の対象となった。

対象地となった高水敷部分は、大和川今池遺跡として周知されている遺跡内であり、大和川河川内であるこの高水敷部分にも埋蔵文化財の包蔵が予想された。このため、建設省　近畿地方建設局　大和川工事事務所（現　国土交通省　近畿地方整備局　大和川工事事務所）から、大阪府教育委員会に対して通知がなされ、両者で協議が行われた。この結果、平成７年度に左岸河川敷部分を対象とした試掘調査が大阪府教育委員会で実施され、遺構・遺物の存在が確認された範囲内において、本調査の必要があるとされた。

これを受けて、建設省　近畿地方建設局　大和川工事事務所と大阪府教育委員会および、大阪府文化財調査研究センター（現　財団法人　大阪府文化財センター）の間で協議が行われ、平成８年度以降下流から上流へと順次、発掘調査を実施する事となった。

平成８年度に（その１）、平成９年度に（その２）、平成10年度に（その３）・（その４）、平成11年度に（その５）、平成12年度に（その６）の発掘調査が行われている。平成12年度には（その６）の発掘調査と併せて、改修事業計画地内である行基大橋から東部分の確認調査が行われ、当初の遺跡範囲よりも、さらに東へ遺構・遺物の包蔵が広がる事が確認された。このため、当該部分についても発掘調査が必要とされ、平成13年度に（その７）として発掘調査を行った。

今回、本書が関わる大和川今池遺跡の発掘調査は、（その５）・（その６）・（その７）についてである。

経過

大和川今池遺跡（その５）は、前述した調査原因に起因し当センターは、平成11年４月に、建設省　近畿地方建設局　大和川工事事務所と平成11年４月から平成12年３月までの期間で受託契約を結び、発掘調査を実施した。

大和川今池遺跡（その６）は、平成12年３月に、建設省　近畿地方建設局　大和川工事事務所と平成12年３月から平成13年３月までの期間で受託契約を結び、発掘調査及び、改修事業計画地内である行基大橋から東部分の確認調査を行った。

大和川今池遺跡（その７）は、平成12年度の確認調査の結果を踏まえて、平成13年３月末に国土交通省　近畿地方整備局　大和川工事事務所と平成13年３月から平成14年３月までの期間で受託契約を結び、発掘調査と大和川今池遺跡（その５）（その６）の遺物整理作業を実施した。

平成13年度末には、国土交通省　近畿地方整備局　大和川工事事務所と平成14年３月から平成15年３月までの期間で受託契約を結び、平成11年度から平成13年度にかけて発掘調査を実施した、大和川今池遺跡（その５）（その６）（その７）の整理作業を行い、併せて大和川今池遺跡（その５）（その６）（その７）の報告書の作成を行った。

参考文献
『大和川工事事務所　事業案内　　大和川』　国土交通省　近畿地方整備局　大和川工事事務所

第２章　位置と環境

地理的環境（図２）

大和川今池遺跡は、南北約１km、東西約1.45kmで堺市常磐町・松原市天美西・大阪市東住吉区矢田の３市にまたがる遺跡である。

当遺跡は、日下雅義氏の分類によると、東を中位段丘・沖積段丘に、西を中位段丘に挟まれた、旧西除川の氾濫原から自然堤防上に位置する。この中位段丘は、「古天野川」の下刻により形成されたものである。その後、この中位段丘の間に形成された谷を埋めて、旧西除川の東側に沖積段丘が形成され、次第に氾濫原や自然堤防が形作られていった。

６世紀後半から７世紀初頭頃に狭山池が「古天野川」の開析によって形作られた谷底平野を、堰き止め造られた。この狭山池からの主たる水路が西除川であり、東除川である。ちなみに東除川は、旧流路を利用して造られた運河であることが、記録等から知られている。

旧西除川は、1704年に大和川が付け替えられるまで狭山池から北流し、平野川と合流してから天満川と合わさり、大阪湾へ注ぎ込んでいた。

現在、本遺跡内を流れる大和川は、笠置山地に源をもつ初瀬川に発し、大和盆地内に流れる川の水を

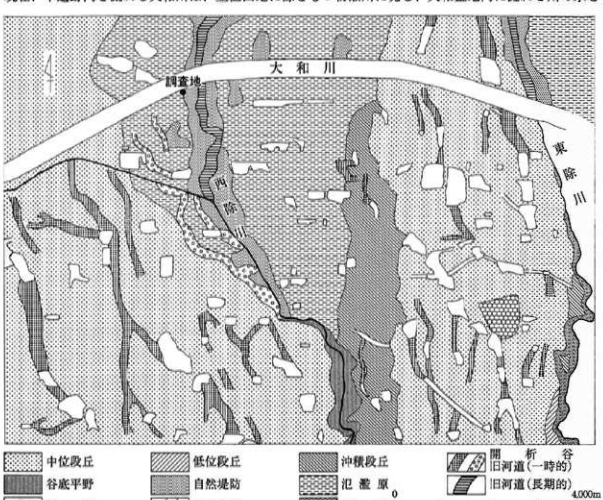


図２　大和川今池遺跡周辺地形分類図

図３　大和川今池遺跡周辺遺跡分布地図

集め、亀の瀬を経て河内平野へと入る。その後、石川などの大小支流を合わせ、通称「浅香の七曲」で浅香山台地の裾をめぐった後、大阪湾へ注ぎ込んでいる。しかし、かつて大和川は亀の瀬を経て、石川と合流した後、玉串川・平野川などを分流させ、長瀬川・八尾川・寺川などと呼ばれながら、放出あたりで玉串川や淀川の分流を合わせ、淀川に注いでいた。

それが現在の様な川筋に固定されたのは、江戸時代1704年（宝永元年）からである。この大和川の付け替え工事は、中甚平衛らによってわずか８ヶ月余りの日数で行われたと記録に残っている。付け替えによって『続日本紀』にも登場し、中世・近世を通して頻繁に起こっていた洪水が減少した点では、優れた治水事業であったが、新しく大和川の川筋にあたる土地に田畑を所有し、旧西除川や溜池から水を受給していた人々からは大きく反対を受けた。しかし、付け替え後1064町歩の新田が開発され綿作が普及したことによる、農業構造の変化は、以後の発展に大きく寄与しているであろう。

歴史的環境（図３　表１）

日本書紀には、崇神天皇「依網の池を造りき」や、推古天皇（607年）「且河内の國に戸苅の池、依網の池を作りき」という記事が見られる。この依網池は、当遺跡の東に推定されており、仁徳天皇（355年）「依網屯倉阿弭古」の記事に出てくる依網屯倉も当遺跡の周辺に伝承として残されている。

また、仁徳天皇(325年）に出てくる大道、難波大道が当遺跡内を南北に位置しているなど、当遺跡周辺は古代より重要な地域であったことが窺われる。

当遺跡の周辺では、この様な文献に見られるものの他、発掘調査などで明らかになっている遺跡が『大阪府文化財分布地図（2001年３月）』で数多く見られる。

旧石器時代では、国府型ナイフ形石器と共に住居跡の可能性がある竪穴状遺構を検出した堺市南花田遺跡や大阪市長原遺跡・瓜破遺跡・大堀遺跡・遠里小野遺跡・住吉大社境内遺跡・松原市清堂遺跡・上田遺跡等があげられる。

表１　遺跡分布地図　遺跡名一覧

1	二本松古墳	22	狐塚古墳跡	43	布忍遺跡
2	弁天塚古墳	23	北花田遺跡	44	清水遺跡
3	［府指］史　若松浄土寺境内遺跡	24	依網池跡	45	南新町遺跡
4	殿辻遺跡	25	東浅香山遺跡	46	河合遺跡
5	寺岡遺跡	26	我孫子城跡伝承地	47	丹比大溝
6	南住吉遺跡	27	山之内遺跡	48	難田遺跡
7	新堀城跡伝承地	28	［市規］史　我孫子鋳物師ゆかりの地	49	東花田遺跡
8	難波大道跡	29	遠里小野遺跡	50	船堂東遺跡
9	矢田部遺跡	30	東浅香山西遺跡	51	南花田遺跡
10	田辺東之町遺跡	31	大豆塚古墳	52	新金岡３丁遺跡
11	酒倉塚古墳	32	奥本町遺跡	53	蔵前町遺跡
12	矢田２丁目所在遺跡	33	今池遺跡	54	長尾遺跡
13	照ヶ丘矢田遺跡	34	五箇荘東遺跡	55	金岡公園遺跡
14	中臣須牟知神社境内遺跡	35	長尾街道（大津道）	56	新金岡更池北遺跡
15	住道寺跡	36	船堂町遺跡	57	新金岡更池遺跡
16	［市規］史　住道廃寺跡	37	我堂南遺跡	58	長曽根遺跡
17	old 遠寺東遺跡	38	高木遺跡	59	［府規］重美　石造地蔵菩薩立像
18	old 遠寺遺跡	39	下高野街道	60	竹内街道（丹比道）
19	池内遺跡	40	堀遺跡	61	南榎町遺跡
20	天美西遺跡	41	天美南遺跡		
21	大和川今池遺跡	42	東新町遺跡		

縄文時代では、大阪市山ノ内遺跡・岸ノ里遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡、堺市榎町遺跡等があげられ、おおむね縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土している。

弥生時代では、堺市北花田遺跡・南花田遺跡があり、北花田遺跡からは土坑と多数の弥生土器片が出土している。また、上町台地の微高地に大阪市遠里小野遺跡・住吉大社境内遺跡・南住吉遺跡・東浅香山遺跡等が、瓜破台地の先端に位置する大阪市瓜破遺跡・瓜破北遺跡・長原遺跡・桑津遺跡・加美遺跡がある。この他、堺市田出井遺跡・三国ヶ丘遺跡、松原市天美南遺跡・城蓮寺遺跡・河合遺跡・布施遺跡等があげられる。

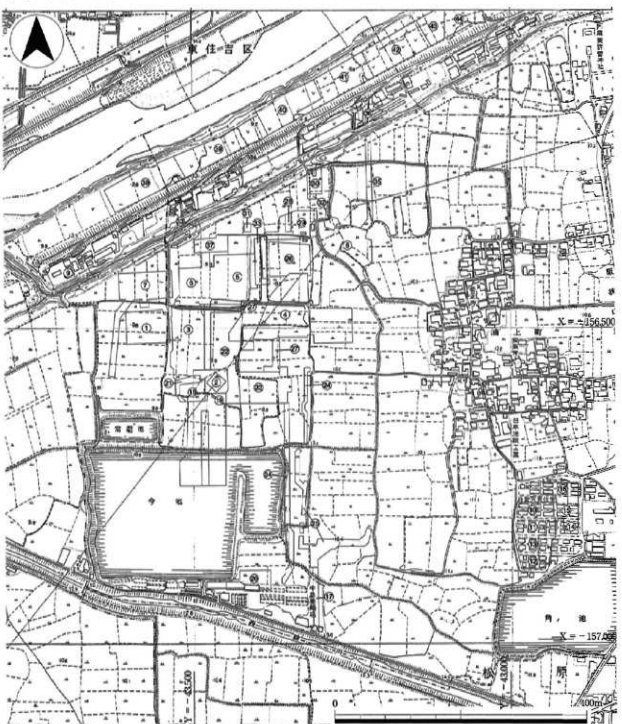


図4　大和川今池遺跡既往の調査地位置図

古墳時代になると遺跡数が格段に増加し、４世紀～６世紀前半頃の古墳が約150基以上見つかった長原古墳群、円筒埴輪や各種の形象埴輪等が出土した塚ノ本古墳・加美古墳群・瓜破北遺跡・喜連東遺跡や、百舌鳥古墳群の北側に位置する堺市反正天皇陵・天王古墳・鉾山古墳、松原市新堂遺跡・三宅遺跡・上田町遺跡等がある。

奈良・平安時代では、大阪市山之内遺跡・津守廃寺・瓜破廃寺、堺市新金岡３丁遺跡・北三国ヶ丘遺跡・南花田遺跡等があげられる。南花田遺跡からは、人面墨画土器や斎串が出土している。また、古道としては、前述した難波大道が確認されている他、長尾街道があげられる。

鎌倉・室町時代以降では、長曽根遺跡・新金岡町遺跡・北三国ヶ丘遺跡・南花田遺跡・高木遺跡・五箇庄東遺跡・寺岡砦遺跡・我孫子城伝承地跡・新堀城跡伝承地等があげられる。

既往の調査（図４　表２）

大和川今池遺跡の既往の調査は、当センター『大和川今池遺跡（その１）（その２）』で詳しく述べられており、『大和川今池遺跡（その３）（その４）』でも調査位置や刊行図書などを掲載している、そちらをご覧頂きたい。なお今回、既往の調査地に、本書で収録している（その５）（その６）（その７）調査区を付け加えた位置図を、昭和34年測量の3,000分の１の地形図に、国土座標を基に重ね合わせた図面を掲載した。

参考文献　『大阪春秋』第40号　大阪春秋社
『大和川工事事務所　事業案内　大和川』　国土交通省　近畿地方整備局　大和川工事事務所
『新版　古代の日本　⑤近畿Ⅰ』　角川書店

表２　既往の調査地・刊行図書一覧

番号	収録書名	出版年	編集機関
①～⑦	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その１	1978年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川・今池遺跡－第１地区発掘調査報告－』	1979年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その２	1979年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その３	1979年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その４	1979年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川・今池遺跡Ⅱ－第３・４・５発掘調査報告－』	1980年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その５	1980年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その６	1980年	大和川・今池遺跡調査会
	『大和川・今池遺跡Ⅲ－第６地区・「古道」発掘調査報告書－』	1981年	大和川・今池遺跡調査会
⑧⑨⑩⑪	『大和川今池遺跡発掘調査概要』	1983年	大阪府教育委員会
	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和59年度	1984年	松原市教育委員会
⑫⑬⑭	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅱ』	1985年	大阪府教育委員会
⑮	『大和川・今池遺跡発掘調査概要・Ⅲ』	1986年	大阪府教育委員会
	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和60年度	1986年	松原市教育委員会
	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和61年度	1987年	松原市教育委員会
⑯	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅳ』	1988年	大阪府教育委員会
⑰⑱	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅴ』	1988年	大阪府教育委員会
	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和62年度	1988年	松原市教育委員会
㉑	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和63年度	1989年	松原市教育委員会
⑳、㉑、㉒	『大和川・今池遺跡発掘調査整理概要・Ⅵ』	1990年	大阪府教育委員会
⑳、㉑、㉒	『大和川今池遺跡発掘調査整理概要・Ⅶ』	1990年	大阪府教育委員会
㉒	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅷ』	1991年	大阪府教育委員会
⑳、㉑、㉒	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅸ』	1992年	大阪府教育委員会
	『大和川今池遺跡・Ⅹ』　『南花田遺跡・Ⅵ』	1992年	大阪府教育委員会
㉒	『大和川今池遺跡発掘調査概要・ⅩⅠ』　『清堂遺跡発掘調査概要・Ⅰ』	1993年	大阪府教育委員会
㉒	『大和川今池遺跡発掘調査概要・ⅩⅡ』	1995年	大阪府教育委員会
⑳、㉑、㉒	『大和川今池遺跡発掘調査概要・ⅩⅢ』	1996年	大阪府教育委員会
㉒	『大和川今池遺跡発掘調査概要・ⅩⅣ』	1997年	大阪府教育委員会
⑳、㉑、㉒	『大和川今池遺跡』	1998年	大阪府教育委員会
㉒	『大和川今池遺跡埋蔵物公資料』	1998年	(財)大阪府文化財調査研究センター
⑳、㉑	『大和川今池遺跡（その１・その２）』	2000年	(財)大阪府文化財調査研究センター
	『大和川今池遺跡埋蔵物公資料』	2000年	(財)大阪府文化財調査研究センター
⑫、⑬	『大和川今池遺跡（その３・その４）』	2001年	(財)大阪府文化財調査研究センター
⑭、⑮、⑯	『大和川今池遺跡（その５・その６・その７）』（本書）	2002年	(財)大阪府文化財センター

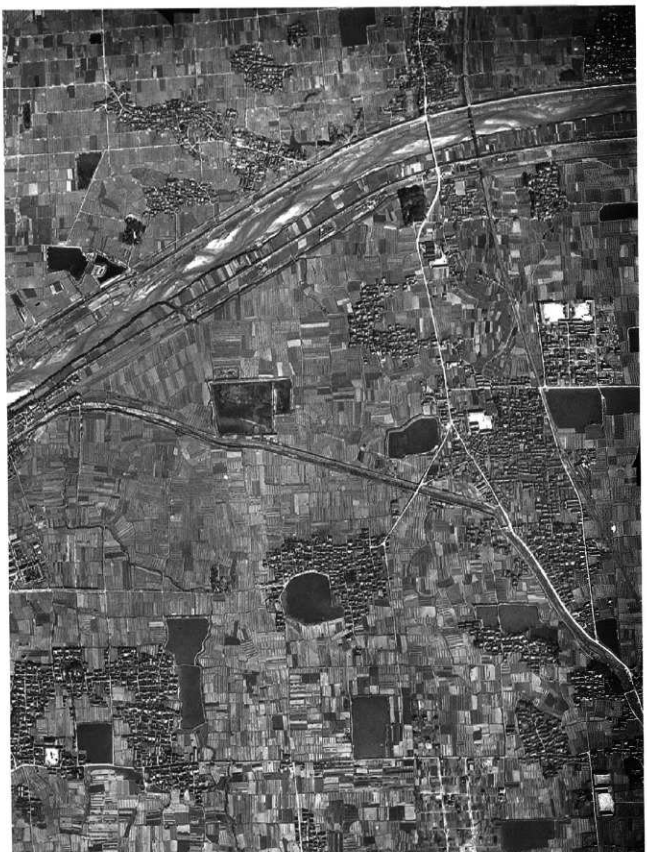


写真1　大和川今池遺跡周辺（1948年）

第３章　調査の方法

本書で報告する大和川今池遺跡の調査は、現地調査を３ヶ年、遺物整理を２ヶ年実施しており、調査時の状況や調査担当者が異なっている。また、各調査区で工程や諸条件によって、便宜上調査区を分けて呼称し、本文中でも使用している等（その５）（その６）（その７）の調査に関わる呼称方法が、それぞれ異なっている点が多い。

その為、ここでは全体を通しての調査基準となった点のみ記述し、それ以外の調査成果の報告に関わる調査方法については、各調査区の調査成果に含めて記載している。

（その５）（その６）（その７）の発掘調査に関わる方法は、当センターの前身である（財）大阪文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』1988に則して実施しており、当センターが発掘調査を行い、報告書が刊行されている大和川今池遺跡（その１）（その２）、大和川今池遺跡（その３）（その４）も同様である。

発掘調査範囲・掘削方法（図５）

（その５）（その６）（その７）調査区は、大和川河川敷に位置し、左岸堤防に隣接している為、調査対象地内の掘削による影響を周辺へ及ぼさないよう、範囲を設定して行った。掘削あたっては、現地表土及び現地表土下の近・現代盛土層、大和川による河川堆積物を、重機を使用して除去した後、最終遺構面まで人力での掘削を行った。

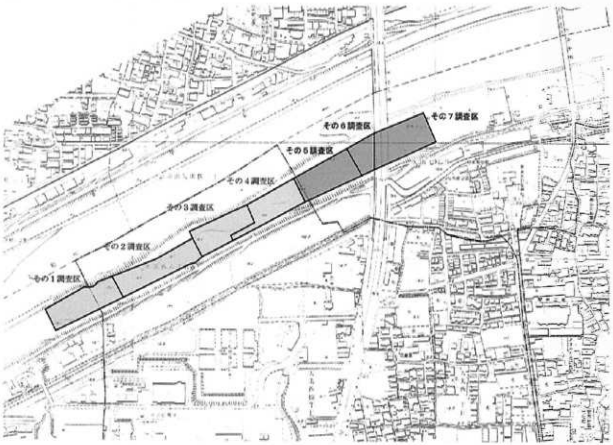


図５　調査区位置図

地区割り（図６）

上述の『遺跡調査基本マニュアル』1988に従って、最終的に10m四方の地区割りを行っている。

この10mの地区割りは、国土座標系に基づく平面直角座標系（17座標系）第Ⅵ座標系を基準としている。

測量・実測

検出した遺構面は、平板測量や写真測量を行って図化した。写真測量については、各調査区で調査した主要な遺構面についてのみ行い、カメラステーションとしてヘリコプターやクレーンを用いた。

平板・写真測量とも、図化の基準は地区割りと同様に国土座標系に基づく平面直角座標系（17座標系）第Ⅵ座標系を基準とし、水準については、東京湾平均海水面（T. P.）を使用している。

ちなみに、座標北に対し真北が東へ０° 15′ 39″、磁北は６° 30″ 振れている。

検出した遺構や遺物出土の状況については、適時縮尺を設定し実測を行った。実測の基準については遺構面の平面実測と同様である。

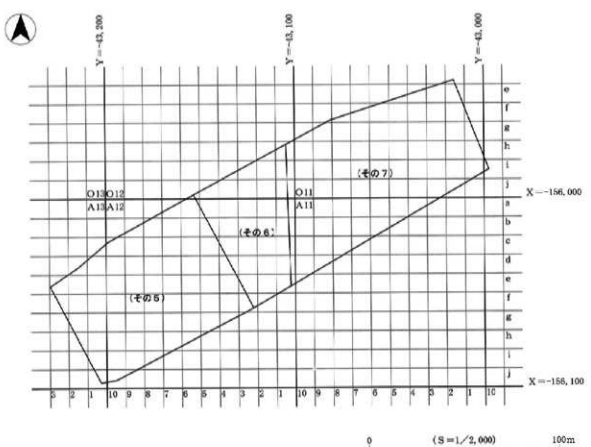


図６　地区割り図

第４章　調査成果

第１節　（その５）調査成果

１　調査の方法（図７）

（その５）調査区の調査は、平成11年度に実施された大和川の河川改修事業に先立つ発掘調査で、大阪市東住吉区矢田７丁目地内に位置する。調査面積は約8500㎡である。

基本的な調査の方法については、第３章　調査の方法　で述べている通りである。

発掘調査は、まず表土・盛土・大和川の洪水砂層を重機によって除去する機械掘削を行い、下層に堆積している包含層や遺構については、人力での掘削を行った。調査後は、流用土で設計深度まで埋め戻し、大和川河川敷内用地として復旧した。

発掘調査で検出した主要な遺構面については、ヘリコプターを用いた写真測量を行い、遺構平面図を作成した。写真測量は、第３面と最終面（第５・６面相当）で実施した。

（その５）調査区における遺構面の名称は、基本的に検出順に上層から番号を与えている。

その際、既往の大和川今池遺跡の発掘調査成果と地層や検出遺構、遺物の相対時期が類似するものについては、なるべくこれまでの調査で用いた遺構面番号に順ずるものとした。なお、その中でも細分される場合は、アルファベット（小文字）の枝番号を遺構面番号の後に付与した。（その５）調査区では、第２－ｂ面がそれに当たる。

この他、必要に応じて個別名称を用いたものや、検出遺構面や地層に相違が見られるものについては、本文中で検出遺構面の対応関係を明示している。

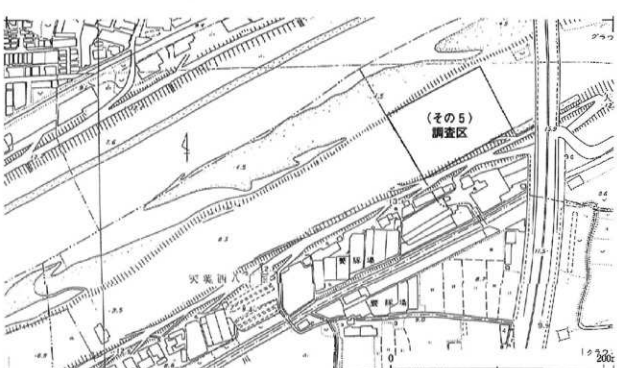


図７　（その５）調査区位置図

2　基本層序（図８）

基本層序は、既往の大和川今池遺跡の調査と同様に、調査区南側の側溝を利用して観察し、検討を行った。地層は、同一層が調査区全域に普遍的に堆積しているのではなく、地形に規制されている部分や、洪水などの後世の削平を受ける場合も多く見られた。

当地区での地層は、大きく９層にまとめることができる。以下の基本層序の記述では、この第１～９層を基に述べており、細部は、調査区南壁断面図（図８）を参照して頂きたい。なお、土層図に表示されなかった層位や、特出するものなどについては、基本層序との対応関係を補足している。

第０層

現況地盤の地表面を覆う表土、整地層と撹乱及び現大和川の洪水砂による堆積土層である。主に、機械掘削した土層に相当する。層厚は約70cmを測る。現地盤下には現代の撹乱が約30cmの厚さで、帯状に広範囲に分布していた。

第１層

整地層、洪水砂層下に堆積する、にぶい黄色および黄灰色砂質シルトを主体とする土層で、大和川の洪水砂層が土壌化した近・現代の耕作土層である。調査区の南側および西側で堆積している。調査区北側では大和川の洪水砂などで削平されている。層厚は約５～15cmを測る。大和川付け替え（1704年）以降に形成された土層である。この層を掘削した下面が第１面に相当し、現大和川に直交する方向を示す耕作溝跡を検出した。陶磁器、瓦など、近世・近代の遺物を含む。

第２層

オリーブ褐色および黄褐色砂混じりシルトを主体とする土層で、シルト層と粘質シルト層が互層を成して堆積する耕作土層である。シルト層の下層では鉄分沈着が見られる。大和川付け替え以前に形成された土層である。この層は単一期間の堆積ではなく、幾度かの洪水や流水と洪水砂の堆積を繰り返した結果、形成されたものと考えられる。地形的には調査区南側および東側が低くなることから、東南側に向けて徐々に厚く堆積する。調査区南側では２層に細分することができる。

２－１層はオリーブ褐色および黄褐色砂混じりシルトで、層厚は約10cmを測る。

２－２層は暗灰黄色および黄褐色砂質シルトで、層厚は約５～20cmを測る。２－１層の下面は第２面、２－２層の下面は第２－ｂ面に相当する。第２面では、正方位に則った耕作溝跡や畦畔を検出した。

第２－ｂ面では、同様の耕作溝跡や南側から北東側に広がる大河川を検出した。陶磁器、瓦、土師質甕、瓦質甕、須恵質すり鉢など、中世～近世の遺物を含む。

第３層

にぶい黄橙色砂混じり粘質シルトおよび灰黄色砂混じりシルトを主体とする土層で、洪水砂が土壌化した鉄分沈着が見られるシルト層と粘質シルト層が堆積する耕作土層である。調査区西側、南側で厚く堆積するほかは、東側の微高地でわずかに堆積している。層厚は約10～30cmを測る。下面は第３面に相当し、建物ピットや井戸、自然流路などを検出した。陶磁器、瓦、瓦器椀、須恵質すり鉢、土師質羽釜、瓦質擂鉢など、中世の遺物を含む。

第４層

黄褐色砂質土およびシルトが互層を成す土層で、洪水・流水などによる流水堆積層である。冠水期と渇水期があったものと思われる。調査区の南側で厚く堆積している。第４層は、さらに４層に細分する

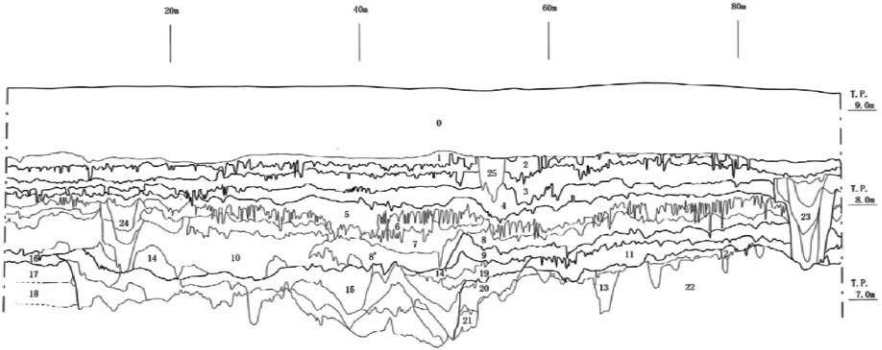


図8　調査区南壁断面図

0　黄褐色砂（表土、盛土、整地土）
1　にぶい黄色砂質シルト（鉄分沈着）
2　オリーブ褐色砂混じりシルト（シルトと粘質シルトの互層、鉄分沈着）
3　暗灰黄色および黄褐色砂質シルト（鉄分沈着）
4　にぶい黄橙色砂混じり粘質シルトと灰黄色砂混じりシルト
5　にぶい黄色砂および黄褐色シルト（砂とシルトの互層、下層にラミナあり）
6　黄灰色粘質シルト（踏込み跡）
7　暗黄色砂混じりシルト
8　灰黄色および暗黄褐色粘質土（鉄分沈着）
8'　暗灰黄色粘質シルト
9　灰オリーブ色粘質土（粘質土とシルトの互層、ラミナあり）
10　にぶい黄色シルト（シルトと砂層の互層、ラミナあり）
11　黒褐色粘質シルト（細砂・小礫含む、ラミナの見られる砂層とシルトの互層）
12　黒褐色～黒色粗砂混じりシルト
13　黒褐色シルト（遺構内）
14　黒色粗砂混じりシルト（砂・礫・土器片を多く含む、鉄分沈着）
17　黒色粗砂混じり粘質土
15　灰色・淡黄褐色粗砂・シルト（南側川内）（互層を成す）
16　黒色粗砂混じりシルト（砂・礫・土器片を多く含む、鉄分沈着）
17　黄灰色粗砂礫混じりシルト（粘土ブロック・ラミナ含む）
18　灰色粗砂礫混じりシルト（炭化物含む）
19　褐灰色粗砂混じりシルト（鉄分沈着）
20　黒褐色粗砂混じりシルト（鉄分沈着、シルトと砂の互層）
21　灰白色細砂礫土（炭化物含む）
22　黄灰色粘質シルト、灰白色礫混じり粘質土の混満層
23　（大河川内）
24　（自然流路内）
25　撹乱

1m
(1:40)
0
0
(1:400)
20m

ことができる。

4－1層はにぶい黄色砂および黄褐色シルトが互層を成し下層にラミナが見られる土層で、洪水・流水などによる流水堆積層である。下層には黄灰色粘質シルトが沈殿堆積しており、踏込み跡が顕著にみられる。層厚は約20～30cmを測る。

4－2層は灰黄色および暗黄褐色粘質土が主を成す土層で、下層に鉄分沈着が見られる。やや乾性状況であったものと思われる。層厚は約5～20cmを測る。4－3層は調査区の西側平野部で見られる灰オリーブ色粘質土およびシルトが互層を成す土層で、洪水・流水などの沈殿堆積層である。踏込み跡が顕著に見られる。層厚は約10cmを測る。4－4層は調査区南東側の谷部で見られるにぶい黄色シルトおよび砂層が互層を成し下層にラミナが見られる土層で、洪水などによる流水堆積層である。層厚は約30cmを測る。

下面は第4面に相当し、調査区南東側ではこの面から南側川が切り込んでいる。黒色土器椀、須恵器杯、甕、土師器杯、皿など、奈良時代から平安時代頃遺物を含む。

第5層

黒褐色粘質シルトを主体とする細砂、小礫を含む堆積土層である。調査区東側の微高地上以外の広範囲で見られる土層である。上層には部分的に灰黄褐色砂層が覆うところもあり、下層ではラミナが顕著に見られる砂層、シルト層が堆積する水成堆積の様相を示す。層境では踏込み跡やわだち跡などが見られ、冠水と渇水を繰り返した後背湿地状態であったことがうかがえる。層厚は20～40cmを測る。

下面は第5面に相当し、東西方向に伸びる溝跡、溝状土坑、不定形土坑などを検出した。土師器杯、須恵器蓋杯、甕、埴輪片など、古墳時代後期から奈良時代頃の遺物を含む。

第6層

黒褐色～黒色粗砂混じり粘質シルトを主体とする土層で、小土器片や炭化物を含む。調査区東側の微高地や西側の西側川沿いで見られる堆積層である。調査時には黒茶層として検出した土層である。

微高地上では、上層が黒褐色粘質シルト、下層が砂、礫、土器細片を多く含む黒色粗砂混じりシルトに細分することができる。層厚は約20～40cmを測る。おおむね、地形の凹面を補充したり、河川などの護岸強化のために搬入されてきた整地土層であると考えられる。

この層を切りこんで、竪穴住居や溝跡などを検出した。第6面に相当する。土師器杯・甕、須恵器杯蓋・壺・甕など、主に古墳時代後期頃の遺物を含む。

第7層

黄灰色粗砂礫混じり粘質シルトを主体とする土層で、調査区全域で見られる堆積層である。おおむね硬く締まっており、地山層に相当する。層厚は20cm以上を測る。顕著な遺構は見られなかったが、直上から石製品、弥生土器片、須恵器、埴輪片など若干の遺物が見られた。

第8層

下層確認トレンチ掘削時に見られた、灰色および明緑灰色粘質土を主体とする土層で、土層中に炭化物や植物遺体を多く含む無遺物層である。硬く締まっており、層厚は20cm以上を測る。さらに下層には黄灰色粘質シルトおよび灰白色礫混じり粘質土の混濁層が見られたが、土層の層境は不明瞭である。

（その5）調査区で確認した基本的な土層は以上の9層で、第1層から第7層までが人力掘削の対象となったものである。

3　調査成果

(その5) 調査区の調査では、表土・盛土・攪乱等を機械掘削した後、第1層から第7層までを人力で掘削した。遺構精査を行った面は、第1面(第1層下面)、第2面(第2－1層下面)、第2－b面(2－2層下面)、第3面(第3層下面)、第4面(第4－4層下面)、第5面(第5層下面)、第6面(第6層下面)の計7面である。

以下、各面毎に検出した遺構と出土遺物について記述する。

第1面(図9　図版1)

機械掘削終了後、大和川の洪水砂である第1層のにぶい黄色砂質シルトを除去すると、調査区の西側を中心として、大和川にほぼ平行ないし直交する耕作溝跡、杭列などを検出した。この面は、大和川の洪水砂が土壌化したものを、攪拌し作土化した耕作面である。第1面の大部分は撹乱や大和川の洪水等の削平を受けており、調査区西側の一部分でのみ確認することができた。検出面はT.P.8.35m前後を測る。第1面で検出した耕作溝跡は、一時期のものではなく複数時期の溝が重なり合っている。いずれも大和川にほぼ平行ないし直交方向を示すことから、大和川の付け替え(1704年)以降の近代・近世の耕作面であると思われる。第1面および第1層包含層からは国産・輸入陶磁器や瓦などが出土した。

鍬溝a～d(図9・10　図版1)

鍬溝a、b、cは大和川に平行する東西方向、鍬溝dは大和川に直交する南北方向の鍬溝跡で、検出した耕作溝跡の中から無作為に摘出したものである。

鍬溝跡の検出幅は10～20cm、深さは3～5cmを測る。鍬溝跡の検出長は約6m前後である。埋土は大和川の洪水砂である明黄褐色細砂で、下層に鉄分の沈着が見られる。ベース層は大和川の洪水砂が土壌化した浅黄色粘質シルトである。幾度となく大和川の洪水・流水にみまわれながらも、繰り返し耕作を営んでいたものと思われる。鍬溝内から遺物は出土しなかった。鍬溝跡の中には、杭列をともなうものや検出幅の広い鍬溝跡も見られた。おおよそ10m間隔に幅の広い溝跡が見られることから、規則的な土地区画の元で耕作していたものと思われる。

調査区が位置する大和川の河川敷内は、昭和40年代頃まで耕作地として使用されていたことが知られている。

第2面(図9　図版1)

機械掘削後、大和川洪水砂層である第1層のにぶい黄色砂質シルト層および第2層の黄褐色砂質シルト層を除去すると、調査区の南半を中心として、大和川の流れの方向に規制されない南北方向の耕作溝跡、畦畔を検出した。大和川の洪水砂が土壌化したものを、攪拌し作土化した耕作面である。

調査区北側は大和川の洪水・流水などで削平されており、第2面に相当する遺構は確認できなかった。地形的には、第1面を検出した西側の微高地から、徐々に下がってきて調査区中央部で最も低くなり東側に向けてやや高くなる。また、南東側に向かって徐々に低くなる。検出面の高さは、T.P.8.25m～T.P.8.30mを測る。第2面で検出した耕作溝跡は、第1面で検出した耕作溝跡とは方向が異なり、ほぼ正方位を示していることから、大和川付け替え(1704年)以前の条里に則った耕作面であると思われる。

第2面および第2層包含層からは国産・輸入陶磁器や瓦、土師質土器などが出土した。

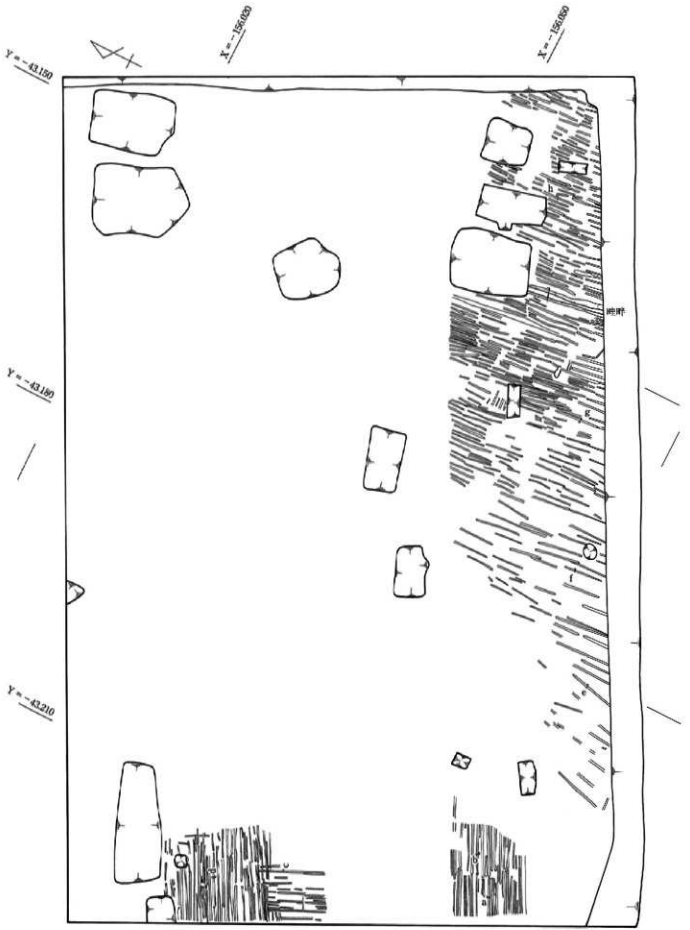


図9　第1面・第2面（1：400）

鋤溝e～h（図9・10　図版1）

検出した鋤溝跡は、おおむね南北方向を示す。鋤溝e～hは検出した耕作溝跡の中から無作為に摘出したものである。

鋤溝跡の検出幅は約20cm、深さは3～10cmを測る。検出長は約6m前後である。埋土はにぶい黄橙色粘質シルトで下層に鉄分沈着が見られる。ベース層は洪水砂が土壌化したオリーブ褐色砂質土が堆積している。幾重にも鋤溝跡が重なっていたが、いずれの鋤溝跡もほぼ南北方向の正方位を示し、同様の掘削形態を呈することから、規則的な土地区画の中で耕作していたものと思われる。これらの鋤溝跡に伴う遺物は出土しなかった。

第2面で検出した鋤溝跡が第1面で検出した鋤溝跡と方向が異なることは、土地利用の形態に変化が生じたことを示すものと考えられる。これは、1704年の大和川付け替えが起因となるものと思われる。

畦畔（図9・10　図版1）

調査区の南東側で検出したほぼ南北方向（N－8°－W）を示す畦畔である。

畦畔の検出幅は約1.6m、残存する高さは約15cm、検出長は約8mを測る。畦畔の盛土は浅黄色粘質シルトが主を成す。盛土内からは遺物は出土しなかった。畦畔は調査区南側の側溝断面にもその形跡が見られることから、さらに南側に続いていたものと思われる。畦畔の北側は攪乱で寸断されているため、その延長は不明である。この畦畔の東西面では高低差があり、東側は畦畔の西側より5cmほど低くなっている。地形的に東側に向けて低くなることから、地形的条件にも合わせながら土地区画を形成していたものと思われる。

第1面・第2面包含層出土遺物（図11・65・66・149　図版11・15・21・22・24～26）

第1面・第2面包含層からは現代から中世を主とする、多くの種類の遺物破片が出土している。

輸入陶磁器では12世紀から13世紀の白磁碗、13世紀、15世紀の同安窯系、龍泉窯系青磁碗や皿が目立つ。また、16世紀の景徳鎮窯系や17世紀の漳州窯系の碗や皿も見られる。国産陶磁器では波佐見窯系、肥前系および瀬戸窯系の碗や皿、京・信楽窯系の壺、備前壺などが出土している[1]。

1～5・19・368・372、図版15－432、図版26－464、465は第1面包含層出土の遺物である。

1は16世紀の備前壺、2は15世紀の瀬戸窯系灰釉水瓶で、底部外面に回転糸切り痕が残る。

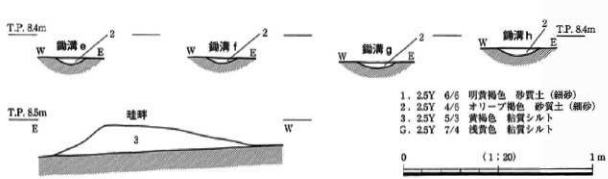


図10　第1面・第2面遺構断面図

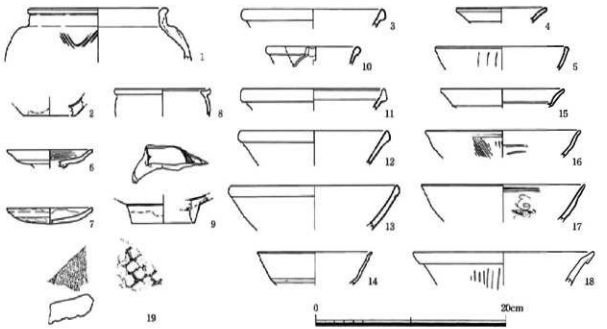


図11　第１面・第２面包含層出土遺物

３は13世紀第１四半期の厦門碗窯系白磁碗である。４は13世紀の同安窯系青磁小皿Ⅰb類である。

５は15世紀末の龍泉窯系青磁線描蓮弁文碗である。

19は平瓦で、凸面にやや粗い格子の叩きを有し、表面には離れ砂が見られる。凹面は布目が残る。焼成はやや軟質で色調は橙色である。図版26－464・465はともに焼土塊であるが、465は砂が層状を成し、鋳型の土と類似する。図版15－432は古墳時代の須恵器の蓋壺である。洪水により大和川の下層から巻き上げられたものと思われる。368・372はサヌカイトの石鏃未成品と剥片である。弥生時代のものか。

８～10は第２層出土の遺物である。８は19世紀の青磁急須と推定されるものである。９は13世紀第１四半期の白磁碗Ⅴ４類である。10は時期不明の中国製片口鉢である。これは細片のため口径復元が不確実で、もう少し大きい可能性がある。この他、413の円筒埴輪が１点出土している（図149　図版24）。

６・７・11～18・375、図版21－451、図版26－462は第２面包含層出土の遺物である。

６は台付瓦器皿である。７は土師器皿Jbタイプで、口縁部に煤の痕跡が見られる。11は13世紀第１四半期の厦門碗窯系白磁碗である。12は12世紀後半の厦門碗窯系白磁碗、13は12世紀中葉の厦門碗窯系白磁碗である。14の緑釉陶器碗は須恵質の胎土に緑色の釉薬が外内にかかっており、釉薬は部分的にうすい。平安京Ⅰの時期にあたると思われる。15は13世紀前半の龍泉窯系青磁皿である。16は13世紀第１四半期の同安窯系青磁碗である。17は13世紀第２四半期の龍泉窯系青磁劃画文碗である。462は鋳造関連の焼土塊と思われるものである（図版26）。

下層からの混入物も数点出土している。18は須恵器壺で、陶邑II型式の段階のものかと思われる。

図版21－451はサヌカイトの楔形石器である。時期は縄文から弥生のいずれかと推定される。また、弥生後期の壺口縁部もみられる（375）。他に、410の円筒埴輪破片も出土している（図149　図版24）。

この他、掲載できなかったが、国産陶磁器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、瓦、サヌカイト、動物骨片など多くの遺物が出土している。

図12　第2-b面（1：400）

第２－ｂ面（図12）

大和川の洪水砂層である第１層のにぶい黄色砂混じりシルトと第２層の黄褐色砂質シルトを除去すると、調査区南西部から北東部、および北西部に広がる河川跡（大河川）を検出した。また、調査区南側の低地部から鋤溝跡とそれに伴う溝跡、さらに下層から東西方向に伸びる自然流路跡を検出した。

調査区南側から検出した鋤溝跡や溝跡は、第２面で検出した鋤溝跡や畦畔とその方向や遺存状況などに類似性が見られ、本来は同一面であった可能性も考慮されることから、この検出面を第２面と関連性をもたせるため、第２－ｂ面とした。時期的にも大きく相違がないものと思われる。

第２－ｂ面は、調査区中央部から東側にかけてやや高くなり微高地となるが、南側から南東部側に向けて谷状に一気に低くなる。また、中央部から北側は平坦部であるが北側に向けてゆるやかに低くなる。

調査区中央部から東側の微高地では、第６層の黒色粗砂混じりシルトが露出している。この微高地の北側および南側では第２－２層の暗灰黄色粘質シルトが堆積している。微高地周辺の低地が洪水・流水砂によって埋没した後、耕作面が形成されたものと考えられる。検出面はT.P.8.15m～T.P.8.30mを測る。

第２－ｂ面から出土した遺物として、主に大河川内から国産・輸入陶磁器、瓦、土師質甕・炮烙・土師・小皿、瓦質甕・すり鉢、須恵質練鉢、石臼、斧など多様なものが見られた。

鋤溝ａ～ｄ（図12・13）

調査区南側で東西方向および南北方向を示す鋤溝跡を検出した。鋤溝ａ～ｄは東西方向を示す鋤溝跡で、検出した耕作溝跡の中から無作為に摘出したものである。

鋤溝跡の検出幅は15～30cm、深さは４～10cmを測る。鋤溝跡の検出長は４～７m程度である。ベース層は洪水などの砂層が土壌化した灰オリーブ色砂質土で、埋土は洪水砂であるオリーブ黄色および黄褐色細砂が堆積している。検出面はT.P.8.15～T.P.8.20m前後を測る。第２面で検出した鋤溝跡と同様の方向、同様の形態を示すことから、あまり時期を異にしないものと思われる。鋤溝跡から遺物などの出土はなかった。

１・２・３・４・５・６・７・８溝（図12・13）

調査区の南側で、鋤溝跡と平行ないし垂直方向を示す溝跡を検出した。

１溝は検出幅が約0.2m、深さは約10cm、検出長は約17mを測る南北溝である。北側に向かってやや低くなる。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで鉄分沈着が見られる。１溝はその北端で東西方向に伸びる６溝にあたる。南側は調査区外に伸びている様相を示す。

２溝、３溝は平行して南北方向に伸びるもの。２溝、３溝の検出幅は0.4～0.45m、深さは20～30cm、検出長は約６mを測るが、溝の北端は攪乱にあたるためその延長は不明である。南側は調査区外に広がる様相を示す。溝の掘方は中央部が浅く両端部が深くなるもので、２条の溝によって形成される形態を示す。埋土は黄褐色ないし黄灰色粘質シルトで鉄分沈着が見られる。２溝、３溝は平行して伸びており、その間隔は約2.0mを測る。第２面で検出した畦畔の検出幅とほぼ一致する。畦畔の痕跡に沿って平行して南北方向に伸びることから、畦畔の側溝であると思われる。

４溝は検出幅が約0.4m、深さが約６cmを測る南北溝である。断面形は薄い皿状を示す。埋土はにぶい黄褐色シルトで鉄分沈着が見られる。検出長は約５mであるが、溝の北端が不明瞭なため延長は確認できなかった。南側は東西方向に伸びる溝とL字状を呈す。この東西方向に伸びる溝は、８溝の延長と

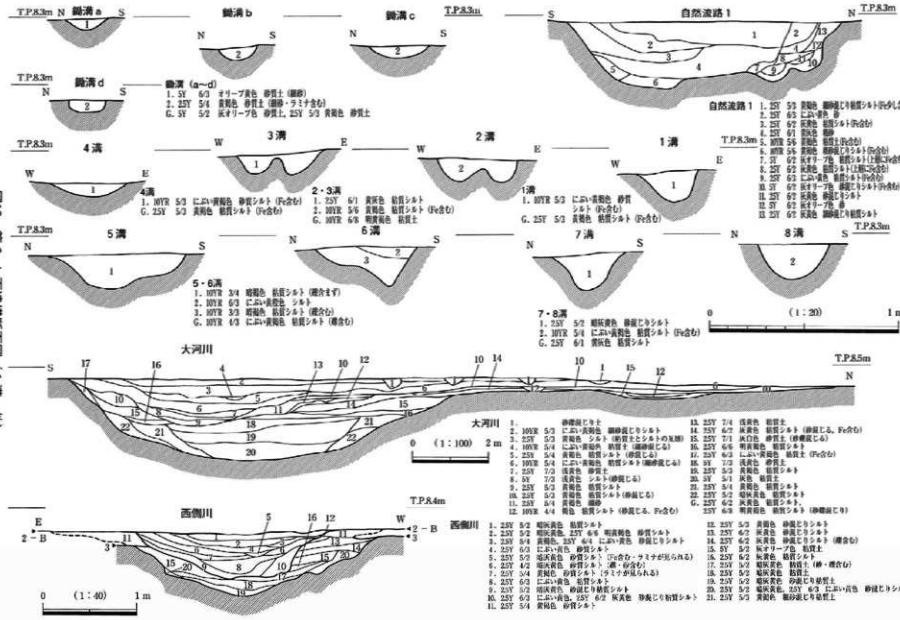


図13 第2－b面遺構断面図（1溝 他）

思われるものである。4溝は1溝および2溝、3溝と同一方向である南北方向を示し、2溝、3溝とは約23mの間隔を持つ。

5溝、6溝は東西方向にほぼ平行して伸びる溝である。5溝は検出幅が約0.7m、深さが約20cmを測る。6溝は検出幅が約0.55m、深さが約25cmを測る。断面形はやや丸みを持つV字形を示す。埋土は暗褐色粘質シルトでやや砂礫を含む。

6溝は途中攪乱に寸断されるが、検出長は約7mを測る。5溝はさらに西側に伸びる様相が見られ、検出長は約18mほどとなる。5溝と6溝の間隔は約1.3mを測る。

両溝間に高まり部分は見られなかったが、2溝、3溝と同様に畦畔にともなう側溝になるものと思われる。

7溝は検出幅が約0.4m、深さが約20cm、検出長が約4mを測る東西溝である。断面形はU字状を示す。埋土は暗灰黄色砂混じりシルトである。8溝は検出幅が0.4～0.45m、深さが約20cm、検出長が約5mを測る東西溝で、7溝とほぼ平行して東西方向に伸びる。断面形はレンズ状を示す。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで鉄分沈着が見られる。8溝は断続的に検出しており、南北方向の4溝と交わる東西溝に繋がるものと思われる。7溝と8溝の間隔は約2.2mで、やや広い様相を示す。両溝間で畦畔に相当する顕著な高まり部分は見られなかったが、2溝、3溝や5溝、6溝と同様に畦畔にともなう側溝になるものと思われる。各溝から遺物などの出土はなかった。

土地区画（図12）

検出した南北方向に伸びる1溝と2溝、3溝は、正方位からやや西に約8°傾くもので、その間隔は約18mを測る。東西方向に伸びる5溝、6溝と7溝、8溝との間隔は約19mである。さらに4溝と関連する溝との間隔は約23mを測る。東西方向に伸びる溝と南北方向に伸びる溝によって、ほぼ方形の土地区画を形成していたものと思われる。規格的な耕作地の土地区画のもとに耕作が営まれていたことを示している。

大和川今池遺跡の周辺では、昭和25年頃の航空写真などから整然とした土地区画に則った農耕地帯であったことがうかがえる。中でも、大和川の河川敷内では大和川の流れに直交するように耕地が築かれていたが、河川敷外ではほぼ正方位の南北方向を示す条里に則った土地区画であることが読み取れる。第2－b面で検出した耕作溝や溝跡は、大和川河川敷外で見られる土地区画に呼応するものである。

既往の調査の中で正方位のプランに相当する遺構として、（その1）調査区の第4面で検出した坪境、（その2）調査区の第5面で検出した2条が平行して伸びる17・18溝、19・20溝、直角に屈曲する22溝、（その3）調査区の第3面で検出した溝1～4、（その4）調査区の第3－1面で検出した溝103、第4－1面で検出した畦畔19、20、260、207、溝11、15、16などがあげられる。さらに、大阪府教育委員会1995年度調査（西口）における2溝は（その2）調査区の19・20溝ないし22溝に連続するものと考えられている。これらの遺構は、出土した遺物などから中世から近世（大和川付替え以前）に位置付けられている。

中世以降、広域にわたって南北方向を示す条里に則った地割りが採用され、遺構と近年まで引き継がれていたことを裏付けるものと言える。

自然流路1（図12・13）

調査区の南側で、動溝群の下層から東西方向に伸びる自然流路を検出した。調査時はSD－1と称していた遺構であるが、報告では「自然流路1」と改名するものである。

自然流路1は、調査区南側の低地部に堆積した黄褐色粘質シルト上に流刻された洪水・流水の痕跡である。平面形はわずかに振幅があり蛇行する様相を示す。自然流路1の検出幅は1.0～1.5m、深さはおおむね20～35cmであるが、深い部分では40cm前後を測る。検出長は70m以上を測る。堆土は、上層がにぶい黄色ないし黄灰色砂、灰黄色粘質シルト、下層が灰オリーブ色粘質シルトと砂混じりシルトが互層を成す。堆積状況から流水と堆積を幾度となく繰り返した流水堆積の状況が看取される。自然流路1から遺物などの出土はなかった。

（その6）調査区でもこの自然流路1に続く溝跡（第3－a面・28溝）を確認している。検出長は合わせて80m以上を測る。この自然流路1は検出面の地形状況から、西側から東側（大和川と逆方向）に流れていたものと思われる。

大河川（図12・13　図版2）

調査区の南西側から北東側に向けて流れる河川跡を検出した。

大河川の本流は、調査区の南西側から北上する西側川から東側に流れた後、蛇行して北東方向に北上するS字状を示す。遺構名については、本調査区を大きく横切り広がることから遺構名を大河川とした。

この大河川は、旧西除川の支流の一つと考えられるもので、堆積状況から大和川の付け替え（1704年）以前に埋没した河川跡である。

・大河川の概要

検出当初、現大和川の洪水・流水時に調査区を北東部から中央部で蛇行し北西側に流れた氾濫跡であろうと思っていた。しかしながら、検出を進めて行くにつれて、流水方向が南側から北側を示していることから、現大和川とは異なる流れであると考えられた。また、この河川跡が南西部の西側川から大河川中央部の蛇行する部分でつながり、北東側に向かうルートが本流部に相当すること、さらに西側川から北西部に流れる部分は常時河川として流れを持つものではなく、増水時などに断続的に流れが生じたものであることも判った。調査時には、北東側から蛇行して北西側に流れる河川跡のみを大河川、調査区の南西側から北側に伸びる河川跡を西側川とし、遺構実測や遺物の取り上げについても同様の区分で行ったが、ここでは包括的に大河川として扱うものとする。

・埋土堆積状況

大河川の本流で河川中央部から北東側に蛇行する部分では、洪水などの増水で川幅が最大となった際の堆積状況を観察することができた。大河川中央部の蛇行部分での検出幅は約10m、増水などで川幅が最大になった場合は約20mを測る。深さは0.2～2.0mである。大河川は、幾度か増水を繰り返しながら徐々に埋没していったものと考えられる。

埋土はおおむね5層に大別することができる。

1層は1～5で、幾度となく流水と堆積を繰り返しながら浅くなった大河川が徐々に埋没していく流水堆積の状況を示す。にぶい黄褐色細砂と黄褐色粘質シルトの互層堆積層で鉄分沈着が見られる。層厚は最深部で約65cmを測る。最大幅は約12mを測る。

2層は6～10で、流れを有しながらも徐々に砂層が堆積する止水堆積の状況を示す。最大幅は約18mを測る。上層部の6・7は、にぶい黄褐色砂混じりシルト層である。中層部の8・9は浅黄色砂質土およびシルト層、下層堆積層の10は黄褐色粘質シルト層である。層厚は15～60cmを測る。流れが穏やかな際に沈殿堆積した状況を示す。

3層は11～18で、流水と堆積を繰り返しながら徐々に埋没したが、一時期に流れた2層によって深部が削平され、両岸際にのみ堆積が認められるもの。最大幅は約20mを測る。11～13は黄褐色細砂と粘質シルトの互層堆積層で鉄分沈着が見られる。浅瀬部は増水などで大河川の川幅が増大した際の一過的な堆積状況を示す。層厚は20～40cmを測る。14～15は灰・浅黄色粘質土および粘質シルトで沈殿堆積の状況を示す。層厚は10～20cmを測る。16は灰白色砂礫混じり砂質土で流水堆積の状況を示す。層厚は約35cmを測る。17・18は明黄褐色およびにぶい黄褐色粘質土層で下層に鉄分沈着が見られる沈殿堆積層である。一時期の河床であったと推測される。層厚は約15cmを測る。

4層は19～20で、下層堆積層を削平して一時期流水し、徐々に堆積した状況を示す。最大幅は約5.2mを測る。19は浅黄色細砂の流水堆積層。層厚は約30cmを測る。20は黄褐色粘質シルトで層厚は約50cmを測る。

5層は21・22で、一時期に流れた4層によって深部が削平され、両岸際にのみ堆積する河床堆積層である。最大幅は約8mを測る。21は灰色粘質土で沈殿堆積層である。層厚は約40cmを測る。22は黄褐色および暗灰黄色粘質シルトである。層厚は約60cmを測る。

大河川の北西側は、大河川本流部分に比べ一様に浅く、土層堆積状況においても一時的な流水の様相が看取されることから、洪水や増水時に生じた流水跡と考えられる。検出幅は1.7～2.2m、深さは20～40cmである。埋土は、おおむね1層および2層で、下層に鉄分沈着が見られるにぶい黄褐色細砂と黄褐色粘質シルトの互層堆積層が主を成す。流水堆積の様相を示す。

大河川で西側川と称した部分では、検出幅は約2.5mで、洪水などの増水で川幅が最大を示した際は約4mを測る。深さは約65cmである。西側川は堆積状況から、一時期埋没する程度にまで縮小するが、再度充分な水量を有する河川として機能し、その後徐々に埋没していったものと思われる。

上層の1～11は流水時およびその後の再堆積層、下層の12～20は古い流水堆積層である。1～11は暗灰黄色および黄褐色系砂と粘質シルトの互層堆積層で、流水堆積の様相を示す。深さは約50cmを測る。1・2層に相当する。12～20は一時期に流れた上層によって深部が削平され、両岸際および下層のみが残存する沈殿堆積層である。おおむね灰黄色砂混じりシルトと暗灰黄色粘質土の堆積層である。深さは20～60cmを測る。3・4・5層に相当する。

大河川は大和川の洪水砂層および第1層のにぶい黄色および黄灰色砂質シルトを主体とする土層で覆われている。また、大河川の上面には第2面相当の耕作溝跡が広がることから、大和川の付け替え（1704年）以前に埋没していたものと思われる。旧西除川の流路の1つとして流れが起こり、長い間生活に即した河川として流路を有していたが、洪水や流水を繰り返す内に川底に砂層が堆積し、埋没したものと考えられる。

・大河川の盛衰

第2－b面（近世初頭頃）に相当する大河川は、その終盛期にあたる。上面の第2面では、大河川跡上に鋤溝などの耕作面が広がるため、大河川はその頃には完全に埋没していたことがうかがえる。

第2－b面相当時には、川底に流水砂が堆積し、川幅は狭くなり、また浅くなっていたものと思われる。旧西除川の支流として蛇行しながら調査区の南西側から東北側方向に流れた大河川は、河川内に洪水砂が堆積して河床が浅くなり、その川筋もついには埋没したものと考えられる。

第3面相当時（中世）は大河川の隆盛期で、河川として南西側から北東方向に蛇行しながら流れていた様相を示す。また、洪水、流水などが頻繁に起こり川幅は最大を示し、大河川本流域のみならず北西

側に流れる流水跡をも形成した時期にあたる。この頃の大河川は、本調査区、（その3）調査区、（その4）調査区で広がる中世の耕作域に、水を供給したと思われる。しかしながら、これらの耕作遺構を覆っている洪水砂層は、大河川が引き起こした洪水・流水によるものと推測される。大河川南西部（西側川）の左岸では、護岸提と考えられる盛土が見られ、洪水・増水などにも対応しながら、農業・生活用水として活用していたことがうかがえる。

第4面相当時は、調査区の南側から東側に向かって流れていた南側川が完全に埋没し、広域にわたって第4層の黄灰色砂質土およびシルト層が堆積していた時期である。この時点では、南側川の流れが移行し、大河川の流路になったものと推測される。大河川の発祥期とすることができるであろう。

大河川は、おおよそ第4面相当時（平安時代頃）から第2－b面相当時（近世・大和川付け替え以前）までの長期間にわたり流路を有していたものと考えられる。大河川による洪水・流水は旧西除川と連動していたものと考えられるが、この周辺地域に直接的な影響を与えたものとして大河川を捉えることができる。

粘土取り跡

大河川は第2面相当時（近世初頃）には、完全に埋没し上面に耕作溝跡が見られるようになるが、上層の洪水砂層を除去した際、大河川の下層に堆積した粘土層及び地山層を掘削したと思われる粘土取り跡が数多く見られた。粘土取り跡は長方形を単位とし、規則正しく掘削された状況が看取できた。（その2）調査区の第3面でも同様の粘土取り跡を検出している。（その2）調査区で検出された粘土取り跡も大和川の流水砂で埋まっていることから、同時期頃に相当すると思われる。

（その2）調査では、採取した粘土の使用用途として、①耕作に関連し整地土として使用した。②大和川堤防の盛土補修に使用した。③粘土を商品として流通させた。と提起している。主に、「数量として明確に認識する必要性と土取りの効率性」と、「土取り採取量が生産管理されていた」ことに注目して、②か③が妥当な使用用途であろうとしている。①については、耕作域に近接した地域で確認できる現象ではなく、局所的なものであり、粘土取り跡から換算できる土量では少量である。②についても①同様に小規模である事から、③が妥当な使用用途であろうと考えられる。③の場合、「使用用途として瓦原料等多岐にわたる。」としているが、近年調査区の北方に位置する大阪市住吉区の苅田4丁目所在遺跡や山之内遺跡などで、河内鋳物師の系譜を引く「我孫子鋳物師」の拠点と思われる鋳造関連遺構が見つかっている[3]。苅田4丁目所在遺跡では、15世紀の鋳物師工房の存在が明らかになった。村の周囲は灌漑用の水路で囲まれており、調査区全域で検出された土坑内には、鋳型、スラグなどの鋳造関連の遺物が多く含まれていた。土坑は粘土取り穴として掘られ、その後、鋳造関連の廃棄物を埋めて整地したと見られている。土坑は共出した遺物などから、15世紀と判断されている。また、山之内遺跡では、炉や鋳型の破片を大量に含む包含層や溶解炉や鋳型を廃棄したと見られる土坑を幾つか検出している。出土遺物の大半が炉、鋳型、支脚といった鋳物関連の遺物であった。さらに、苅田の鋳物師については『河内国鋳物師座法』の中に列記されている地名に「あひこ村」「かつた村」「にわい村」などが見られる。おおむねJR阪和線と近鉄南大阪線に挟まれた地域に『河内国鋳物師座法』に見える鋳物師が住していたようだとしている。「苅田」、「庭井」は（その5）調査区から大和川をはさんだ対岸に位置する。広域的に見て本調査地を含む地域にあたる。

この様に、鋳型などの材料として、同地の良質の粘土を鋳物生産に利用したのではないかと思われる。

当地は「河内鋳物師」の中心拠点である日置荘遺跡、余部遺跡、真福寺遺跡、観音寺遺跡などと同じ旧西除川流域に位置し、「我孫子鋳物師」の拠点と思われる遺構が見つかった苅田４丁目所在遺跡などの近郊に当たる。また、（その３）（その４）調査区では、焼土坑や鋳造・鍛冶生産に関連すると思われる遺物が数多く見られるが、大河川内出土の遺物の中にも羽口、砥石、窯壁と思われる焼土塊、鉄滓などが見られたことから、当地においても鋳造・鍛冶生産を行っていた可能性があるのではないかと

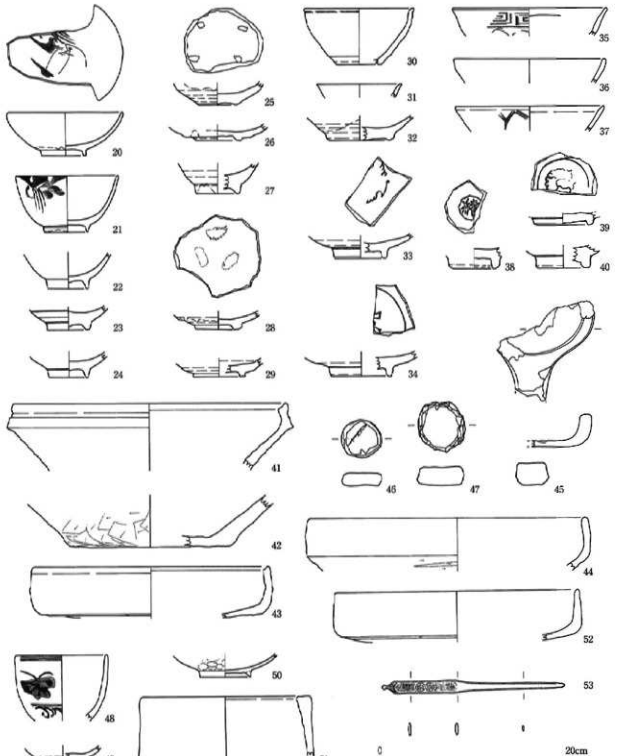


図14　大河川出土遺物①・西側川出土遺物

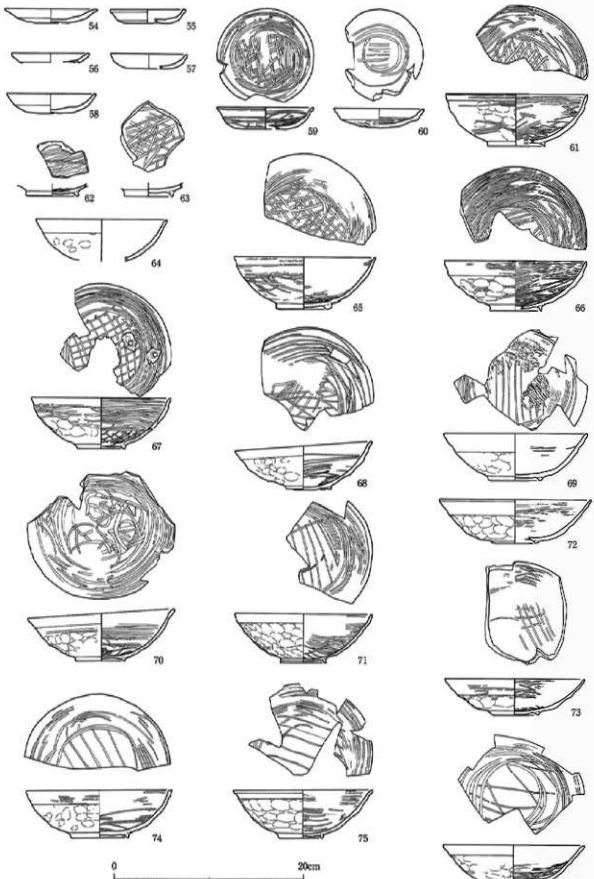


図15　大河川出土遺物②

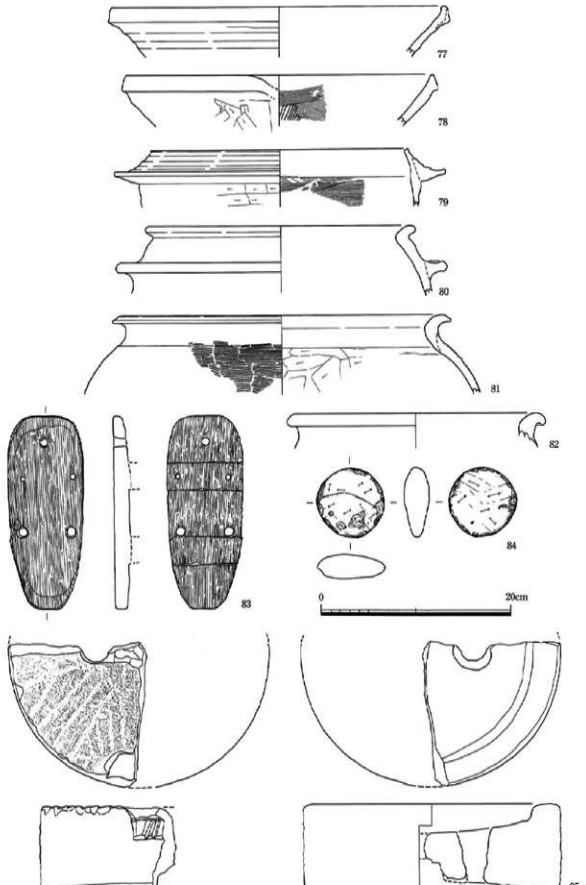


図16　大河川出土遺物③

思われる。推論の域を出ないが、周辺の今後の発掘調査成果に期待したいところである。

大河川出土遺物（図14～18・65・66・148・149　図版11～15・21～26）

大河川内より出土した遺物は、古墳時代、奈良・平安時代のものも若干出土しているが、主に鎌倉時代頃から大和川付け替え以前（中世～近世）を中心とする時期に相当すると考えられる。

出土遺物として、国産・輸入陶磁器、瓦器椀、瓦質すり鉢、甕、土師質焙烙、須恵質甕、壺、瓦、石白、斧など多様なものが見られた。中でも碗、皿、石白、下駄、瓦面子、土人形などの生活用品が多く見られ、生活域に近接する河川であったことがうかがえる。

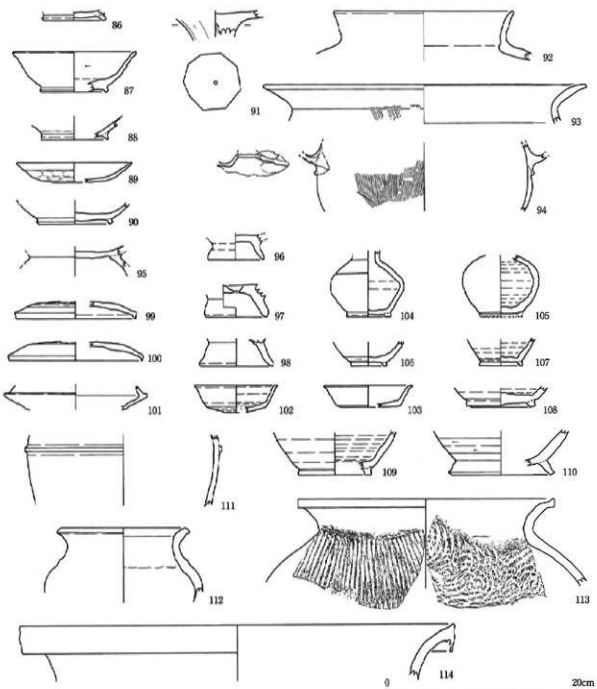


図17　大河川出土遺物④

なお、最下層からは埴輪片や弥生土器、石製品などが出土しているが、これらは河川の増水、洪水等により下層の遺物が巻き上げられたものであろう。また、埴輪片などは、大河川内に流入した土砂や整地土などに混入していたものと思われる。

20～47・54～125・365～367・370・376・386・389・399～402・411・414・422～431・455～457・460・461・463は大河川出土の遺物、48～53・126～128は西側川出土の遺物である。

20～42、図版11－422～425は陶磁器である。20は18世紀前半の肥前・京焼系山水文碗、21～24は17世紀から18世紀の波佐見窯系碗である。22は白磁、23・24は青磁である。25～29は唐津窯系碗である。25は胎土目の痕跡を留める16世紀末のものである。26～29は17世紀初頭から前半頃のもので、28の碗の見込には砂目の痕跡が見られる。30は16世紀末から17世紀初頭の美濃窯系鉄釉天目茶碗である。31は16世紀の

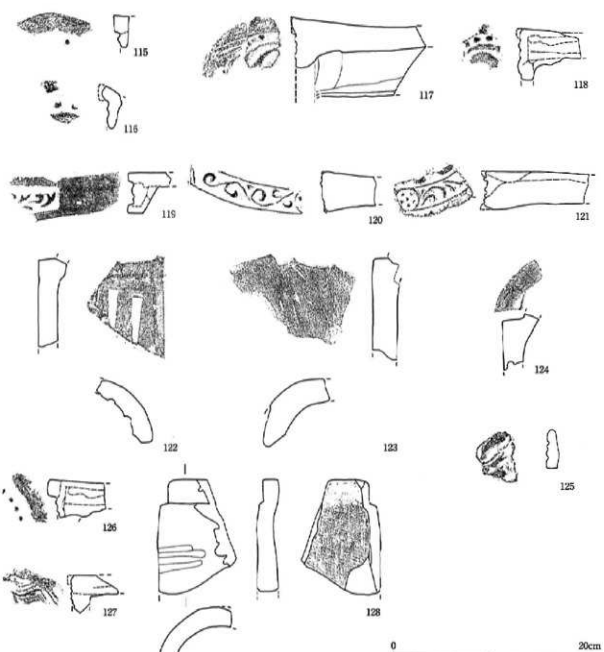


図18　大河川出土遺物（瓦）・西側川出土遺物（瓦）

白磁皿、32は12世紀中葉の白磁碗である。33～40は龍泉窯系青磁である。39は稜花皿で、その他は碗である。33・34・39・40は15世紀後半、35・36が15世紀前半に相当するものである。35は口縁部外面に雷文帯を施文している。37は13世紀第3四半期の蓮弁文碗である。38は15世紀末、41は16世紀前半の備前擂鉢、42は中世の国産陶器甕底部である。図版11－422は16世紀前半の美濃窯系鉄釉天目茶碗、図版11－423は18世紀前半の唐津窯系刷毛目片口鉢、図版11－424は17世紀初頭の美濃窯系鉄釉皿、図版11－425は16世紀後半の備前擂鉢である。

43～45・51・52は近世土師器である。43・44は焙烙であり、18世紀前半のものである。45は十能である。焙烙と同じ頃のものと思われる。

46・47は平瓦の周辺を打ち欠き円形状に再加工した瓦質メンコで、46は打ち欠いた後さらに周縁を擦っている。

46は両面ともにナデで、砂が付着している。47は凸面側に僅かに叩き、凹面側には僅かに布目の痕跡があり、両面ともにナデられ、砂の付着が見られる。

48は17世紀の波佐見窯系花蝶文碗である。49は16世紀の景徳鎮窯系白磁端反皿である。

50はII－2～3にあたる瓦器椀である。51は土師質火鉢と考えられる。内面には煤の付着が見られた。胎土の特徴が52の焙烙と類似しており、近世のものであろう。52は18世紀の焙烙である。

53は片面に沢潟文を2個配した箆である。文様は浅く浮き出た扁平なつくりで、室町時代に属する。

図版13－426は古銭であるが、残存状況が悪く、文字の判読は不可能である。

図版26－456・457は鉱滓である。図版26－460・461・463は鋳造関連の焼土塊と思われるものである。

460は胎土の粒子が縞状に異なり、鋳型破片の可能性が考えられる。461は全体に高温をうけ、紫色に変色し、糸が入ったように軽くなっている。

54～76は主に中世の土師器、瓦器を図化した。54～58は土師器皿である。54は口縁部がなだらかに大きく開く点でAaタイプ、55～57はJbタイプと思われる。58はGaタイプか。59・60は瓦器皿で、59は体部外面にまでミガキがおよぶ。61～76は瓦器椀である。瓦器椀はII－1～2からIII－2～3までのものが見られる。見込みの暗文は62が密な平行線状、63・65が篦目状、61・67・68・73は格子状、66・69・71・74・75は平行線状、70が不規則な螺旋状。76は平行線状であるが、一部格子状暗文を施す。72の見込み暗文は平行線状と思われる。64は不明である。62・65・66がII－1～2、63・64・67がII－2～3、68・69・74がII－3～III－1、71がIII－1、70・72・73・75がIII－1～2、76がIII－2～3の時期に相当するものと思われる。

77～82は中世の須恵質・瓦質鉢、土師質・瓦質羽釜、瓦質甕である。77は第III期第1段階の須恵質練鉢である。78は14世紀から15世紀の瓦質擂鉢である。79は瓦質羽釜河内D1b型、80は土師質羽釜河内B1d型である。81・82は瓦質甕である。

83は凹の欠損した連歯下駄である。台部は平面長円形状をなし、踵側に狭まる。台部には5箇所に穿孔があり、上面には使用による、くぼみが僅かに認められる。

84は叩き石ないしは磨石と考えられる。薄手の円形状礫を用い、周縁には叩いた痕跡と、平坦面には磨ったような痕跡が認められる。85は石臼である。側面に回転させる際の木の棒を差し込む挽手穴が見られる。

この他石には、図版15－427の輝石安山岩B[21]に分類されている碁石や、図版15－428の白雲母流紋岩製の白い石、図版15－429の紅柱石ホルンフェルス製温石がある。図版15－430は全面に煤の付着した砂

岩製の模石と思われるものである。法量は14.3×9.5×6.8cm、800gを測る。

86～114は古墳時代から平安時代までの遺物を図化したものである。86は黒色土器A類椀の高台部である。87は平安時代の緑釉陶器碗、88は平安時代の土師器椀、89は平安京IV期の土師器皿と思われるものである。90は平安京IV～V期の土師器杯B、91は平城宮IIの土師器高杯脚部である。91の脚柱部は９面に面取りされている。92は６世紀代と思われる土師器壺である。93は平城宮III～IVの土師器甕、94は平城宮II～IIIの土師器把手付甕、95は土師器台付容器の脚部である。時期は不明である。

96～98は土師器台付皿の台部である。平安時代終わり頃のものか。97の土師器杯部底には径0.4cmの穿孔が見られ、内面側から大きく開けられている。99は平城宮II～IIIの須恵器杯蓋、100は平城宮III～IVの杯蓋、101は陶邑II－５～６の須恵器杯身である。102、103は平城宮I～IIの須恵器杯身、104～110は平安京I中の須恵器壺類である。111は平安京I～IIの須恵器壺と思われるものである。112～114は平安京I中～II中と思われる須恵器甕である。

図版15－431は土師質の蓋であり、把手部分が一部残る。時期は不明である。

115～128は瓦類である。このうち115～125は大河川出土、126～128は西側川出土のものである。

115～118・126が軒丸瓦、119～121・127が軒平瓦、122～124・128が丸瓦、125が鬼瓦片である。

軒丸瓦はいずれもC型式[1]の巴文と思われるもので、外区に圏線が巡らず、珠文が配されている。115が室町時代、116～118が鎌倉時代のものである。117の瓦当が剥落した丸瓦面には接着を良くするための刻み目が見られる。126はC型式の巴文と推定されるものである。119は段顎で外区が広く、内区には簡略化された唐草文を配した近世の軒平瓦である。120は中心飾りが円形の中に浮文のあるB２型式と思われるものである。121は中心飾りが円形で中に浮文を６個（１＋５）配し、唐草文の配し方がB１やB２型式とは異なるものである。120・121ともに直線顎である。127はD型式の水波紋で、段顎である。122は丸瓦の凹面側に長軸方向の棒叩きの痕跡が残る室町時代のものである。123は丸瓦凸面玉縁寄りに線刻による×のヘラ記号が記された室町時代の丸瓦である。124は、丸瓦と玉縁接着部の接合面に短い線状の痕跡が残る。128は玉縁の極めて短い丸瓦である。凸面に短軸方向のナデが見られ、凹面にはやや粗い布目が残る。古代の丸瓦である。125は鬼瓦の表面が剥落したものである。

この他、大河川から出土した遺物として、形象埴輪（図148　図版23－399～402）、円筒埴輪（図149　図版24－411・414）、動物骨（歯）、石器（図65－365～367・370）、弥生土器片（図66－376・386・389　図版22－455）などが見られた。

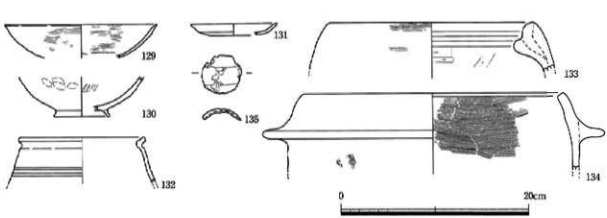


図19　第２－ｂ面包含層出土遺物

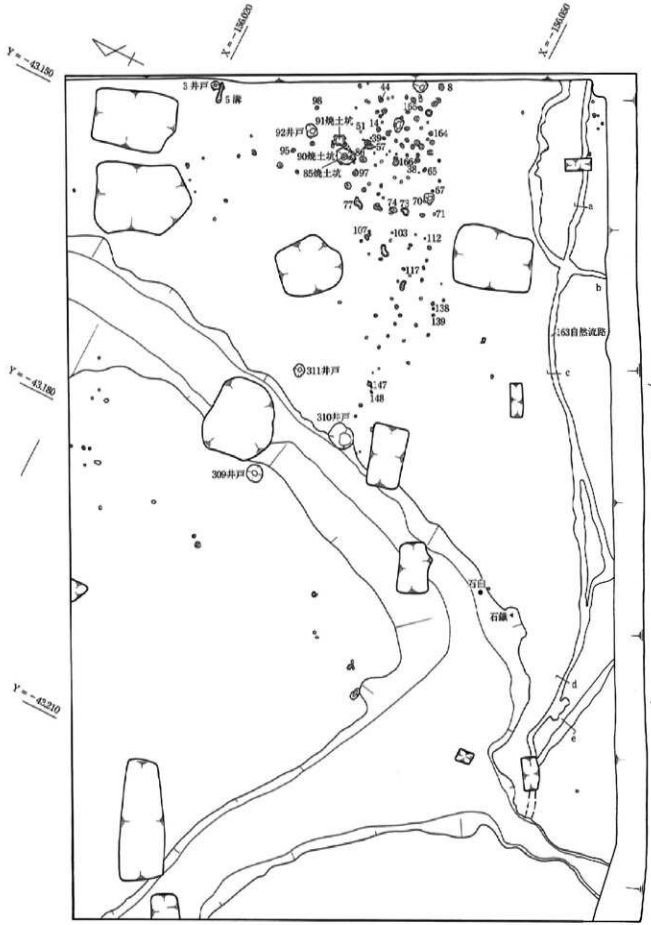

X＝－156,020
X＝－156,050
Y＝－43,150
Y＝－43,180
Y＝－43,210
X＝－156,080
3井戸
5溝
91焼土坑
92井戸
90焼土坑
85焼土坑
163自然流路
311井戸
310井戸
309井戸
石臼
石鍋
a
b
c
d
e

図20　第３面（１：400）

第2－b面包含層出土遺物（図19・149　図版15・24）

近世から中世を主とする遺物が出土している。

129、130は黒色土器A類椀である。時期は平安京II期新と平安京III期新にあたると思われる。

131は中世の土師器皿Jタイプである。132は灰黄色ないし灰白色を呈した、13世紀の中国製四耳壺である。133は瓦質の火舎で、口縁部が内面側に厚くなっている。

134は口縁部外面に段を持たない土師質羽釜で、山城Ebの型式か。

135は直径4cmの周縁が一部欠けた青銅製円板で、裏面側へ湾曲している。片面中央部には、帯状に何かが付着している。仏具や装飾具の一部である可能性が考えられる。

図版15－433は小型の泥人形である。田畑の豊穣を祈る近世の伏見土人形の類か。434は青銅製の小さな不明の部品である。片方が細く尖り、もう一方の端は耳掻き状に丸く僅かに屈曲する。中央部には長軸方向のスカシがある。何の部品か不明である。

この他、瓦片、円筒埴輪破片（図149－417・420　図版24－417）、サヌカイトなどが見られた。

第3面（図20　図版3）

第3層のにぶい黄褐色および黄褐色粘質シルトを主体とする土層を掘削し、検出した遺構面を第3面とした。

第3面は東側の微高地が高く、北側・西側に向かって低くなり平坦となる。特に南側は谷状に落ち込む様相を示す。第3層は南側の谷部および西側の低地部で厚く堆積しており、東側の微高地ではほとんど堆積は見られなかった。

第3面で検出した遺構として、東側の微高地では多数のピットや焼土坑、井戸などの他、数棟の建物跡と柵列を検出した。また、大河川の北側でも多くのピットを検出している。

南側では一時期に流れた自然流路跡が見られた。建物等を検出した東側の微高地上ではT.P.8.15～8.25m前後を測る。北側の遺構面はT.P.7.90m前後を測る。

第3面は検出された遺構、遺物から、おおむね中世（鎌倉時代から室町時代）に相当するものと考えられる。

3井戸・5溝（図20・22　図版3）

東側の微高地北西端部で検出した3井戸と井戸にともなう5溝である。

3井戸はやや不整円形状を示す井戸である。直径約1.0m、深さは約70cmを測る。上部約30cmはすり鉢状であるが、下部は径40cmの円柱状となる。おそらく下段に曲げ物などの井戸枠があったものと

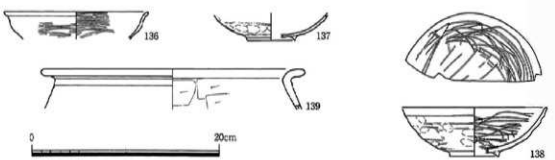
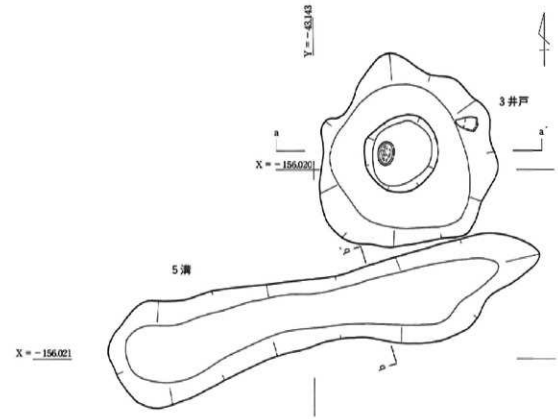


図21　第3面3井戸・5溝出土遺物



1．10YR 4/2　灰黄褐色　粘質シルト
2．10YR 4/3　にぶい黄褐色　粘質シルト
　（粒山ベースのハブロック含む）
3．10YR 5/3　にぶい黄褐色　細砂
4．10YR 4/4　褐色　粘質シルト
G．10YR 6/4　にぶい黄橙色，
　10YR 5/4　にぶい黄褐色　粘質シルト

1．10YR 4/3　にぶい黄褐色　粘質シルト
2．10YR 3/2　黒褐色　粘質土
3．10YR 4/1　褐灰色　粘質土（礫含む）
4．10YR 4/2　灰黄褐色，10YR 5/1　褐灰色　粘質土
5．10YR 2/1　黒色　粘質土（礫，土器含む）
6．2.5Y　4/2　暗灰黄色　粘質土（小礫，土器含む）
7．2.5Y　5/2　暗灰黄色　粘質土
8．2.5Y　6/2　灰黄褐色　細砂
9．2.5Y　6/3　にぶい黄色　中砂（下層は砂礫層）

0　（1：20）　1 m

図22　第3面3井戸・5溝平・断面図

考えられる。埋土は上層がにぶい黄褐色粘質シルトでブロック土を含む。

中層が黒褐色ないし黒色粘質土、下層が礫を含む暗灰黄色粘質土となっている。中・下層が滞水性の水成堆積で埋没した後、人為的に埋め戻されたものと思われる。

下層の暗灰黄色粘質土からは完形の瓦器椀が1点出土した。検出時には、ほぼ正位置を向いていたことから、人為的に埋められた可能性が高い。

この他、中層を中心に瓦器椀片、土師質羽釜片などが出土している。これらの遺物は、12世紀から13世紀頃に比定することができる。

5溝は、3井戸に近接して検出された東西方向の溝である。検出幅は約25cm、深さは10cmを測る。検出長は1.3mであるが、さらに長かったものと思われる。断面形はやや底が平らなU字型を示し、井戸側が一段浅くなっている。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト、灰黄褐色粘質シルトが主を成し、下層にラミナが見られる、止水堆積の様相を示す層が堆積している。おそらく浅い溝が埋没した後、意識的にやや深く溝を再掘削したのであろう。

また、溝は東西方向で、条里に則った土地地割りに規制されていると思われる事から、計画的に設定された溝であると考えられる。

集落に属する井戸と、その井戸に付帯する溝であると思われる。

溝内から土師質羽釜（139）、瓦器椀（136～138）などの遺物が出土した。

12世紀から13世紀頃に比定することができる。（図21）

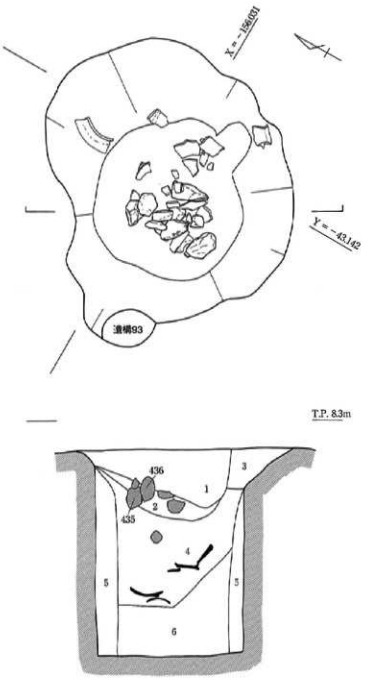


図23 第3面92井戸平・断面図

3井戸・5溝出土遺物（図21　図版16）

3井戸からは、II－2～III－1と考えられる瓦器椀136～138が出土している。136の瓦器椀は外内に密なヘラ磨きが残り、もう少し古い時期になるかもしれない。

5溝からも、3井戸と同時期と考えられる、土師質羽釜(139）が出土している。また、図化していないが瓦器椀III－1～2の底部や、中世の須恵質鉢の体部破片なども見られる。139は土師質羽釜河内B1c型と思われるものである。これらの遺物は12世紀から13世紀に属すると考えられる。

92井戸（図20・23　図版3）

東側の微高地の北西部で検出したやや東西に広がる不整円形状を示す井戸である。

井戸の検出径は短径が1.1m、長径が1.5m、深さは1.1mを測る。掘方は上部がややラッパ状に開くほぼ円柱状を示す井戸である。おそらく下段に曲げ物などの井戸枠があったものと思われる。

埋土は下層がにぶい黄褐色砂質シルトで滞水性の水成堆積の様相を示す。中層は黒褐色粘質土で止水堆積層の様相を示す。上層は灰黄褐色砂混じり粘質シルト、暗褐色砂混じり粘質シルトである。

中層の埋土内からは、瓦器椀片が出土した。井戸の機能時に埋没したものと考えられる。

上層の埋土内からは、瓦器椀、土師質羽釜、須恵質片口鉢などの日常的な生活用品と焼成をうけた石、瓦片、焼土塊、炭、炭化物粒などが数多く出土した。

何らかの焼成行為によって生じた炭、灰などを含んだ土壌と共に人為的に埋め戻しが行われたものと思われる。瓦や根石と思われる石も見られることから、家屋等の廃絶・焼失にともない、その後片付けの際に井戸内に廃棄物として投棄されたものと考えられる。

出土した遺物などから、井戸の機能時は12世紀後半から13世紀頃に比定することができる。

この92井戸の周辺地域では、85・90・91焼土坑などや、広範におよぶ焼土域（図20）が見られた。

焼土域には、遺構として平面形や掘方が捉えられず、焼土層や土壌に変色の見られる部分として、周辺に点在している様子がうかがえる。上層は削平されていると思われるが、何らかの焼成行為によって生じた炭化物や灰などの土壌化したものが、地面の窪地などに堆積したものと考えられる。

92井戸出土遺物（図24・25・66　図版16・22・26）

92井戸からは多くの遺物が出土している。瓦器椀、小皿、土師質羽釜、須恵質鉢、瓦、根石などで、おおむね中世の遺物である。

140・141は瓦器皿、142～145は瓦器椀、146～155は土師質羽釜、156・157は須恵質鉢である。

140の瓦器皿は見込みに格子状暗文が残り、器高が少し深めである。

瓦器椀は145がII－2～3、142がII－3、143・144がIII－2～3である。

土師質羽釜は河内B1cかB1d型に属すると思われる。156の須恵質鉢は口縁部を上方に拡張させており、第III期第1段階に属し、157は口縁端部の拡張が殆ど見られないことから第II期第2段階に属すると思われる。

158の丸瓦、159の平瓦はともに焼けて煤が付着している。丸瓦は一部赤く変色している。159の平瓦は凸面縄叩き、凹面に木挽き痕と砂の付着が見られる。

図版16－435～437の石は根石かと思われる一面が平らな石である。

435・437には煤が付着している。石材は435が砂岩、436が流紋岩A、437が流紋岩と考えられる。

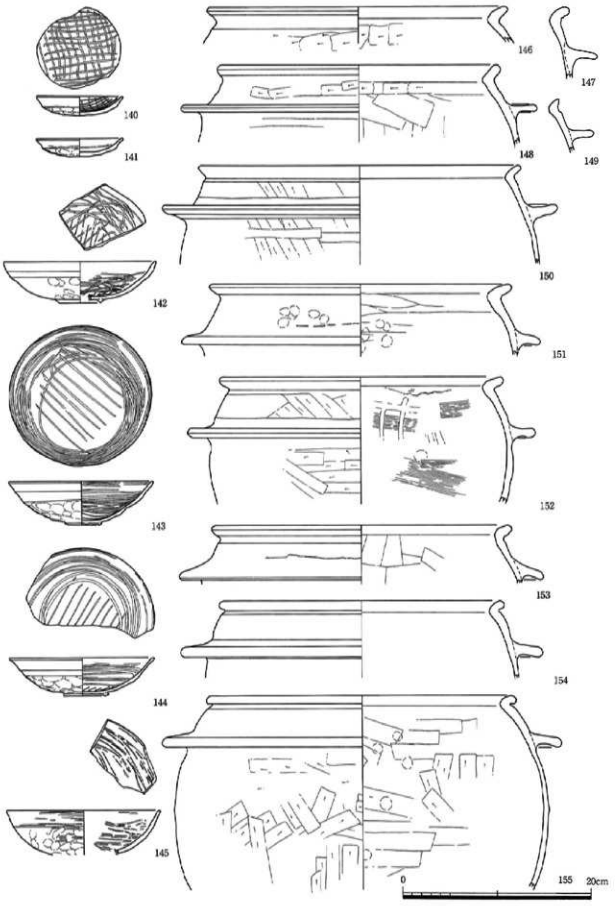


図24　第3面92井戸出土遺物①

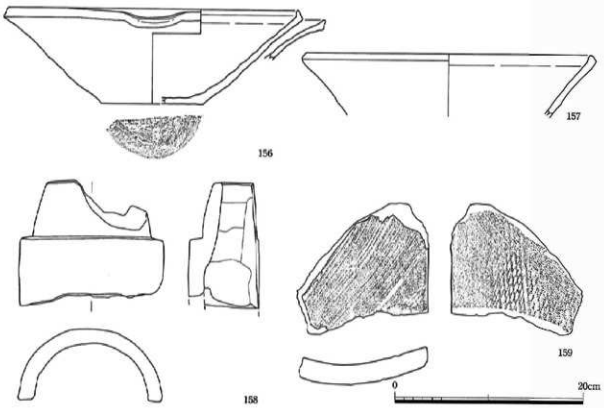


図25　第3面92井戸出土遺物②

図66　図版22－394は縄文土器の破片であるが、細片のため詳細は不明である。押型文らしきものが観察され、縄文早期の可能性がある[4]。

この他、弥生土器と思われる細片や、古墳時代の須恵器の破片などが若干出土している。

309井戸（図20・26　図版3）

大河川の北西側に近接して検出した井戸である。

やや東西に広がる楕円形状を示す、浅い素掘りの井戸である。井戸の上層部は後世の洪水などにより削平を受けているものと思われる。検出径は長径が0.95m、短径が0.8m、深さは約0.3mを測る。埋土は、にぶい黄褐色および暗灰黄色中砂～細砂で、洪水・流水などにより短期間で埋没したものと思われる。

埋土からは土師質土器の細片が出土している。

309井戸は、比較的浅いものであることから、集落で一般生活に際する井戸ではなく、耕作時に一時的に水を溜めるなどの機能をもつ井戸であると想定される。

310井戸（図20・26　図版3）

大河川の東側に近接して検出した井戸である。

やや南北に広がる不整円形状を示すもので、断面形は上方がラッパ状に広がり、下方は円柱状を示す素掘りの井戸である。上層部は後世の削平を受けているものと思われる。検出径は長径が1.4m、短形が1.2m、下段は径0.55mを測る。深さは0.6mである。底部の形状は不整形で凹凸が見られる。最下層は木片や植物遺体等の混入物を含む灰白色粘質土が主を成し、止水堆積の様相を示す。上層は黄褐色細

砂で洪水・流水などにより短期間に埋没したものと思われる。埋土の堆積状況から、一度埋没した後、再度掘削して利用し、止水堆積の状況を示す灰オリーブ色粘質シルトが再堆積したものと思われる。埋土中からは、土師質羽釜などの細片が出土した。

井戸は比較的浅いものであり、集落域から離れていることなどから、309井戸同様、耕作関連の井戸であると考えられる。

311井戸（図20）

大河川の真側に近接して検出した井戸である。

311井戸は、第4層掘削時に確認されたため、下部のみの検出となった。検出時の形状は、やや東西に広がる不整円形状を示す。検出径は長径が0.6m、短形が0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は黄褐色細砂となっている。最下層には植物遺体等の混入物を含む灰白色粘質土が見られた。遺物は出土しな

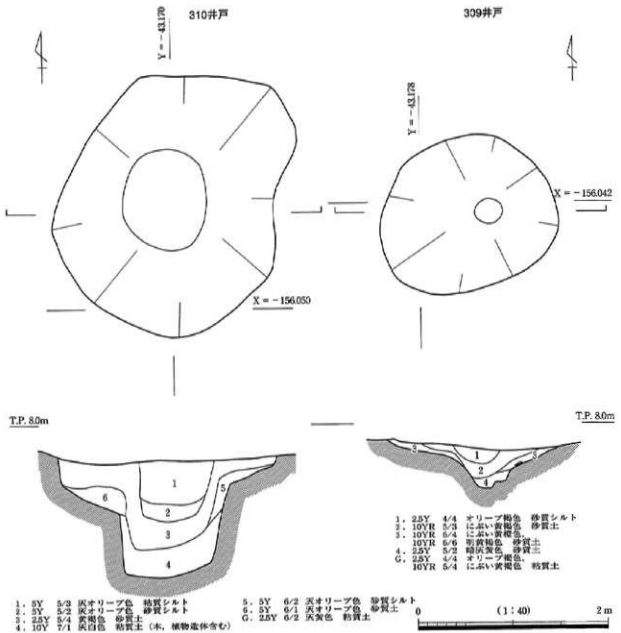


図26　第3面309・310井戸平・断面図

かった。

309井戸と同様、耕作関連の機能を持つ井戸であると考えられる。

90・91焼土坑（図20・27）

調査区東側の微高地北西部で、92井戸に近接して検出した焼土坑である。

土坑として捉えられた遺構では90・91焼土坑があげられるが、平面形や掘方が捉えられず焼土層や土壌に変色の見られる部分は、周辺に数カ所広がっている（図20）。焼土域は東西約10m、南北約６mによぶ。上層は削平されていると思われるが、何らかの焼成行為によって生じた炭化物や灰などの土壌化したものが地盤の窪地などに堆積したものと考えられる。

90・91焼土坑はいずれもピット状にやや深くなる箇所が見られるが、ほぼ均一的に浅い堆積状況を示す。ピット状に深くなる部分の埋土は、黒褐色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトで炭化物や灰などを含む。均一的に浅い部分の埋土は、にぶい黄褐色砂質シルトで細かい炭化物や灰などを含む。焼土坑および焼土層には、瓦器椀細片、土師器細片、細かい焼土塊、炭化物などが混入している。遺物は、細片のため詳細は不明である。

このような焼土の広がりを考えると、①火災などの災害、②広範で焼成行為を人為的に行う場合が考えられる。①では、家屋などの火災などが挙げられる。②では、火を用いて行う作業などが挙げられ、鍛冶、鋳造関連遺構などが想定される。焼土層中の焼土塊、炭化物などの混入物を分析していないので不確定ではあるが、焼土層は均一的に広がるのではなく、土壌に変色の見られる箇所がいくつか見られ、焼土層が厚く堆積する部分が散逸的であることなどから、焼成炉など高温になるものがいくつか設置されていたのではないかと想定される。推測の域を出ないが、「我孫子鋳物師」による鋳物関連の遺構ではないかと思うところである[1]。

163自然流路（図20・27　図版３）

調査区南側の低地部で検出した東西方向の自然流路である。第２－ｂ面で検出した自然流路の下層遺構にあたる。この163自然流路は（その６）調査区でも検出しており、東方に位置する河川が増水した際に、一時的に流れたものと思われる。

163自然流路は幾枝にも分岐して伸びており、複雑な平面形状を示す。自然流路の底部は起伏に富んでおり、溝の深さや断面形態に一様性が見られない。自然流路の検出幅はおおむね0.2～1.0m、深さは10～20cmを測る。検出長は70m以上である。（その６）調査区での検出分を含めると約80mとなる。

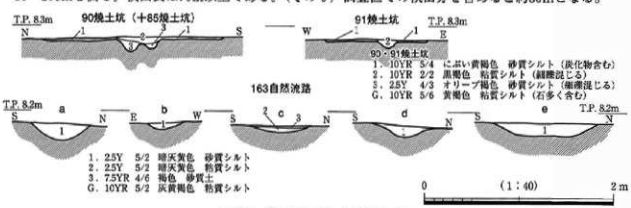


図27　第３面土坑・流路断面図

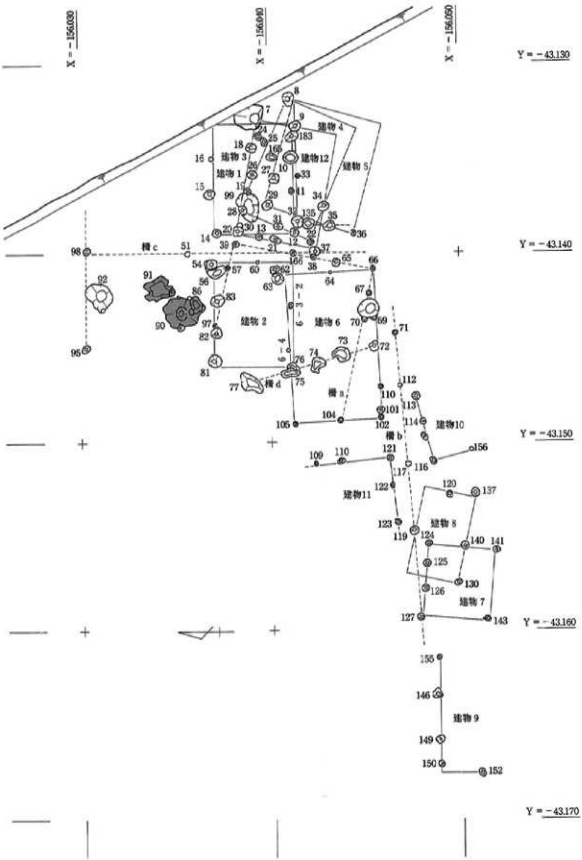


図28　第3面建物・柵列配置図（1：200）

埋土は、上層がにぶい黄色ないし黄灰色砂、暗灰黄色砂質シルト、下層は灰オリーブ色粘質シルトと砂混じりシルトが互層を成す。下層には鉄分沈着が認められる。堆積状況から流水と堆積を幾度となく繰り返した流水堆積の状況が看取される。163自然流路から、遺物は出土していない。

掘立柱建物（図28）

東側の微高地で数多くのピットを集中的に検出した。これらのピットは浅いものが多く、また埋土は洪水砂と見られる砂層を含むものが、多く見られることから、洪水・流水など後世の影響を受けて本来の遺構面は削平されているものと思われる。建物ピットとして掘方などが、不明瞭なものもあるが、多数のピットから、計12棟の掘立柱建物と4列の柵列を復元することができた。さらに多くの建物の存在が考えられるが、復元は困難であった。復元された掘立柱建物の棟方向には幾通りかの方向性が見られた。またピットの集中する範囲もほぼ限定されることなどから、建物の配置に際しては、何らかの規制があったものと考えられる。掘立柱建物の建物ピットから出土した遺物は少なく、建物の時期を確定するには決定力に欠くが、おおむね中世のものと、さらに古い様相を示すものが出土している。

建物1（7・9～17ピット）（図28・29）

ピットの集中する範囲の東側部で検出した掘立柱建物である。

掘立柱建物の規模は東西3間（6.0m）×南北2間（4.4m）の東西棟で、主軸方向はほぼ正方位を示す。柱穴間は東西列が平均2m、南北列が平均2mを測る。建物ピットの検出形は隅丸方形ないし楕円形を呈す。検出径は30～75cm、深さは6～27cmを測る。埋土は、土層内に土器細片が混じるにぶい黄褐色砂質シルトが主を成し、下層には黒褐色粘質シルトおよび黄褐色砂質シルトが見られる。柱痕の明確なピット（9・11～14ピット）も見られた。柱痕の直径は20cm程度である。

7ピットからは土師器皿などが出土した。土師器皿は原型を止めないほど、割れた状態で検出した。ピット埋土の上層部で検出していることから、柱抜き取り後埋め戻した際に埋土中に混入、あるいは割った状態で埋納したものと思われる。土師器皿は、内面に僅かに一段の放射状暗文が見られる事から、平城宮III～IVの時期と思われる。この他、土師器甕片などが見られた。

なお、17ピットは側溝の断面で確認された遺構で、検出形状、埋土の堆積状況は不明である。

建物2（ピット6－3－2、54・60・76・81～83ピット）（図28・29）

建物1の西側で近接して検出した掘立柱建物である。

一部、建物を構成するピットが未確認であるが、東西3間（5.5m）×南北2間（4.2m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はほぼ正方位を示す。柱穴間は東西列が平均1.85m、南北列が平均2.1mを測る。柱穴の検出形は隅丸方形ないし楕円形を呈す。ピットの検出径は50～80cm、深さは5～18cmを測る。埋土は土層内に土器細片が混じる黒褐色粘質シルトとにぶい黄褐色砂質土が主を成す。

柱痕の明確なピット（54・60ピット）も見られた。柱痕の直径は20cm程度である。54・81～83ピットからは、土師器甕片、須恵器甕片などが出土した。

なお、ピット6－3－2は下層の竪穴住居検出時に確認した遺構であるが、整理した結果、この建物のピットと解したものである。

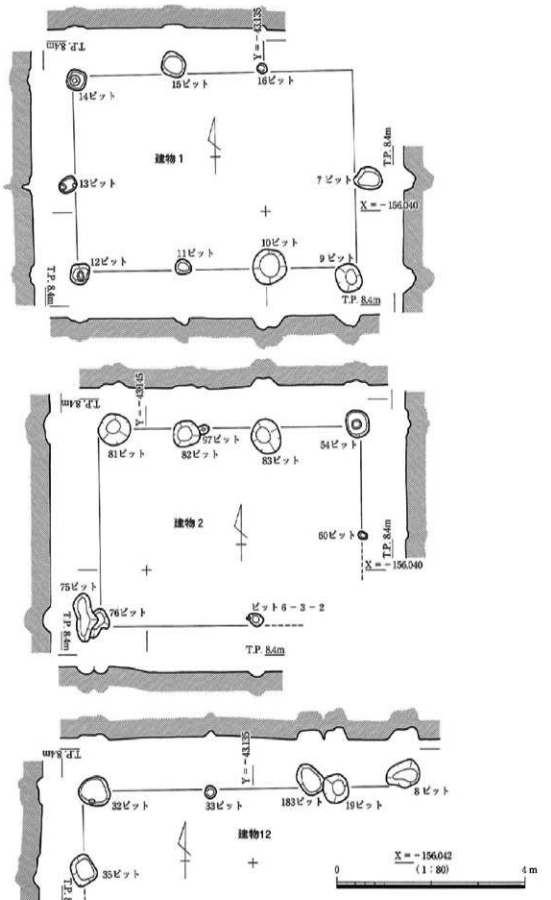
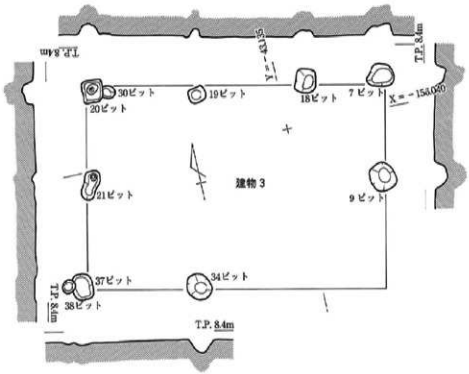


図29　第3面建物1・2・12平・断面図



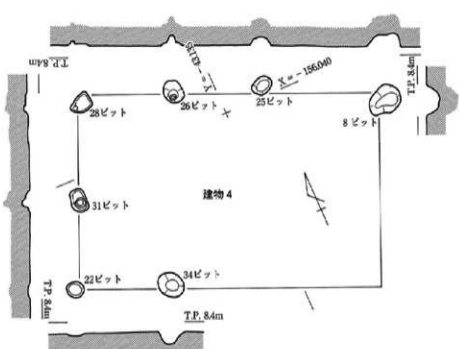
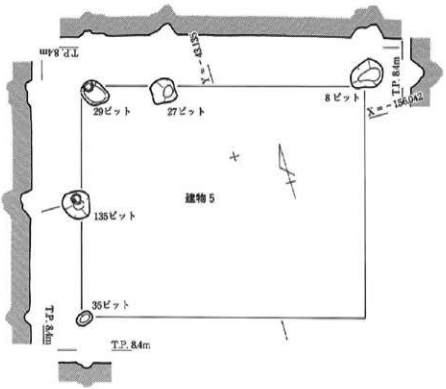


図30　第3面建物3・4平・断面図



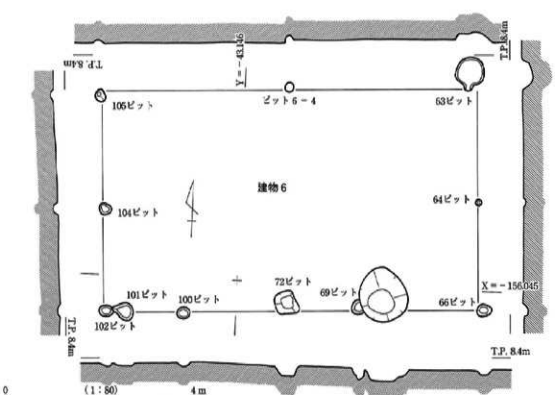


図31　第3面建物5・6平・断面図

建物3（7・9・18～21・34・37ピット）（図28・30）

建物1に重複して検出した掘立柱建物である。

一部、ピットが未確認な部分もあるが、東西3間（6.3m）×南北2間（4.3m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－12°－Eを示す。柱穴間は東西列が平均2.2～2.3m、南北列が平均2.0mを測る。ピットの検出形は長方形ないし隅丸方形を示す。検出長は20～60cm、深さは3～28cmを測る。

埋土は土層内に土器細片が混じる黒褐色ないし暗黄褐色粘質シルトが主を成す。柱痕の明確なもの（19～21ピット）も見られた。19～21・37ピットからは、土師器甕片、須恵器片、瓦器椀片などが出土した。19ピットから出土した土師器甕は、柱の抜き取り穴埋土の上層部で形状を細かく割れた状態で検出した。

柱抜き取り後埋め戻した際に埋土中に混入、あるいは割った状況で埋納したものと思われる。

建物4（8・22・25・26・28・31・34ピット）（図28・30）

建物3に重複して検出した掘立柱建物である。建物の南西部分のピットが不明瞭であるが、東西3間（6.4m）×南北2間（4.2m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－23°－Eを示す。柱穴間は東西列が平均2.0m、南北列が平均2.1mを測る。ピットの検出形はやや歪な楕円形を示す。検出長は30～70cm、深さは4～27cmを測る。埋土はにぶい黄褐色ないし明黄褐色礫混じり粘質シルトが主を成す。柱痕の明確なもの（26・28・31ピット）も見られた。柱痕の直径は20cm程度である。

8・31ピットからは中世の土師器甕片、土師器小片などが出土した。また、8ピットでは柱を抜いた跡がうかがえた。

建物5（8・27・29・36・135ピット）（図28・31）

建物4に重複して検出した掘立柱建物である。建物の南西部分が不明瞭であるが、東西3間（6.0m）×南北2間（5.0m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－15°－Eを示す。柱穴間は東西列が平均2.0m、南北列が平均2.5mを測る。ピットの検出形はややいびつな方形ないし楕円形を呈す。

検出径は30～60cm、深さは10～27cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトおよび黄褐色砂礫混じり粘質シルトが主を成す。柱痕の明確なもの（27・29・135ピット）も見られた。柱痕の直径は20cm程度である。8・27・29・36・135ピットから中世の土師器甕片、瓦器椀片、その他小土器片が出土した。

建物6（ピット6－4、63・64・66・69・72・100・102・104・105ピット）（図28・31）

建物2に重複して検出した掘立柱建物である。建物北辺部分が不明瞭であるが、東西4間（7.9m）×南北2間（4.8m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－5°－Wを示す。柱間は東西列が平均2.3m、南北列が平均2.0mを測る。ピットの検出形は小ぶりの円形ないしひずんだ楕円形を呈す。検出径は20～110cm、深さは3～23cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトおよび黄褐色砂礫混じり粘質シルトが主を成す。検出形が小ぶりの円形を示すものは、柱痕と思われる。柱痕の直径は20cm程度である。ピットが2つ近接するものが見られることから、建て替えが行われたものと推測される。72ピット・ピット6－4から土師器甕などの細片、その他小土器片などが出土した。

なお、ピット6－4は下層の竪穴住居検出時に確認した遺構であるが、整理した結果建物ピットと解したものである。63ピットは下層の遺構（竪穴住居の竈部）と重なって検出したため、建物ピットの検出

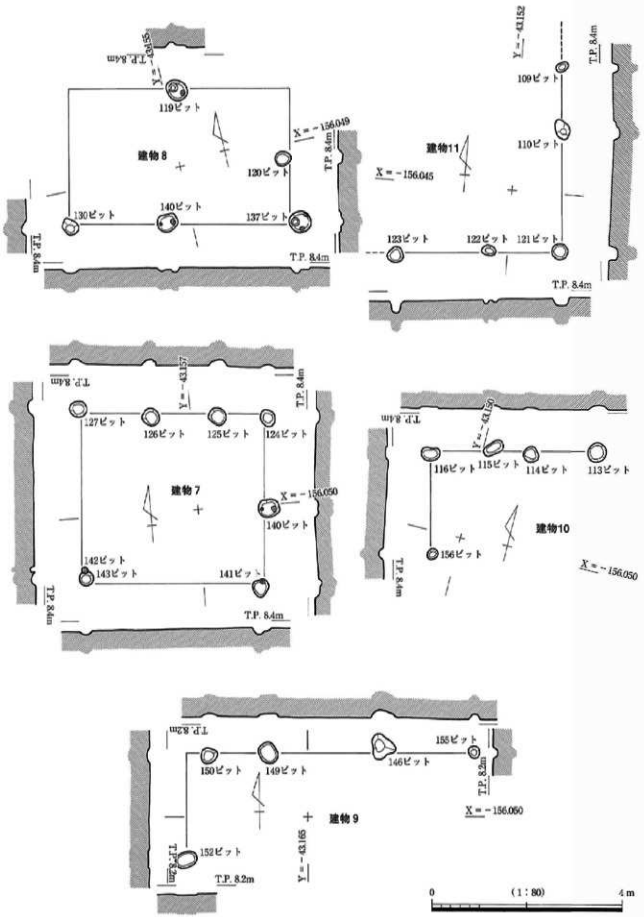


図32　第3面建物7・8・9・10・11平・断面図

形態は不明瞭である。

建物7（124～127・140・141・143ピット）（図28・32）

ピットの集中する南西部で検出した掘立柱建物である。一部ピットが未確認な部分があるが、東西3間（3.9m）×南北2間（3.6m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－5°－Eを示す。

柱間は東西列が平均1.5m、南北列が平均1.8mを測り、やや不均等な形態を成す。小屋的な建物ではないかと思われる。ピットの検出形はおおむね円形ないし楕円形を呈す。

検出径は30～50cm、深さは6～17cmを測る。埋土は土内に土器細片が混じる黒褐色ないしにぶい黄褐色粘質シルトが主を成す。柱痕の明確なもの（142・141ピット）も見られた。125・127ピットから土師質羽釜片などが出土した。

建物8（119・120・130・137・140ピット）（図28・32）

建物7に重複して検出した掘立柱建物である。一部ピットが未確認な部分もあるが、東西2間（4.6m）×南北2間（2.9m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－12°－Eを示す。柱間は東西列が平均2.5m、南北列が平均1.4mを測る。やや不均等な形態を成す。ピットの検出形はやや歪んだ楕円形を呈す。検出径は30～50cm、深さは8～14cmを測る。埋土は黒褐色ないし、にぶい黄褐色粘質シルトが主を成す。柱痕の明確なもの（119・137・140ピット）も見られた。130ピットから小土器細片などが出土した。

建物9（146・149・150・152・155ピット）（図28・32）

ピットの集中する範囲の西端部で検出した。一部ピットが未確認で不明瞭な部分も多いが、おおむね東西3間（5.7m）×南北1間以上（2.2m）を測る、やや不均等な様相を示す掘立柱建物である。主軸方向はほぼ正方位を示す。柱穴間は東西列が平均1.7～2.0m、南北列が平均2.2mを測る。ピットの検出形はやや歪んだ楕円形を呈す。検出径は20～50cm、深さは3～18cmを測る。埋土は灰黄色砂質シルトや土器細片が混じる黒褐色粘質シルトが主を成す。146・149ピットから土師器甕片、瓦器椀、須恵器杯片、小土器細片などが出土した。

建物10（113～116・156ピット）（図28・32）

ピットの集中する範囲の南部で検出した。一部ピットが未確認で不明瞭な部分も多いが、おおむね東西2間以上（3.7m）×南北1間以上（2.2m）の掘立柱建物であると思われる。主軸方向はN－14°－Wを示す。柱穴間は東西列が平均1.8m、南北列が平均2.0mを測る。埋土は黄褐色砂混じりシルトが主を成す。ピットの検出形はやや歪んだ楕円形を呈す。検出径は20～40cm、深さは4～11cmを測る。ピットから遺物の出土はなかった。

建物11（109・110・121～123ピット）（図28・32）

ピットの集中する範囲の西部で建物6に近接して検出した。一部ピットが未確認で不明瞭な部分も多いが、おおむね東西2間以上（3.7m）×南北1間以上（4.0m）の掘立柱建物になると思われる。主軸方向はN－5°－Wを示す。建物6と併存するものと考えられる。柱間は東西列が平均1.5m、南北列

が平均1.5～2.0mを測る。ピットの検出形はやや歪んだ楕円形を呈す。検出径は18～35cm、深さは11～16cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトやにぶい黄色砂混じりシルトが主を成す。109・110ピットから小土器片などが出土した。

建物12（8・19・32・33・35・183ピット）（図28・29）

建物4、5に重複して検出したピット列である。一部ピットが未確認で不明瞭な部分も多いが、おおむね東西3間（7.0m）×南北1間以上（1.8m）の掘立柱建物になると思われる。

主軸方向はほぼ正方位を示す。柱間は東西列が平均2.5m、南北列が平均1.8mを測る。ピットの検出形は方形気味の楕円形を呈す。検出径は20～70cm、深さは5～27cmを測る。埋土は土器細片が混じる黒褐色粘質シルト、黄褐色砂混じりシルトが主を成す。8・32・19ピットから瓦器椀、土師器甕片、小土器片などが出土した。

柵列（図28）

多数のピットの中から計4列の柵列を復元することができた。ピットの遺存状況が芳しくないため不明瞭な部分が多く、さらに多くの柵列の存在が考えられたが、復元は困難であった。柵列には方向性が見られ、近接する建物との関連が想定できるものも見られた。

柵列a（97・57・39・166・38・65・66・67・70・104ピット）（図28・33）

建物3に近接して検出した逆コの字状を呈する柵列である。柵列aは、南北方向に4間以上（7.6m）、北端の39ピットから東西方向に2間以上（4.5m）、南端の66ピットから東西方向に3間以上（8.0m）を測る。さらに西側に伸びるものと思われるが不明である。主なピットの検出形は方形気味の楕円形を示す。検出径は25～45cm、深さは5～36cmを測る。埋土は小礫・石の混じるにぶい黄褐色砂質シルト、黒褐色粘質シルトが主を成す。柱の抜き取り跡が見られる。

柵列aの主軸方向はN－12°－Eを示す。建物3と同一方向を指すことから、建物3の西側を区画する柵になるものと思われる。しかしながら、建物3に取りつく柵列跡は不明瞭である。柵列aが成す区画内では、この柵列に対応する建物跡は確認できなかった。

39・67ピットからは須恵器杯片、土師器細片などが出土した。

柵列b（71・112・117・119・127ピット）（図28・33）

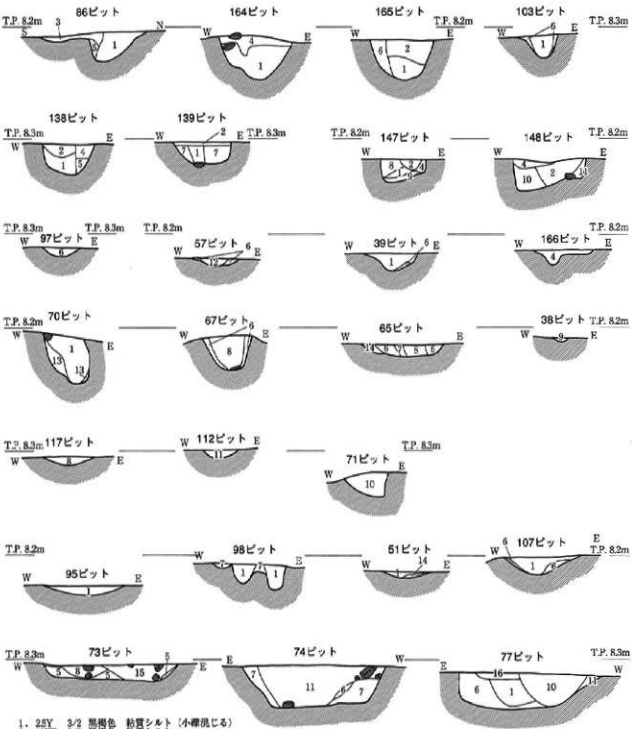
建物6、建物11の南側で検出した東西方向の直線を呈する柵列である。

柵列の検出長は東西方向で4間以上（15m）を測る。さらに東西方向に伸びるものと思われるが不明である。主なピットの検出形は、やや歪んだ楕円形を示す。検出径は20～45cm、深さは10～30cmを測る。埋土は小礫が混じるにぶい黄褐色粘質シルトが主を成す。

柵列bの主軸方向はN－5°－Wである。建物6と建物11と同一方向を示し、建物の南側に付随する柵列であると考えられる。127ピットから土師器小片などが出土した。

柵列c（95・98・51・166ピット）（図28・33）

建物1、建物2の周辺で検出した「二」の字状を呈する柵列である。



1. 2.5Y　3/2　黒褐色　粘質シルト（小礫混じる）
2. 10YR　3/2　黒褐色　砂質シルト
3. 2.5Y　4/3　オリーブ褐色　砂質シルト
4. 2.5Y　5/2　暗灰黄色　砂質シルト（小礫混じる）
5. 2.5Y　6/4　にぶい黄色　粘質シルト
6. 2.5Y　5/3　黄褐色　砂質シルト（小礫、石含む）
7. 10YR　5/3　にぶい黄褐色　砂質土（小礫混じる）
8. 10YR　4/3　にぶい黄褐色　粘質シルト（小礫混じる）
9. 2.5Y　6/8　明黄褐色　粘質シルト
10. 10YR　3/3　暗褐色　粘質シルト（礫混じる）
11. 2.5Y　4/3　オリーブ褐色　粘質シルト（小礫混じる）
12. 5Y　3/2　オリーブ黒色　粘質シルト
13. 2.5Y　4/3　オリーブ褐色　砂質シルト（小礫混じる）
14. 2.5Y　7/4　淡黄色　砂質シルト（礫混じる）
15. 2.5Y　5/2　暗灰黄色　粘質シルト（小礫混じる）
16. 7.5YR　4/3　褐色　粘質シルト

図33　第3面建物ピット・柵列断面図

柵列cは、南北方向（98ピット～166ピット）が約11m、北端の98ピットを中心として東西方向に約10mである。また、南端の166ピットを中心として東西方向に約17m以上を測る。さらに東西方向に伸びる様相が見られるが不明である。

主なピットの検出形はやや歪んだ楕円形を示す。検出径は25～50cm、深さは4～20cmを測る。埋土は小礫が混じる黒褐色粘質シルトが主を成す。

主軸方向は建物1、建物2と同一方向で、ほぼ正方位を示す。南北方向の柵列は、建物1と建物2を区画し、166ピットを中心として東西方向に伸びる柵列は、建物1と建物2の南限を区画するものと考えられる。また、98ピットを中心として東西に伸びる柵列は、建物1と建物2の北限を区画するものと考えられる。遺物は出土しなかった。

柵列d（77・75・74・73・72ピット）（図28・33）

建物2の西側で検出した直線方向を呈する柵列である。

柵列dの検出長は約7mである。ピットの検出形は不定形で、検出長は80～150cm、深さは10～30cmを測る。埋土は小礫が混じる暗黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色粘質シルトが主を成す。柱の抜き取り跡が明確に観察できる。主軸方向はN－15°－Wを示し、他の柵列とはやや方向が異なるものである。

若干距離が離れるが、建物10と主軸方向がほぼ同一方向を呈しており、付随するものと考えられる。

77ピットから、瓦器椀片などが出土した。

建物ピット（86・103・138・139・147・148・164・165ピット）（図20・33）

建物や柵列のプランとして復元できなかったが、掘方等の形態から建物や柵列にともなうと思われるピットを主に掲載した。

ピットの検出形は、円形ないし楕円形のもの（103・138・139・164・165ピット）と方形ないし隅丸方形（86・147・148ピット）を呈するものが見られた。検出径および検出長は約20～40cm、深さは約10～30cmを測るものが主を成す。埋土は、黒褐色系粘質シルトで小礫を含むもの、にぶい黄褐色砂質シルト、暗褐色粘質シルトなどである。

ピットの中には、柱痕が見られるもの（139ピット）、遺構の底から石（根石か？）を検出したもの（139・148ピット）、柱の抜き取り跡と考えられるもの（86・147・148ピット）などが見られた。

建物ピット出土遺物（図34・66　図版16・22）

建物のピットからはわずかではあるが遺物が出土した。しかしながら、実測の可能なものがごくわずかであり、遺物の器種や時期を確定するのにも困難なものが多かった。

建物1の7ピットからは土師器皿（160）が出土している。時期は平城宮III～IVに属すると思われるもので、内面には僅かに放射状の暗文が見られる。

44ピットからは平安時代の黒色土器A類杯（161）、瓦器椀の細片が出土している。

図34　第3面建物ピット出土遺物

建物9の146ピットからは弥生時代中期の高杯脚部(387)、古墳時代の須恵器、中世の土師器、瓦器の細片などが僅かに出土している。

掘立柱建物の配置について（図28）

今回検出したピット群からいくつかの掘立柱建物のプランを復元することができた。復元された掘立柱建物のプランは、その主軸の方向や建物ピットの形態、出土遺物などから幾つかのタイプに分類することができた。

①正方位…建物1・建物2・柵列c

ピットの検出形が隅丸方形ないし楕円形を呈するものである。柱間が約2m以上を測り、ほぼ均等で整っている。間口の大きな建物である。さらに、建物の周囲に計画的な柵列が巡ることなどから、地主など上層クラスの建物に相当すると思われる。建物ピット内から出土した遺物として、平城宮III～IVに属する土師器皿、土師器甕片、須恵器甕片などが見られた。建物プランの中でも古い様相を示し、奈良時代から平安時代頃に比定できる。

②ほぼ正方位…建物9・建物12

ピットの検出形が方形気味の楕円形ないし、やや歪んだ楕円形を呈するものである。柱間が約2m前後を測るが、やや不均等な様相を示す。ピットの形状にも大小が見られることから、一般庶民的な建物に相当すると思われる。建物ピット内から出土した遺物として、土師器甕、瓦器椀片、須恵器杯片などが見られた。ピット埋土には時期差が見られるが、おおむね平安時代から鎌倉時代頃に比定できる。

③N－12°－E…建物3・建物8・柵列a

ピットの検出形が長方形あるいは隅丸方形、やや歪んだ楕円形を呈するものである。柱間が約2m以上を測り、ほぼ均等で整っている。ピットの形状もほぼ同様の大きさを示す。また、建物に付随すると思われる柵列が見られることなどから、地主など上層クラスの建物に相当すると考えられる。建物ピット内から出土した遺物として、土師器甕、瓦器椀片、須恵器杯片などが見られた。ピット埋土には時期差が見られるが、おおむね平安時代から鎌倉時代初期頃に比定できる。

④N－23°－E…建物4

ピットの検出形がやや歪んだ楕円形を呈するものである。柱間が約2m以上を測り、ほぼ均等で整っている。ピットの形状もほぼ同様の大きさを示すことなどから、地主など上層クラスの建物に相当すると考えられる。建物ピット内から出土した遺物として、中世の土師器甕などが見られた。建物4は建物5のピットを切っている様相を示す。鎌倉時代から室町時代頃に比定できる。

⑤N－15°－E…建物5

ピットの検出形がやや歪な方形ないし楕円形を呈するものである。柱間が約2m前後を測るが、やや不均等な様相を示す。一般庶民かやや上層クラスの建物に相当するものと考えられる。建物ピット内から出土した遺物として、中世の土師器甕、瓦器椀片などが見られた。瓦器椀の高台は低く粗雑なものである。鎌倉時代から室町時代頃に比定できる。

⑥N－5°－E…建物7

ピットの検出形がおおむね円形ないし楕円形を呈するものである。柱間が約1.8m前後を測り、ほぼ均等で整っている。ピットの形状はほぼ同様の大きさを示す。一般庶民かやや上層クラスの建物に相当するものと考えられる。建物ピット内から出土した遺物として、土師器羽釜片などが見られた。建物7

は建物８のピットを切っている様相を示す。鎌倉時代から室町時代頃に比定できる。

⑦N－５°－W…建物６・建物11・柵列b

ピットの検出形が小ぶりの円形ないし歪んだ楕円形を呈するものである。柱間が約2.0m以上を測るが、やや不均等な様相を示す。建物に付随すると思われる柵列が見られることなどから、一般庶民かやや上層クラスの建物に相当するものと考えられる。ピット内から出土した遺物として、土師器甕片などが見られた。

⑧N－14°－W…建物10・柵列d

ピットの検出形がやや歪んだ楕円形を呈するものである。柱間が約1.8m前後を測るが、やや不均等な様相を示す。ピットの形状はほぼ同様の大きさであるが小ぶりである。建物に付随すると思われる柵列が見られるが、ピットの形状も一様でなく不均等であることから、一般庶民の建物に相当するものと考えられる。ピット内から出土した遺物として、瓦器椀片などが見られた。鎌倉時代から室町時代頃に比定できる。

これらの特徴を検討すると、建物プランの相対順序は、①→⑦→②→⑥→③→④→⑤→⑧と考えることができる。①はやや古い様相が見受けられるが、建物の時期として、奈良時代末頃に相当するものと思われる。②、③などが平安時代から鎌倉時代頃、その他の建物は鎌倉時代から室町時代頃に相当するものと思われる。建物の主軸の方向にやや違いが見られたが、これはその時点の土地区画などによるところが大きいものと推測される。

第３面包含層出土遺物（図35　図版16・26）

第３面包含層からは主に中世の遺物が出土しているが、須恵器、土師器、黒色土器A類椀などの破片も見られた。中世の遺物では土師器皿、土師質羽釜、須恵質鉢、瓦器、瓦質甕、陶磁器、瓦などの破片が数多く出土した。

また、鋳造関連の遺物も数多く見られた。

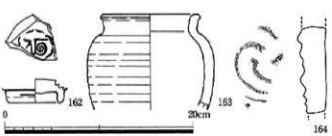


図35　第３面包含層出土遺物

162は見込部に「福」と刻印された15世紀末葉の龍泉窯系青磁碗である。釉は白濁し、文字は不鮮明である。163は16世紀の備前種壺であり、肩部に把手の剥落した痕跡を留める。164は巴文軒丸瓦C型式である。左巻き巴の尾は細くて長く、外区に圏線は無い。外区に一部珠文を残す鎌倉時代の軒丸瓦である。瓦当面に離れ砂が見られる。図版26－458は大型の鞴羽口である。真福寺遺跡出土例に類似する[6]。溶解炉に付随するものか。

第４面（図36　図版４）

第４層の黄灰色砂質土およびシルトの互層を主体とする堆積層を掘削し、検出した面を第４面とした。

第４層は洪水・増水による流水堆積砂層で、調査区の南側の落ち込み部分で厚く堆積している。北側では若干の堆積が見られたが、真側の微高地ではほとんど第４層の堆積は見られなかった。

第４面の地形は、東側の微高地面から一気に南側が谷状に落ち込み、河川跡（南側川）に至る。北側はやや北側に向かって低くなっており、一過的な河川の流水跡（北側川）が見られる。西側では西側川の西肩部に堤防状の高まりが見られるが、西側川の東側周辺は窪地状を呈しており湿地であったことが

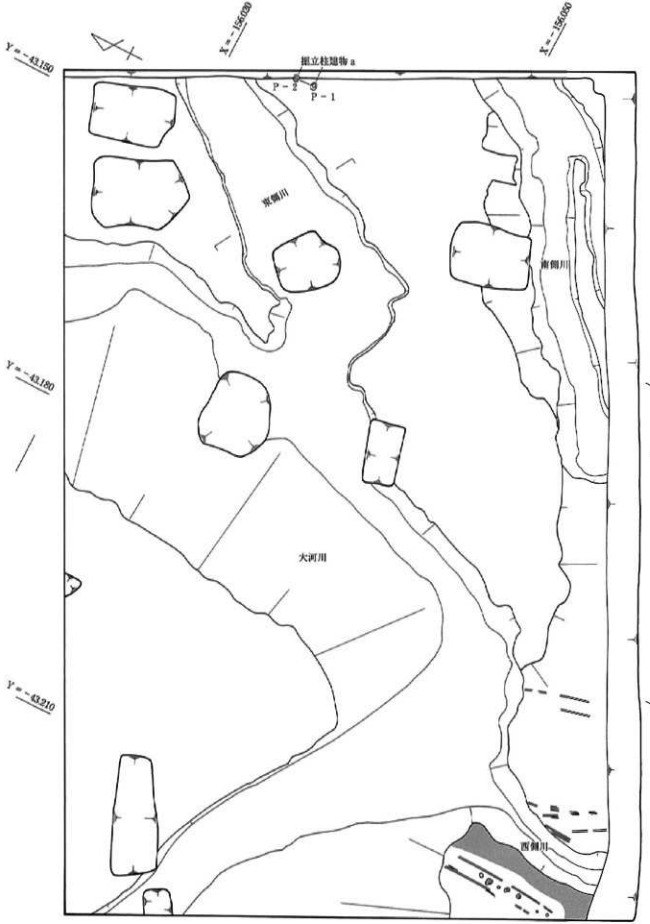

X＝－156.020
X＝－156.050
Y＝－43.150
Y＝－43.180
Y＝－43.210
X＝－156.080
掘立柱建物ａ
P－2
P－1
東側川
南側川
大河川
西側川

図36　第４面（１：400）

うかがえる。南側の河川跡（南側川）の検出面はT.P.7.40m前後を測る。北側および西側では相対的に遺構が見られず、大河川と大河川から東側に流走する河川跡（東側川）がわずかに確認することができた。検出面は、T.P.7.90m前後を測る。

第4面は検出された遺構・遺物などから、おおむね奈良時代末から平安時代頃に相当するものと考えられる。

掘立柱建物a（図36・37）

調査区東側のピットが集中する地域の東端部で、P－1・P－2を検出した。

ピットは南北方向に並び、柱間は2.2mを測る。主軸方向はほぼ正方位を示す。ピットの検出形は東西方向がやや長い方形を示す。P－1は、長辺が76cm、短辺が60cm、深さは26cmを測る。

P－2は、長辺が57cm、短辺が48cm、深さは18cmを測る。埋土は黒色粘質シルトにやや黄色粘質シルトの地山ブロックが含まれるものである。柱痕は確認できなかった。ピット内から遺物等は出土しなかった。

（その6）調査区でP－1・P－2に対応するピット（37・41ピット）を検出している。（図104・105）

東西方向のP－1と37ピットおよびP－2と41ピットの柱間は2.5m、南北方向のP－1とP－2および37ピットと41ピットの柱間は2.2mを測る。これらのピットにより、主軸方向がほぼ正方位を示す、南北方向1間（2.2m）×東西方向1間（2.5m）の掘立柱建物を構成する。建物は倉庫にあたるものと思われる。

掘立柱建物aは、第3面相当の微高地上で検出した建物1・2と主軸方向が同じ方向を示す。また、建物1・2を区画する柵列cの北側列（98ピットを中心に東西方向に伸びる柵列）は掘立柱建物aの南限

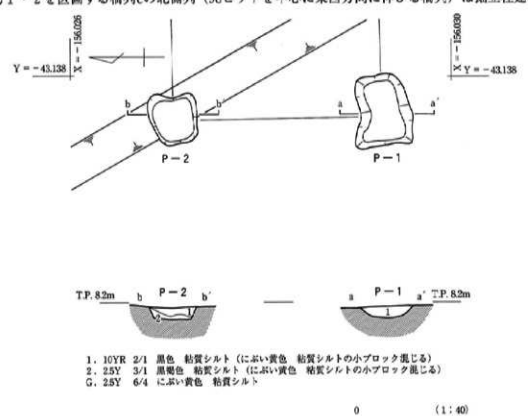


図37　第4面掘立柱建物aピット平・断面図

にあたる。これらのことから、掘立柱建物aは建物１・２および建物１・２を画する柵列cと同一区画内に位置するものと考えられる。建物１・２および柵列cと同様に掘立柱建物aは奈良時代末頃のものと推定される。

なお、「掘立柱建物a」は調査時には「第４面・建物１」と称していたが、第３面で検出した建物と混乱する恐れがあったので、報告書では「掘立柱建物a」と改称した。ただし、ピットの番号は調査時の呼称をそのまま採用している。

東側川（図36・38）

調査区の北東側で大河川から分岐して東北側に伸びる河川跡である。河川跡としたが、常時満水であったのではなく、大河川の増水時に川筋となった一過的な流水跡である。東側に向けて低くなる地形に沿って、東北側に向けて流れたものと思われる。

東側川の検出幅は約８～13mを測るが、幾度かの流水により川幅に振幅が見られる。深さは６～45cmである。埋土からも、幾度かの流水堆積の様子が看守できる。おおむね、１～２層から成る流水堆積層と、３～10層から成る流水堆積層、11～15層から成る流水堆積層に大別できる。

３～10層の流水堆積層が最も新しいもので、東側川が埋没する最終段階の流水で形成された堆積層である。河川中央部を浅く流れる。上層（６～８層）は灰オリーブ色シルトと細砂の互層を成す。中層（３・４層）は浅黄色細砂と下層にシルトが堆積する。下層（５・９・10層）は灰白色細砂と明黄褐色シルトと細砂の互層から成る。層厚は約30cmである。

11～15層の流水堆積層は川の南側部分を流れた流水で形成された堆積層である。上層（15層）は細い流水路でオリーブ灰色シルトである。中層（12層）オリーブ灰色粗砂が厚く堆積している。下層（11・13・14層）は浅黄色細砂で下層に砂層が見られる。層厚は約40cmである。

１～２層の流水堆積層は、古い段階で一時期に洪水などの流水が起こった様相を示す。上層（１層）は浅黄色粗砂礫混じり砂、下層（２層）はにぶい黄色砂である。層厚は約６～45cmである。

東側川は、大河川が増水で最大幅となり、その時に堆積した洪水砂層（１層）が、南側川の上層で見られる（13層）にぶい黄褐色およびにぶい黄橙色砂質土に相当すると思われることから、南側川の埋没時期頃から第３面で、掘立柱建物や柵列が造られた頃までの間の時期に存続した流水跡と考えられる。

東側川から遺物等の出土は見られなかった。

南側川（図36・38～42　図版４～７）

調査区の南側中央部から南東部へ向けて流れる河川跡を検出した。調査区南側の谷部を東西方向に流れることから、遺構名を南側川とした。この南側川は（その６）調査区で延長部分として南側川（遺構500）を検出している。

南側川内からは、多種多様な遺物が出土した。調査時には、遺物の検出状況、組成等を確認するため、ある程度のまとまりごとに遺構番号を付与し、遺物の取り上げを行った。南側川内の遺物に付与した遺構番号は遺構300～308、312～321である。

・埋土堆積状況（図38）

南側川は調査区南側の谷部を東西方向に流れるもので、調査区東側の壁断面で堆積状況を観察することができた。

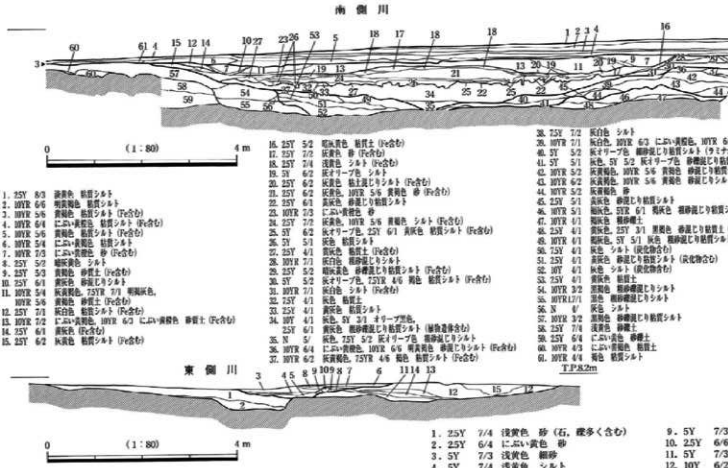


図38 第4図南側川・東側川断面図

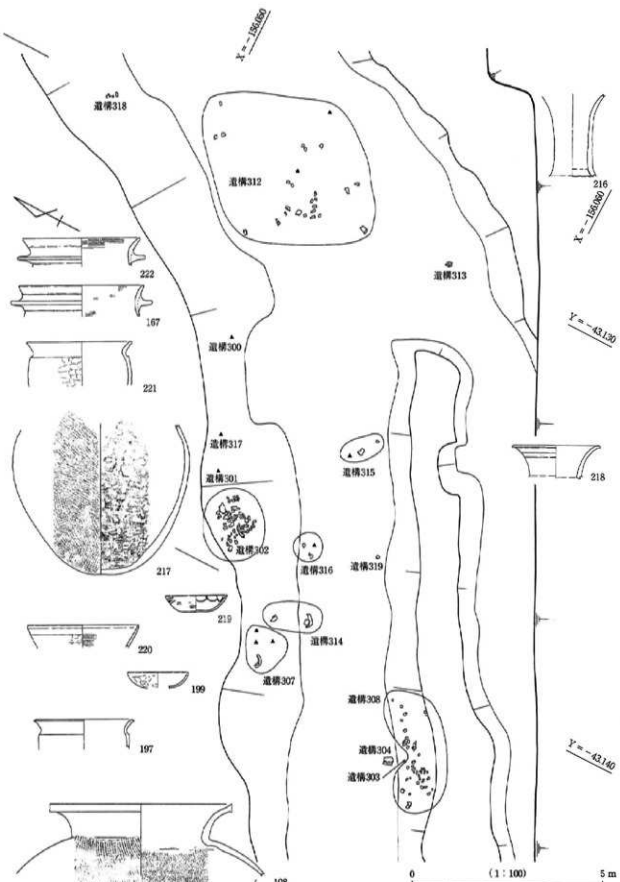


図39　第4面南側川平面図

南側川の検出幅は約８m、深さは約0.6～1.4mを測る。検出長は約44mで、その東側は（その６）調査区へ伸びている。

南側川は幾度かの増水・流水を繰り返したのち、徐々に洪水砂により埋没したものと思われる。南側川の左岸の一部で度重なる流水・増水に対応すべく、護岸強化のために盛土・整地をしている部分も見られた。南側川内の埋土はおおむね７層に大別することができる。

１層（14～27）は、灰黄色シルト、黄褐色細砂などの互層を主とする南側川の上面を覆う洪水堆積層で、下層にラミナが顕著に見られる止水堆積の様相を示す。層厚は約10～40cmを測る。基本層序の第４層にぶい黄色砂および黄褐色シルトの砂とシルトの互層に相当する南側川の上面を覆う洪水堆積層である。下層に鉄分沈着が顕著に見られる。また、下面には無数の踏み込み痕が見られ、湿地状況であったものと思われる。

２層（28～35）は、南側川内埋土上層の（34）植物遺体を含む灰色ないしオリーブ黒色粘質土、（35）灰色ないし灰白色粗砂混じりシルト層を主とする堆積層と（28～31）白灰色ないし暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト層、（32・33）黄灰色粘質シルト層を主とする堆積層が見られる。前者は河川中央部に堆積する土層で、河川が一度埋没した後、再度流水した際の二次的な流水堆積層である。後者は河川の両側に見られる堆積土層で、中央部が削られる以前の河川内堆積層である。層厚は約10～60cmを測る。

３層（36～41・49～51）は、南側川内埋土中層の（36～41）にぶい黄橙色ないし明黄褐色砂混じりシルト層で下層が灰オリーブ色砂礫混じり粘質土、（49～51）灰褐色ないし灰色砂混じり粘質シルト層を主とする堆積層である。層中に炭化物を含む止水堆積の様相を示す。一時期の河床であったと思われる。層厚は約10～25cmを測る。

４層（42～45・52～53）は、南側川内埋土下層の（42～45）灰黄褐色ないし黄褐色砂混じり粘質シルト層、（52～53）灰色シルト層を主とする堆積層である。砂層と粘質シルトが互層を成す流水堆積の様相を示す。層厚は約20～60cmを測る。

５層（46～48）は、南側川内埋土最下層の（46・47）黄灰色粗砂混じり粘質シルト層、（48）黄灰色ないし黒褐色砂混じり粘質シルト層を主とする堆積層で、沈殿堆積の様相を示す。層厚は約10～30cmを測る。

６層（54～57）は、南側川左岸堆積層の黒褐色粗砂礫混じりシルト層を主とする堆積層で、砂礫を多く含み、川内の堆積層がより固く締まっている。この層は川の肩部で地山層を覆うように一様に見られることから、度重なる増水に対応する川肩部の護岸堤であると思われる。川の護岸対策として用いられた整地土層である。黒茶層と同様に古墳時代後期の遺物細片を多く含む。層厚は約50cmを測る。

７層（58～59）は、浅黄色ないしにぶい黄色砂礫土層を主とする堆積層で地山層に相当する。

・遺物出土状況（図39～42　図版５～７）

南側川内からは、数多くの遺物がある程度まとまって出土した。遺物は、まとまりごとに取り上げた（図39　遺構300～308・312～319・321）。遺構の主な遺物出土状況をまとめておく。

南側川内中央部北側肩部に位置する遺構300（図39）では、土師器羽釜片（157）が出土した。この他、土師器甕片も近接して出土している。

南側川内中央部北側肩部で遺構302に近接した遺構301（図39・40　図版５）では、土師器甕片（165）が散乱した状況で出土した。破片の一部は遺構321として取り上げたものとも接合した。南側川内中央部北側肩部に位置する遺構302（図39・40　図版５）では、多種多様な遺物が小範囲にまとまって出土した。

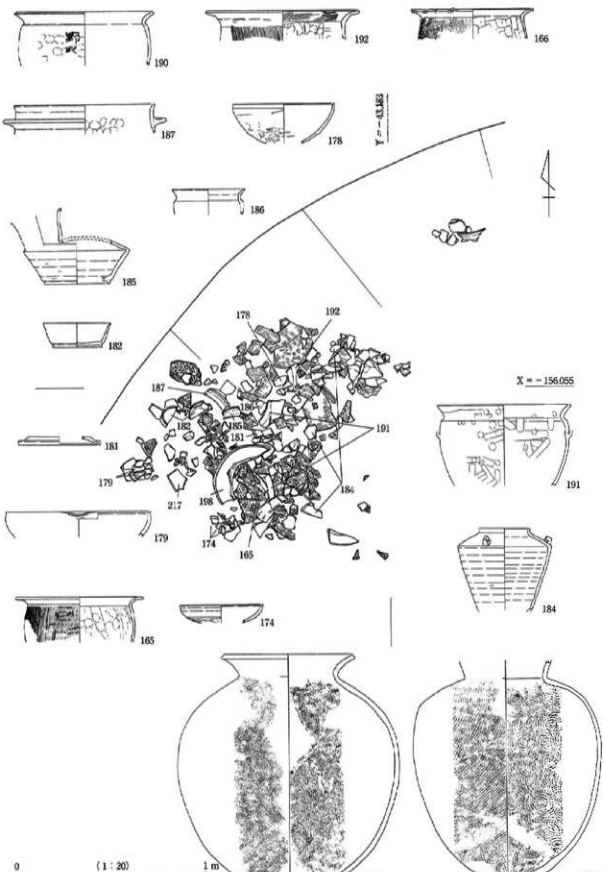


図40　第4面（南側川内）遺構301・302遺物出土状況図

主な遺物としては、土師器甕、把手付甕、羽釜、杯、皿、鉢、黒色土器椀、須恵器杯蓋、壺、三耳壺、平瓶、須恵器大甕などとともに、土師器甕体部に「野取」と読める墨書土器（図44　図版18－190）が見られた。これらの遺物は大半が割れた状態で検出している。しかしながら接合、復元すると原型を把握できるものが多いことから、この場所で一括して廃棄したものと思われる。また、若干ではあるが、炭片なども混入していた。遺物の中には墨書土器も見られることから、何らかの祭祀の後に廃棄されたものではないかと推測される。南側川内西側部南寄りで遺構308に近接して検出した遺構303（図39・41　図版6）では、須恵器鉢（195）が出土した。古墳時代末頃に属するものである。円筒埴輪片などと

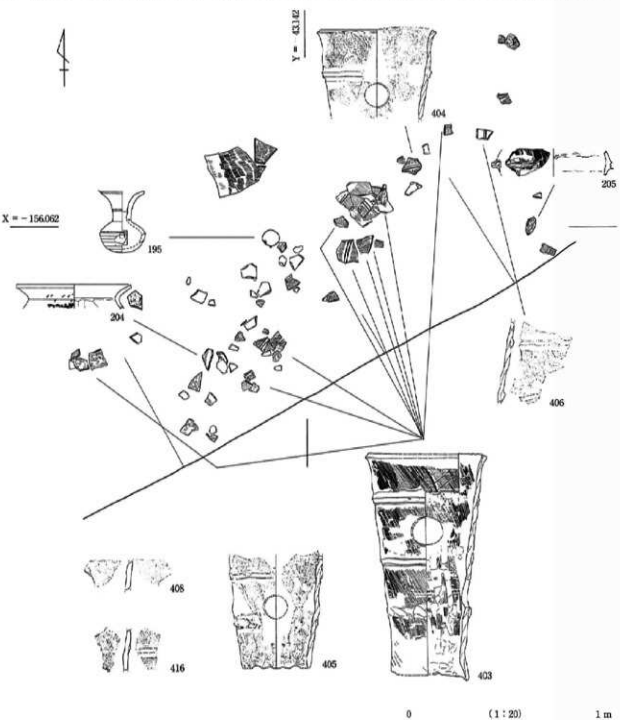


図41　第4面（南側川内）遺構303・304・308遺物出土状況図

ともに搬入され、炭化した木片などとともに南側川内に廃棄されたものと推測される。

南側川内西側部で遺構308及び遺構303に近接した遺構304（図39・41　図版6）では、須恵器甕の体部片（193）が出土した。この甕片は遺構302・307などで出土した須恵器甕片と接合することができた。

南側川内西側部北側肩部に位置する遺構305では、土師器甕片が出土した。体部片が多く実測するに至らなかった。

南側川内西側肩部のやや離れた位置で検出した遺構306では、土師器甕片（196）が出土した。土圧によって割れたものと考えられる。

南側川内西側部北側肩部で遺構314に近接して検出した遺構307（図39　図版6）では、土師器甕片（197）、土師器杯片（199）、須恵器甕片などが出土した。細片が多く実測するに至らなかったものが多かった。

南側川内西側部南寄りの位置で検出した遺構308（図39・41　図版6）では、内面が焼けた円筒埴輪片や6～7世紀代に相当する須恵器鉢、甕、杯、平瓶、取手付塊、甕、皿、杯、つけ木などが見られた。

内面が焼けた円筒埴輪片などは当地に近接していたと推測される古墳から持ち寄り、煙突、竈などとして二次利用していたものと思われる。

南側川内の東側最深部で検出した遺構312（図39・42　図版7）では、広範囲にわたって土器片が散乱していた。

ここから出土した遺物には、土師器杯、皿、甕、羽釜、把手付塊、6～7世紀代の須恵器鉢、甕、杯、平瓶などがある。また、細片ではあるが、平瓦、丸瓦などが出土している他、内面が焼けた円筒埴輪片も出土している。内面が焼けた円筒埴輪片は遺構308の円筒埴輪片と同様に、煙突、竈などとして二次利用していたものと考えられる。

南側川内東側部南寄りの位置で遺構312に近接して検出した遺構313（図39　図版7）では、須恵器長頸壺（216）の頸部が突き刺さるような状況で出土した。

南側川内中央部北側肩部で遺構302と遺構307に挟まれるような位置で検出した遺構314（図39　図版6）では、須恵器甕の体部片（217）などが散乱した状況で出土した。遺構307や遺構302の遺物と接合するものも見られた。別々に取り上げたが、同一個体が広範囲に散布している様子が看取された。

南側川内中央部最深部で検出した遺構315（図39　図版7）では、遺構302と接合した須恵器甕体部片、須恵器壺（218）、下層遺構321と接合した円筒埴輪片（405）などが出土した。南側川内の最深部のシルト層に炭化物や植物遺体に混じって検出された。

南側川内中央部北側寄りで遺構302に近接して検出した遺構316（図39　図版7）では、土師器杯片（220）や土師器椀片などが出土した。細片が多かったが、遺構302などの遺物とも接合でき、遺構314と同様に、同一個体が広範囲に散布されている様子が看取できた。

南側川内中央部北側肩部で検出された遺構317（図39　図版7）では、土師器甕片（221）が散乱した状況で出土した。

南側川内東側部北側肩部で検出した遺構318（図39　図版7）では、土師器羽釜片（222）や土師器甕の体部片などが出土した。土師器甕は体部片が多く実測するには至らなかった。

南側川内中央部最深部で検出した遺構319（図39）では、土師器壺の体部片が出土したが、実測するにはいたらなかった。シルト層の中に埋没するような状況で体部片が出土している。

南側川内中央部からやや西側寄り部に在する遺構308（図39）の下層では、川底の高まり部が見られた

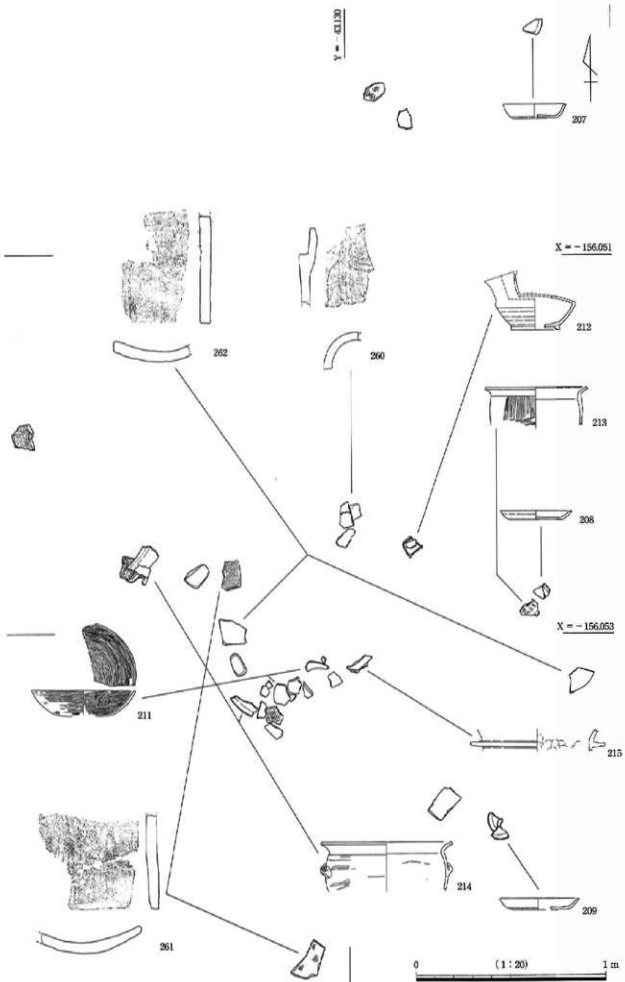


図42　第４面（南側川内）遺構312遺物出土状況図

が、その高まり部を掘削した下層から東西方向に伸びる小溝を検出した。この小溝とその周辺部分については遺構321とした。調査時、遺構308の下層部でのみ見られる南側川内の深み部かと思っていたが、断面で堆積層を検討した結果、遺構が重なっていたと判断したものである。

遺構321は南側川の川底より下層の溝状の遺構で、ほぼ南側川の最深部を東西方向に伸びるものである。主に遺構314・315・319などの下層にあたる。溝の検出幅は約60cm、深さは約20cm程度を測る。溝の断面形は半円形を呈す。埋土は南側川内埋土の5層である黒褐色砂混じり粘質シルト層を主とする堆積層である。この土中から多様な遺物が出土した。須恵器杯・蓋・土師器杯・須恵器鉢・土師器把手付塊・甕のほかに、複数の円筒埴輪片や焼土、焼け石などが出土した。おおむね古墳時代から平安時代にかけての時期に比定される。

南側川内中央部からやや西側寄り部に在する遺構308の下層からは須恵器壺、須恵器杯蓋（200・201）など古墳時代末頃（6世紀）に相当する遺物が出土した。これらの遺物は、南側川の河川内中央部の最深部で検出しており、遺構314・315などの下層遺構として確認された遺構321の溝の延伸部に当たると思われる。

遺構番号を付与しなかったが、南側川内からはこの他にも多様な遺物が出土している。遺構302付近では、体部に人面墨書が見られる土師器甕（図版18－252・266）や焼けた土師器、須恵器などが多く見られた。おそらく、この近辺で何らかの祭祀的な行為が行われていたものと想定される。遺構302を中心として出土した祭祀関連と思われる遺物群からは、南側川が機能していた時期が、まじないを必要とするような社会情勢であったことがうかがわれる。また、遺構308の下層およびその周辺部から円筒埴輪片が多量に出土している。これらの円筒埴輪の内部にはススが付着し、煙突などに転用していたと思われるが、不要になった際に一括して南側川内に廃棄したものと思われる。

南側川内より出土した遺物から、河川内に混入したものだけにとどまらず、祭祀に関与すると思われるもの、不用となったものを廃棄したものなどが見られた。南側川がただ単なる河川ではなく、この地域の住む人々の生活に密着した河川であったことがうかがえる。

南側川の護岸

南側川は調査区の東側を北流する旧西除川の支流と考えられる河川で、調査区の南側から地形に沿って低地部を東北に流れる。この南側川は、土層断面図（図38）から幾度となく流水と堆積を繰り返しながら流れていたが、度重なる大規模な洪水などにより、河川内に一気に砂層が堆積し、河床が浅くなっていった状況が看取できた。河床が浅くなり、河川としての機能が果たせなくなると、この地域一帯は一時期、湿地状態になったようである。

第4面で検出した南側川は、埋土内の出土遺物からおおむね奈良時代末頃から平安時代を中心とする時期が埋没期であったことを示している。多種多様な遺物が含まれており、生活に密着した河川であったことがうかがえる。度重なる洪水・出水にそなえ護岸を補強している状況が確認された。東側の微高地に住居域があったと考えられることから、住居域に流水が入り込まないように南側川左岸（北側）の護岸強化を行ったのであろう。南側川の北肩部で遺物がまとまって出土する状況が看取できた。これも、南側川の北側に住居域が広がっていたため、河川の北肩部で祭祀を行ったのではないかと思われる。

祭祀の内容として、土師器甕の体部に墨書文字の書かれたものや人面の墨書などが見られた。平城宮近辺の流路などからも墨書土器が検出されているが、当時の民衆のまじない行為であったと考えられて

いる。

墨書土器には人物画を描いたもののほかに、文字を記載したものが見られた。割れているため全容は不明であるが、「野取」とも「野粟」とも考えられるものである。「野」とは大和川今池遺跡周辺の松原市城連寺付近で「野中」郷が見られることなどから、不明瞭ではあるが、土地名として「野」と称していたのではないだろうかと思われる。「取」「粟」については、書かれた文字の大きさなどから、「取」より「粟」であったかと思われる。「粟」はあつまる・あつめるの意味があり、人が大勢集まることを表す。

「野」の地に人が集まる事を願ったのであろうか。無病息災や家内安全というようなありきたりの願いではないようである。文字を読み・書き出来る人々が周辺地域に住んでいたことがうかがえる。大和川今池遺跡の周辺では、古くから屯倉(依網屯倉)が設置されたり、「難波大道」が設置されたりと中央政権の支配の及ぶ地域であったことが知られている。

南側川の下層からは、遺構231に見られるような古墳時代の遺物を含む小溝が先行して流れていたようである。北側に微高地が広がるため、谷部の低地を東側に流れていたものと思われる。現在の大和川の流れと逆行するものである。

大和川今池遺跡周辺は、古代から大規模な開発が行われた地域でもある。旧西除川の上流では狭山池の築造や、近接する依網池の築造やこれに伴う灌漑施設の設置など、相当な土木技術を持っていたと考えられる。また、「難波大道」などの道路設置と水路、用水の完備などは大規模な開発がともなったと考えられる。いつの時期に大規模な開発が行われたか不明であるが、南側川の中に古墳から持って来られたと思われる埴輪が多く出土することなどから、かつてこの周辺に古墳が存在したが、大規模な開発にともない削平され、消滅したのではないかと考えられる。

周辺地域の開発や陶邑など西除川上流域での森林伐採による洪水の発生と増加により、南側川内に一気に砂層が堆積し、河床が浅くなっていった状況が看取できた。河床が浅くなり、河川としての機能が果たせなくなると、この地域一帯は湿地状態になったようである。南側川の流域および谷部が埋没したことにより、新たな流域として南側から東北方向に蛇行しながら流走する大河川が起こったものと推測される。南側川に代わる河川として、この後、しばらく大河川がこの地域の生活に密着した河川となり、周辺地域を潤してきたのであろう。

南側川内出土遺物(図43～49・65・66・149・150　図版17・18・19・21～24・26)

遺構300・301の出土遺物として、奈良時代と平安時代初頭の土師器甕、土師器羽釜が出土している。

165の土師器甕は頸部の屈曲部が丸みをもつ。体部内面の調整は指押さえのちヘラ削りを施す。外面は縦方向に刷毛目を施す。平城宮III～IVの時期と考えられる。

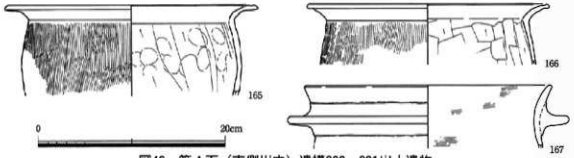


図43　第4面(南側川内)遺構300・301出土遺物

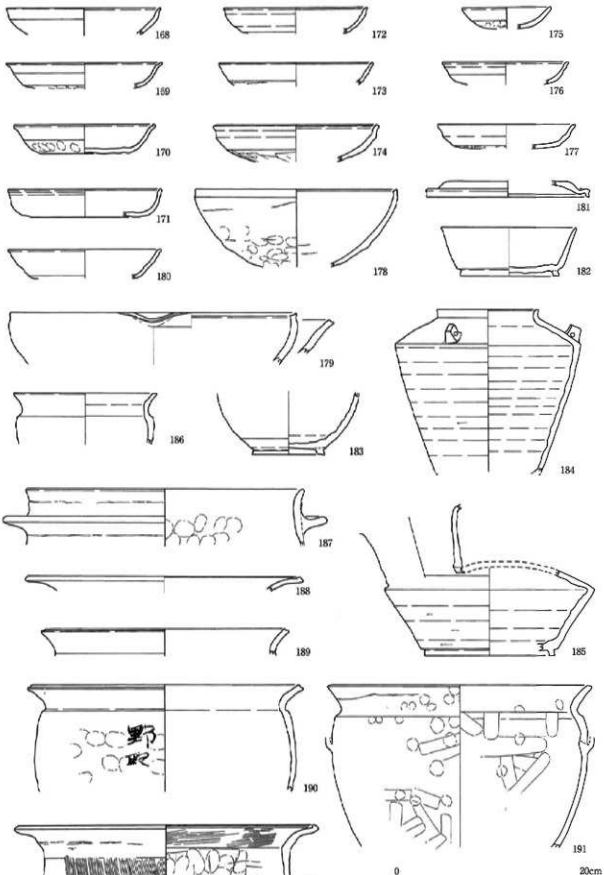


図44　第4面（南側川内）遺構302出土遺物①

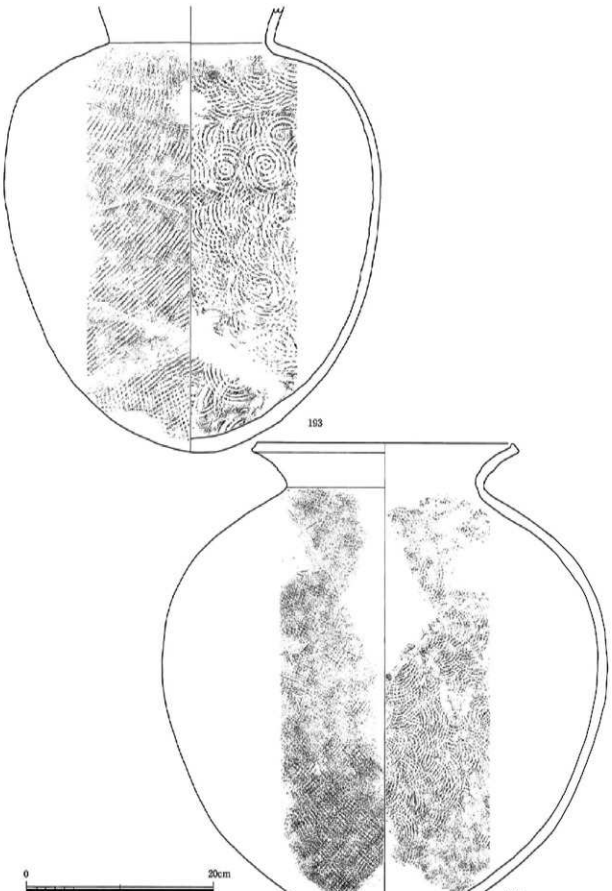


図45　第４面（南側川内）遺構302出土遺物②

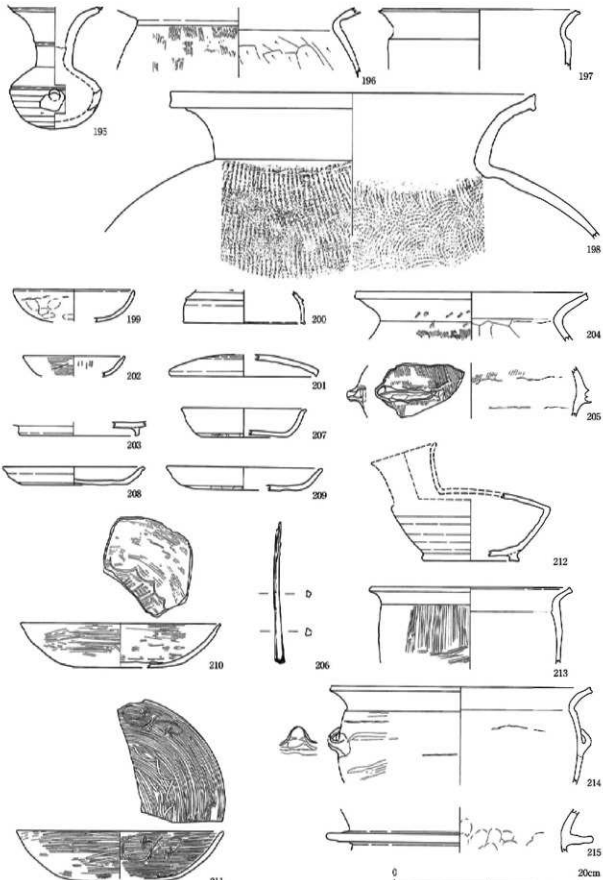


図46　第4面（南側川内）遺構303～312出土遺物

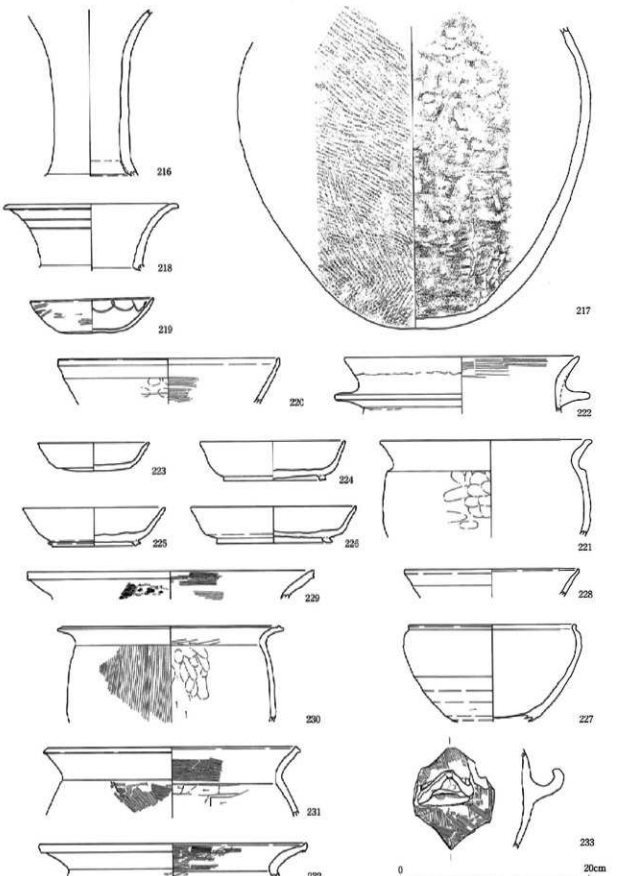


図47　第４面（南側川内）遺構313～321出土遺物

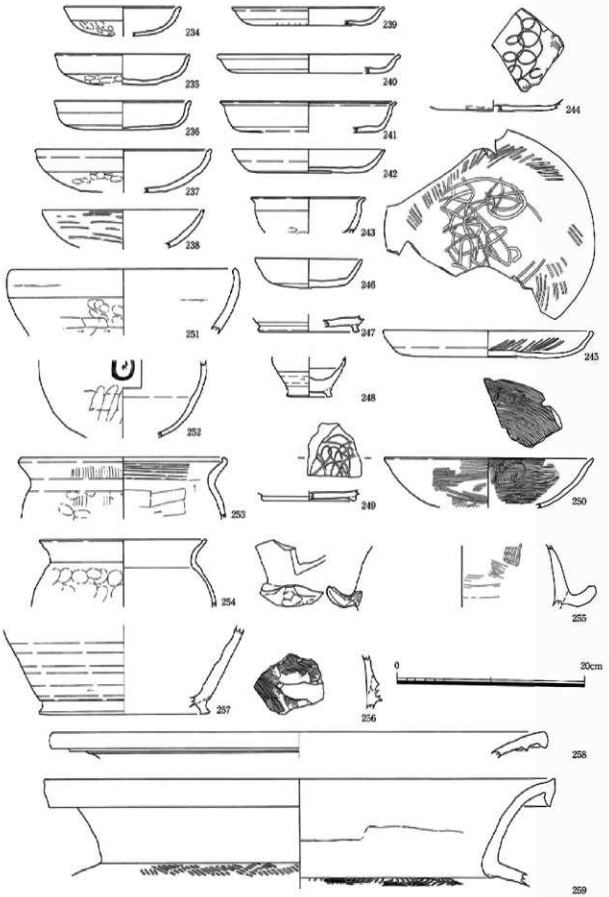


図48　第4面南側川内出土遺物

166の土師器甕は頸部の屈曲部が角張り、内面はヘラ削り、外面は縦方向の刷毛目を施している。平城宮VI～平安京I期の時期と考えられる。167の土師器羽釜は胎土中に角閃石を含む。口縁部の立ち上がり状態から平安京I期中と思われる。

遺構302からは奈良時代から平安時代初頭にかけての土師器、須恵器が比較的まとまって出土している。168～194のうち、180が黒色土器A類、181～185、193、194・441は須恵器である。

土師器の種類は168～171・173・174の杯、172・175の椀、176・177の皿、178・179の鉢、186の壺、187の羽釜、188～192の甕がある。これらのうち、176・177・186・187・189～191は平安京I期の時期にあたると思われる。これら以外の土師器は平城宮II～III（168・172・188）、平城宮III（192）、平城宮III～IV（169・175・178・179）、平城宮IV～V（170・171・173・174）の時期に相当すると考えられる。

190の土師器甕は191と同様の退化した把手がつく器形で、体部に縦書きの墨書が見られ、「野取」と読むものか。「取」が上の「野」と比較して小さい事から、文字の上半分の可能性も考えられる。

黒色土器A類の180は器高が低めであることから、9世紀前半頃と思われる。

須恵器は181の杯蓋、182の杯B、183の壺高台部、184の三耳壺、185の平瓶、193・194の甕、441（図版19）の鉢がある。181・182の蓋杯および184の壺は平城宮IV、183・441は平城宮V、185は平安京II古の時期にあたると思われる。甕は193が8世紀、194は平安京I期中にあたると思われる。

遺構303からは口縁部の欠損した須恵器鼈（195）が1点出土しており、時期は陶邑II－5～6にあたると思われる。

遺構304からは6世紀から7世紀の須恵器甕体部破片が出土している。

遺構305からは6世紀から7世紀の須恵器甕体部破片や土師器の杯、鉢、甕などの破片が出土している。

遺構306からは196の平城宮IV～Vの土師器甕破片が出土している。

遺構307からは古墳時代から奈良時代にかけての須恵器、土師器の破片が少量出土しており、197は平安京I期中頃の土師器甕、199は平城宮V頃の杯であろう。198は遺構302・307・314出土破片が接合したものである。平安京II期古と考えられる。

遺構308からは須恵器の陶邑II－2～6の蓋杯細片、古墳時代の土師器甕、円筒埴輪、奈良時代の土師器杯、鉢、把手、木器などが出土している。

図化したのは200・201の須恵器、202～205の土師器と206の木器である。

200は陶邑I－5～II－1の須恵器杯蓋、201・202は平城宮III～IV頃と思われる須恵器杯蓋と土師器杯である。203は土師器杯の高台部破片である。204は平城宮IV～Vの甕、205は把手付甕の体部である。203・205は平城宮II～IIIの時期のものか。206はつけ木である。これは断面四角形状で、一端が黒く焼けており、他方の端は細くなっている。

円筒埴輪の破片が比較的まとまって出土している（図149　図版24－403～405・416、406・408）。

この他、縄文が一部擦り消され、沈線が1条残る縄文後期中葉の土器破片が1片見られた。

（図66　図版22－395）

遺構312からは古墳時代の須恵器甕、壺の体部破片、平城宮V～VIの土師器杯（207）、土師器皿（208）、平城宮Vの土師器甕（213）、平城宮III～IVの土師器羽釜（215）、平安京I期と思われる214の土師器把手付甕、平安京I期新の須恵器平瓶（212）や黒色土器A類杯（210・211）黒色土器A類皿（209）などが出土している。215は胎土中に角閃石を含む。210・211は内面を密に一定方向に磨いたのち、草花

のような暗文が施されている。

遺構313からは平安京I期中と思われる須恵器長頸壺（216）が出土している。

遺構314からは須恵器甕体部（217）が出土しており、おそらく奈良時代から平安時代のものと思われる。

遺構315からは須恵器甕体部破片、円筒埴輪破片（図149　図版24－405）と、平安京Ⅰ期と考えられる須恵器壺口縁部（218）が出土している。

遺構316からは須恵器甕体部破片と奈良時代の土師器破片が出土している。219は土師器杯で、口縁部内面に連弧文状の暗文と、体部内面に不明瞭だが暗文の痕跡が見られる。外面は磨きが施されている。時期は平城宮V～VIに属するものであろうか。220は土師器杯であり、時期は平城宮VI～VIIと考えられる。遺構317からは平安京I期中の土師器甕（221）が出土している。

遺構318からは平安京I期中にあたると思われる土師器羽釜（222）が出土している。これは、胎土中に角閃石を含む。

遺構319からは388の弥生中期か不明の鉢が出土している（図66）。

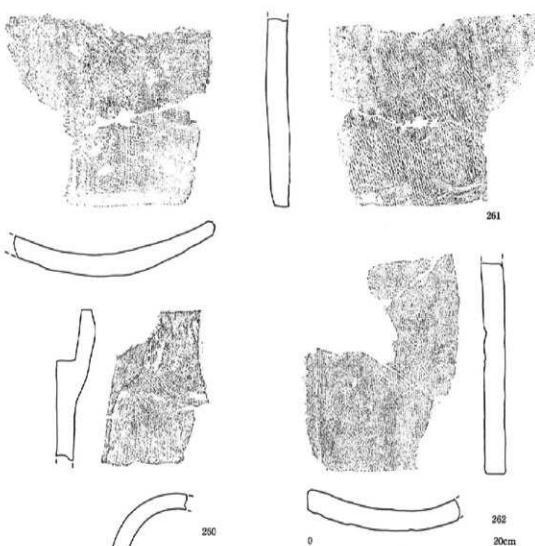


図49　第4面南側川内出土遺物（瓦）

遺構321からは陶邑II－６の蓋杯と、７世紀の須恵器甕体部片の他、竈片が出土している。223～226は平城宮IV～Vの須恵器杯である。227は須恵器鉢で飛鳥IV～Vの時期と思われるものである。

228～233は土師器である。228・232は平安京I期新の杯と甕と思われる。229は平城宮I～IIの甕、230・233は平城宮III～IVの甕および把手付甕、231は平城宮IV～Vの甕である。

これら以外に、円筒埴輪破片（図149　図版24－405）も出土している。

その他、南側川内から出土した遺物として、古墳時代から平安時代までの遺物がまとまって出土している。また、弥生後期の甕底部かと思われる破片（図66－378）と、表面の縄目が擦り消された縄文後期中葉の土器破片１点（図66　図版22－396）、サヌカイト石器も認められた。

234～245、251～256は土師器、246～248、257～259は須恵器、249・250は黒色土器、260～262は瓦、図版18－438は製塩土器である。

234～238・243は土師器杯、239～242・244は皿、245は盤である。時期は平城宮III～IVまたはIV～Vである。234は底部外面を一部ヘラ削りの後ナデているが、指押さえが残り、内面には極かすかに放射状の暗文が施されている。234の時期は飛鳥IIIの時期に考えられる。235・236は口縁端部内面に沈線が１条巡り、暗文は見られない。平城宮V～VIか。237は内面に螺旋状暗文があり、体部外面には粘土継ぎ目が残る。平城宮III～IVか。238は外面にミガキが施された杯で、平安京I期中か。239～242の皿は平城宮IV～Vにあたると思われる。243は平城宮III～IVか。244の皿は内面に螺旋状暗文が巡る。平城宮II～IIIか。245の底部内面には螺旋状暗文が244のように規則正しくなく、かなり粗雑に施されている。平城宮III～IVか。

246の須恵器杯は平城宮III～IVの時期のものか。247は平城宮V～VIと思われる杯、248は平安京I期中の小型壺、249は黒色土器B類底部であり、器種は椀と考えられる。250は黒色土器A類の杯で、内面に圏線状の密な磨きの上から更に草花文状の暗文を施している平安京I期新の時期のものである。

251は平城宮II～IIIの土師器鉄鉢形鉢、252も同じ時期と思われる墨画のある土師器甕体部である。体部中央くらいの位置に、目玉のような墨画が一つ見られる。253～254は土師器甕であり、大体平城宮III～IVの時期にあたる。255・256は土師器把手付甕である。255は平城宮I～IIの時期か。図版18－438の製塩土器は全面赤く変色したもので、外面はナデ、内面は布目が残る。257は平城宮V～VIの須恵器壺である。258は奈良時代の須恵器甕であると思われる。259は平安京II期中の須恵器大甕である。

260は玉縁の残る丸瓦で、凸面はなでられている。261は平瓦で、凸面全面に縄叩きがあり、凹面には布目が明確に残る。凹面の狭端側は面取りを行っている。262も平瓦であるが、凸面の叩きが261ほど粗くなくやや細めである。261・262共に、12世紀代のものである。

この他、図150　図版23－421の朝顔形埴輪１片と、円筒埴輪破片（図149　図版24－409）、サヌカイトの石鏃未成品（図65　図版21－369）、楔形石器（図版21－453）が認められた。

黒茶層（整地土）

調査区東側の微高地上や調査区西側の大河川（西側川）沿いで見られた盛土部あるいは、南側川の左岸の護岸を強化するために使用された、黒褐色から黒色砂混じり粘質シルトを主体とする小土器片や炭化物を含む土層である。この層は基本層序で第６層にあたるものである。調査時からこの層は黒褐色で特徴的な土層であったため「黒茶層」とし、この層から出土した遺物についても層順として「黒茶層」としたため、基本層序の層名に加えて個別名を与えた。

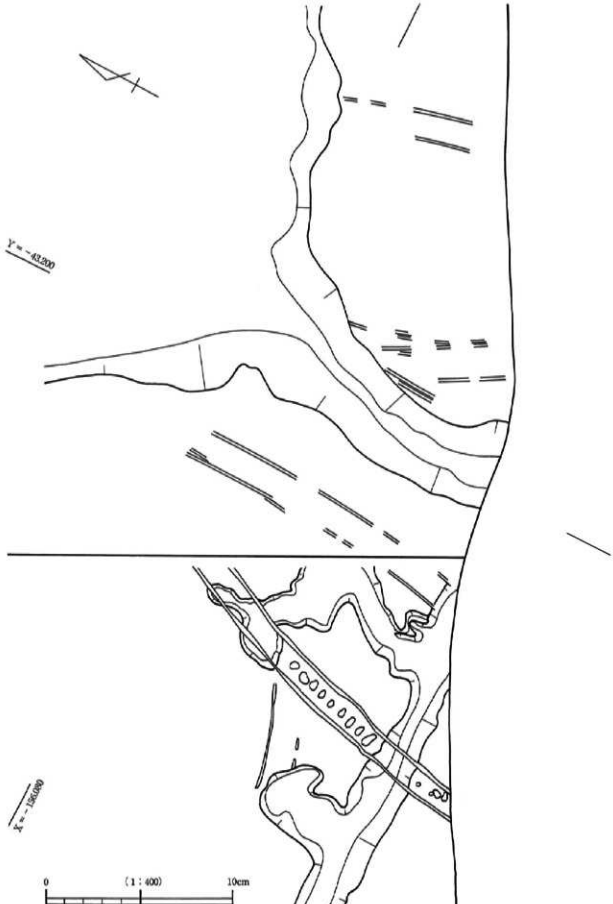


図50　第4面わだち跡平面図

第２－b面で記載した大河川（西側川）の左岸で見られた盛土部（堤防）では、黒褐色から黒色粗砂混じり粘質シルトを主とする堆積層で、土中には須恵器や土師器の小土器片が含まれている。

この盛土部は第２－b面においては確認できなかったが、第４層黄灰色砂質土およびシルトの互層を掘削した段階で黒褐色粘質シルトが露出したことから、第３面以前の遺構面に相当することがわかった。

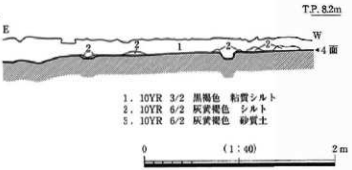


図51　第４面わだち跡断面図

盛土部の検出幅は東西方向に約２～３m、検出長は南北方向に約20mを測る。南側はさらに調査区外に伸びる。北側は大河川の北西部に伸びる流路によって切断されているため、延長は確認できなかった。盛土部の高さは約25～55cmを測る。上層部は削平をうけているものと思われるため、築造時にはさらに高低差があったものと思われる。同土層はかなり堅固で突き固められた感のあるもので、自然に堆積したものとは様相が異なる。護岸強化のために盛土を造作したものと推測される。黒褐色粘質シルト層中には、須恵器片、土師器片の他、埴輪片（器財埴輪など）が含まれていた。（その３）調査区の第４面－ｉ９地区で耕作面を整地土（５－３層）が覆う個所が見られたが、おそらく、同様の土砂を用いて護岸堤を築いたのではないかと思われる。既往の調査である大和川（その３）調査区で検出した、第３面相当（中世）の耕作面が形成される以前に行われたこの地域における大規模な土地開発によって、古墳時代の生活面を含む土壌が削平され、整地土および流用土として運び込まれ、護岸提として活用されたものと考えられる。（その３）調査区における第４面は平安時代末頃に相当する。護岸提の盛土部の造営時期もこの時期におさまるものと思われる。

南側川の左岸で護岸強化のために使用された黒褐色から黒色砂混じり粘質シルトを主体とする小土器片や炭化物を含む土層もこの黒茶層にあたる。大河川（西側川）の左岸で見られた盛土部（堤防）と同様に同土層はかなり堅固で付き固められた感のあるもので、自然に堆積したものとは様相が異なる。護岸強化のために盛土を造作したものと思われる。

わだち跡（図36・50・51　図版８）

調査区の南西側の西側川に沿って南北方向に伸びる、わだち跡を検出した。

わだち跡は、検出幅は10～12cmを測り、深さは10cm程度である。断面形は浅いコの字形を呈す。

埋土は黒褐色粘質シルト層に灰黄褐色シルトが下層に見られる。わだち跡の両筋間は約1.5mで平行して伸びている。わだち跡は、一条だけでなく幾重にも重なって検出しており、また、その延長方向も一様ではなく、多方向を示している。

わだち跡の両筋には、不定形の浅い土坑状の窪みが連なっている。これらの窪みの形態・規模は一様ではなく、おそらくわだち跡に伴う人や牛の足跡が、折り重なり最終的には、土坑状の窪みとなったものと思われる。

土坑状の窪みから遺物は出土しなかった。

隣接する（その４）調査区で検出した畝状遺構２の延長部分と見られる、わだち跡も（その５）調査

区で確認できた。本来ならば、轍状遺構1の延長部分もあったと思われるが、大河川の氾濫域にあたり確認できなかった。

わだち跡を検出した地区は、ベース層が灰黄褐色砂質土で、上層にはにぶい黄色砂層が全面を覆っている。土層断面ではこの砂層の下面に無数の踏み込み跡が見られることから、河川の増水などで湿地状況であったと考えられる。わだち跡を残した牛車は、街道や畦道を通行していたのではなく、湿地状態の荒野を縦横無尽に往来していたものと思われる。

第4面包含層出土遺物（図52・66・149　図版18・20・24）

第4面包含層からは主に奈良時代から古墳時代までの遺物が多く出土しており、一部で弥生時代、平安時代や鎌倉時代の遺物も見られる。

263・264は須恵器、265～274は土師器、275は黒色土器、276は青銅製品、図版18－440は製塩土器で

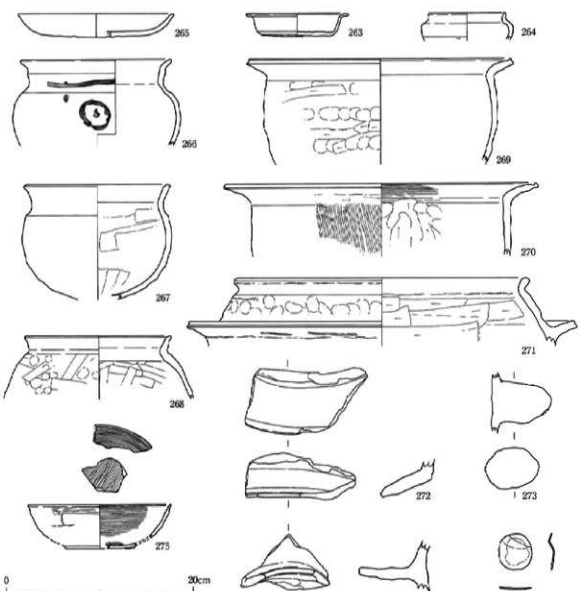


図52　第4面包含層出土遺物

ある。

263は須恵器杯、264は須恵器壺で、平城宮Iの時期に考えられるものである。265の土師器皿は平城宮Vの時期と思われる。

266は土師器甕で頸部に一条、体部に1黒点を囲む円形の墨圏があり、人面の眉と目を表現したものかと思われる。平城宮II～IIIの時期か。

267・268は平安京I期須の土師器甕である。図版18－440の製塩土器は器壁が薄く、外内面ともに淡赤橙色に変色しており、奈良時代のものと思われる。269・270は平城宮Vかと思われる土師器甕である。271は中世の土師質羽釜で河内B1d型である。中世の遺物は羽釜以外に、細片で瓦器が僅かに認められた。272・274は土師質竈の底部分、273は竈か何か不明であるが把手である。

図版20－448・449は竈の焚き口近辺の破片である。竈および把手は古墳時代のものかは、不明である275は黒色土器A類の椀である。時期は平安京IV期古か。この他に、弥生後期の甕底部（図66－383）、円筒埴輪が出土している（図149　図版24－418）。276の青銅製円板は直径3.4cm×3.85cmの大きさで厚さ1mmと薄く、若干歪んでいる。時期は不明。

第4面黒茶層出土遺物（図53・66・149　図版18・21・22・24・26）

弥生時代から奈良時代の遺物が少量と、円筒埴輪（図419　図版24）、サヌカイトなどが出土している。277～289は須恵器、290～293は土師器、294は黒色土器A類、295は灰釉陶器、296は土師質の土錘、図版18－439は製塩土器である。377・379～381・390・392・393は弥生中期～後期土器である（図66　図版22）。

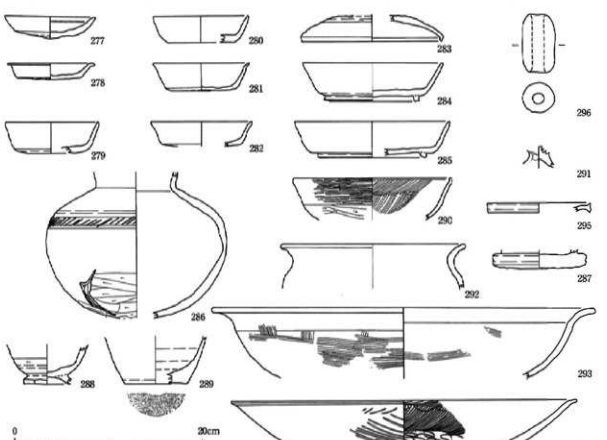


図53　第4面黒茶層出土遺物

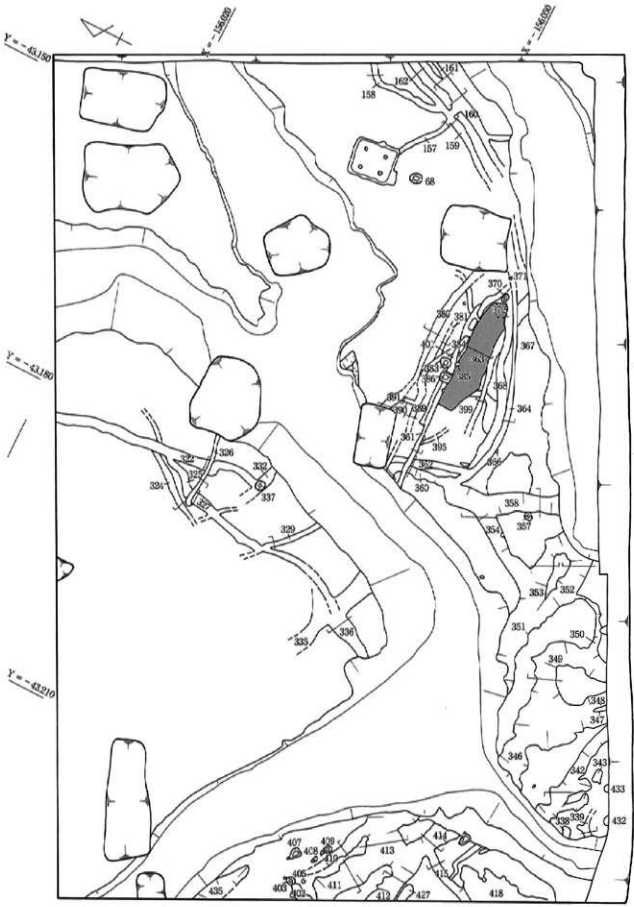


図54　第5面・第6面（1：400）

277は杯蓋か杯か判断に苦しむが、浅いため蓋として図化した。陶邑II－６か。278～282は口径の小さい杯である。278は平城宮Iか。279～282は平城宮IVか。283は杯蓋、284・285は杯身で平城宮IVの時期である。286は陶邑編年のII－３～４に属すると思われる壺体部である。287は須恵器すり鉢底部破片で、平城宮IVの時期か。288は高台付壺底部であり、平城宮Iの時期か。289は底部外面に回転糸切り痕を残す壺底部破片で、平安京I期中の時期である。

290は土師器杯内面に放射状暗文が２段施されているもので、平城宮IIの時期と思われる。291は古墳時代の製塩土器脚部片と考えられるものである。292は平城宮IIと思われる土師器甕、293は平安京I期新と考えられる土師器盤である。外内に刷毛目調整の痕跡が残る。

294は黒色土器A類の盤と思われる器形で、平安京I期からII期の時期に考えることができる。

295は壺の口縁端部を上下に拡張したもので、胎土は他の須恵器と比べて白く、かすかに灰釉を被っている。

図版18－439は器壁が薄く、外面は淡黄色であるが、内面が淡赤橙色に変色した奈良時代と思われる製塩土器の破片である。

296の土錘は中空の円柱状を成し、表面は剥落している。片面に黒斑が見られる。直径3.4cm、長さ6.2cm、孔部分直径1.2cm、重さ80gである。

図版21－452は縄文時代もしくは、弥生時代のサヌカイトの楔形石器である。

図版26－459は小型の鏃羽口である。内径は約２cmを測る。古墳時代のものと考えられる。

第５面（図54　図版９）

上層に堆積する第５層の黒褐色粘質シルトを主体とする細砂、小礫を含む土層および第４層の黄灰色砂質土を主とする洪水砂を掘削し、検出した面を第５面とした。第５面の上層を部分的に灰黄褐色砂層が覆うところも見られる。

第５面の地形は、東側の微高地面から南側へ大きく谷状に落ち込み、南側川に至る。北側および西側では、やや北側に向かって低くなるなだらかな平面を示す。第４層は中でも調査区の中央部から南側川周辺に厚く堆積している。北側では若干の堆積が見られたが、東側の微高地では第５層の堆積は見られず、第６層の黒褐色粘質シルト（黒茶層）層が露出している。この黒褐色粘質シルト層（黒茶層）は、大和川今池遺跡の既往の調査で広範囲にわたって検出されている整地層で、古墳時代中期から奈良時代頃に相当する遺物を含むものである。

第５面で検出した遺構として、調査区の北側では、溝、流路などが見られた。南側川周辺および調査区の西側では、溝、流路、不定形土坑などが多く見られた。微高地の西端部では溝、流路、不定形土坑の他、焼土の広がる箇所が見られた。中には意図的に掘削されたと思われる溝群も見られた。遺構検出面はT.P.7.70～7.80m前後を測る。第５面は全体的に井戸・建物ピットなどの生活遺構や耕作跡などの生産遺構があまり見られず、一過的に流れた溝、流路などが多く見られることなどから、軟弱な後背湿地状況であったことがうかがえる。第５面で検出された遺構からは、須恵器杯蓋、高杯、甕、壺、鉢、土師器杯、皿、鉢、蓋、甕、把手付甕、黒色土器などの遺物が見られた。おおむね、古墳時代末頃から平安時代に相当するものと考えられる。

なお、溝・流路などで検出時に付与した遺構番号を、複数連ねて一つの遺構番号としたものがある。この場合、各々の中で主流となる遺構番号を採用して個別呼称番号とした。

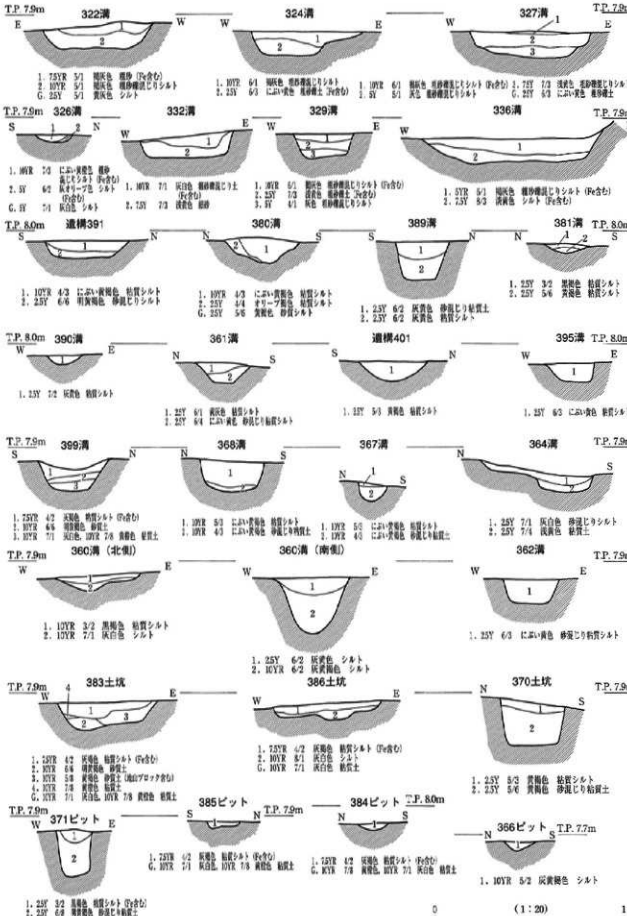


図55　第5面遺構断面図①（322溝・324溝・327溝　他）

322・324・327・326・332・329溝（図54・55）

調査区の北側で検出した網目状に広がる溝跡である。おおむね南北方向に伸びる322・327・324溝に、直交するように東西方向に伸びる326・332・329溝などが見られた。322溝は遺構322・331が、327溝は遺構325・327・330・334が、324溝は遺構324・323が、332溝は遺構332・328が各々つながったものである。南北方向に伸びる322・327・324溝は、検出幅が0.9～1.2mを測る。深さは15cm前後である。溝の断面形は浅い皿状を呈す。埋土は褐灰色粗砂礫混じりシルト、浅黄色粗砂礫混じり土が主で、シルトと礫が互層を成す一過的な流水堆積の様相を示す。これらの溝は、おおむね南側から北側に向かって低くなる自然地形に沿って流れていたものと思われる。

堆土内から、古墳時代後半頃から奈良時代頃の須恵器蓋杯片、甕体部片、土師器把手などが出土した。

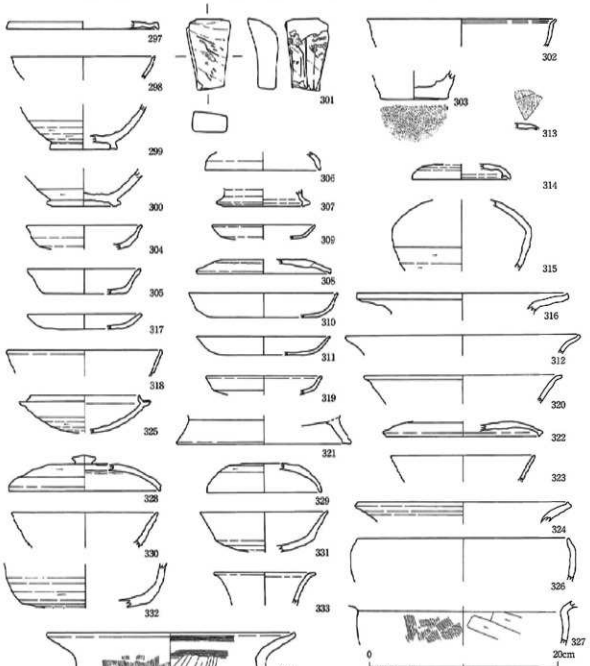


図56　第5面遺構出土遺物①（322溝・327溝、遺構325　他）

326溝は、南北方向に伸びる322・327溝を切って東西方向に伸びるもので、検出幅は約0.4m、深さが約10cmを測る。断面形は薄いレンズ状を呈す。埋土はにぶい黄橙色粗砂混じりシルト、灰オリーブ色シルトで、ややゆるやかな流水堆積の様相を示す。埋土内からは、須恵器甕体部片などが出土した。

332・329溝は、南北方向の327溝から派生して東西方向に伸びる溝で、検出幅が0.5～1.0m、深さが30cm前後を測る。溝の断面形は平底の浅い皿状を呈す。埋土は褐灰色および灰白色粗砂礫混じり土と浅黄色砂質土の互層で、流水堆積の様相を示す。

埋土内からは、古墳時代後半頃から奈良時代頃の須恵器杯蓋、土師器杯などが出土した。

335・336溝（図54・55）

調査区の北側で検出した溝跡である。335溝は遺構335・333が、336溝は遺構334・336がつながったものである。

335溝は、ほぼ南北方向を示す溝で、検出幅は1.4～3.2m、深さが30～40cmを測る。336溝は、335溝に直交して東西方向に伸びる溝で、検出幅は1.4～2.5m、深さが20～30cmを測る。溝の断面形は、いずれも底の平たい皿状を呈す。埋土は上層が黄灰色ないし褐灰色粗砂礫混じりシルト、下層が淡黄色シルトで、やや緩やかな流水堆積の様相を示す。調査区の西側や南西部の平野部で検出した東西方向に広がる溝跡と同様に、流水と止水堆積を繰り返しながら埋没したものと思われる。

335溝の埋土内からは、古墳時代後半頃から奈良時代頃の土師器杯、皿、甕、須恵杯蓋などが出土した。

調査区北側に広がる溝跡は深さが浅く、埋土中に砂礫を含むシルトと砂層が互層を成すことから、恒常的な溝ではなく河川の増水時などに形成された一過的な自然流水路であると考えられる。埋土中に、土師器杯、皿、須恵器壺などの遺物が含まれることから、奈良時代中頃に流水、埋没したものと思われる。

380・389・361・399・364・367・368・390・395溝（図54・55）

調査区の中央部で、主に微高地の西側で検出した溝跡である。微高地の肩部を東西方向にほぼ平行して伸びる380・389・361・399・364・368溝、東西方向の溝の間を結ぶように南北方向に短く伸びる367・390・395溝などが見られた。

380溝は遺構391・380がつながったもの。389溝は遺構393から遺構389・382へと続くもの。361溝は遺構361から遺構388・401、さらに遺構378へ続くもの。399溝は遺構399から遺構374へと続くもの。364溝は遺構397から遺構364・367へと続くもので、西側では367溝と368溝が重なって検出された。

380・361・399溝は、検出幅が0.7～0.9m、深さが15～30cmを測る。溝の断面形はおおむね底の平らな、すり鉢状を呈す。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト、灰黄色粘質シルトが主を成し、止水堆積の様相を示す。埋土内からは、奈良時代の土師器杯、皿、甕、古墳時代後期の須恵器杯蓋、鉢などが出土した。

これらの溝は、微高地の肩部をわずかに東端が南側に湾曲するが、東西方向にほぼ平行して伸びるもの。各溝は約4mの間隔で平行しており、意図的に掘削された溝であると思われる。

389溝は途中やや南北方向に蛇行するが361・380溝にほぼ平行して東西方向に伸びるもので、検出幅は0.4～0.6m、深さが20～50cmを測る。溝の断面形は底の平らなすり鉢状を呈す。埋土は灰黄色砂混じり粘質シルト、粘質シルトが主を成し、止水堆積の状況を示す。埋土内から遺物などは出土しなかっ

た。381溝は、389溝から派生して東西方向に伸びる溝で、検出幅が約0.5m、深さが約10cmを測る浅い小溝である。埋土はわずかに炭化物を含む黒褐色粘質シルト、黄褐色粘質シルトで、止水堆積の様相を示す。

埋土内には、土師器の砕片が見られた。

367・390・395溝は、東西方向の溝の間を結ぶように南北方向に短く伸びる溝で、検出幅が0.4～0.5m、深さが10～20cmを測る。埋土は灰黄色粘質シルトが主を成す。溝の断面形は浅いレンズ状を呈す。いずれも遺物の出土はなかった。東西方向に伸びる溝の補助的な機能を有するものと考えられる。

367・368溝は検出幅が0.3～0.6m、364溝では検出幅が約1.2mである。深さは20～60cmを測る。

埋土はにぶい黄褐色系粘質シルト、砂混じり粘質土が主を成し、止水堆積の様相を示す。溝の断面形は浅いU字形を呈す。364・367・368溝は、380・361・399溝が伸びる方向とはやや異なり、溝の西端がわずかに北西方向へ湾曲するもので、おおむね微高地尾部の自然地形に沿うものである。意図的に掘削された溝であると思われる。埋土内からは、土師器甕片、須恵器杯蓋などが出土した。

362溝（図54・55）

調査区中央部で検出した微高地の西端部をやや西方向に幅くが南北方向に伸びる溝跡である。362溝は391・392・362溝が繋がったもので、東西方向に伸びる389・361・364溝を貫くように南北方向に伸びるものである。検出幅は0.5～0.8m、深さは20～30cmを測る。溝の断面形は底が平坦なU字形を呈す。埋土はにぶい黄褐色砂混じり粘質シルト、灰黄色粘質シルトが主を成し、止水堆積の様相を示す。埋土内から遺物は出土しなかった。

360・358溝（図54・55・57）

調査区中央部で検出した、やや西に振るが南北方向を示す溝跡である。360溝は北側部で362溝と近接しており、また、南側では358溝に繋がるものである。調査時、360・358溝は別個の溝と考えていたが、溝の途中に段を設け、V字状を呈す掘削状況から継続する溝であると判断した。

360溝は、検出幅が約0.8m、深さは溝の北部が約15cm、南部では段を成して一気に深くなり約70cmを測る。溝の断面形はV字状を呈す。埋土は上層部が黒褐色粘質シルト、下層が灰黄褐色シルトである。

358溝は、360溝からやや東側に屈曲してから直線的に伸びるもので、検出幅は1.6～2.2m、深さは360溝からは段を成して深くなり、北側では約20cm、中央部では約30cm、南側ではさらに一段深くなり約70cmを測る。溝の断面形は深いV字状を呈す。

埋土は上層が灰黄褐色砂混じりシルト、中層が黒褐色粘質シルト、灰黄褐色粘質シルト、下層が褐灰色ないし暗灰黄色砂混じり粘質シルトで、止水堆積の様相を示す。埋土中には炭化物、土器砕片などが含まれていた。溝底の高低差は360溝の北側から358溝の南側では約90cm以上を測る。何らかの理由で南側に流水する必要があったものと思われる。

360・358溝付近は微高地の西端部で、西側および北側に広がる平野部との境にあたる。

358・360溝さらに、362溝は他の溝とは明らかに掘削形態が異なり、深く、また段を設けていることから、意図的に掘削されたものであることがうかがえる。西側に広がる後背湿地との境界溝ないし濠になるものではないかと考えられる。

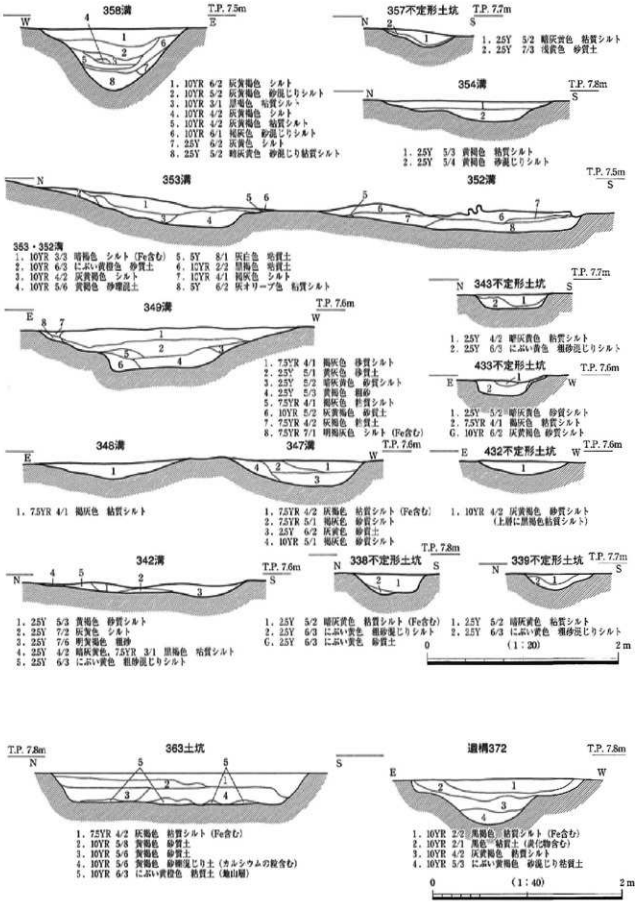


図57　第5面遺構断面図②（353溝・354溝・357不定形土坑・358溝　他）

383・386・370土坑（図54・55）

調査区中央部で検出した焼土や土器砕片を含む土坑である。

383・386土坑は近接して検出した土坑である。386土坑の検出形はやや方形気味を呈す。長辺は約1.2m、短辺は約1.0m、深さは約20cmを測る。埋土は上層が灰褐色粘質シルト、下層が灰白色シルトである。383土坑の検出形はやや方形気味の楕円形を呈す。長径は約1.3m、短径は約1.0m、深さは約25cmを測る。埋土は上層が褐灰色粘質シルト、下層が明黄褐色砂質土で、焼土塊や土器砕片を含む。

370土坑は363土坑の東端部で検出した土坑で、検出形は扁平な楕円形を呈す。長径は約1.0m、短径は約0.7mを測る。深さは約50cmを測る。埋土は上層が黄褐色粘質シルト、下層が黄褐色砂混じり粘質土で、焼土塊や土師器甕片、土器砕片を含むものである。焼土塊などを含む土を土坑内に廃棄したものと思われる。

371・384・385・366ピット（図54・55）

調査区中央部で検出したピットで、東西方向に伸びる361溝、364溝に近接するものである。

371ピットは、検出径が約40cm、深さが約50cmを測るピットで、断面形は深いU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質シルト、明黄褐色砂混じり粘質土である。

384・385・366ピットは、検出径が約30～35cm、深さが約10cmを測るピットで、断面形は浅いレンズ状を呈す。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

これらのピットは、溝にともなう杭跡と思われる。各埋土内から遺物は出土しなかった。

342・346・347・348・349・351・352・353・354溝（図54・57　図版9）

調査区南西部の平野部で検出したおおむね東西方向に延びる溝である。

342溝は遺構340と遺構342が繋がったもので、東側から西側に流走する溝である。検出幅は1.4～2.0m、深さは15～30cm、検出長は約11.5mを測るが、さらに西側へ伸びている。342溝は2条の溝によって形成されている。埋土は下層がにぶい黄色ないし黄褐色粗砂混じりシルトで粗砂とシルトが互層を成す。上層は暗灰黄色粘質シルトで覆われている。流水と堆積を繰り返しながら埋没した様相を示す。埋土の堆積状況から2条の溝に時期差はないものと思われる。埋土内から遺物は出土しなかった。

346溝は東側に位置する414溝から続くもので、347溝と348溝、および349溝に分岐する溝である。検出幅は1.6～3.2m、深さは25～50cmを測る。検出長は347溝と348溝方向に約14m、349溝方向に約20mを測るが、さらに南側へ伸びている。347溝と348溝は2条で形成される溝である。埋土は褐灰色砂質シルトと灰黄色砂質土でラミナが顕著に見られる流水堆積の様相を示す。上層は褐灰色粘質シルトである。

349溝は断面形が平底の浅いすり鉢状を呈す溝で、褐灰色砂質シルトや黄褐色粗砂が互層を成し、流水堆積の様相を示す。流水と堆積を繰り返していたものと思われる。埋土内から遺物は出土しなかった。

351溝は東側に位置する411溝から続くもので、西側では近接しているが東側で352溝と353溝に分岐している。351溝の検出幅は約4m、352溝、353溝は1.6～2.2mである。深さは50～60cmを測る。

検出長は約17mであるが、西側は南側川で切られているため延長は不明である。溝の断面形は浅い皿状を呈す。埋土は黄褐色砂礫混じり土や灰黄褐色シルトが互層を成し、流水堆積の様相を示す。上層には黒褐色ないし暗褐色粘質土が覆っている。埋土内から遺物は出土しなかった。

354溝は351溝から分岐して南北方向に流走する溝で、358溝に合流するものである。溝の検出幅は1.3～1.8m、深さは20～40cmを測る。溝の断面形は浅い皿状を呈す。埋土は下層が黄褐色砂混じりシルト、上層が黄褐色粘質シルトである。354溝は他の溝に比べると、やや細く浅い様相を示す。恒常的に流水していたのではなく一過的な流水によるものと思われる。埋土内から遺物は出土しなかった。

338・339・343・350・432・433・357不定形土坑（図54・57）

調査区南西部の平野部で、東西方向に広がる溝跡に近接して検出されたものである。

検出形はいずれも0.7～1.2mの広がりをもつ歪な形状を示す。断面形は10～20cm程度の浅い皿状ないしレンズ状を呈す。埋土は灰黄褐色砂混じりシルトが主を成す。おそらく窪地などにオーバーフローした洪水砂が堆積したものと考えられる。

338不定形土坑の埋土内からは、須恵器甕細片が出土した。433不定形土坑の埋土内からは、須恵器甕、土師器甕片などが出土した。

410・411・412・413・414溝（図54・58）

調査区の西部で検出した東西方向に広がる溝跡で、西側川で寸断されるが調査区の南西部で検出された346・351溝などの溝跡につながるものである。また、（その4）調査区の第5面で検出された溝跡の延伸部にあたると思われる。

410溝は西端部が不明瞭であるが、413溝に伸びる溝である。検出長は約7mである。溝の検出幅は1.0～1.3m、深さは20～45cmを測る。溝の断面形は皿状を呈す。埋土はにぶい黄褐色砂混じりシルト、にぶい黄色砂礫混じり土が互層を成し、流水堆積の様相を示す。上層には黒褐色粘質シルトが覆っている。埋土内では土師器の砕片が見られた。

411溝は東西方向に約7m流走したのち、413溝および414溝に合流するものである。溝の検出幅は2.0～3.5m、深さは30～80cmを測る。溝の断面形は深みのある皿状を呈す。埋土は主ににぶい黄橙色砂礫混じり土、にぶい黄褐色砂質土が互層を成し流水堆積の様相を示すが、中層に黒褐色シルトが堆積していることから、長期間に渡って流水と止水堆積を繰り返していたことがうかがえる。（その4）調査区の第5面で検出された128溝の延伸部にあたると思われる。埋土内から遺物は出土しなかった。

412溝は414溝に続く溝で、さらに調査区の南西部で検出された346溝につながるものである。（その4）調査区で検出された溝状遺構の延伸部にあたると思われる。412溝、414溝の検出幅は1.7～2.8m、深さは35～50cmを測る。検出長は約12mである。溝の断面形は浅いすり鉢状を呈す。埋土はにぶい黄褐色シルト、灰黄褐色砂質土が互層を成し流水堆積の様相を示す。上層に黒褐色粘質シルトが見られることから、411溝と同様に流水と止水堆積を繰り返していたことがうかがえる。埋土内からは、奈良時代の土師器杯、甕片、須恵器甕片、杯片などが出土した。

413溝は410溝と411溝が合流して東側に広がる溝で、さらに調査区の南西部で検出された351溝につながるものである。検出長は約13mである。検出幅は2.0～5.0m、深さは25～50cmを測る。溝の断面形は浅いすり鉢状を呈す。埋土はおおむね灰黄褐色シルト、灰黄褐色粘質シルトが互層を成すが、中層および上層に黒褐色粘質シルトが見られることから、長期間に渡って流水と止水堆積を繰り返していたことがうかがえる。埋土内からは、奈良時代頃の土師器皿、甕細片などが出土した。

これらの溝は、おおむね正方位をとり東西方向に伸びる溝群である。若干ではあるが、埋土内に奈良

時代頃の遺物を含む洪水砂で埋まっていることから、奈良時代頃に掘削されていた溝群であると考えられる。洪水砂によって埋没するまでは、おそらく耕作にともなう用水施設であったと推測される。

当地において奈良時代には正方位を基準とする土地地割りが敷かれていたことがうかがえる。

415溝（図54・58）

415溝は414溝から分岐して南北方向に流走する溝である。

検出長は約７mであるが、西側は調査区外に伸びている。溝の検出幅は約1.0m、深さは約20cmを測る。溝の断面形はやや段をともなうレンズ状を呈す。埋土は灰黄褐色粘質シルトとにぶい黄橙色細砂が互層を成す流水堆積の様相を示す。上層に暗褐色粘質シルトが見られるが、流水は一過的なものであっ

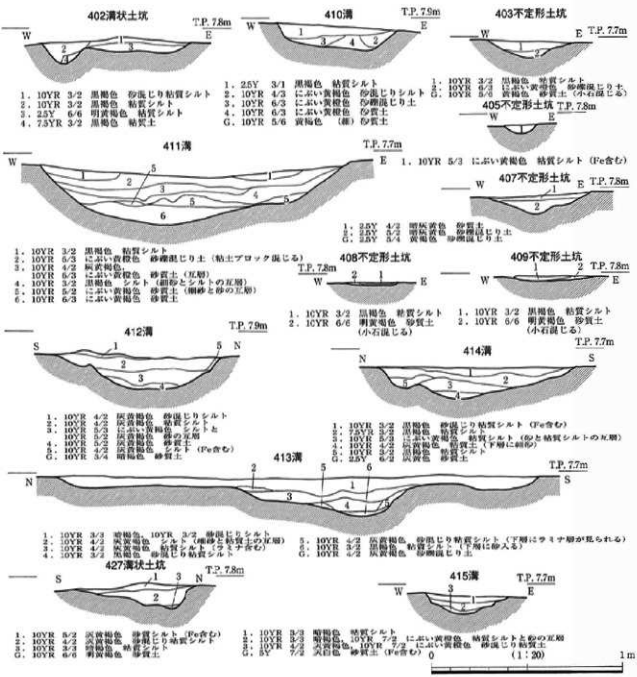


図58　第５面遺構断面図③（402溝状土坑・415溝　他）

たと思われる。埋土内から遺物は出土しなかった。

402・427溝状土坑（図54・58）

調査区の西部で検出した溝状に広がる遺構である。いずれも西側が調査区外に広がるため、形状は不明である。

溝状土坑の深さは10～30cmを測る。遺構の断面形は凹凸のある浅い皿状を呈す。埋土は、下層が黒褐色ないし灰褐色粘質シルトで、上層を洪水砂である黄褐色砂質土が覆っている。浅い窪地などにオーバーフローした洪水砂が堆積したものと考えられる。埋土内からは、須恵器杯身、甕体部片などが出土した。

403・405・407・408・409不定形土坑（図54・58）

調査区西部の中央辺りで検出した遺構である。

403・407不定形土坑は検出幅が約1.0～1.4mほどの歪んだ楕円状を示す。埋土は下層に暗灰黄色砂礫土、上層は植物遺体を含む黒褐色粘質シルトなどで覆われている。断面形はやや凹凸のあるレンズ状を呈す。深さは約20cmを測る。

405・408・409不定形土坑は薄い皿状を呈し、深さは5～8cmを測る浅いものである。埋土は黒褐色ないしにぶい黄褐色粘質シルトが主を成す。いずれも窪地などにオーバーフローした洪水砂が堆積したものと考えられる。埋土内からは、わずかにローリングを受けた土師器砕片が出土したが、実測するには至らなかった。

418・435不定形土坑（図54）

調査区西部の北側および南側で検出した、不定形の平面形を呈する土坑である。いずれも西側が調査区外に広がるため、形状は不明である。

埋土は下層に植物遺体を含む黒褐色粘質土、上層を灰褐色粘質シルトが覆うもので、深さが20cm程度と浅いものである。いずれも窪地などにオーバーフローした洪水砂が堆積したものと考えられる。埋土内からは、土師器甕片などがわずかに出土したが、実測するには至らなかった。

調査区の西側部および南西部で検出した溝、不定形土坑、溝状土坑などは、おおむね灰黄褐色粘質シルトとにぶい黄橙色細砂が互層を成し、流水堆積の様相を示す。上層部では、暗灰黄色ないし黒褐色粘質土、粘質シルト層が堆積し、埋土中にも植物遺体を含む黒褐色ないし暗黄褐色粘質シルト層の堆積が見られ、止水堆積の様相を示すことから、洪水・流水などで、溝、不定形土坑、溝状土坑などが埋没した後は、冠水した後背湿地であったものと推測される。

このような状況は、（その3）調査区の第4面や（その4）調査区の第5面でも見られることから、かなり広い範囲が後背湿地状況にあったものと考えられる。

157・158・159・160・161・162溝（図54・59）

調査区東南側の微高地上で検出した溝跡である。159溝、160溝は、西方向に約32°傾く南北方向を示す溝跡である。160溝は東側において161溝と162溝に分岐している。これらの溝の西側は攪乱により途切れており、延長は不明であるが、東側は（その6）調査区で延長部分が確認されている。検出長は約15

mである。検出幅は0.6～1.0m、深さは30～60cmを測る。159溝の断面形は深いV字形を呈す。

160溝の断面形は底が平らなコの字型を呈す。埋土は上層が黒褐色粘質シルトで土器片などを含む。

中層は黒褐色砂混じり粘質シルトである。上層および中層は、基本層序の第6層の「黒茶層」にあたる。下層は黄褐色砂質シルトで砂礫が混じるものである。最下層には黄褐色粗砂が堆積している。一時期は流路として機能していたが、黒茶層が主を成す整地層が上層を覆い、溝を埋没させている。溝159、溝160は、約2.5m間隔で平行している。自然発生的な溝ではなく、計画的に掘削されたものと考えられる。

158溝は、159溝から分岐して南北方向に伸びた後、屈曲して東方向に伸びる溝跡である。東側はさらに（その6）調査区に伸びている。検出長は約10mである。検出幅は約50cm、深さは約30cmを測る。溝の断面形は底が平らなコの字型を呈す。埋土は上層がオリーブ褐色砂質シルト、中層が「黒茶層」で黒褐色粘質シルトである。下層はにぶい黄色粗砂礫混じり砂質シルトである。

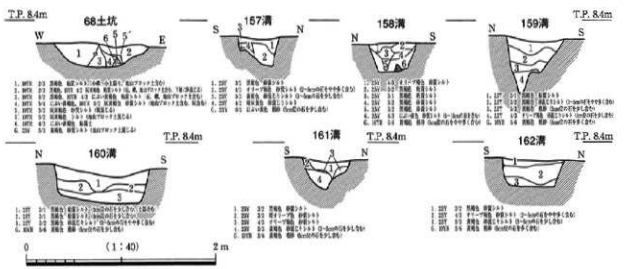


図59　第5面・第6面遺構断面図④（158溝・160溝　他）

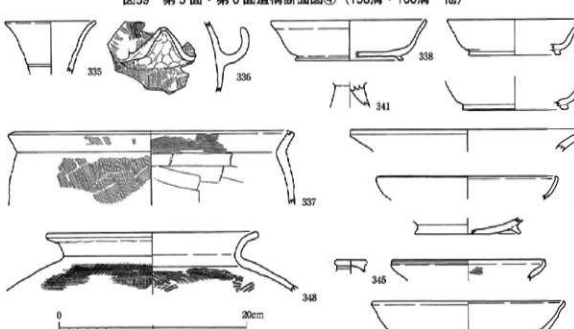


図60　第5面遺構出土遺物②（337井戸・322溝・325溝　他）

157溝は、159・160溝に直交するように東西方向を示す溝跡である。西側は最終面で検出した竪穴住居を切って伸びているが、その延長は不明である。検出長は約7m以上である。検出幅は約40cm、深さは約30cmを測る。溝の断面形はやや不均等な深いV字形を呈する。埋土は上層が「黒茶層」にあたる黒褐色粉質シルト、中層がオリーブ褐色小礫混じり砂質シルト、下層が黄褐色ないし暗灰黄色砂混じりシルトである。いずれも、計画的に掘削されたものと考えられる。

溝内からは遺物片が多く出土したが、大半が細片であるため実測に耐えられるものはわずかであった。

出土した遺物として、土師器羽釜、土師器高杯脚部、土師器杯、土師器甕、須恵器杯蓋、須恵器甕片、黒色土器片などが見られた（336～348）。7世紀から8世紀頃に相当すると考えられる。

363土坑（図57）

調査区東側の微高地の西側肩部に位置する焼土を含む土坑である。

363土坑の検出形は東西方向に長い方形を示す。東西方向は約14m、南北方向は約3mを測る。深さは約34cmである。第5面で東西方向に伸びる溝群を検出したが、これらの溝に囲まれるような配置になっている。溝の断面形は底の平らな浅い皿状を成す。埋土は、上層が灰褐色粘質シルトで鉄分沈着が見られる。中層が黄褐色砂質土で炭化物等を多く含む遺構である。下層は黄褐色砂礫混じり土である。

埋土内から出土した遺物として、須恵器甕片、土師器片の他に、鋳型片や、焼土塊など見られた。明確な焼土の範囲などが認められなかったが、鋳造関連の遺構ではないかと思われる。

第5面遺構出土遺物（322・325・327溝、337井戸、157・158・159溝　他）

（図56・60・65・149　図版19～22・24）

322溝からは弥生時代後期の高杯口縁部と思われる破片が1片出土している以外は、古墳時代から奈良時代の遺物が少量出土している。

図56－297～301の遺物が322溝からの出土である。

297～300は須恵器で、杯蓋（297）、杯（298）、高台付壺（299・300）の器種が見られ、時期は平城宮V前後と思われる。301は石英安山岩と思われる白っぽい砥石で、表・裏・両側面に使用痕が認められる。後世に被熱しており、煤が付着している。

325溝からは古墳時代の須恵器壺頸部破片、奈良時代の鉄鉢形鉢や平瓶把手、土師器細片が少量出土している。302は土師器杯で、平城宮IIと思われるものである。303は底部外面に回転糸切り痕を残す須恵器壺底部で、第4面黒茶層出土の289と同じく平安京I期中と思われる。

329溝からは古墳時代の須恵器杯蓋や甕頸部の細片、奈良時代の須恵器杯蓋や土師器杯の細片が出土している。図化したのは304の土師器杯で、平城宮III～IVの時期と考えられる。

330溝からは、古墳時代の須恵器横瓶と考えられる体部片が1点、須恵器甕で焼成が不良の体部片が1点、奈良時代と思われる土師器杯の他、器種不明の体部片が少量出土している。図化しているのは305の須恵器杯である。時期は平城宮IVであろうか。

332溝からは須恵器2点が出土している。306は杯蓋で寿邑編年II－5～6の時期にあたる。307は須恵器壺高台部破片で、平城宮I～IIの時期か。

335溝からは古墳時代と奈良時代の土師器・須恵器が少量と、円筒埴輪片（図149　図版24－412）が出土している。308は須恵器杯蓋で、平城宮I～IIの時期のものか。309～312は土師器で、309が杯、310・

311が皿、312が甕である。309・312が平安京I～Ⅱ期、310・311が平城宮IV～Vか。

399溝からは古墳時代から奈良時代の土師器甕他の破片が少量出土しており、その中には胎土中に角閃石を含む土師器羽釜鍔も含まれている。図化した313～315は須恵器である。313は陶邑II－２～４の杯蓋天井部で、外面にヘラで線刻された記号の一部が残る。314は飛鳥III～IVの杯蓋で、つまみは欠損している。315は陶邑II－４～５の脚体部片である。316は土師器甕口縁部で平城宮Vの時期のものと考えられる。この他に371のサヌカイト剥片や374の二次加工のある剥片も出土している（図65　図版21）。

380溝からは弥生時代中期の壺頸部に刻み目凸帯のある破片や、古墳時代と思われる土師器体部片、焼土塊細片などが少量出土している。317は土師器皿、318は土師器杯で、共に平城宮V前後の時期と思われる。380溝の遺構391からはサヌカイトのスクレーパーが出土している（図版21－450）。

413溝からは須恵器横瓶と思われる体部片、時期不明の土師器体部片、土師器皿が出土している。319の土師器皿は平城宮III～IVの時期のものであろう。

412溝からは古墳時代と考えられる須恵器甕体部片、土師器体部破片が出土している。320の器形は体部から口縁部にかけて直線的に上方へ広がり、口縁端部で少し外反している。奈良時代の土師器杯と思われるが不明である。

327溝からは須恵器、土師器の細片が出土している。321は平城宮III～IVの時期にあたると思われる須恵器壺高台部である。図版19－442は７世紀代の把手付椀の把手部分と推測するものである。把手断面は扁平な楕円形状を呈し、先端部は薄い。つけ根部分の片面側に煤が少し残る。

367溝からは奈良時代の須恵器、土師器が出土している。322は須恵器杯蓋、323は須恵器杯、324は土師器甕である。時期は須恵器が平城宮III～IVと土師器が平城宮VI～VIIか。

402溝状土坑からは須恵器、土師器の細片が出土している。325は須恵器杯で、時期は陶邑II－４～５と思われる。

433不定形土坑からは奈良時代の須恵器、土師器が出土している。326は須恵器鉢、327は土師器甕である。時期は平城宮IV～Vと思われる。この他、図化していないが須恵器鉄鉢型鉢が出土している。

363土坑の整地層からは弥生時代から奈良時代の遺物が出土している。328～333は須恵器、334は土師器である。328は平城宮II～IIIの杯蓋、329は陶邑編年のII－５～６の杯蓋、330は平城宮V～VIの杯、331は飛鳥II～IIIの高杯、332は飛鳥IIの壺底部と思われる。333は平城宮V～VIの長頸壺、334は平城宮IV～Vの甕である。382は弥生時代後期の壺底部と思われる破片で、底部外面は上げ底状である。

337井戸の遺構についての記述は掲載していないが、奈良時代の土師器、須恵器が出土している。335は須恵器長頸壺の口縁部であり、平城宮II～IIIにあたる。

157溝からは古墳時代から奈良時代の須恵器、土師器が出土している。336・337は土師器甕である。

336は把手付で平城宮IV～Vの時期と思われる。337は形態的に平安京IV期新の時期の甕に類似するが、第５面からは平安時代後期の遺物が出土していない点から、奈良時代の土師器甕の可能性が考えられる。338～340は須恵器杯である。338・339は平城宮Iの時期か。340は高台貼り付けの位置が若干外にあるので、平城宮Vの時期と思われる。

158溝からは古墳時代から奈良時代の土師器、須恵器が出土している。341は古墳時代の土師器高杯脚部破片である。342は土師器甕口縁部破片で、平城宮II～IIIである。

159溝からは古墳から奈良・平安時代の須恵器、土師器、黒色土器が出土している。343は土師器皿で、平安京I期中の時期にあたる。344は黒色土器A類の椀高台部破片である。この他、図化していないが古

墳時代の須恵器壺体部や杯体部破片、胎土中に角閃石を含む奈良か平安時代の羽釜破片などが見られる。

160溝からは古墳から奈良時代の須恵器、土師器が出土している。このほか、サヌカイト剥片（図版21－373）や円筒埴輪破片（図149　図版24－415）も見られる。345～347は土師器である。345は土師器杯蓋のつまみで平城宮I～II、346の甕は奈良時代。347は平城宮IIIの鉢と思われるものである。

161溝からは弥生中期の体部破片と、器種不明の体部片が若干出土している。348は須恵器甕であり、陶邑編年のIII型式にあたると思われる。

遺構368からは古墳時代の須恵器甕細片と弥生時代中期の高杯脚破片が1点（図版22－454）出土している。

第6面（図54）

調査区東側の微高地で、第3面検出時に露出していた黒褐色粘質シルト層をベース層とする遺構面を第6面とした。調査時には、東側の微高地上では第6層を掘削すると第3面～第6面に相当する遺構が一括して検出された。洪水砂層等により幾分上層が削平されているが、土壌の堅固な微高地であったため遺存していたものと思われる。微高地外の地域では、第3面相当の大河川の増水やその他の事象により遺構が削平されたものと考えられる。

第6面では、微高地上で竪穴住居、溝などを検出した。また、微高地の西端部では土坑や焼土層の広がる個所が見られた。残存する遺構を検出した面はT.P.8.10m前後を測る。第6面の時期は、検出された遺構・遺物から6世紀後半頃に相当するものと思われる。

竪穴住居（図61・62　図版10）

調査区東側の微高地上で、第3面のピット群検出時にやや下層から竪穴住居を検出した。

この竪穴住居は、東西辺約4.0m、南北辺約4.6mを測り、隅丸長方形を呈するものである。周囲に浅い壁溝が巡る。主軸の方位はN－6°－Wである。検出面から床までの深さは約13cm、面積は約18.4㎡を測る。埋土は、上層が灰黄褐色ないしにぶい黄橙色砂混じりシルト、中層が暗褐色細砂混じりシルトで小土器片が含まれる。下層がにぶい黄橙色ないし明黄褐色砂混じりシルトで土器片が含まれるものである。竪穴住居の床面はやや起伏をともない一概に平坦とは言い難いものである。貼床は確認できなかった。

竪穴住居内で4本の柱穴（ピット6－1～4）を検出した。柱穴はやや歪んだ円形ないし楕円形を呈する。検出径は約35～40cm、深さは約35～45cmを測る。各柱間の距離は南北方向が約2.3m、東西方向が約2.0mである。柱穴内の埋土は中央部が黒褐色砂質シルト、中央部の周辺は黄褐色砂混じりシルト、暗灰黄色砂混じりシルトである。ほぼ中央部に位置する黒褐色砂質シルト層は、柱痕が腐食して空間が出来ると黒褐色砂質シルト層（黒茶層）が入れ替わり混入したものである。

壁溝は検出幅約10cm、深さ約5cmを測る。埋土は褐色ないし暗褐色砂混じりシルト層が主を成す。東辺中央部ではカマド跡と思われる張り出し部が見られた。1辺60cm×75cmの長方形を示す。深さは約10cmを測る。カマド跡については、第3面調査時に掘立柱建物の建物ピットと重複していたため、充分な観察ができなかったが、埋土中には炭化物、灰層などが確認できた。

南辺の南西部で拡張部が見られた。外側に約80cm、延長75cm、面積は0.6㎡を測る。深さは約30cm

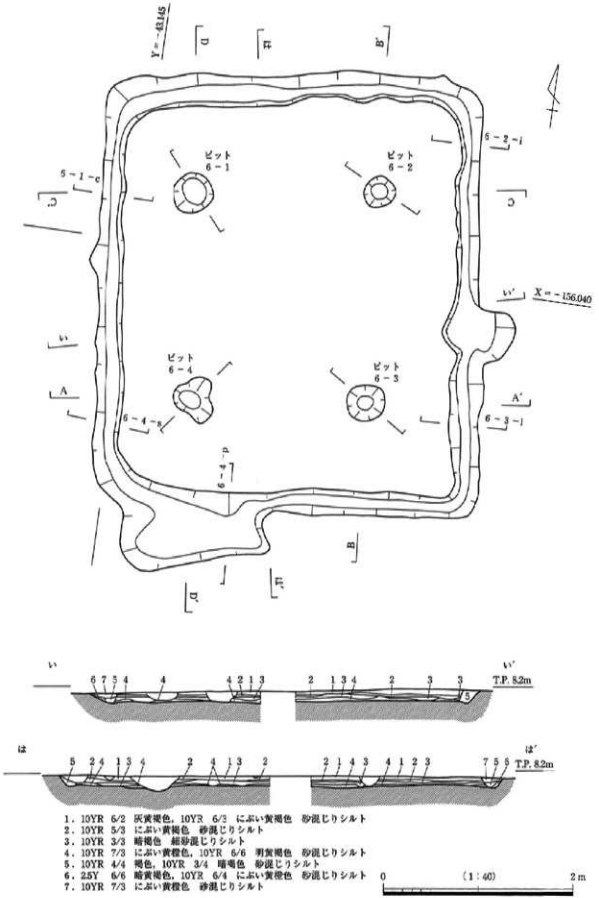


図61　第６面竪穴住居平・断面図

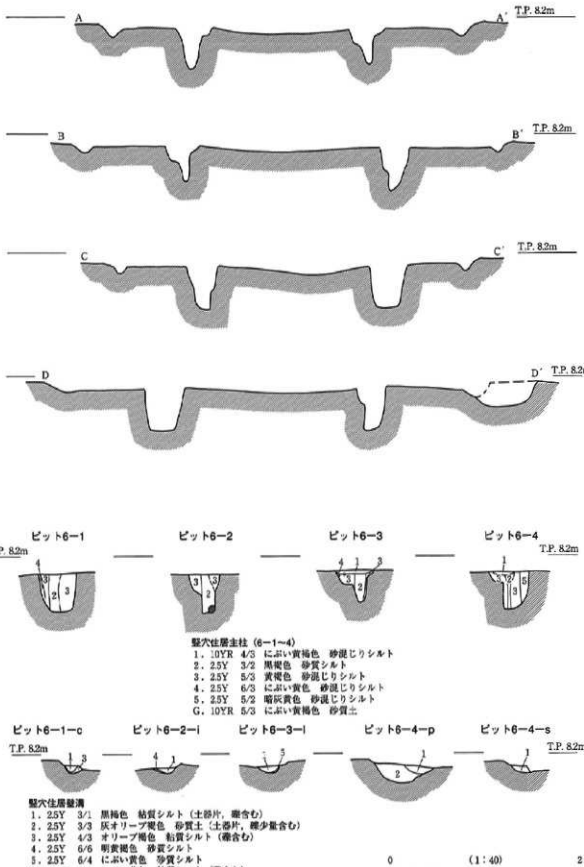


図62 第6面竪穴住居内ピット断面図

である。壁溝を切って拡張するものである。

竪穴住居内からはわずかではあるが遺物が出土した。細片が多く、実測できるものが少なかったが、床面付近からは、須恵器杯身、土師器甕体部片、桃の種などが出土している。竪穴住居の時期として、5世紀末から6世紀頃に相当するものと考えられる。

大和川今池遺跡の既往の調査では、掘立柱建物が数多く確認されているが、竪穴住居を検出したのは昭和54年度の大和川・今池遺跡調査会による第5地区の調査で検出したSB01竪穴住居があるが、その他で竪穴住居の検出例は知られていない。大半が掘立柱建物である。河内、大和ではいち早く竪穴住居から掘立柱建物へと移行したとされているが、この地域の地理的条件にもよるところが大きいものと推測される。当地における建物の構成を考えるうえで興味深い資料になると思われる。

竪穴住居内出土遺物（図63　図版19）

竪穴住居からは弥生中期の甕底部と思われるものと、古墳時代から奈良時代の須恵器、土師器、種子が出土している。

349～352は須恵器、353・354、図版19－443は土師器である。349は杯蓋で、平城宮III～IVの時期である。350・351は須恵器杯蓋で、陶邑編年のII－3～4の時期と思われる。352は須恵器皿と思われるもので、平城宮I～IIの時期のものと思われる。353・354は土師器甕である。353が平城宮II～III、354が平城宮I～IIのものか。図版19－443は土師器甕の体部から底部にかけての破片である。外面は主に縦方向の刷毛目、内面は指押さえ・ナデの後、体部側に斜め方向のヘラ削り調整が施され、外面には煤が付着している。土師器甕は6世紀代のものか。図版19－444は桃の種で計6個あり、その内の1個は半分欠損している。大きさは長さ1.9～2.9cm、幅1.5～1.9cm、厚さ1.3～1.5cmである。

68土坑（図54・59）

調査区東側の微高地上で竪穴住居の南側に位置する土坑である。

調査当初は、第3面の掘立柱建物のピット検出時に確認されていたため、第3面の遺構であると考えていたが、調査の結果、遺構内の埋土などから、竪穴住居にともなう遺構と思われるようになったものである。

68土坑はやや南北方向に広がる楕円形を呈する土坑である。

検出径は、長径が1.4m、短径が1.0mを測る。調査当初、深さは25cm程と考えていたが、上述したように竪穴住居に伴う遺構である点から、下層を確認したところ、さらに堆積層が認められた。最下層までは深さは約1.0mを測る。おそらく井戸になるであろうと思われる。竪穴住居に付随する井戸では

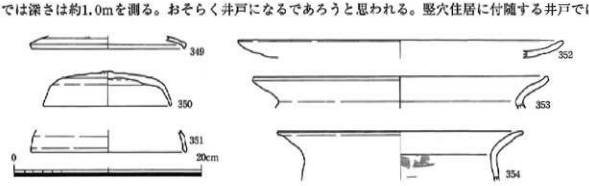


図63　第6面竪穴住居内出土遺物

ないかと思われる。68土坑の断面形は半円形を示す。下層はほぼ円筒状に垂下に広がっている。

埋土は上層が黒褐色粘質シルトで小礫、小土器片などが含まれていた。この黒褐色粘質シルトは「黒茶層」にあたる。中層は黒褐色粘質シルトとにぶい黄褐色粘質シルトで石、礫、地山ブロック、ススが含まれる。井戸の廃絶期に石などを混入したものと思われる。下層は黄褐色砂質シルトで湧水層となっている。出土した遺物として、細片であるため実測はできなかったが、須恵器甕片、土師器片などである。

第5面・第6面包含層出土遺物（図64～66・148・149　図版20・21・23・24）

この層からは古墳時代から奈良時代の土師器、須恵器、形象埴輪および円筒埴輪（図149－407　図版24－407、図148　図版23－397・398）の他、弥生土器の細片、サヌカイト石鏃（図65　図版21－364）、縄文時代と考えられる土器細片が出土している。

355～358は土師器、359～363は須恵器である。

355は6世紀代の土師器杯か。356は平城宮II～IIIの須恵器杯蓋、357は古墳時代の土師器高杯で布留の新しい時期のものか。358は平安京I期中の土師器皿と思われるものである。359は飛鳥II～IIIの須恵器杯、360・361は平城宮I～IIの須恵器杯か。362は平安京I期中の須恵器壺高台部、363は平城宮III～IVの須恵器すり鉢である。

364は凹基無茎式石鏃で、抉りの状態から縄文時代の石鏃かと思われる。384は弥生後期壺底部、図版20－445は奈良時代か不明の土師器把手であり、断面は扁平な楕円形状を呈し、片面側に煤がみられる。図版20－446・447は土師器竈片である。時期は古墳時代から奈良時代のいずれかに属する。

石器（図65　図版21）

サヌカイトの剥片および石器は（その5）では計36点出土している。

石核2点、剥片13点、チップ3点、二次加工のある剥片6点、スクレーパー2点、楔形石器4点、石鏃3点、石鏃未成品2点、石錐1点である。

364～366は凹基無茎式石鏃である。367も凹基無茎式石鏃と類似するが、先端部にかすかに石錐として使用された痕跡が残る。368・369は石鏃未成品である。368は下部が折れ面であることから、石錐の錐部が欠損したものかとも考えられる。369は石槍の先端部破片の可能性も考えられる。370～373は剥片である。374は二次加工のある剥片であるが、一見スクレーパーのようにも見える。

出土層は第1層包含層、第2面包含層、第2－b面包含層、第3面包含層、第4面黒茶層、第2－b面大河川内埋土、第4面南僧川内埋土、第5面365・399溝、第6面160溝であり、全て後世の遺構や包

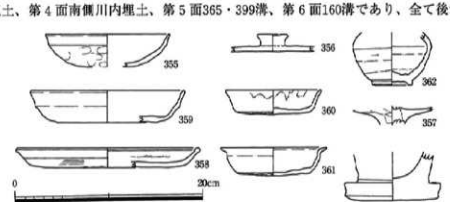


図64　第5面・第6面包含層出土遺物

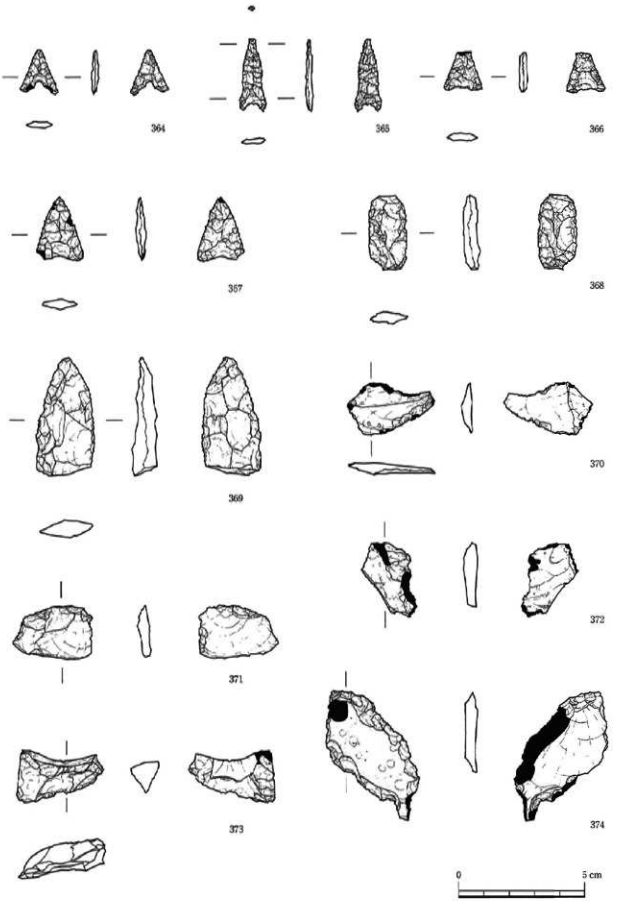


図65　石器

含層に含まれている。第4面以下の層からの出土が約1／3強を占める。

縄文土器・弥生土器（図66　図版22）

縄文土器が細片で3点認められた。

394は少し薄手でもろく、早期の押型文の可能性があるものである。395は縄文が一部磨り消され、沈線が1条見られる後期の土器片である。396は縄文が殆ど磨り消された後期の土器片である。

弥生土器は中期から後期の土器破片が少々出土している。いずれも後世の遺構ないしは包含層出土である。第4面以下の遺構や包含層からの出土が多い。

375・378～386は後期、376・377・387～393は中期に属すると思われるものである。375は壺口縁部で、端部外面に擬凹線と円形浮文が施されている。378～386は底部破片である。

382・384～386は底部から体部にかけての屈曲が大きく、壺の可能性がある。それ以外の底部破片は屈曲が小さめなので甕と思われる。

376は壺口縁部で、端部が下方に折れ曲がり、外面に簾状文と刺突文が見られる。377は壺口縁部で、端部が少し斜め下方に折れ曲がり、外面に簾状文と刺突文が見られる。387は高杯脚部である。内面に横方向のヘラ削り、外面に縦方向のヘラ磨きが施されている。

388は鉢と考えられる体部から底部にかけてのものである。時期は中期か不明である。これの外面体部下半に黒斑が見られる。389～393は中期の底部破片である。器種は不明であるが、392・393は底部から体部にかけての屈曲が少し大きいことから、壺の可能性も考えられる。

図版22－454は中期の脚台部または水差しか、短頸壺の口縁部破片である。1箇所に直径0.7cmの穿孔が見られる。454の破片の大きさは長さ5.3cm、幅4.5cmである。

455は中期の高杯脚柱部である。内面には絞り目が残る。

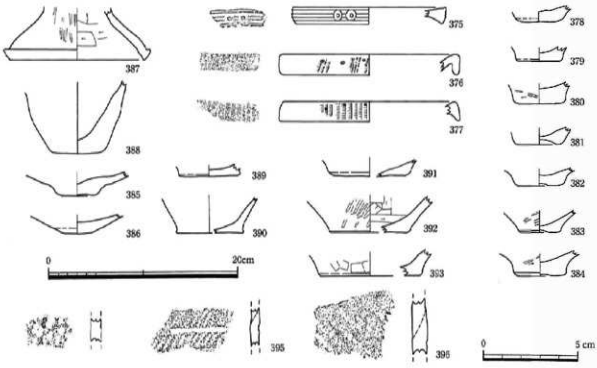


図66　縄文土器・弥生土器

4　小結

（その5）調査区の調査の結果をまとめると、以下のようになる。

1．第2－b面において、畦畔や耕作にともなう溝などを検出し、大和川付替え以前の当地周辺の耕作区画を復元することができた。

2．第2－b面で検出した大河川内から、大河川の機能時（中世から近世）の生活用品や遺具、また、鍛冶関連遺物が出土した。大和川が付替えられるまで大河川が生活域に近接する河川であることが判った。さらに、出土した遺物から当地における生産環境を想定することができた。

3．大河川から鍛冶関連遺物が出土し、また、計画的に採取された粘土取り穴が検出された。大和川今池遺跡に近い大阪市苅田7丁目遺跡においても鋳造関連遺構や遺物が出土し、「あびこ鋳物師」の関連遺構であるとしている。当地においても関連遺構である可能性を指摘することができた。

4．第3面で掘立柱建物群を検出したことで、中世における集落域がさらに西側に広がることが判った。また、掘立柱建物の配置に規則性が見られ、分類することができた。

5．第4面で検出した南側川内から、奈良時代から平安時代を主とする遺物がまとまって出土した。大半は河川内に投棄したものと思われるが、一部の河岸際で祭祀を行ったと思われる痕跡をみることができた。また、墨書土器など特徴的な遺物が一括して出土したことで、この頃の当地の状況を探る良好な資料になったと思われる。

6．第5面では直線的に伸びる溝群を検出した。これらの溝群は、古代における水利事業の一貫として造営されたものではないかと推測した。

7．第6面において、竪穴住居を検出した。これまで大和川今池遺跡では、古墳時代の建物跡は多数検出されているが、竪穴住居はほとんど見られなかった。この地における古墳時代の集落における建物構成を考える手がかりになるものと思われる。

8．煙突などに転用された円筒埴輪や、盾型埴輪などの形象埴輪が出土した事で、当地付近に埴輪を有する古墳が存在していたことを想定できる有力な資料となったと思われる。また、古墳時代における当地の環境復元を考える上で、新たな資料になるものと思われる。

9．南側川の左岸や大河川の西側で堤防や護岸強化の跡が見られた。古墳時代の遺物を含む整地土（黒茶層）を敷入していることが判り、古代から中世にかけてのこの地における大規模な開発の様相をうかがうことができた。

大和川今池遺跡の周辺では、古代の人工溜め池である依網池の存在や、古代の官道である「難波大道」の存在、近接する「阿麻美許曽神社」に残る行基伝説など、古代における開発に関与する事象が多く見られる。発掘調査によって得られた資料と、開発の事象を照合する事は困難であるが、検証を行う必要性があろう。

日本書紀、古事記では依網池造営の記事が見られるように、当地周辺地域は早くから土木技術や灌漑の進んだ地域であったことがうかがえる。河川の護岸強化対策だけでなく、直線的に平行する溝跡の設置や正方位に則った溝跡は計画的に設定されたものであると考えられる。また、このような事業が地域単位で行われたものとは考えづらく、おそらくその時点の政治権力によって国家的事業として実施されたものと考えられる。この地域の開発と、国家体制が緊密であったことを示すものであろう。

古代の開発から現代の開発まで看取することの出来る大和川今池遺跡ではあるが、今後の課題として周辺地域の古環境の復元や各時代における集落の変遷について、さらに今後の成果が期待される。

参考文献

中世土器研究会　1995年　『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
古代の土器研究会　1992年　『古代の土器１　都城の土器集成Ⅰ』　真陽社
古代の土器研究会　1993年　『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』　真陽社
古代の土器研究会　1994年　『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』　真陽社
古代の土器研究会　1996年　『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』　真陽社
『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30集　1980　大阪府教育委員会
『大和川今池遺跡』　大阪府埋蔵文化財調査報告1997－１　1998年　大阪府教育委員会
菅原正明　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1983年　同朋社
本田穂一郎・監修　1999年　『新集家紋大全』　梧桐書院

註

1）第３章第１・２節記述の陶磁器は堺市立埋蔵文化財センター　森村健一氏の御教示による。大和川今池遺跡（その５・６）調査区出土陶磁器の大部分を見て頂き、非常にお手を煩わせた。
2）岩石については（その５・その６）調査区出土の主要なものを奥田尚先生に見て頂いた。但し？をつけている石材については未鑑定のため、村上が判断した。第７章では「大和川今池遺跡出土の石器の石種とその産地について」という原稿を頂いた。
3）『大和川今池遺跡　大阪府埋蔵文化財調査報告1997－１』　1998年　大阪府教育委員会　「第４章　出土瓦の基礎整理」の分類基準に準拠して報告しているが、その分類にあてはまらない新型式のものも今回の調査では出土している。瓦については当センターの市本芳三氏に御教示頂いた。
4）大阪府教育委員会　渡辺昌宏氏御教示による。
5）『苅田４丁目所在遺跡　現地説明会資料』　2002　（財）大阪市文化財協会、『鋳造遺跡研究資料　2002』　2002　鋳造遺跡研究会
5）『真福寺遺跡』　1997年（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第19集　には梵鐘や鍔などを鋳造した際の鞴羽口他鋳造関連遺物が多く掲載されている。その中のⅣ調査区Ⅳ－９号および４号土坑出土の鞴羽口に、大和川今池遺跡出土の鞴羽口（458）は類似する。

表3　（その5）出土遺物観察表①

図版	図	遺物番号	器　種	遺構面	遺構・層名	備　考
11	11	1	備前壺蓋	第1面	包含層	
11	11	2	瀬戸窯系灰釉水瓶	第1面	包含層	回転糸切り底
11	11	3	厦門碗窯系白磁碗(Ⅳ2類)	第1面	包含層	
11	11	4	同安窯系青磁小皿（Ⅰ1b類）	第1面	包含層	
11	11	5	龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗	第1面	包含層	
	11	6	瓦器台付皿	第2面	包含層	
	11	7	土師器皿	第2面	包含層	
11	11	8	青磁急須？		上層包含層	
11	11	9	白磁碗(Ⅴ4類)		上層包含層	
11	11	10	中国製青磁片口鉢		上層包含層	
11	11	11	厦門碗窯系白磁碗(Ⅳ2類)	第2面	包含層	
11	11	12	厦門碗窯系白磁碗(Ⅳ1類)	第2面	包含層	
11	11	13	厦門碗窯系白磁碗(Ⅳ2c類)	第2面	包含層	
11	11	14	緑釉陶器碗	第2面	包含層	
11	11	15	龍泉窯系青磁皿	第2面	包含層	
11	11	16	同安窯系青磁碗	第2面	包含層	
11	11	17	龍泉窯系青磁劃花文碗	第2面	包含層	
	11	18	須恵器壺	第2面	包含層	
25	11	19	平瓦	第1面	包含層	
	14	20	肥前京焼系山水碗	第2-b面	大河川	
	14	21	波佐見窯系碗	第2-b面	大河川	
12	14	22	波佐見窯系白磁碗	第2-b面	大河川	
12	14	23	波佐見窯系青磁碗	第2-b面	大河川	
12	14	24	波佐見窯系青磁碗	第2-b面	大河川	
12	14	25	唐津碗	第2-b面	大河川	
12	14	26	唐津碗	第2-b面	大河川	
12	14	27	唐津碗	第2-b面	大河川	
12	14	28	唐津碗	第2-b面	大河川	
12	14	29	唐津碗	第2-b面	大河川	
12	14	30	美濃窯系鉄釉天目茶碗	第2-b面	大河川	
12	14	31	白磁皿	第2-b面	大河川	
12	14	32	厦門碗窯系白磁碗(Ⅳ2類)	第2-b面	大河川	
12	14	33	龍泉窯系青磁碗	第2-b面	大河川	
12	14	34	龍泉窯系青磁碗	第2-b面	大河川	
12	14	35	龍泉窯系青磁雷文帯碗	第2-b面	大河川	
12	14	36	龍泉窯系青磁無文碗	第2-b面	大河川	
12	14	37	龍泉窯系青磁蓮弁文碗(Ⅰ5b類)	第2-b面	大河川	
12	14	38	龍泉窯系青磁碗	第2-b面	大河川	見込みに印字紋
12	14	39	龍泉窯系青磁稜花皿	第2-b面	大河川	
12	14	40	龍泉窯系青磁碗	第2-b面	大河川	
11	14	41	備前擂鉢	第2-b面	大河川	
11	14	42	陶器甕？	第2-b面	大河川	
13	14	43	土師質焙烙	第2-b面	大河川	
13	14	44	土師質焙烙	第2-b面	大河川	
13	14	45	土師質十能	第2-b面	大河川	
14	14	46	平瓦(メンコに再加工)	第2-b面	大河川	
14	14	47	平瓦(メンコに再加工)	第2-b面	大河川	
	14	48	波佐見窯系花蝶文碗	第2-b面	西側川	
12	14	49	景徳鎮窯系白磁端反皿	第2-b面	西側川	
	14	50	瓦器椀	第2-b面	西側川	
13	14	51	土師質火鉢？	第2-b面	西側川	
	14	52	土師質焙烙	第2-b面	西側川	
13	14	53	箕(沢瀉紋)	第2-b面	西側川	
	15	54	土師器皿	第2-b面	大河川	
	15	55	土師器皿	第2-b面	大河川	
	15	56	土師器皿	第2-b面	大河川	
	15	57	土師器皿	第2-b面	大河川	
14	15	58	土師器皿	第2-b面	大河川	
14	15	59	瓦器皿	第2-b面	大河川	
14	15	60	瓦器皿	第2-b面	大河川	
	15	61	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	62	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	63	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	64	瓦器椀	第2-b面	大河川	
14	15	65	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	66	瓦器椀	第2-b面	大河川	
14	15	67	瓦器椀	第2-b面	大河川	
14	15	68	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	69	瓦器椀	第2-b面	大河川	
14	15	70	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	71	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	72	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	73	瓦器椀	第2-b面	大河川	
14	15	74	瓦器椀	第2-b面	大河川	
14	15	75	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	15	76	瓦器椀	第2-b面	大河川	
	16	77	須恵質鉢	第2-b面	大河川	
13	16	78	瓦質擂鉢	第2-b面	大河川	
13	16	79	瓦質羽釜	第2-b面	大河川	
	16	80	土師質羽釜	第2-b面	大河川	
	16	81	瓦質甕	第2-b面	大河川	
	16	82	瓦質甕	第2-b面	大河川	
14	16	83	木製下駄	第2-b面	大河川	
15	16	84	砥石	第2-b面	大河川	砂岩
15	16	85	石臼	第2-b面	大河川	砂岩
	17	86	黒色土器A椀	第2-b面	大河川	
12	17	87	緑釉陶器碗	第2-b面	大河川	
	17	88	土師器椀	第2-b面	大河川	
	17	89	土師器皿？杯？	第2-b面	大河川	
	17	90	土師器杯B	第2-b面	大河川	
	17	91	土師器高杯	第2-b面	大河川	
	17	92	土師器壺？	第2-b面	大河川	
	17	93	土師器甕	第2-b面	大河川	
	17	94	土師器把手付甕	第2-b面	大河川	
	17	95	土師器台付皿？	第2-b面	大河川	
	17	96	土師器台付皿	第2-b面	大河川	
	17	97	土師器台付皿	第2-b面	大河川	
	17	98	土師器台付皿	第2-b面	大河川	
	17	99	須恵器杯蓋	第2-b面	大河川	
	17	100	須恵器杯蓋	第2-b面	大河川	
	17	101	須恵器杯	第2-b面	大河川	
	17	102	須恵器小皿	第2-b面	大河川	
	17	103	須恵器杯	第2-b面	大河川	
	17	104	須恵器壺	第2-b面	大河川	
	17	105	須恵器壺	第2-b面	大河川	
	17	106	須恵器小壺	第2-b面	大河川	
	17	107	須恵器小鉢？	第2-b面	大河川	
	17	108	須恵器壺	第2-b面	大河川	
	17	109	須恵器壺	第2-b面	大河川	
	17	110	須恵器壺	第2-b面	大河川	
	17	111	須恵器壺？	第2-b面	大河川	
	17	112	須恵器？壺	第2-b面	大河川	
	17	113	須恵器甕	第2-b面	大河川	
	17	114	須恵器大甕	第2-b面	大河川	
25	18	115	軒丸瓦(C7か新型式)	第2-b面	大河川	凸凹面布目、赤変
25	18	116	軒丸瓦(C型式)	第2-b面	大河川	
25	18	117	軒丸瓦(C型式)	第2-b面	大河川	
25	18	118	軒丸瓦(C9型式)	第2-b面	大河川	被熱？
25	18	119	軒平瓦	第2-b面	大河川	
25	18	120	軒平瓦(B2型式)	第2-b面	大河川	
25	18	121	軒平瓦	第2-b面	大河川	
	18	122	丸瓦	第2-b面	大河川	
	18	123	丸瓦	第2-b面	大河川	ヘラ記号
	18	124	丸瓦	第2-b面	大河川	
	18	125	鬼瓦？	第2-b面	大河川	
25	18	126	軒丸瓦(C型式)	第2-b面	西側川	新型式
25	18	127	軒平瓦(D型式)	第2-b面	西側川	
25	18	128	丸瓦	第2-b面	西側川	
	19	129	黒色土器A椀	第2-b面	包含層	
	19	130	黒色土器A椀	第2-b面	包含層	
	19	131	土師器皿	第2-b面	包含層	
	19	132	中国製双耳壺	第2-b面	包含層	
	19	133	瓦質火鉢	第2-b面	包含層	
	19	134	土師質羽釜	第2-b面	包含層	
15	19	135	青銅製円板	第2-b面	包含層	
16	21	136	瓦器椀	第3面	3井戸	
16	21	137	瓦器椀	第3面	3井戸	
16	21	138	瓦器椀	第3面	3井戸	

表4　（その5）出土遺物観察表②

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考
15	21	139	土師質羽釜	第3面	5溝	
15	24	140	瓦器皿	第3面	92井戸	
15	24	141	瓦器皿	第3面	92井戸	
	24	142	瓦器椀	第3面	92井戸	
15	24	143	瓦器椀	第3面	92井戸	
15	24	144	瓦器椀	第3面	92井戸	
	24	145	瓦器椀	第3面	92井戸	
	24	146	土師質羽釜	第3面	92井戸	
	24	147	土師質羽釜	第3面	92井戸	
16	24	148	土師質羽釜	第3面	92井戸	
	24	149	土師質羽釜	第3面	92井戸	
16	24	150	土師質羽釜	第3面	92井戸	
	24	151	土師質羽釜	第3面	92井戸	
16	24	152	土師質羽釜	第3面	92井戸	
	24	153	土師質羽釜	第3面	92井戸	
	24	154	土師質羽釜	第3面	92井戸	
16	24	155	土師質羽釜	第3面	92井戸	
16	25	156	須恵質鉢	第3面	92井戸	
	25	157	須恵質鉢	第3面	92井戸	
26	25	158	丸瓦	第3面	92井戸	
26	25	159	平瓦	第3面	92井戸	
16	34	160	土師器皿	第3面	建物1　7ピット	
	34	161	黒色土器A杯	第3面	建物　44ピット	
16	35	162	龍泉窯系青磁碗	第3面	包含層	見込に福の印字文
	35	163	備前擂鉢	第3面	包含層	
25	35	164	軒丸瓦C6型式？	第3面	包含層	
	43	165	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構301・321	
17	43	166	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構301	
17	43	167	土師器羽釜	第4面	（南側川内）遺構300	
	44	168	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	169	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
17	44	170	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	171	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	172	土師器椀	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	173	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
17	44	174	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
17	44	175	土師器椀？	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	176	土師器皿	第4面	（南側川内）遺構302	
17	44	177	土師器皿	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	178	土師器鉄鉢形鉢	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	179	土師器片口鉢	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	180	黒色土器A杯	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	181	須恵器杯蓋	第4面	（南側川内）遺構302	
17	44	182	須恵器杯	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	183	須恵器壺	第4面	（南側川内）遺構302	
17	44	184	須恵器三耳壺	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	185	須恵器平瓶	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	186	土師器壺	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	187	土師器羽釜	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	188	土師質甕	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	189	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構302	
18	44	190	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構302	「野政？」墨書
17	44	191	土師器把手付甕	第4面	（南側川内）遺構302	
	44	192	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構302	
17	45	193	須恵器大甕	第4面	（南側川内）遺構302	
17	45	194	須恵器甕	第4面	（南側川内）遺構302	
17	46	195	須恵器鉢	第4面	（南側川内）遺構303	
	46	196	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構306	
	46	197	土師器甕？	第4面	（南側川内）遺構307	
	46	198	須恵器甕	第4面	（南側川内）遺構307・332・314	
17	46	199	土師器杯？	第4面	（南側川内）遺構307	
	46	200	須恵器杯蓋	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	201	須恵器杯蓋	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	202	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	203	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	204	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	205	土師器把手付甕	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	206	木器（つけ木）	第4面	（南側川内）遺構308	
	46	207	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構312	
	46	208	土師器皿	第4面	（南側川内）遺構312	
	46	209	黒色土器A皿	第4面	（南側川内）遺構312	
	46	210	黒色土器A杯	第4面	（南側川内）遺構312	
17	46	211	黒色土器A杯	第4面	（南側川内）遺構312	
	46	212	須恵器平瓶	第4面	（南側川内）遺構312	
	46	213	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構312	
17	46	214	土師器把手付甕	第4面	（南側川内）遺構312	
	46	215	土師器羽釜	第4面	（南側川内）遺構312	
	47	216	須恵器長頸壺	第4面	（南側川内）遺構313	
	47	217	須恵器甕	第4面	（南側川内）遺構314	
	47	218	須恵器壺	第4面	（南側川内）遺構315	
17	47	219	土師器壺	第4面	（南側川内）遺構316	
	47	220	土師器杯	第4面	（南側川内）遺構316	
	47	221	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構317	
17	47	222	土師器羽釜	第4面	（南側川内）遺構318	
17	47	223	須恵器杯	第4面	（南側川内）遺構321	
17	47	224	須恵器杯	第4面	（南側川内）遺構321	
17	47	225	須恵器杯	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	226	須恵器杯	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	227	須恵器鉢？	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	228	土師器杯？	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	229	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	230	土師器甕	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	231	土師器甕？	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	232	土師器甕？	第4面	（南側川内）遺構321	
	47	233	土師器把手付甕	第4面	（南側川内）遺構321	
17	48	234	土師器杯	第4面	南側川内	
	48	235	土師器杯	第4面	南側川内	
	48	236	土師器杯	第4面	南側川内	
17	48	237	土師器杯	第4面	南側川内	
	48	238	土師器杯	第4面	南側川内	
	48	239	土師器皿	第4面	南側川内	
	48	240	土師器皿	第4面	南側川内	
	48	241	土師器皿	第4面	南側川内	
17	48	242	土師器皿	第4面	南側川内	
	48	243	土師器杯	第4面	南側川内	
	48	244	土師器皿	第4面	南側川内	
17	48	245	土師器皿	第4面	南側川内	
17	48	246	須恵器杯	第4面	南側川内	
	48	247	須恵器杯	第4面	南側川内	
17	48	248	須恵器蓋	第4面	南側川内	
	48	249	黒色土器B椀？	第4面	南側川内	
	48	250	黒色土器A杯	第4面	南側川内	
	48	251	土師器鉄鉢形鉢	第4面	南側川内	
18	48	252	土師器甕	第4面	南側川内	人面墨画
	48	253	土師器甕	第4面	南側川内	
	48	254	土師器甕	第4面	南側川内	
	48	255	土師器把手付甕	第4面	南側川内	
	48	256	土師器把手付甕	第4面	南側川内	
	48	257	須恵器蓋	第4面	南側川内	
	48	258	須恵器甕	第4面	南側川内	
	48	259	須恵器甕	第4面	南側川内	
26	49	260	丸瓦	第4面	（南側川内）遺構312	
26	49	261	平瓦	第4面	（南側川内）遺構312	
	49	262	平瓦	第4面	（南側川内）遺構312	
	52	263	須恵器杯	第4面	包含層	
	52	264	須恵器短頸壺	第4面	包含層	
	52	265	土師器皿	第4面	包含層	
18	52	266	土師器甕	第4面	包含層	人面墨画
	52	267	土師器甕	第4面	包含層	
	52	268	土師器甕	第4面	包含層	
	52	269	土師器甕	第4面	包含層	
	52	270	土師器甕	第4面	包含層	
	52	271	土師質羽釜	第4面	包含層	
20	52	272	土師器竈	第4面	包含層	
	52	273	土師器不明把手	第4面	包含層	
20	52	274	土師器竈	第4面	包含層	
	52	275	黒色土器A椀	第4面	包含層	
18	52	276	青銅製円板	第4面	包含層	
18	53	277	須恵器杯蓋	第4面	黒茶層（整地土）	
18	53	278	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	279	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	280	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
18	53	281	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	282	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	283	須恵器杯蓋	第4面	黒茶層（整地土）	
18	53	284	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	285	須恵器杯	第4面	黒茶層（整地土）	
18	53	286	須恵器蓋	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	287	須恵器すり鉢	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	288	須恵器蓋	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	289	須恵器蓋	第4面	黒茶層（整地土）	
	53	290	土師器杯	第4面	黒茶層（整地土）	

表5　（その5）出土遺物観察表③

図版	図	遺物番号	器　種	遺構面	遺構・層名	備　考
	53	291	土師器製塩土器	第4面	黒茶層(整地土)	
	53	292	土師器甕	第4面	黒茶層(整地土)	
	53	293	土師器甕	第4面	黒茶層(整地土)	
	53	294	黒色土器A盤？	第4面	黒茶層(整地土)	
	53	295	灰釉陶器壺	第4面	黒茶層(整地土)	
18	53	296	土錘	第4面	黒茶層(整地土)	
19	56	297	須恵器杯蓋	第5面	322溝	
19	56	298	須恵器杯	第5面	322溝	
19	56	299	須恵器壺	第5面	322溝	
19	56	300	須恵器蓋	第5面	322溝	
20	56	301	砥石	第5面	322溝	石英安山岩？
	56	302	土師器杯	第5面	遺構325	
	56	303	須恵器壺	第5面	遺構325	
	56	304	土師器杯	第5面	329溝	
	56	305	須恵器杯	第5面	遺構330	
	56	306	須恵器杯蓋	第5面	332溝	
	56	307	須恵器蓋	第5面	332溝	
	56	308	須恵器杯蓋	第5面	335溝	
	56	309	土師器杯	第5面	335溝	
	56	310	土師器皿	第5面	335溝	
	56	311	土師器皿	第5面	335溝	
	56	312	土師器甕	第5面	335溝	
	56	313	須恵器杯蓋	第5面	399溝	ヘラ記号
	56	314	須恵器杯蓋	第5面	399溝	
20	56	315	須恵器瓶	第5面	399溝	
	56	316	土師器甕	第5面	399溝	
	56	317	土師器皿	第5面	380溝	
	56	318	土師器杯	第5面	380溝	
	56	319	土師器皿	第5面	413溝	
	56	320	土師器杯？	第5面	412溝	
	56	321	須恵器壺	第5面	327溝	
	56	322	須恵器杯蓋	第5面	367溝	
	56	323	須恵器杯	第5面	367溝	
	56	324	土師器甕	第5面	367溝	
20	56	325	須恵器杯	第5面	402隅丸土坑	
	56	326	須恵器鉢	第5面	433不定形土坑	
	56	327	土師器甕	第5面	433不定形土坑	
	56	328	須恵器杯蓋	第5面	363土坑	
20	56	329	須恵器杯蓋	第5面	363土坑	
	56	330	須恵器杯	第5面	363土坑	
	56	331	須恵器高杯	第5面	363土坑	
	56	332	須恵器壺	第5面	363土坑	
	56	333	須恵器長頸壺	第5面	363土坑	
	56	334	土師器甕	第5面	365土坑	
	60	335	須恵器長頸壺	第5面	337井戸	
19	60	336	土師器把手付甕	第5面	157溝	
19	60	337	土師器甕	第5面	157溝	
19	60	338	須恵器杯	第5面	157溝	
	60	339	須恵器杯	第5面	157溝	
19	60	340	須恵器杯	第5面	157溝	
	60	341	土師器高杯	第5面	158溝	
	60	342	土師器甕	第5面	158溝	
	60	343	土師器皿	第5面	159溝	
	60	344	黒色土器A椀	第5面	159溝	
19	60	345	土師器蓋	第5面	160溝	
	60	346	土師器甕	第5面	160溝	
19	60	347	土師器鉢？	第5面	160溝	
19	60	348	須恵器甕	第5面	161溝	
	63	349	須恵器杯蓋	第6面	竪穴住居内	
19	63	350	須恵器杯蓋	第6面	竪穴住居内	
	63	351	須恵器壺	第6面	竪穴住居内	
	63	352	須恵器皿	第6面	竪穴住居内	
	63	353	土師器甕	第6面	竪穴住居内	
19	63	354	土師器甕	第6面	竪穴住居内	
	64	355	土師器杯	第6面		
	64	356	土師器杯蓋	第6面		
	64	357	土師器高杯	第5面	包含層	
	64	358	土師器皿	第5・6面	包含層	
	64	359	須恵器杯	第5面	包含層	
	64	360	須恵器杯	第5・6面	包含層	
	64	361	須恵器杯	第5面	包含層	
	64	362	須恵器壺	第6面		
20	64	363	須恵器すり鉢	第5・6面	包含層	
21	65	364	凹基無茎式石鏃	第5面	包含層	サヌカイト 0.33g

図版	図	遺物番号	器　種	遺構面	遺構・層名	備　考
21	65	365	凹基無茎式石鏃	第2-b面	大河川	サヌカイト 0.52g
21	65	366	凹基無茎式石鏃	第2-b面	大河川	サヌカイト 0.58g
21	65	367	凹基無茎式石鏃（石錐）	第2-b面	大河川	サヌカイト 1.15g
21	65	368	石鏃未成品	第1面	包含層	サヌカイト 2.92g
21	65	369	石鏃未成品	第4面	南側川内	サヌカイト 7.93g
21	65	370	剥片	第2-b面	大河川	サヌカイト 2.12g
21	65	371	横長剥片	第5面	369溝	サヌカイト 3.69g
21	65	372	横長剥片	第1面	包含層	サヌカイト 2.91g
21	65	373	剥片	第5面	160溝	サヌカイト 6.19g
21	65	374	二次加工のある剥片	第5面	399溝（遺構365）	サヌカイト 7.80g
22	66	375	弥生後期壺	第2面	包含層	
22	66	376	弥生中期壺	第2-b面	大河川	
22	66	377	弥生中期壺	第4面	黒茶層(整地土)	
	66	378	弥生後期甕	第4面	南側川内	
	66	379	弥生後期甕？	第4面	黒茶層(整地土)	
	66	380	弥生後期甕	第4面	黒茶層(整地土)	
22	66	381	弥生後期壺か甕	第4面	黒茶層(整地土)	
22	66	382	弥生後期壺？	第5面	363土坑	
	66	383	弥生後期甕	第4面	包含層	
	66	384	弥生後期壺	第5・6面	包含層	
22	66	385	弥生後期甕	第6面	竪穴住居内	
	66	386	弥生後期壺	第2-b面	大河川	
22	66	387	弥生中期高杯	第3面	建物9　146ピット	
	66	388	弥生中期鉢？	第4面	（南側川内）遺構319	
	66	389	弥生中期不明	第2-b面	大河川	
22	66	390	弥生中期壺	第4面	黒茶層(整地土)	
	66	391	弥生中期不明	第5面	包含層	
22	66	392	弥生中期甕	第4面	黒茶層(整地土)	
	66	393	弥生中期甕	第4面	黒茶層(整地土)	
22	66	394	縄文土器	第3面	92井戸	
22	66	395	縄文土器	第4面	（南側川内）遺構308	
22	66	396	縄文土器	第4面	南側川内	
23	148	397	埴輪（靫）	第6面		
23	148	398	埴輪（靫）	第6面		
23	148	399	埴輪（盾）	第2-b面	大河川	
23	148	400	埴輪（盾）	第2-b面	大河川	
23	148	401	器材埴輪？	第2-b面	大河川	
23	148	402	土師質形象埴輪？	第2-b面	大河川	
24	149	403	円筒埴輪	第4面	（南側川内）遺構308・321	
24	149	404	円筒埴輪	第4面	（南側川内）遺構308	
24	149	405	円筒埴輪	第4面	（南側川内）遺構308・315・321・南側川内	
	149	406	円筒埴輪	第4面	（南側川内）遺構308	
24	149	407	円筒埴輪	第6面		
	149	408	円筒埴輪	第4面	（南側川内）遺構308	
24	149	409	円筒埴輪	第4面	南側川内	
24	149	410	円筒埴輪	第2面	包含層	
24	149	411	円筒埴輪	第2-b面	大河川	
24	149	412	円筒埴輪	第5面	335溝	
24	149	413	円筒埴輪		上層包含層	
24	149	414	円筒埴輪	第2-b面	大河川	
24	149	415	円筒埴輪	第5面	160溝	
24	149	416	円筒埴輪	第4面	（南側川内）遺構308	
24	149	417	円筒埴輪	第2-b面	包含層	
24	149	418	円筒埴輪	第4面	包含層	
24	149	419	円筒埴輪	第4面	黒茶層(整地土)	
	149	420	円筒埴輪	第2-b面	包含層	
23	150	421	朝顔形埴輪	第4面	南側川内	
11		422	景徳鎮窯系鉄釉天目茶碗	第2-b面	大河川	
11		423	唐津窯系刷毛目片口鉢	第2-b面	大河川	
11		424	美濃窯系鉄釉皿	第2-b面	大河川	
11		425	備前擂鉢	第2-b面	大河川	
13		426	煙管	第2-b面	大河川	
15		427	碁石（黒）	第2-b面	大河川	輝石安山岩B
15		428	碁石（白）	第2-b面	大河川	白雲母流紋岩
15		429	温石	第2-b面	大河川	紅柱石ホルンフェルス
15		430	砥石?	第2-b面	大河川	砂岩、煤付着
15		431	土師質蛸壺	第2-b面	大河川	

表6　（その5）出土遺物観察表④

図版	図	遺物番号	器種	遺構面	遺構・層名	備考
15		432	須恵器蛸壺	第1面	包含層	
15		433	土人形	第2-b面	包含層	
15		434	不明骨角製品	第2-b面	包含層	
16		435	砥石？	第3面	92井戸	砂岩？、煤付着
16		436	砥石？	第3面	92井戸	流紋岩A、煤付着
16		437	砥石？	第3面	92井戸	流紋岩？、煤付着
18		438	製塩土器	第4面	南側川内	
18		439	製塩土器	第4面	黒茶層（整地土）	
18		440	製塩土器	第4面	包含層	
19		441	須恵器鉄鉢型鉢	第4面	（南側川内）遺構302	
19		442	土師器把手付椀？	第5面	327溝	
19		443	土師器甕	第6面	竪穴住居内	
19		444	礫子	第6面	竪穴住居内	焼、8個
20		445	土師器不明把手	第6面	包含層	
20		446	土師器竈	第5面	包含層	
20		447	土師器竈	第6面		
20		448	土師器竈	第4面	包含層	
20		449	土師器竈	第4面	包含層	
21		450	スクレーパー	第5面	遺構391	サヌカイト 5.10g
21		451	楔形石器	第2面	包含層	サヌカイト 5.15g
21		452	楔形石器	第4面	黒茶層（整地土）	サヌカイト 27.46g
21		453	楔形石器	第4面	南側川内	サヌカイト 74.32g
22		454	弥生中期高杯？	第5面	368溝	穿孔1
22		455	弥生中期高杯	第2-b面	大河川	
26		456	鉱滓	第2-b面	大河川	
26		457	鉱滓	第2-b面	大河川	
26		458	鞴羽口	第3面以下		
26		459	鞴羽口	第4面	黒茶層（整地土）	
26		460	焼土塊	第2-b面	大河川	鋳型？
26		461	焼土塊不明	第2-b面	大河川	
26		462	焼土塊	第2面	包含層	
26		463	焼土塊	第2-b面	大河川	
26		464	焼土塊	第1面	包含層	
26		465	焼土塊	第1面	包含層	鋳型？

第２節　（その６）調査成果

１　調査の方法

（その６）調査区の調査は、平成12年度に実施された大和川の河川改修事業に先立つ発掘調査で、大阪市東住吉区矢田７丁目地内に位置する。調査面積は約2500㎡である。

基本的な調査の方法については、第３章　調査の方法　で述べている通りである。

発掘調査は、まず表土・盛土・大和川の洪水砂層を重機によって除去する作業を行い、掘削終了後、逐次人力掘削に転換し、下層に堆積している包含層や遺構の調査を行った。

調査後は、掘削した流用土で設計深度まで埋め戻し、大和川河川敷内用地として復旧した。

発掘調査で検出した遺構面の内、特に必要と認められる遺構面については、ヘリコプターを用いた写真測量を行い、遺構平面図を作成した。本調査区で行った写真測量は、第３－a面と最終面（第４・５・６面相当）を対象としている。

（その６）調査区における遺構面の名称は、基本的には検出順に上層から番号を与えることとしたが、これまでの大和川今池遺跡の発掘調査成果と、層序や検出遺構・遺物の相対時期が類似するものについては、なるべくこれまでの調査で用いた遺構面番号に準ずるものとした。その中で検出状況が細分される場合は、アルファベット（小文字）の枝番号を遺構面番号の後に付与し対応関係を示すものとした。

（その６）調査区では、第２－b面、第３－a面、第４－a面がそれに当たる。

このほか、必要に応じて個別名称を用いたものや、検出遺構面と土層層順に相違が見られるものについては、本文中で対応関係を示すものとする。また、これまでの調査で検出した遺構面との相対関係についても、その都度明記するものとする。遺構名については、原則として調査時に付けたものを本文中でも使用している。その際、アラビア数字の番号の後ろに、溝や土坑と言ったその遺構の属性を表す言葉を付記している。

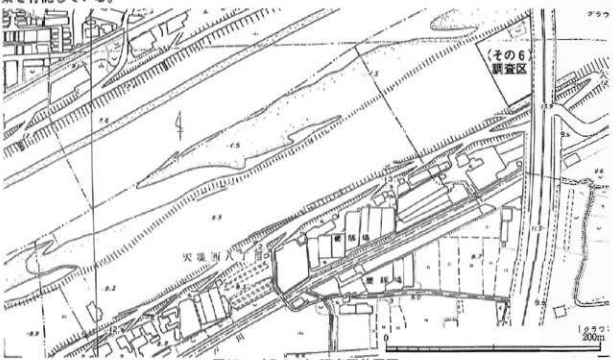


図67　（その６）調査区位置図

2　基本層序（図68）

基本層序は、既往の大和川今池遺跡の調査と同様に、調査区の南側に位置する大和川の堤防沿いに設けた側溝を利用して、層序の観察用に記録・実測したものである。また、補助的な層序観察用として調査区の東側（大和川の上流側）の壁面を記録・実測した。必要に応じて記載するものとする。

既往の調査区を含め、連続した層序を明確にするため、南側の土層図全体を掲載するよう努めた。

当地区での土層堆積状況として、おおむね10層に大別することができた。図示した土層は、調査区全域で普遍的に同一土層が堆積しているのではなく、洪水・流水や後世の削平などを受ける場合や地形に規制されたりする場合も多く見受けられた。土層断面図に表示されなかった層や、特に必要とするものなどについては、基本層序との対応関係を補足する。以下、各層の概要を記述する。

第０層

現表土、整地層と撹乱及び、大和川の洪水砂、流水等による堆積土層である。主に、機械で掘削を行った層である。現地盤下では、現代の撹乱や、帯状に広がる整地層が遺構面直上まで及んでいる。このような撹乱を含む堆積層は約70cm以上を測る。

第１層（１）

現代の整地層および大和川の洪水砂層下に堆積する、淡黄色砂混じりシルトを主体とする土層で、大和川の洪水砂層が土壌化した近・現代の耕作層である。下層には鉄分沈着が顕著に見られる。層厚は10cm以上を測る。（その５）調査区の第１層に対応する層である。調査区の全域で厚く堆積しているが、調査区北側および東側では、現在の大和川の洪水砂によって削平されている。大和川の付替え(1704年)以降に形成された層である。

この層を掘削した下面が、第１面に相当し、大和川に直交する方向を示す近・現在の耕作溝跡を検出した。陶磁器、瓦類など、近世・近代の遺物を含む。

第２層（２～５）

黄褐色砂混じり粘質シルトと灰黄色細砂を主体とする層で、細砂と粘質シルト層が互層を成して堆積する層である。シルト層の下層には鉄分沈着が顕著に見られる。大和川付替え以前に形成された層である。この層は単一期間の堆積ではなく、幾度かの洪水や流水と洪水砂の堆積を繰り返した結果、形成されたものと考えられる。

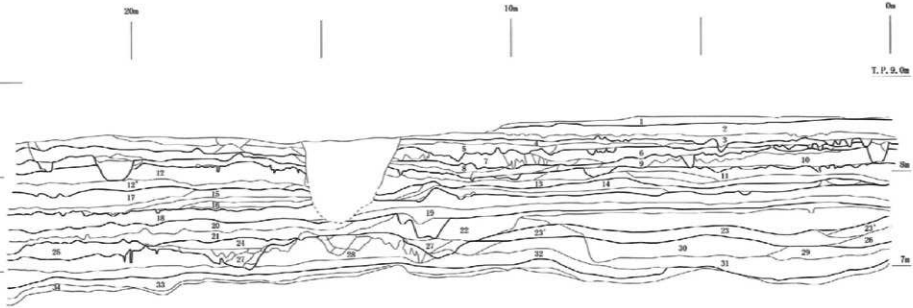
地形的には、調査区南側から東側にむけて低くなり、徐々に厚く堆積する傾向が見られた。第２層はさらに細分することができる。

２－１層（２、３）は灰黄色細砂と明黄褐色砂混じり粘質シルトの互層である。層厚は約15～20cmを測る。主に調査区の南側から西側に堆積しており、この下面は第２面に相当する。正方位に則った耕作溝跡や井戸などを検出した。

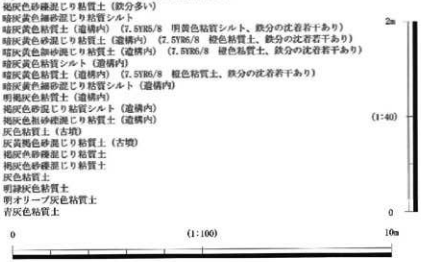
２－２層（４）は黄褐色砂混じりシルトである。層厚は約10cmを測る。主に調査区の南側に堆積しており、東側では機械掘削終了時に露出していた場所も見られた。

２－３層（５）は暗灰黄色砂混じりシルトで、層厚は約５～20cmを測る。主に調査区の東側に堆積しており、その下面は第２－ｂ面に相当する。東西方向に流れる数条の溝跡と井戸、不定形土坑などを検出した。数多くの国産・輸入陶磁器、瓦類、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器など、中世から近世の遺物を含む。

図68　調査区南壁断面図



1　2.5Y8/3　淡黄色砂混じりシルト（洪水砂）
2　2.5Y6/2　灰黄色細砂（洪水砂）
3　2.5Y7/6　明黄褐色砂混じり粘質シルト
4　2.5Y5/3　黄褐色砂混じりシルト
5　2.5Y5/2　暗灰黄色砂混じりシルト
6　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土
7　2.5Y4/4　オリーブ褐色砂混じりシルト
8　5Y7/2　　灰白色細砂
9　2.5Y5/2　暗灰黄色砂混じりシルト
10 5Y5/2　　灰オリーブ色シルト（ラミナあり）
11 7.5Y4/1　灰色シルト（ラミナあり・鉄分沈着あり）
12 5Y5/2　　灰オリーブ色シルト（ラミナあり・鉄分沈着あり）
12' 5Y6/2　灰オリーブ色粘質土（鉄分沈着あり）
13 5Y5/2　　灰オリーブ色シルト（ラミナあり）
14 2.5Y7/2　灰黄色砂質シルト（7.5Y5/6　明褐色砂質シルト、鉄分沈着あり）
15 10YR7/2　にぶい黄橙色砂質シルト（10YR5/8 黄褐色砂）
16 10YR7/2　にぶい黄橙色細砂（鉄分の沈着若干あり）
17 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（10YR4/6　褐色粘質シルト）
18 2.5Y7/2　灰黄色砂質シルト（7.5Y5/6　明褐色砂質シルト、鉄分の沈着若干あり）
19 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（10YR4/6 褐色粘質シルト）
20 10YR4/2　灰黄褐色砂混じり粘質土
　10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト
21 7.5YR4/2　灰褐色粘質土（10YR4/6　褐色粘質シルト、鉄分の沈着若干あり）
　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト
22 10YR4/2　灰黄褐色砂礫混じり粘質土
23 10YR7/2　にぶい黄橙色細砂（鉄分の沈着若干あり）
23' 10YR5/3　にぶい黄褐色細砂（粗砂礫混じる、鉄分の沈着若干あり）
24 10YR5/2　灰黄褐色砂礫土（細砂礫混じる（鉄分の沈着若干あり）
25 10YR5/1　褐灰色砂礫混じり粘質土（鉄分多い）
26 2.5Y5/2　暗灰黄色細砂混じり粘質シルト
27 2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土（遺構内）（7.5YR5/8　明黄色粘質シルト、鉄分の沈着若干あり）
　2.5YR5/2　暗灰黄色砂混じり粘質土（遺構内）（2.5YR6/8　橙色粘質土、鉄分の沈着若干あり）
　2.5Y5/2　暗灰黄色細砂混じり粘質土（遺構内）（7.5YR6/8　橙色粘質土、鉄分の沈着若干あり）
　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト（遺構内）
　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土（遺構内）（7.5YR6/8　橙色粘質土、鉄分の沈着若干あり）
　2.5Y5/2　暗灰黄色細砂混じり粘質シルト（遺構内）
　7.5Y7/1　明褐灰色粘質土（遺構内）
　10YR5/1　褐灰色砂混じり粘質シルト（遺構内）
　7.5Y5/2　褐灰色粗砂礫混じり粘質土（遺構内）
28 5Y6/1　　灰色粘質土（古墳）
　10YR4/2　灰黄褐色砂混じり粘質土（古墳）
29 10YR5/1　褐灰色砂礫混じり粘質土
30 7.5YR5/3　褐灰色砂礫混じり粘質土
31 5Y6/1　　灰色粘質土
32 7.5GY7/1　明緑灰色粘質土
33 5GY7/1　　明オリーブ灰色粘質土
34 5BG6/1　　青灰色粘質土



第4章　第2節（その6）調査成果

第3層（6～10）

暗黄褐砂混じりシルトと灰オリーブ色シルトを主体とする層で、洪水砂層が土壌化し、鉄分沈着が見られるシルト層である。地形的には、調査区の南側から西側にむけて低くなる傾向が見られる。

第3層はさらに細分することができる。

3－1層（6、7）は暗灰黄色砂質土とオリーブ褐砂混じりシルトである。（5）暗灰黄色砂質土は主に調査区の西側から南側で見られる。（7）オリーブ褐砂混じりシルトで、調査区の東側で見られる。層厚は約5～15cmを測る。その下面では、第3－a面に相当する正方位に則った方形区画溝と数石建物跡、自然流路跡などを検出した。

3－2層（8、9、10）は、調査区の南側では（8）灰白色細砂を主とする洪水砂層が見られる。調査区の東側に向けては（9）暗灰黄色砂混じりシルトを主とする洪水砂が土壌化した堆積層が見られる。（10）灰オリーブ色シルトは調査区の西側に向けて厚く堆積している。層厚は8～20cmを測る。その下面は第3面に相当する多数のピットと掘立柱建物、井戸、土坑、溝などを検出した。

瓦類、須恵質すり鉢、瓦器椀、土師器皿、土師質羽釜、鋳造関連遺物など、中世を主とする遺物を含む。

第4層（11～19）

灰オリーブ色シルトおよび砂質土が互層を成す、洪水・流水等による流水堆積層で、冠水期と渇水期があったものと思われる。下層は不安定で踏み込み跡が幾重にも重なっている。同層は調査区全域で見られるが、特に南側で厚く堆積している。第4層さらに3層に細分することができる。

4－1層（11～13）は下層にラミナが顕著に見られる灰色および灰オリーブシルトが互層を成す洪水・流水等による流水堆積層である。下層に（12′）灰オリーブ色粘質土が沈殿堆積しており、踏込み跡が顕著に見られる。層厚は10～25cmを測る。

4－2層（14～17）は灰黄色砂質シルトとにぶい黄橙色細砂などが複雑に互層を成す流水堆積層である。幾度となく洪水、流水に見舞われ、洪水砂が一気に堆積した様相が見られる。下層には鉄分沈着が見られる。調査区の東側で厚く堆積する。層厚は2～25cmを測る。その下面は第4－a面に相当し、北側川、畦畔、不定形土坑、溝状土坑やわだち跡、足跡などを検出した。

4－3層（18、19）は灰黄色砂質シルトの下層に灰黄褐色粘質シルトが堆積する沈殿堆積層である。下層ではラミナが顕著に見られる砂層、シルト層が堆積する水成堆積層の様相が見られる。層境では踏込み跡やわだち跡などが見られ、洪水などによる冠水と渇水を繰り返した湿地状態であったことがうかがえる。層厚は10～20cmを測る。その下面は第4面に相当し、南側川やピットなどを検出した。

瓦器椀、土師器皿・杯、黒色土器椀、須恵器甕・杯身・杯蓋・平瓶、土師器把手付甕・羽釜・竈など、古代の遺物（主に奈良・平安時代）を含む。

第5層（20～22）

灰黄褐色粘質シルトおよび粘質土を主体とする層である。調査区の西側中央部に位置する微高地上では黒褐色粘質シルトを主とする、いわゆる「黒茶層」として検出した土層である。おおむね、地形の凹面を補充したりするために搬入されてきた整地土を含む土層である。調査区西側では、上層に砂層が薄く覆っている部分も見られる。層厚は10～30cmを測る。その下面は第5面に相当し、縦横無尽に流れる自然流路跡、不定形土坑、ピットなどを検出した。

土師器杯・甕、須恵器杯蓋・壺・甕など、古墳時代末頃の遺物を含む。

第6層（23～28）

にぶい黄橙色から暗灰黄色砂礫混じり粘質シルトを主体とする細砂、砂礫土を含む堆積層である。調査区西側では土中に細砂から中砂が混じるが、東側に向かうにつれて中砂から砂礫が混じる傾向が見られる。狭い範囲で土質の変化する傾向が見られることから、地形の凹面を補充したりするために搬入されてきた整地土であると考えられる。層厚は5～20cmを測る。その下面は第6面に相当し、小古墳と思われる遺構を検出した。

土師器甕、須恵器杯蓋・甕、埴輪など、古墳時代の遺物を含む。

第7層（29～32）

褐灰色砂礫混じり粘質土を主体とする層で、調査区全域で見られる堆積層である。東側に向けて徐々に低くなる傾向が見られる。第7層は土質の違いから細分することができる。

7－1層（29～31）は褐灰色砂礫混じり粘質土で堅く締まった地山層である。調査区の西側および北側で主に厚く堆積している。堅く締まっており、生活面の地山層に相当する。層厚は5～20cmを測る。上層で石製品、弥生土器片、須恵器、埴輪片など若干の遺物が見られた。

7－2層（32）は明緑灰色粘質土で、7－1層の下層に堆積する土層で、土層中に炭化物や植物遺体を含む無遺物層である。堅く締まっており、層厚は5～20cmを測る。

第8層（33）

下層確認トレンチ掘削時に確認されたもので、明オリーブ灰色粘質土を主とする土層である。調査区西側のさらに下層では黄灰色粘質土および灰白色礫混じり粘質土の混濁層が見られたが、土層の層境は不明瞭である。土層中からは遺物は確認されなかった。堅く締まっており、層厚は10cm以上を測る。

第9層（34）

下層確認トレンチ掘削時に確認されたもので、青灰色粘質土を主とする土層である。調査区の東側にむけてやや厚く堆積する傾向が見られる。土層中からは遺物は確認されなかった。層厚は10cm以上を測る。

（その6）調査区で確認した基本的な土層は、以上の10層で、第1層から第7層までが人力掘削の対象となったものである。

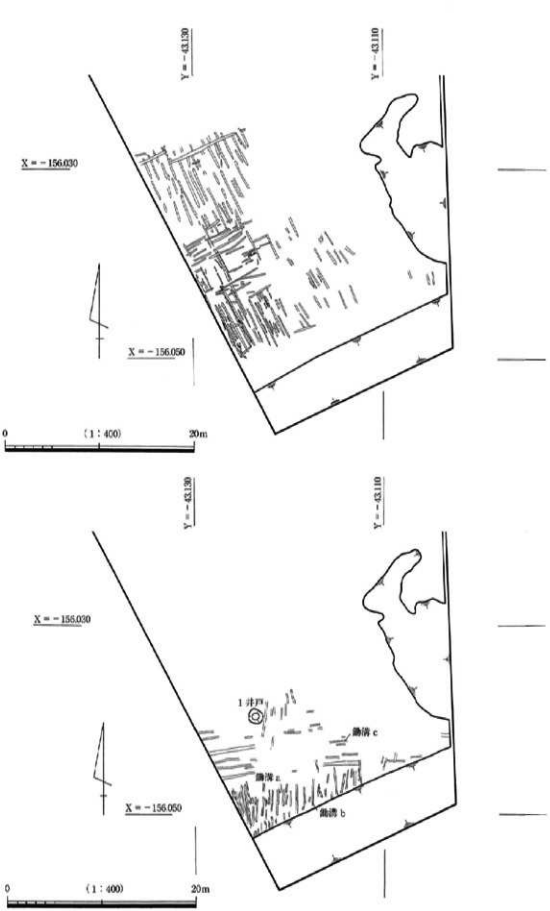


図69　第1面（上）・第2面（下）

３　調査成果

（その６）調査区の調査では、表土・盛土・撹乱等を機械掘削した後、第１層から第７層までを人力で掘削した。遺構精査を行った面は、第１面（第１層下面）、第２面（２－１層下面）、第２－b面（２－３層下面）、第３－a面（３－１層下面）、第３面（３－２層下面）、第４－a面（４－３層下面）、第４面（４－３層下面）、第５面（第５層下面）、第６面（第６層下面）の計９面である。ただし、第４面～第６面は同一面で確認したものである。

以下、各面毎に検出した遺構と出土遺物について記述する。

第１面（図69）

機械掘削終了後、盛土および大和川の洪水砂層である第１層の淡黄色砂混じりシルト層を除去すると、調査区の南西側を中心として、大和川にほぼ平行ないし直交する耕作溝跡を検出した。第１面は大部分が大和川の洪水砂や撹乱による削平を受けており、顕著な遺構は確認できなかった。第１面は大和川の洪水砂が土壌化した土層上に形成された耕作面である。検出面は、T.P.8.35m前後を測る。

検出した耕作溝跡は、幾時期かのものが重なっているが、いずれも大和川にほぼ平行ないし直交方向を示すことから、大和川付替え（1704年）以降の近世・近代の耕作面であると思われる。第１面および第１層包含層からは陶磁器片・瓦類などが出土した。

鋤溝（図69）

第１面で検出した鋤溝跡は、大和川にほぼ平行ないし直交方向を示すものである。鋤溝跡の検出幅は10～20cm、深さが２～５cmを測る。検出長は５～６m前後が主を成す。鋤溝跡は規則正しく約0.7m間隔で掘られている。埋土は、大和川の洪水砂である明黄褐色系砂土である。ベース層は、大和川の洪水砂が土壌化したにぶい黄褐色粘質シルトで、鉄分沈着が見られた。幾度となく洪水や流水に見舞われながらも、繰り返し耕作を営んでいたものと思われる。鋤溝跡内から遺物は出土しなかった。

第１面で検出した鋤溝跡については、（その５）調査の項でも述べたが、調査区域周辺が昭和40年代頃まで耕作地として使用されていたことが知られており、古くから当時が耕作地であったことがうかがえる。

第２面（図69・70　図版27）

機械掘削後、大和川の洪水砂である第１層淡黄色砂混じりシルト層および第２－１層明黄褐色砂混じ

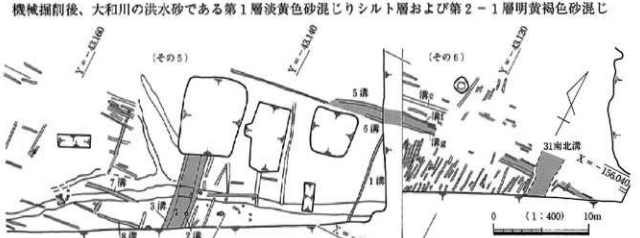


図70　耕作土地区画検出状況図

り粘質シルト層を除去すると、調査区南西側の第１面下層から大和川の流れの方向に規制されない南北方向を示す耕作溝跡、溝跡、井戸などを検出した。第２面は、調査区の大部分が洪水・流水等で削平されており、その他の地区では遺構は確認できなかった。遺構が残っていた調査区南西部は地形的にわずかに高くなっている部分に当たる。検出面は、T.P.8.30m前後を測る。

第２面で検出した耕作溝跡は、第１面で検出した耕作溝跡とは方向が異なり、ほぼ南北方向を示していることから、大和川付替え（1704年）以前の条里に則った耕作面であると思われる。また、遺構の検出状況から、（その６）調査区における第２面は、（その５）調査区の第２面および、第２－ｂ面に相当するものと思われる。

第２面および第２面包含層からは、国産・輸入陶磁器、瓦類、土師質土器、瓦質土器などが出土した。

鋤溝a～c（図69～71　図版27）

鋤溝a、bは大和川に直交する南北方向、銭溝cは大和川に平行する東西方向を示す鋤溝跡で、検出した耕作溝跡から無作為に摘出したものである。

鋤溝跡の検出幅は、いずれも約10～20cm、深さは約２～５cmを測る。検出長は約４～５mである。埋土は、大和川の洪水砂であるにぶい黄橙色粘質シルトで下層に鉄分沈着が見られる。ベース層は、洪水砂等が土壌化したにぶい黄褐色粘質シルトである。埋土内から瓦器椀片、土師質小皿片などの細片が

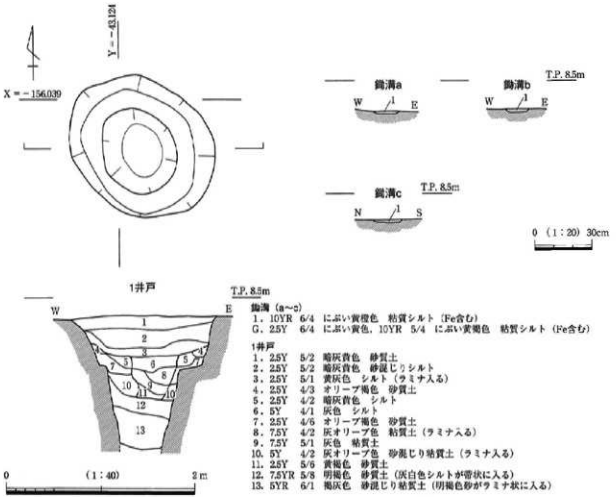


図71　１井戸・鋤溝a・b・c断面図

出土した。これらの遺物は、下層土からの混入と思われる。

鍬溝跡の中にはやや幅の広い鋤溝跡が約10m間隔で見られた。また、鋤溝跡は東西方向に伸びる溝gを端として、南北方向に鋤溝が伸びている。この東西方向に伸びる溝跡は、耕作地を区画する溝と考えられる。方位（条里）に則った土地区画を形成し、耕作していたことがうかがえる。

溝e、f、g（図70　図版27）

耕作溝を分断するように東西方向に伸びる溝が数条見られた。これらの溝は寸断されているが、調査区の東西方向に平行して伸びている様相が確認された。

（その5）調査区第2－b面で検出した5溝の延伸が溝f、6溝の延伸が溝gに相当する。また、溝fの北側で東西方向に伸びる溝eを検出した。第2－b面で検出した7・9溝に続くものと考えられる。

溝gは、検出幅約40cm、深さ約20cmを測る。検出長は調査区の西側から約4m、途中途切れる部分もあるがその延長は約20mにおよぶ。溝fは、検出幅約20～30cm、深さ約20cmを測る。検出長は約7mであるが、東側に延長部と思われる溝跡が続いている。

溝eは、検出幅約30m、深さは約20cmを測る。検出長は約5mであるが、調査区東端部に延長部と思われる溝跡が見られる。これらの溝の埋土は、暗褐色粘質シルトで鉄分沈着が見られる。ベース層はにぶい黄褐色粘質シルトである。溝内から遺物の出土はなかった。

溝fと溝gの間隔は約1.5m、溝fと溝eの間隔は約1.5mを測る。また、溝gと溝eの間隔は約3.0mである。

耕作土地区画（図70）

（その5）調査区で検出した東西方向の溝である5・6溝の延長部分が(その6）調査区で検出した溝f・gに相当する。これら2条の溝の延長は、約40m以上におよぶ。また、5・6溝と7・8溝の間隔は約19mを測った。

（その5）調査区で検出した南北方向の溝である、1溝、2・3溝、さらに1溝を挟んで東側に等距離倍すると、本調査の第3－a面で方形区画溝（遺構30）上層遺構として捉えた31南北溝に当たることがわかった。この31南北溝は、検出幅は約5mであるが、両端に個溝（12・21溝）が見られるものである。上面は削平されていたが、2・3溝と同様に畦畔にともなう個溝に相当するものと思われる。南北方向の延長については攪乱や削平が著しく明確にはできなかった。

1溝、2・3溝、31南北溝（12・21溝）はそれぞれ等間隔で、約18mを測る。

（その5）調査区の第2－b面で検出した2・3溝、5・6溝、7・8溝の項においても記載したが、正方位からやや西に約8°西に傾く2条の南北溝と直交して東西方向に伸びる2条の溝によってほぼ方形の土地区画を形成していることがわかったが、今回の検出によってこの区画がさらに広がり、広域にわたって正方位に則った規格的な耕作土地区画のもとに耕作が営まれていたことを示している。

大和川の河川敷内の用地では大和川の付替え以降は、大和川の流れに直交あるいは平行する方向に溝が伸びているが、大和川の付替え以前は、周辺旭域で今年まで残っていた正方位に則った土地区画であったことも確認されている。これまでの大和川今池遺跡の調査の中でも正方位のプランに相当する溝が数多く見られたが、広域にわたって基本的な正方位を示す条里に則った土地区画地割りが採用され、遠絹と今年まで引き継がれてきたことを裏付けるものといえる。

1井戸（図69・71　図版27）

調査区南側中央部で検出した、やや不整円形状を示す井戸である。

井戸の検出径は、直径が約1.5m、深さが約1.35mを測る。断面形は、上部約55cmがすり鉢状であるが下部は段を成して狭くなり、直径約75cmの円柱状となる。おそらく下層に曲げ物などがあったものと思われる。埋土は、上層が暗灰黄色および黄灰色砂質土とシルトである。中層は暗灰黄色および灰色、灰オリーブ色の粘質土とシルトのブロック土が互層を成す。下層は明褐色および褐灰色砂質土で湧水層となっている。

おそらく井戸の廃絶後、人為的に埋められ、さらに洪水砂などにより自然埋没したものと考えられる。

埋土内からは、須恵質すり鉢、土師質羽釜、瓦器椀片、土師質皿片などが出土した。また、窯壁と思われる焼けた土塊が出土している。おおむね中世のものが主を成す。

中には奈良時代から平安時代のものと思われる遺物が含まていたが、最下層の砂層からの出土であることから、湧水層である砂層内に含まれる遺物であると考えられる。最下層の砂層は第4面における遺構500（河川跡）に相当する。

1井戸出土遺物（図72）

奈良時代から中世までの遺物が少量出土している。

1・2は第1期第2段階の11世紀末葉から12世紀前半と思われる須恵質鉢、3は平城宮III～Vの時期にあたると思われる土師器羽釜であり、胎土中には角閃石を含む。

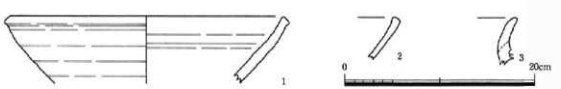


図72　1井戸出土遺物

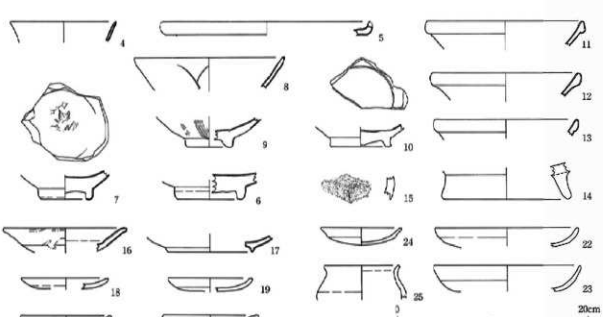


図73　第1面・第2面包含層出土遺物

第1面・第2面包含層出土遺物（図73　図版35）

第1面包含層からは近世から古墳時代までの遺物と、雉の骨1点が出土している。ここでは主に中世の遺物を図化した。

4は17世紀後半の伊万里窯系白磁碗である。5は15世紀後半の龍泉窯系青磁盤の口縁部破片であり、受け口状の口縁端部は欠損している。6～8は龍泉窯系青磁碗、9は同安窯系青磁碗である。6は15世紀後半の無文碗、7は15世紀前半の見込み部に印花文のあるもの、8は13世紀第4四半期の連弁文碗、9は外面に櫛描文が見られる13世紀第1四半期の碗である。10～13は13世紀第1四半期の厦門碗窯系白磁碗である。10の見込み部には蛇の目釉剥ぎが見られる。11～13の口縁部は玉縁が大きめのもの（11・12）と小さめのもの（13）の2種類が見られる。14は土師質盤の高台部と思われるものである。15は丸みをもった瓦質火舎の体部破片であり、外面には菊花状のスタンプ文が見られる。

第2面包含層では、中世から古墳時代までの遺物が出土している。また、1点だけであるが、風化したサヌカイト剥片も見られる。

16は17世紀前半の唐津窯系溝縁皿、17は15世紀の龍泉窯系青磁皿、18・19は中世の土師器皿である。

20・21は平安時代の土師器皿である。22・23は19を大きくしたような形状の土師器大皿であり、中世のものと思われる。24は底部が丸くやや深めの瓦器皿である。暗文は摩滅して不明である。25は土師器の壺である。胎土の特徴が中世の土師器皿に類似しているので、中世のものと思われる。

第2－b面（図74）

大和川の洪水砂である第1層の淡黄色砂混じりシルトと第2－1層の灰黄色細砂層および明黄褐色砂混じり粘質シルト層を除去すると、調査区の南端部で東西方向に流れる数条の溝と井戸、不定形土坑を検出した。また、調査区の中央部では上層を削平されていると思われる井戸を数基検出した。調査区の北側は洪水砂などによる削平をうけており、顕著な遺構は見られなかった。

第2－b面は、調査区の西側中央部が平坦な地形を成すが、東側や南側に向けて谷状に低くなる様相を示す。検出面はT.P.8.20m前後を測る。

第2－b面は、調査時において（その5）調査区における第2－b面に相当すると考えていたが、調査の結果、（その5）調査区の第2－b面にやや先行する時期のものと判った。第2層を成している黄褐色砂混じり粘質シルトと灰黄色細砂が互層を成して堆積する土層であることから、検出面に若干の相違が見られたが、時期的にはあまり大差ないものと思われる。ここでは、調査時の遺構面名称をそのまま使用するものとする。

各遺構および包含層から出土した遺物として、国産・輸入陶磁器、瓦類、土師質土器、須恵質土器などが見られた。

2・16・17・390井戸（図74・75　図版27）

2井戸は、調査区南側で検出されたやや不整楕円形状を示す井戸である。

井戸の検出径は約1.5m、深さ約1.2mを測る。断面形は、上部約50cmがすり鉢状であるが下部は段を成して狭くなり、直径約70cmの円柱状となる。おそらく下層に曲げ物などがあったものと思われる。

埋土は、上層が黄褐色砂混じり粘質シルト、中層が暗灰黄色粘質シルト、灰オリーブ色砂混じり粘質シルトで廃棄時の人為的な投入土、下層が灰色および黄灰色細砂混じり粘質土で滞水性の水成堆積の様

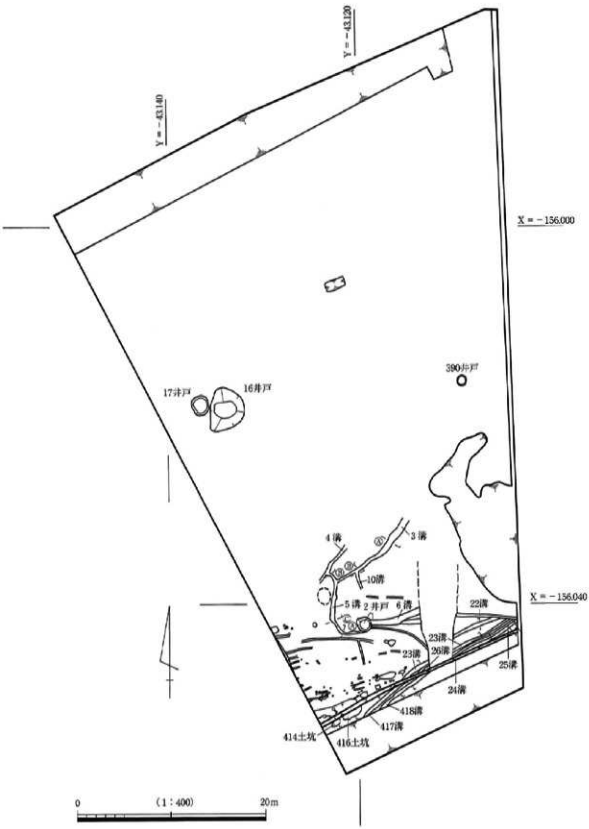

Y＝－43,120
Y＝－43,140
X＝－156,000
X＝－156,040
17井戸
16井戸
380井戸
4溝
3溝
10溝
5溝
2井戸
6溝
22溝
23溝
20溝
23溝
25溝
24溝
418溝
417溝
414土坑
416土坑
0
(1：400)
20m

図74　第２－ｂ面

相を示す。最下層が黄褐色砂土で湧水層となっている。井戸の廃絶後放置され、窪みとして残っていたが、洪水砂などにより埋没したものと思われる。下層の灰色および黄灰色細砂混じり粘質土層からは、瓦器椀、瓦質羽釜、鉢、土師質羽釜、甕、備前焼甕、青磁などの細片が出土した。おおむね14世紀から16世紀代のものが主を成す。

16井戸は、調査区中央部西側で17井戸と近接して検出された井戸である。当初、16井戸はブロックなどが混入していたため、上面からの攪乱であると思っていたが、掘削を進めて行く内に井戸であることが判ったものである。

16井戸の平面形は、いびつな楕円状を示す。検出時の長径が約4.5m、短径は約3.5m、深さは約1.2mを測る。断面形は上部がすり鉢状に開くが、下部では検出径約0.8mの円柱状をなす。本来の井戸の掘方に相当する。埋土内にはブロック、角材、木片などが入っており、廃絶時に人為的に投棄したものと思われる。井戸の最下層からは陶磁器片、軒丸瓦などの細片が出土した。

17井戸は、16井戸の西隣で検出された、やや方形気味の円形状を示す井戸である。

井戸の検出径は約1.8m、深さ約65mを測る。断面形は、浅いすり鉢状を成す。埋土は、上層が灰黄褐色および明黄褐色粘質シルト、中層が黄褐色砂礫混じり土、下層が黄灰色砂質土である。下層の砂層は湧水層ではなく、滞水性の沈殿堆積の様相を示す。17井戸は、比較的浅いものであることから、おそらく農業用などの溜め井戸として使用されたものと思われる。井戸内から遺物は出土しなかった。

390井戸は、調査区中央部東側で検出された、ほぼ円形状を示す井戸である。

井戸の検出径は約0.9m、深さ約1.1mを測る。断面形は円柱状を成す。埋土は、上層が灰オリーブ色および黄褐色砂質土ないしシルトで、すり鉢状に堆積している。中層はすり鉢状の底部にあたる、にぶい黄色粘質シルト層を囲むように灰オリーブ色および黄灰色系の砂質シルト、砂質土が堆積する。下層はさらにすり鉢状を呈するオリーブ褐色砂質シルト層を囲むように、黒褐色粘質土、暗灰黄色粘質土が堆積する。最下層は暗灰黄色砂質土で湧水層となる。埋土の状況から、幾度か掘削をしながら水汲み用の井戸として利用していたことがうかがえる。埋土内からは、瓦質甕片、瓦器椀片、土師質土器片や、弥生土器片などが出土した。

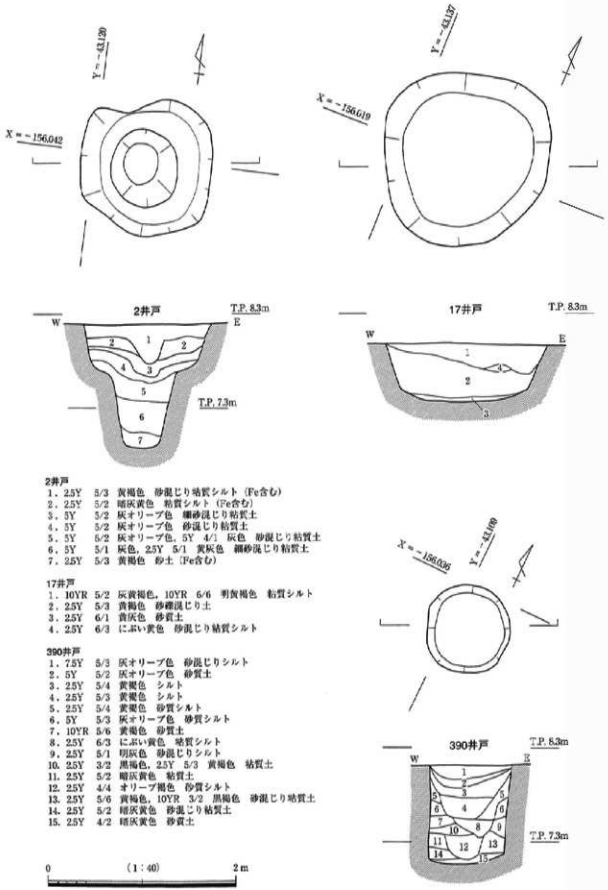
3・4・5・6・10溝（図74・76・77　図版27）

調査区南側中央部の2井戸の周辺で不定方向に伸びる数条の溝跡を検出した。いずれも検出幅に振幅があり、不定方向に流層していることなどから、洪水・増水時などに溝として流れを有したものと思われる。

3溝は、南北方向に伸びる5溝から分岐して東西方向に伸びる溝である。3溝の検出幅は25～50cm、深さは2～10cmで、東側に向かうほど幅が広くなり、浅くなる。検出長は約10mを測る。埋土は、灰オリーブ色およびにぶい黄色粘質シルトで鉄分沈着が見られる。埋土内からは、白磁碗、土師質羽釜片、瓦器椀片、平瓦片などが出土した。白磁碗は溝の中央部で検出されたもので、口縁部・体部などは割れ、かろうじて低部と高台部分が遺存していた。

4溝は3溝に平行するように東西方向に伸びる溝である。検出幅が約20cm、深さは約7cmを測る。検出長は約5mである溝の両端は攪乱などにより不明瞭となっている。埋土はにぶい黄色シルトで鉄分沈着が見られる。埋土内からは、備前焼甕片が出土した。

5溝は、2井戸から西進した後、弧を描くように北進して伸びる溝である。4溝にあたり、吸収され



2井戸
1. 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じり粘質シルト（Fe含む）
2. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘質シルト（Fe含む）
3. 5Y 5/2 灰オリーブ色 礫砂混じり粘質土
4. 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂混じり粘質土
5. 5Y 5/2 灰オリーブ色，5Y 4/1 灰色 砂混じり粘質土
6. 5Y 5/1 灰色，2.5Y 5/1 黄灰色 礫砂混じり粘質土
7. 2.5Y 5/3 黄褐色 砂土（Fe含む）

17井戸
1. 10YR 5/2 灰黄褐色，10YR 6/6 明黄褐色 粘質シルト
2. 2.5Y 5/3 黄褐色 砂礫混じり土
3. 2.5Y 6/1 黄灰色 砂質土
4. 2.5Y 6/3 にぶい黄色 砂混じり粘質シルト

390井戸
1. 7.5Y 5/3 灰オリーブ色 砂混じりシルト
2. 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂質土
3. 2.5Y 5/4 黄褐色 シルト
4. 2.5Y 5/3 黄褐色 シルト
5. 2.5Y 5/4 黄褐色 砂質シルト
6. 5Y 5/3 灰オリーブ色 砂質シルト
7. 10YR 5/6 黄褐色 砂質土
8. 2.5Y 6/3 にぶい黄色 粘質シルト
9. 2.5Y 5/1 明灰色 砂混じりシルト
10. 2.5Y 3/2 黒褐色，2.5Y 5/3 黄褐色 粘質土
11. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘質土
12. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 砂質シルト
13. 2.5Y 5/6 黄褐色，10YR 3/2 黒褐色 砂混じり粘質土
14. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じり粘質土
15. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質土

図75 第2-b面2・17・390井戸平・断面図

る。5溝の検出幅は25～65cm、深さは3～10cmで、北側に向かうほど低くなる。検出長は約9mである。

埋土は、上層がにぶい黄色ないしオリーブ黄色シルトで、下層が灰黄色ないしオリーブ黄色粘質シルトである。埋土内からは、瓦類、土師質羽釜片や礫などが出土した。

6溝は、2井戸から東方向に伸びる溝で、検出幅が約55cm、深さは約10cmを測る。検出長は約6mであるが、東側は撹乱などで不明瞭となる。埋土は黄褐色砂質シルトと暗灰黄色粘質シルトの互層である。

埋土内からは、土師質羽釜片、鬼瓦などが出土した。

10溝は、3溝に向かって北進して伸びる溝で、検出幅が約20cm、深さは約3cmを測る。検出長は約2mである。南側は不明瞭である。埋土は灰黄色シルトである。埋土内からは、土師質小皿片、瓦器椀片、陶磁器片などが出土した。

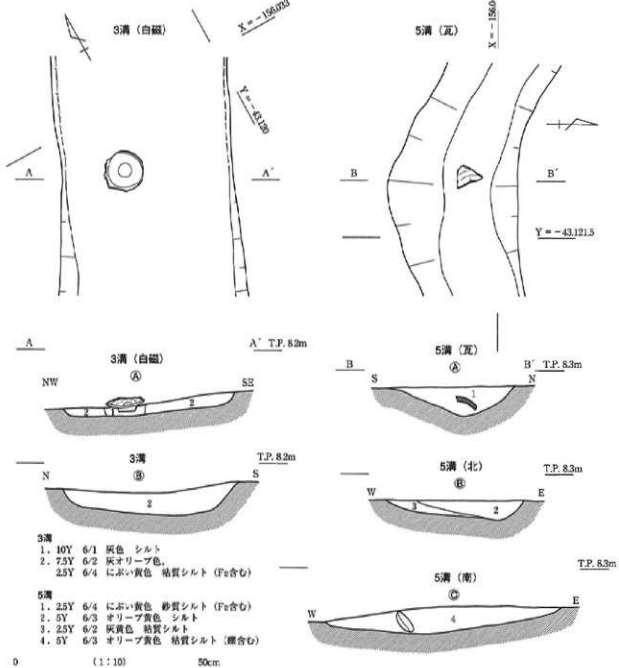


図76　第2－b面3・5溝平・断面図

2井戸の周辺に広がるこれらの溝は、本来は2井戸の機能時には流水路として使用されていたものであると思われるが、主に洪水・増水時などに溝として流れを有したものと思われる。

一部の遺構は、第2面相当の耕作溝跡とも見られる。7・9溝などがそれにあたる。

その他の溝（22・23・24・25・26・417・418溝）（図74・77）

調査区の南端部で東北から西南方向に伸びる数条の溝を検出した。南端部は第2－b面ではやや谷状に低くなるところに位置する。

検出した溝の検出幅は、約20～65cm、深さは約2～20cmを測る。検出長は約20mである。同一溝内でも深さに差異が見られることから、下層の土質によって凹凸が生じたものと思われる。

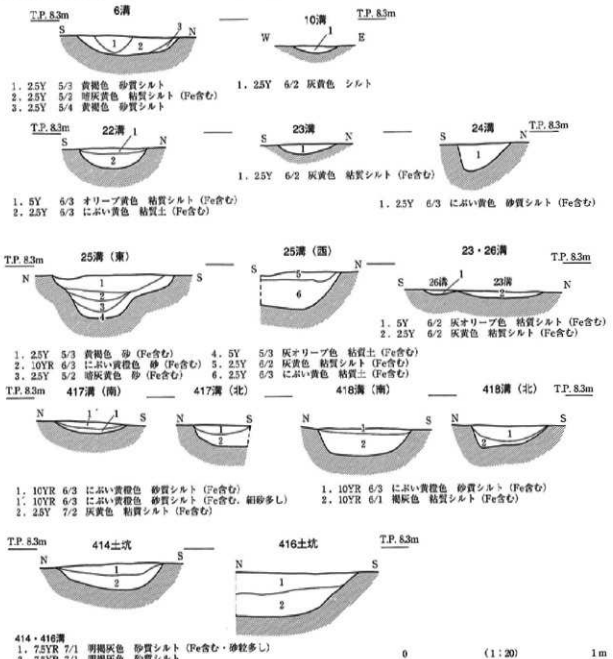


図77 第2－b面遺構断面図

埋土は、にぶい黄色および灰黄色・灰オリーブ色系粘質シルトおよび、にぶい黄橙色砂質シルトや砂層が混じるもので、鉄分沈着が顕著に見られた。流水堆積の様相を示す。

25溝のように深く堆積している部分では下層ににぶい黄橙色砂質土、褐灰色粘質シルトなど止水堆積の状況が見られた。いずれの溝の埋土内からも遺物は出土しなかった。

これらの溝は、ほとんど同様の方向を示し、重なり合っていた。溝の切り合い関係から、短時期に流水して埋没を繰り返したものと思われる。

414・416土坑（図74・77）

調査区の南西端で幾つかの不定形土坑を検出した。南西部は谷状に低くなる南端部の肩部にあたる。

流水などでできた窪地などではないかと思われる。

検出した土坑は、形状が多様で規模にも差異が見られたが、埋土の堆積状況はほぼ類似していた。

埋土は、上層が明褐灰色砂質シルトで砂粒が多く含まれる。

下層は明褐灰色砂質シルトで粒子が細かいラミナが堆積するもので止水堆積の様相を示す。埋土の深さは、約15～25cmを測る。

地形的に窪んだところに洪水・増水などで一時的に冠水して、埋没したものと思われる。不定形土坑の埋土内から遺物は出土しなかった。

2井戸・3溝・6溝他　出土遺物（図78　図版35）

2井戸からは中世遺物の土師器、瓦器、瓦質羽釜破片などが僅かに出土している。

26は16世紀末から17世紀初頭にかけての備前種壺である。肩部に数条の櫛描文が施されている。

16井戸からは中世の瓦器、土師器皿、須恵質が少量と、奈良時代と考えられる須恵器が出土している。

図化したのは16井戸付近出土の軒丸瓦（27）である。

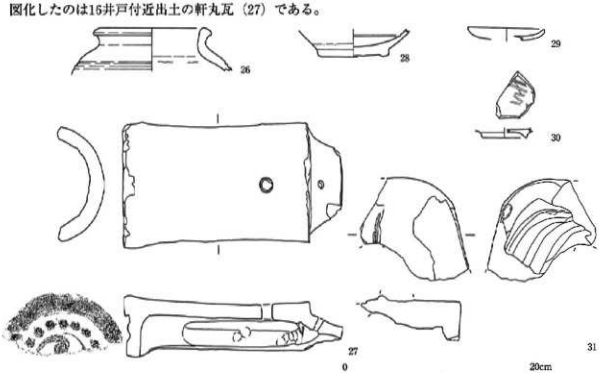


図78　第2－b面遺構出土遺物

27は、玉縁と短めの胴部に釘孔が各１箇所ずつ見られる。

瓦当面には左回りの巴文の周囲にやや大きめの珠文が巡る。巴文の頭部は丸く大きめで、尾部はやや短めである。外縁の幅はやや幅広である。文様、形からC６型式で、近世のものと思われる。

３溝からは中世遺物が極僅か出土している。それらはII～III期の瓦器椀体部と土師質羽釜である。また、弥生土器と考えられる破片が１点だけだが認められた。28は13世紀第１四半期の厦門碗窯系白磁碗底部である。

６溝からは鬼瓦(31)が１点出土している。表面の文様は剥落しており不明である。外縁が一部残り、幅約４cmの平坦な面をなす。裏面は周縁が粘土帯の貼付けにより厚くなっており、中央にむけて薄くなっている。室町時代のものである。

10溝からは中世の遺物が若干出土している。

それらは土師器皿、土師質羽釜、瓦器椀などである。また、平瓦片が１点出土している。

図化したのは29の土師器皿、30の瓦器椀高台部である。瓦器椀は高台断面が三角形状をなすが、見込み部に斜格子状の暗文があり、時期はII－２～３期と思われる。

390井戸出土遺物（図147）

土師器皿、瓦質甕、羽釜、III期と思われる瓦器片を含む中世土器、古墳時代の土師器、弥生土器片などが出土している。

398は緩く「く」の字状に外反する口縁部と、体部に粗い叩きが施された弥生後期から古墳初頭にかけての甕である。

第２－ｂ面包含層出土遺物（図79　図版35）

中世の遺物が少量出土している。それらはII－３～III－３期までの瓦器椀、土師器皿、土師質羽釜破片などである。

32は土師器皿、33は瓦器皿、34は瓦器台付皿である。32の土師器皿には内面に螺線状暗文の痕跡が微かに残る。平安時代初め頃のものか。35は15世紀第３四半期の龍泉窯系青磁蓮弁文碗。

36は13世紀の龍泉窯系青磁皿、37は12世紀の白磁皿である。38～40が厦門碗窯系白磁碗であり、38・40が13世紀第１四半期のもの、39が12世紀後半のものである。

41・42は須恵質鉢である。41は第II期第２段階の12世紀末葉から13世紀初頭、42は第I期第２段階の11世紀末から12世紀前半かと思われる。42は片口部分が残存する。この他、瓦片などが出土している。

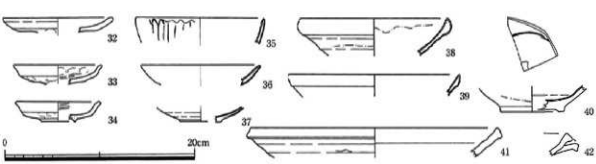


図79　第２－ｂ面包含層出土遺物

第3－a面（図80　図版28）

第2層の黄褐色ないし暗黄灰色砂混じりシルト層、第3層の暗灰黄色砂質土、オリーブ褐色砂混じりシルト層を除去した面を第3面とした。第3面については、同一面で数多くの遺構を検出したが、同一面で時期的にも、また遺構の性格上にもやや相違が見られる遺構が見られることが判ったため、整理し分離して表記することにした。そこで、既往の調査結果と照合して、建物跡を中心とする遺構を第3面とし、今回検出した方形区画溝を中心とする遺構は第3面の遺構よりやや新しいものと考えられることから、第3－a面とした。

第3－a面は、西側中央部でやや微高地となるが、南側では谷状に低くなり、増水・洪水跡とともに、自然流路跡を検出した。調査区の中央部から南側および東側では、方形に配する溝（方形区画溝）と井戸を検出した。検出面は、T.P.8.15m前後を測る。調査区の北側は北側に向かって若干低くなる。不定形土坑、溝、ピットなどを検出した。検出面は、T.P.8.0m前後を測る。

第3－a面は検出された遺構、遺物から、室町時代を中心とする時期に相当するものと考えられる。

方形区画溝（遺構30）（図80～88　図版28・29）

調査区中央部から東側にかけての微高地上で方形区画溝（遺構30）を検出した。検出時は遺構30としていたが、単なる溝ではなく、規格、規模、機能などを考え合わせて、呼称を「方形区画溝」とした。

方形区画溝の形状は、北側と南側に張りだし状に突出する部分が見られる区画溝で、正方位に則るものである。

・法量

各溝の検出長は、次の通りである。南側で東西方向に伸びる溝（南辺）の検出長が20m以上を測る。

西側で南北方向に伸びる溝（西辺）は27mを測る。北側で東西方向に伸びる溝（北辺）は11mを測る。

北側張りだし部で南北方向に伸びる溝（北張り出し西辺）は10mを測る。北側の張りだし部で東西方向に伸びる溝（北張り出し北辺）は8m以上を測る。南側の張りだし部で南北方向に伸びる溝（南張り出し西辺）は8m以上を測る。南辺および北張り出し北辺や南張り出し西辺も、さらに伸びている。ただし、南側で東西方向に伸びる溝（南辺）は、溝の東側でやや北側にずれて東側に伸びる様相を示す。

各溝の検出幅は、南辺の西側および、西辺の南側が最も広く約4mを測る。北側に向かうほど狭くなり、北張り出し北辺では検出幅は約1mとなる。おおむね2.5～3.0mとなっている。

各溝の深さは、南辺の西側、西辺の南側および南張り出し西辺が最も深く0.8m以上を測る。溝の幅同様、北側に向かうほど浅くなり、北張り出し北辺では約0.2mとなる。西辺北側、北辺、北張り出し西辺では約0.3～0.7mとなっている。やや北側にずれて東側に伸びる南辺の東側では、約0.5mほどの深さとなり、西側に比べて極端に浅くなる様相を示す。

南側で東西方向に伸びる溝（南辺）は、溝の東側でやや北側にずれるだけでなく、その深さが浅くなり溝の幅も小さくなる傾向が見られた。検出当初、南辺は直線的に1本のものと考えていたが、北側に張り出す様に、南側に屈曲していることが判った。南辺の東側にあたる溝は、方形区画溝内をさらに細分する小区画溝になるものと思われる。

検出された方形区画溝は、溝の位置により溝の幅や深さなどが異なるが、各溝はL字状に屈曲し、おおむね正方位に則るものである。検出された溝で構成される南北方向の最大長は39m、東西方向の最大長は20mを測る。調査区の東側や南側に拡張する様相を示すため、方形区画溝の全容は不明であるが、

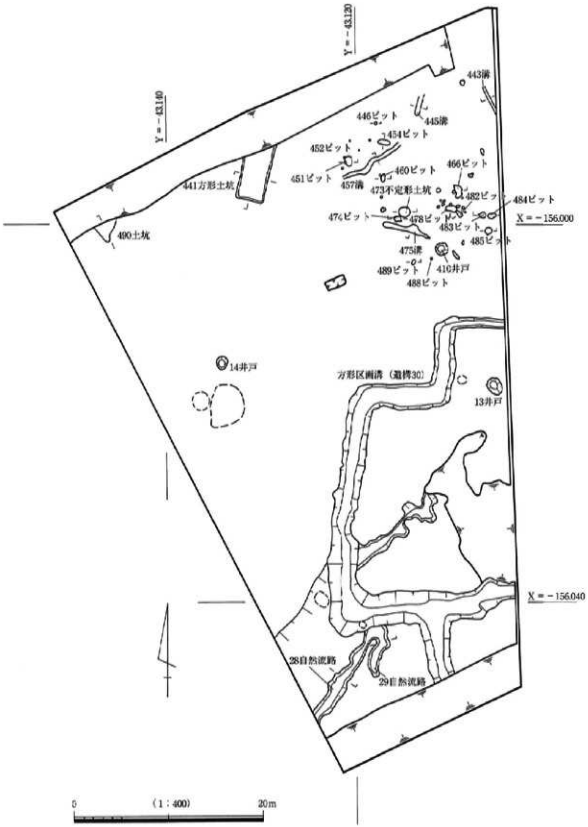

Y＝－43,120
Y＝－43,140
X＝－156,000
X＝－156,040
443溝
446ピット
445溝
454ピット
452ピット
460ピット
466ピット
451ピット
457溝
473不定形土坑
482ピット
484ピット
441方形土坑
490土坑
47cピット
478ピット
483ピット
485ピット
475溝
489ピット
416井戸
488ピット
14井戸
方形区画溝（遺構30）
13井戸
28自然流路
29自然流路
0
（1：400）
20m

図80　第３－ａ面

今回検出できた、方形区画溝内の面積は約750㎡を測る。

・埋土（図81～84・87）

埋土は、溝内の深さに差異があるため一様ではないが、おおむね7層に大別することができた。なお、溝内の土層観察のため、各辺についてセクションを設けた。南辺については東側からセクション1・3、南張り出し西辺ではセクション2、西辺では南側からセクション5・6、北辺ではセクション7、北張り出し西辺はセクション8、北張り出し北辺はセクション9として記録した。

1層は、にぶい黄褐色・灰黄褐色砂・砂礫混じりシルトが主を成す洪水砂層で、流水堆積の様相を示す。全域で見られた。

2層は、褐灰色・灰黄褐色砂・砂礫混じり粘質シルトで、砂とシルトの互層が顕著に見られるもので、流水堆積の様相を示す。西辺、北辺、北張り出し西辺・北辺で見られた。特に西辺では流水が頻繁にあったらしく、幾重にも砂層とシルト層が重なっている様子が見られた。

3層は、灰黄色・灰オリーブ色砂礫混じり粘質シルトが主を成すもので、瓦や陶磁器など多量の遺物と炭化物などが含まれていた。おそらく人為的に埋めた様相を示す。南辺、南張り出し西辺で特に厚く堆積していた。

4層は、褐灰色・暗オリーブ色砂礫混じり粘質土が主を成すもので、下層には瓦や陶磁器などの遺物が含まれていた。おそらく人為的に埋めた様相を示す。西辺、北辺、北張り出し西辺・北辺で見られた。

5層は、灰黄色・浅黄色砂質シルト、細砂、砂混じり粘質シルトなどの沈殿堆積層である。止水堆積の様相を示す。南辺、南張り出し西辺で見られた。

6層は、灰黄色・灰黄褐色砂混じり粘質土が主を成すもので、瓦や瓦器椀などの遺物を含む下層堆積層である。止水堆積の様相を示す。おそらく方形区画溝が設定される以前の遺構に相当するものと思われる。西辺の東側部でのみ見られた。

7層は、灰オリーブ色・灰黄褐色砂礫混じり土が主を成すもので、地山層に相当するものと思われる。

埋土の堆積状況から、方形区画溝は人為的に埋め戻されている状況が看取できた。埋め戻す際には、瓦や陶磁器など大量の遺物と炭や炭化物なども含まれている事などから、火災などで倒壊、壊滅した建物や生活用品などを方形区画溝内に投棄、廃棄したものと考えられる。遺物は、主に3・4・6層から出土した。

・出土遺物（図81～86・89～96）

溝内埋土からは、大量の遺物が出土した。遺物は、溝内全域から出土したが、特に南辺、西辺、南張り出し西辺で多く見られた。これらの遺物はおおむね方形区画溝内に投棄、廃棄されたものである。

主な出土遺物は、国産および輸入陶磁器、瓦類、土師質羽釜、須恵質鉢、瓦質羽釜・甕・火舎などである。中でも、瓦類や備前すり鉢・甕片、青磁・白磁類が多く見られた。また、瓦や石の中には、焼けたものも含まれていたほか、焼土塊、窯壁など鋳造関連のものと思われる遺物も多く見られた。完形品のものはなく、細片となっているものが大半であった。溝内に投棄される以前に崩壊していたものと思われる。

方形区画溝から出土した遺物は15世紀から16世紀にかけての時期に集中している傾向が見られた。また、一般庶民が有するものというより、やや裕福な階層の人が有していたものと考えられる。鬼瓦や鳥衾を持つ建物に、多彩な輸入陶磁器をともなうものである。

青磁・白磁碗などの出土量も多く、中には16世紀前半の景徳鎮窯系青花アラベスク文盤がある。この

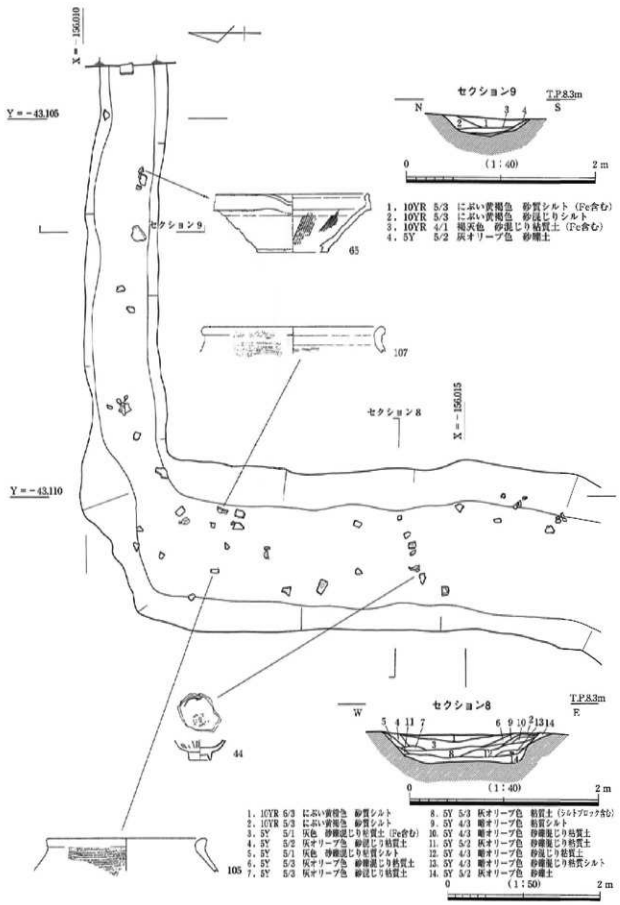


図81　第3－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図①

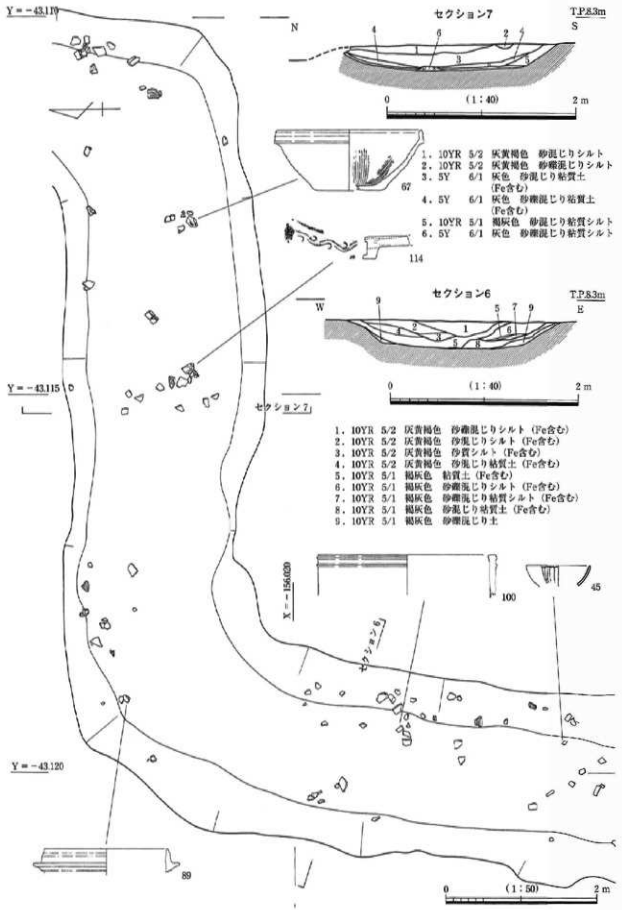


図82　第3－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図②

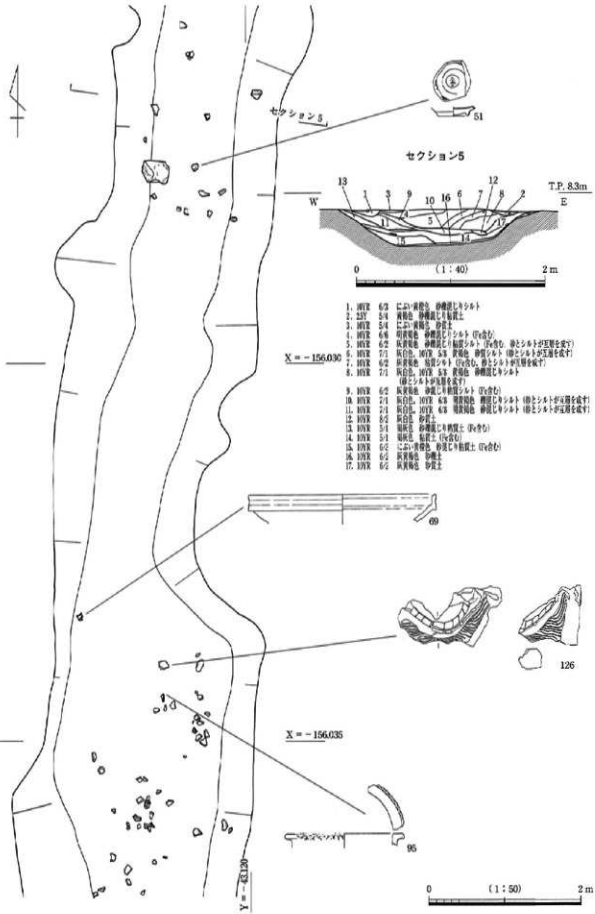


図83　第3－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図③

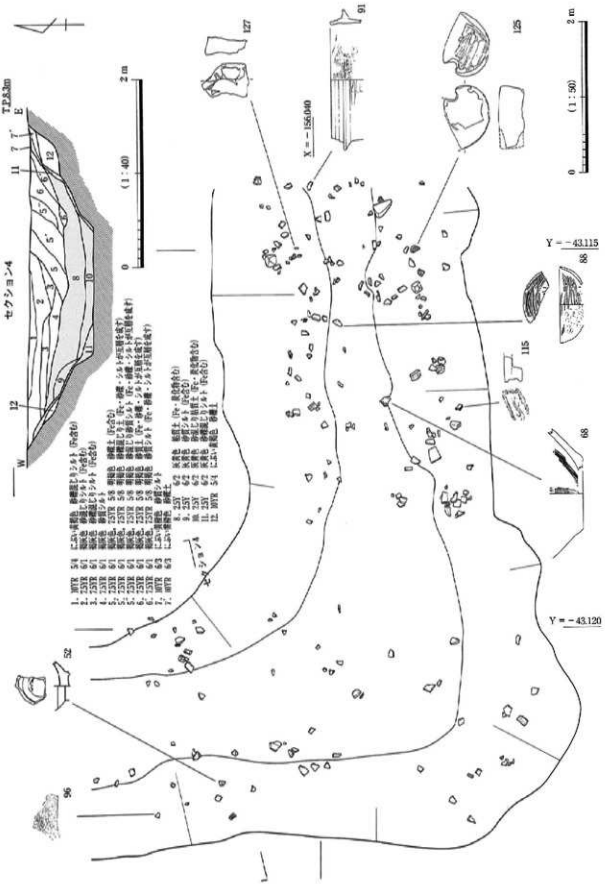


図84　第３－ａ面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図④

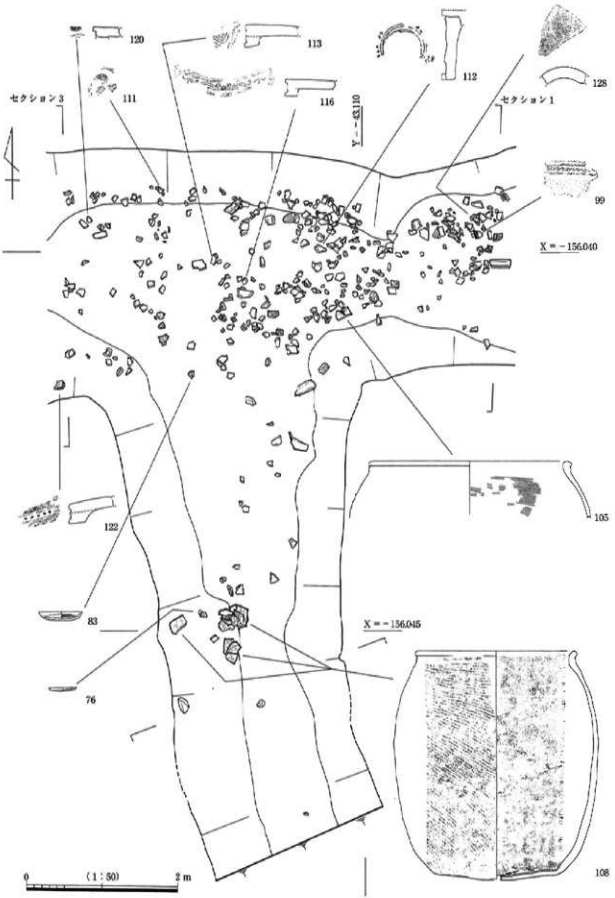


図85　第3－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図⑤

他にも、備前すり鉢・甕片が数多く出土している。一軒の家で使用するには多すぎる備前すり鉢・甕片が出土しており、多彩な輸入陶磁器類と合わせて、交易を生業とするものではないかと推測される。

・鋳造関連遺物

鋳造関連の遺物も数多く見られた。主に焼土塊、窯壁などであるが、既往の調査においても鋳造関連の遺物が多く出土している。また近年、大和川今池遺跡の近郊で14世紀を上限とする中世の一大鋳物工房地帯であった可能性がある廃棄土坑や鋳型、炉などの鋳造関連遺物を検出した遺跡（大阪市・山之内遺跡、苅田4丁目所在遺跡）が見つかっている。大阪市住吉区苅田は大和川を挟んだ対岸にあたる。さらに、「真継家文書」『河内国鋳物師座法』の中には、「あひこ村」「かつた村」「にわい村」「東堀村」「西堀村」「大豆塚」などの地名が見られ、当地に極めて近いことから、当地も鋳物工房に関連するものではないかと想起される[21]。

河内鋳物師集団の本拠地である河内丹南地区の日置荘遺跡や余部遺跡では、12世紀から14世紀代に相当する鋳造工房群や方形の区画溝で囲まれた大きな屋敷跡などがみつかっている。「我孫子鋳物師」の

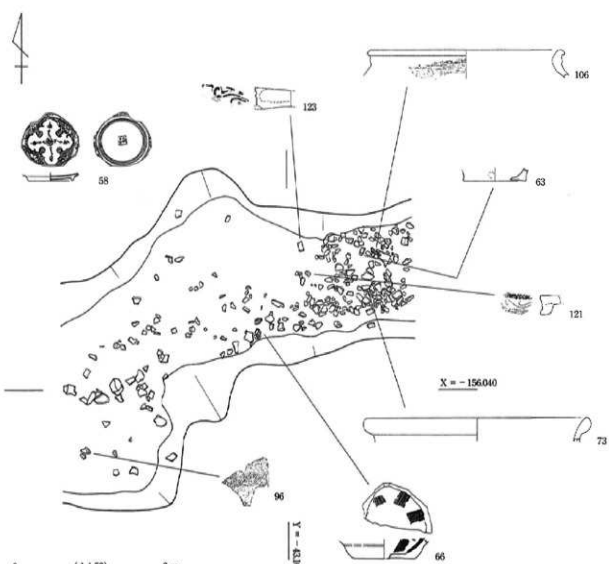


図86　第3－a面方形区画溝（遺構30）遺物出土状況図⑥

工房と推される苅田４丁目所在遺跡では、村の周囲が灌漑用の水路で囲まれていた。このように、鋳造工房と方形区画溝が見られる状況は、当遺跡の状況と通じるところがある。当地においても鋳物工房が営まれていたものと推測される。今後の調査成果に期待するものである。

・敷石建物（図88　図版28）

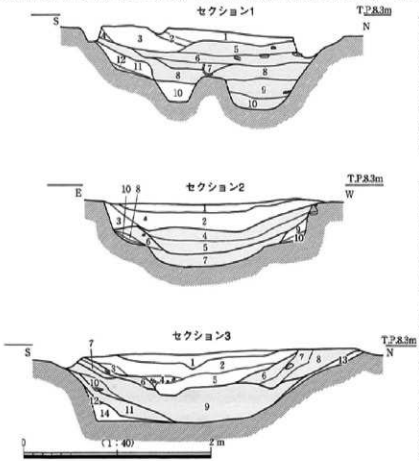
検出された方形区画溝の区画内からは、建物の敷石と思われる石列が見られた。やや元位置から動いているもの、欠損するものもあるが、以下のような残存状況から礎石を伴う建物であることがわかった。

方形区画溝の区画内では建物を構成する建物ピットは不明瞭で確認できなかった。

方形区画溝の西辺、北辺に沿って平らな面を持つ石が列状に並んでいた。特に、北西隅の石には表面の剥離にともなう凹凸が見られたが、長辺が約70cm、短辺が約40cmを測る敷石であり、ほぼ中央部に径約10cm程の柱あたりと考えられる凹みが見られた。この敷石を元に、南側へ約4.6m、さらに南側に約３mの位置で上面が平らな石が埋められていた。東側に伸びる北辺では若干南側に振るが約３m隔てて敷石が見られた。南辺でも同様に東側に約３m隔てて敷石が見られた。これらの敷石から東側については北側および南側に広がる様相が見られた。この敷石から東側では洪水砂などにより削平が著しく敷石を検出するには至らなかった。検出された敷石列をもって建物を復元するにはやや欠落する敷石も多いため、建物プランを復元することは出来なかった。

・方形区画溝の時期

検出された方形区画溝の機能時については、溝内に廃棄されていた遺物が15世紀から16世紀にかけての時期に集中していることから、各溝間に時期的な差はあまりないものと思われる。



セクション1
1. 2.5Y　7/2　灰黄色　粘質シルト（Fe含む）
2. 2.5Y　6/3　にぶい黄色　小礫混じり砂質シルト（Fe含む）
3. 2.5Y　7/3　浅黄色　砂質シルト（Fe含む）
4. 2.5Y　7/2　灰黄色　砂質シルト（Fe含む）
5. 2.5Y　6/3　にぶい黄色　細砂混じり粘質シルト（Fe・炭化物含む）
6. 2.5Y　6/2　灰黄色　砂礫混じり粘質シルト（Fe・炭化物含む）
7. 2.5Y　6/2　灰黄色　粘質シルト（Fe・炭化物含む）
8. 2.5Y　5/2　暗灰黄色　砂礫混じり粘質土（炭化物含む）
9. 2.5Y　6/2　灰黄色　細砂礫混じり粘質土
10. 10YR 5/2　灰黄褐色　細砂混じり粘質土
11. 2.5Y　6/2　灰黄色　砂質シルト（Fe含む）
12. 5Y　7/3　浅黄色　細砂（Fe含む）

セクション2
1. 2.5Y　5/3　黄褐色　砂質混じり粘質シルト（Fe含む）
2. 2.5Y　5/2　暗灰黄色　砂礫混じり粘質シルト（Fe含む）
3. 2.5Y　5/2　暗灰黄色　砂混じり粘質シルト（Fe含む）
4. 2.5Y　5/2　黄褐色　礫砂混じり粘質シルト（Fe・炭化物含む）
5. 5Y　5/1　灰色　砂混じりシルト（Fe・炭化物含む）
6. 2.5Y　4/3　オリーブ褐色　砂質混じり粘質シルト
7. 7.5Y　5/1　灰色　砂礫混じり粘質土（Fe・炭化物含む）
8. 2.5Y　4/3　オリーブ褐色　砂礫混じり粘質シルト
9. 2.5Y　6/5　灰黄色　粘質シルト（Fe含む）
10. 10YR 4/2　灰黄褐色　砂混じり粘質シルト

セクション3
1. 2.5Y　6/2　灰黄色　礫砂混じり粘質シルト（Fe含む）
2. 2.5Y　6/3　にぶい黄色　砂礫混じり粘質シルト（Fe含む）
3. 2.5Y　6/3　にぶい黄色　粘質シルト（Fe含む）
4. 2.5Y　6/2　灰黄色　砂礫混じり粘質シルト（Fe含む）
5. 2.5Y　6/4　にぶい黄色　砂礫混じり粘質シルト（Fe含む）
6. 5Y　6/2　灰オリーブ色　礫砂混じり粘質シルト（炭化物含む）
7. 5Y　6/2　灰オリーブ色　砂礫混じり粘質シルト（炭化物含む）
8. 2.5Y　6/2　灰黄色　砂混じり粘質シルト（炭化物含む）
9. 2.5Y　5/2　暗灰黄色　細砂混じり粘質土（炭化物含む）
10. 2.5Y　6/2　灰黄色　砂混じり粘質土（炭化物含む）
11. 5Y　6/2　灰オリーブ色　砂礫混じり粘質土（炭化物含む）
12. 5Y　5/3　浅黄色　砂質シルト（Fe含む）
13. 2.5Y　6/1　黄灰色　砂質土
14. 10Y2　4/2　灰黄褐色　砂混じり粘質シルト

図87　第３－ａ面方形区画溝（遺構30）断面図

方形区画溝の南辺および、南張り出し西辺の下層面から井戸（491・495井戸）が検出されている。井戸の埋土内からは、瓦器椀、小皿、銅銭などが出土しており、機能時は12世紀代を中心とする時期で、13世紀中頃には廃絶していたものと想定される。

方形区画溝は、これらの井戸の廃絶後に造られていることから、13世紀以降に造られ、16世紀末頃には廃絶していたものと思われる。

・方形区画溝の機能と集落の形態

今回検出した方形区画溝は、中世集落と考えるには小規模であるが、内側には礎石建物の存在が想定される事から、方形区画溝を構成するのは一般庶民ではなく、やや裕福な階級の民であろうと思われる。

方形に区画された溝は北側では非常に浅く、幅も狭くなっている。南側の溝内では下層（3層）の粘質土が厚く堆積しており、滞水層が深いことから、防御機能を主とするものではなく、灌漑用としての機能を有していたものと思われる。領主の館を中心として、周匝を巡る方形区画溝に取り付く様に一般農民が建物を建てて、方形区画溝を周辺に拡大していったものと考えられる。中世農村の形態を示すものである。

大和川今池遺跡の既往の調査で、（その2）調査区から方形区画溝に囲まれた豪族居館跡が検出された。

（その2）調査区で検出された方形区画溝は13世紀から14世紀代のものである。平安時代末頃から周辺に残る字名である「観音堂廃寺」を紐帯として徐々に集村化していく村落形成の過程が明らかにされた。この方形区画溝は14世紀中葉から後半頃に廃絶され、17世紀初頭頃には完全に埋没している。

今回検出した方形区画溝は、（その2）調査区で検出された方形区画溝の廃絶後に機能しているものと思われることから、（その2）調査区から、この地に移動したのではないだろうかと想定される。いかなる理由で移動が行われたのかについては、不明であり今後の当地域における発掘調査の成果に期待したいところである。

方形区画溝（遺構30）出土遺物（図89～96・146・151　図版36～41・51・52）

方形区画溝内からは大量の中世土器・瓦類の他、極少量の古代の遺物や、弥生後期の土器1片、サヌカイト剥片（図146　図版51－390）が出土している。また、鋳造関連遺物と考えられる焼土塊も少量ながら出土している。円筒埴輪も3点出土している（図151　図版52－415・417・419）。

中世の遺物の内訳は土師器皿・椀、瓦器皿・椀、土師質羽釜、須恵質鉢、瓦質羽釜・甕・火舎、国産および輸入陶磁器、瓦類などである。古代の遺物には土師器甕、須恵器杯、緑釉陶器などがある。古墳時代の遺物には須恵器ではI型式と思われる杯片と、II型式末の杯、III型式の壺体部破片などが出土している。その他、埴輪片、土師器杯、甕かボ明の体部破片などが僅かに見られる。

43～59は輸入陶磁器、60～75は国産陶磁器、76～79は土師器皿、80～83は瓦器皿、84～88は瓦器椀である。

輸入陶磁器は13世紀代のものも見られるが、14世紀から16世紀代のものが殆どである。なかには43のような16世紀末から17世紀初頭の漳州窯系青花も見られる。これは周縁を打ち欠き、メンコに再加工している。44は16世紀初頭の龍泉窯系青磁線描蓮弁文碗である。見込み部には「福」のスタンプ文がある。45～47・49・51・52は15世紀後半の龍泉窯系青磁碗である。49・52は見込み部に印花文、51は印字文がある。48は14世紀初頭の龍泉窯系青磁蓮弁文碗、50は15世紀前半の龍泉窯系青磁梵字文碗、53は15世紀初頭の土龍泉窯系青磁碗である。54は厦門碗窯系白磁碗で13世紀第1四半期、55は同時期の白磁碗、56は

12世紀後半の厦門磁窯系白磁碗、57は15世紀末から16世紀前半の景徳鎮窯系白磁端反碗、58は16世紀前半の景徳鎮窯系青花アラベスク文盤、59は15世紀の龍泉窯系青磁皿である。

60は17世紀前半の唐津窯系漳縁皿である。61～74は備前焼で、61は16世紀後半の大徳利、62・63は16世紀後半から17世紀初頭の同一個体と思われる花入れである。64～71は擂鉢である。71が15世紀中頃で、それ以外は全て16世紀代のものである。72は大きな水屋甕、73は口縁部が玉縁状をした15世紀後半の甕、74・75は甕底部である。

76・78の土師器皿はJbタイプ、77・79はIタイプか。80～83は瓦器皿の底部が少し丸みを残す。瓦器椀は84がII－1期、85・87・88がII－2～3期、86がIII－1期である。

方形区画溝内からは大量の備前窯系が出土しており、特に擂鉢と甕の器種に集中する。擂鉢は使用により摩滅が見られる。甕は口縁部破片が少ないものの、体部破片が多く見られるのが特徴である。これらの点から、何らかの生産活動をした痕跡ではないか[2]と考えられる。

89～102・図版38－424は瓦質土器である。89～92は瓦質羽釜である。これらは口縁部がほぼ直立ぎみで、口縁部外面に段を有し、89・91が河内D1b型、90が河内D2a型に類似し、14世紀から15世紀のものと思われる。92は内傾した口縁の端部で小さく直に立ち上がる形状をなす河内Jb型で15世紀のものか。93・94は瓦質擂鉢である。94が口縁端部を下方へ僅かに拡張しているのに対し、93は表面が磨耗しているが、口縁部断面が丸みを帯びる。94が14世紀から15世紀、93が16世紀にあたる。97～101は瓦質火舎である。97～99が浅鉢、95・96・100・101が深鉢と推測される。95と96は同一個体と推定されるもので、外反した口縁端部に連続した押圧文があり、体部には花のスタンプ文が施されている。いずれも14世紀から15世紀のものか。

102は仏花瓶の体部破片と思われるものである。体部中央にスタンプ文がある。図版38－424は口縁端部が平坦で内面へ傾斜した擂鉢である。内面はナデ調整のあと擂り目がつけられている。外面はナデ調整であるが、指押さえの痕が残る。口縁端部の特徴が他の瓦質擂鉢とは異なるため、他地域の可能性が考えられる。

103は土師質甕、104～108は瓦質甕である。103は口縁上端部が平らで断面が四角いところから、最も新しい形態である。16世紀後半頃のものか。104～108は15世紀から16世紀前半のものと思われる。

104・105は頸部が短く、口縁端部が丸みを帯びているのに対し、105～108は立ち上がる頸部から口縁部で僅かに屈曲する。口縁部、頸部が一体化した物ほど新しい要素を示すとするなら、108は口縁部、頸部の区別が明確である点から、15世紀のものと思われる。

109～141は瓦類である。瓦は方形区画溝内から最も多く出土した。出土した破片数は1309点あり、（その6）調査区全体の約8割弱を占める。その他の遺構や包含層からの出土は少なく、多くても3％未満である。全体の瓦のうち、平瓦が約7割、丸瓦が約3割弱を占め、その他に軒瓦、鬼瓦、道具瓦などが見られる。

方形区画溝内出土の軒瓦は、軒丸瓦が4点、軒平瓦が13点である。それらは図95に示した。

109～112は巴文軒丸瓦である。109～111は左巻きの巴文で尾は長い。109・110は珠文の外側に圏線が無い型式である。鎌倉時代に属する[3]。

大阪府教育委員会刊行の『大和川今池遺跡』1998年「大阪府埋蔵文化財調査報告1997－1」によると、巴文軒丸瓦はC型式であるが、109・110の型式は見られない。111は左巻きの巴文で、頭部は尖り、尾は長い。内区のみ残存のため型式は不明であるが、C2型式の可能性が考えられる。鎌倉時代のもの。112

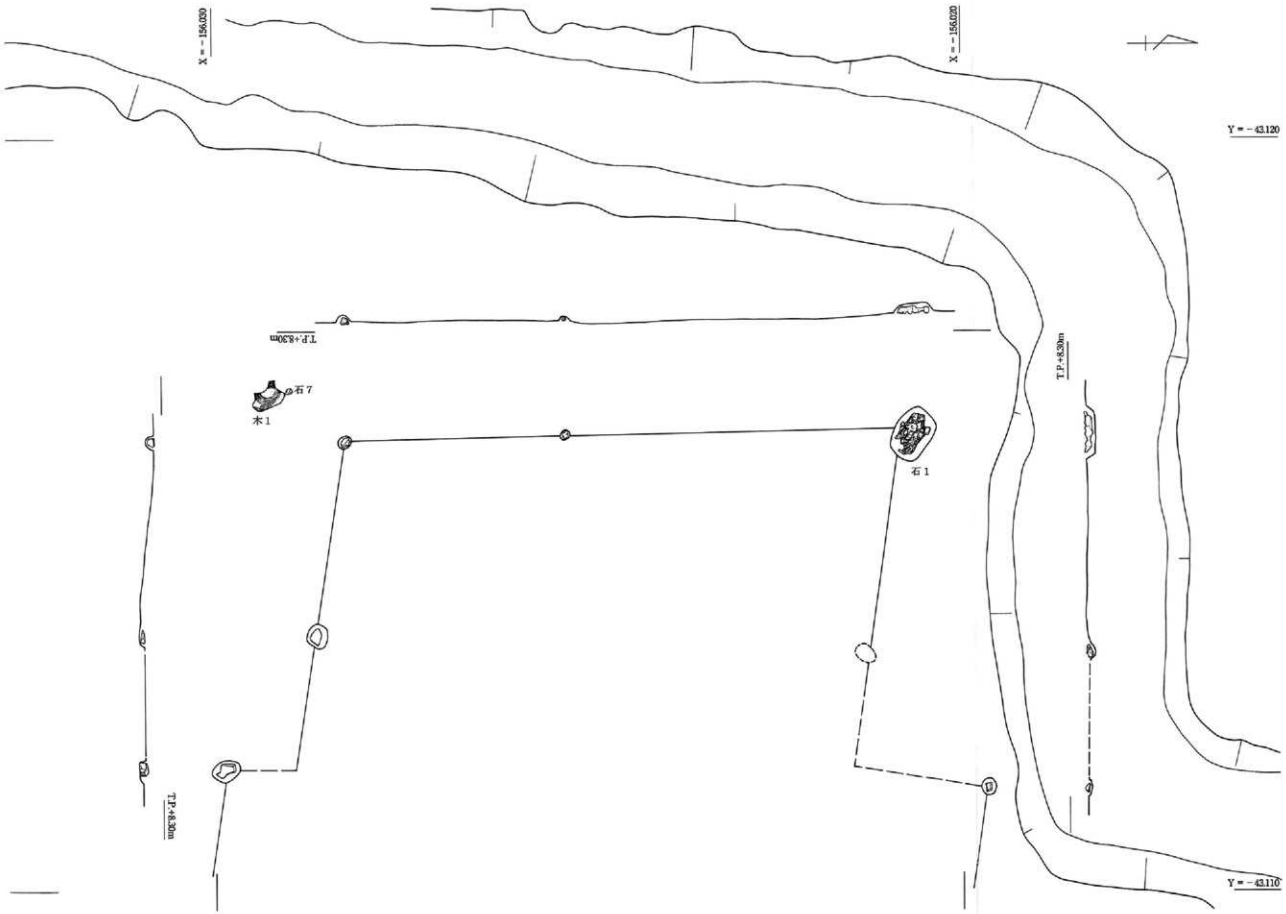


図88　第 3 - a面方形区画溝（遺構30）内建物敷石平・断面図（1 ：50）

図89　第3－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物①

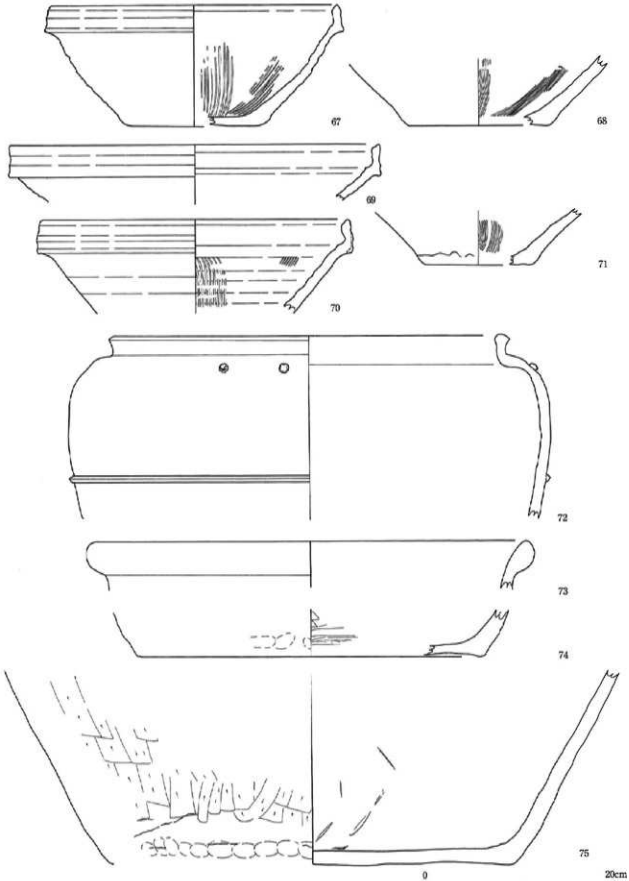


図90　第３－ａ面方形区画溝（遺構30）出土遺物②

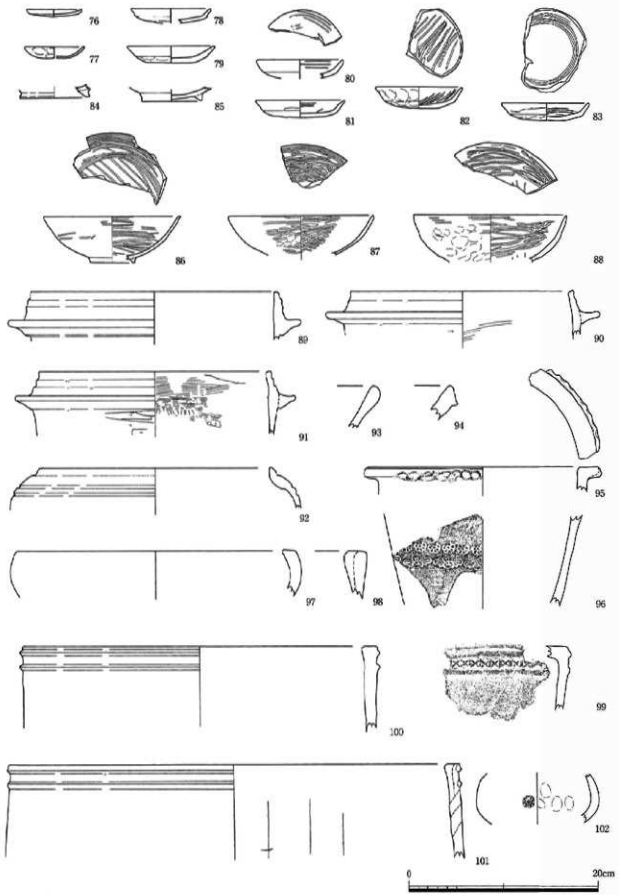


図91　第3－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物③

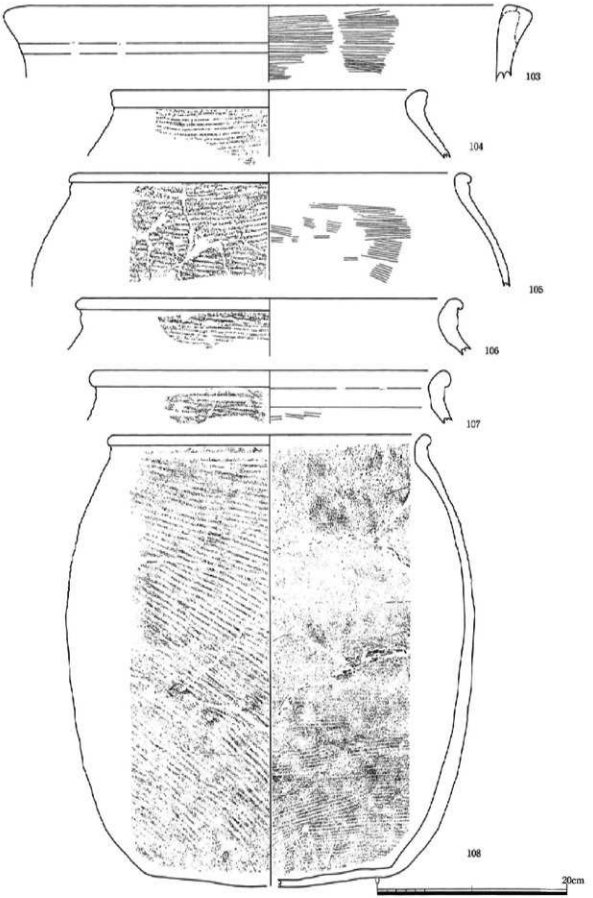


図92　第３－ａ面方形区画溝（遺構30）出土遺物④

は珠文の内側に2本の圏線を巡らせたおそらくC2型式と考えられるものである。長い尾の先端部分のみ残存する。平安時代後期のものである。

113～124は軒平瓦である。113は段顎で、水波文が表現されている。D型式か。114・115は段顎で、同一の型式と思われる唐草文様が表現されているが、前掲の報告書に類例の見られない型式である。116は段顎で、中心に宝珠文、左右に対称の唐草文を表現したものである。117も116と同じ型式の破片と思われるものである。118はB7型式の唐草文に一見類似するが、よく見ると圏線が無い点で異なる。119は118と同じ型式のものである。120は宝珠文の軒平瓦破片か不明である。段顎の部分が剥落している。

121は段顎で、唐草文が前掲報告書に類例のない新型式のものである。113～121は室町時代のもの。

122は連珠文を配した軒平瓦で、珠文の周りに圏線が1条巡る。C型式である。鎌倉時代から室町時代のもの。123は曲線顎で、唐草文がB4型式と類似したものである。124も同じくB4型式と思われる破片である。123・124は平安時代後期のものである。

125～127は鬼瓦破片である。125は右側の一部が残存しているもので、表面は平滑になでられており、裏面はヘラ状のもので削られている。126は下顎部分と思われ、歯と顎鰭状のものが表現されている。

127は目の近辺と思われる破片である。

128～131は玉縁式丸瓦である。128は凸面にヘラで刻字されている。文字の内容は不明。129は玉縁が欠損するが、上下の径に差の無いB2型式と思われるものである。玉縁が残存する130・131はB2型式である。131の凹面には吊り紐痕が見られる。丸瓦はいずれも室町時代のものと考えられる。

132～137、図版40－425・426は平瓦である。132・133・137・425は凹・凸面ともに砂が付着し、ナデられている。426は凸面が縄叩き、凹面が布目で、両面ともに砂が付着し、少しナデられている。132・133は広端側の凹面に面取り、凸面側には弧状の圧痕が見られる。室町時代のもの。134は凸面に斜格子叩き、凹面に布目と砂の付着が見られる。B型式か。凸面の粗い斜格子叩きは鎌倉時代によく見られるものである。135・136は凸面に縄叩き、凹面に布目があり、両面ともに砂の付着が認められる。136はさらに凹面をナデている。135はD型式、136はE型式にあたる。135～137は平安後期から鎌倉時代のもの。137は調整で見た限りでは前述の室町時代のものと類似する。

138～141は道具瓦片である。138～140は凹面側の窪みが側縁と平行ではないため、鳥衾の破片である。

141は残存する横断面が三角形状で、側縁に向けて薄くなり、段をなす。道具瓦破片と思われるが、詳細は不明である。いずれも中世の瓦である。

142は青銅製品の笠緋である。長さ3.9cm、幅0.9cm、厚さ0.35cm、重さ5.6gを測る。形は舟形状をなし、中央には直径0.7cmの孔が2個開けられている。これは鐙の止め金具にあたる[4]。

143は不明土製品である。原形を留めている部分で、平面形は円弧の一部をなす。裏面が平坦で表面中央寄りは粘土が盛り上がり、上端に狭い平坦面が残る。側面は湾曲しており、その部分は本来の表面が残る。平坦な裏面と表面上端部および側面の一部に粘土が接合部より剥がれたような痕跡が見られる。胎土中に籾圧痕があり、鋳造関連の土製品を想定したが、若干被熱しているものの、著しく高温を受けた痕跡は見られない。原形は不明である。図版40－427は不明土製品である。長さ4.6cm、幅4.1cm、厚さ2.2cmの直方体の一端が欠損する。片面には長軸方向に浅い窪みがあり、一部表面は高温で焼けたような痕跡がある。鋳造関連の遺物の可能性が考えられる。

図版41－429～433は焼土塊である。これらは胎土中にスサを含み、片面がガラス化して高温で焼けた痕跡を留め、溶解炉の破片と思われるものである。焼土塊の時期は不明であるが、他の中世遺跡出土例

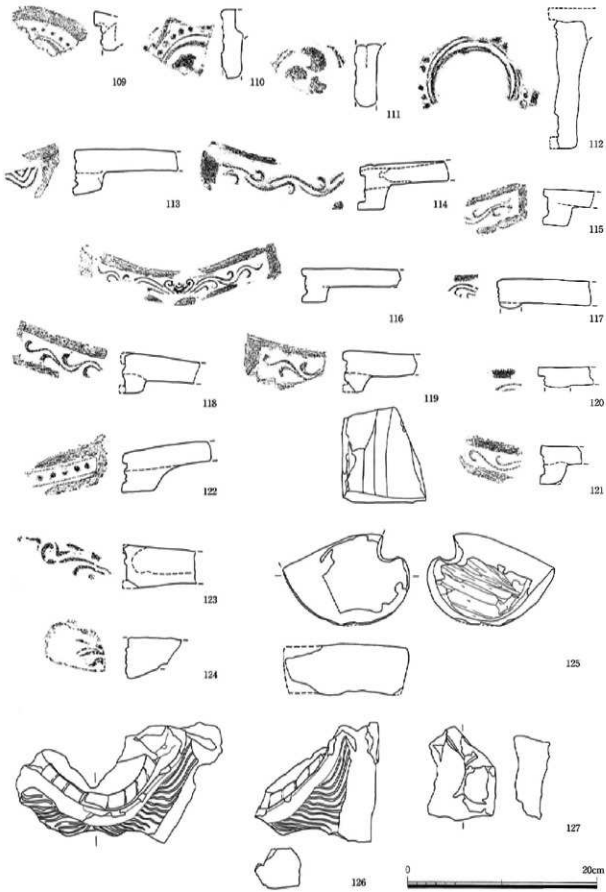


図93　第３－ａ面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑤

からみて、中世の可能性が考えられる[51]。焼土塊で一番大きい破片は432で、長さ18.5cm、幅16.5cm、厚さ5.0cmを測る。

その他の遺物として、石が若干出土している。144は残存長5.0cm、幅3.8cm、厚さ0.6cm、重さ14.87gを測る。石材は紅柱石ホルンフェルスである。これは熱を受けており、表面はもろい。温石として使用されたものらしい。

145は長さ15.05cm、幅6.8cm、厚さ6.2cm、重さ1420gを測る。石材は流紋岩Aである。根石と考え

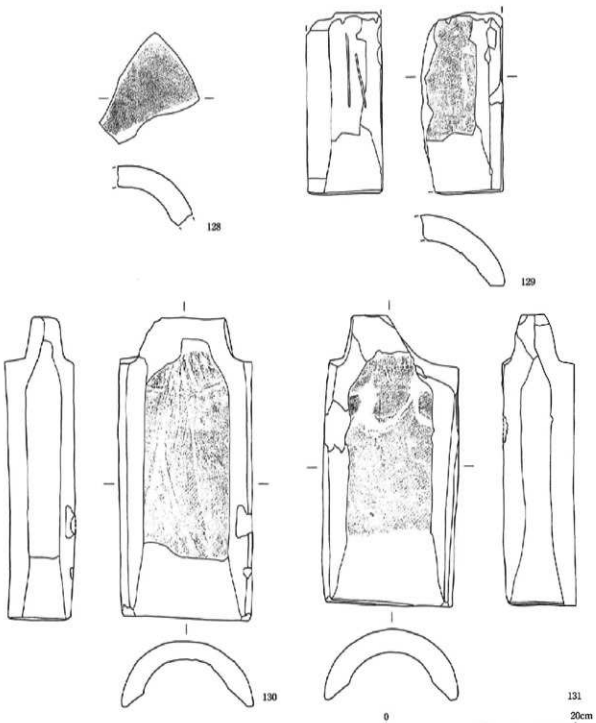


図94　第3－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑥

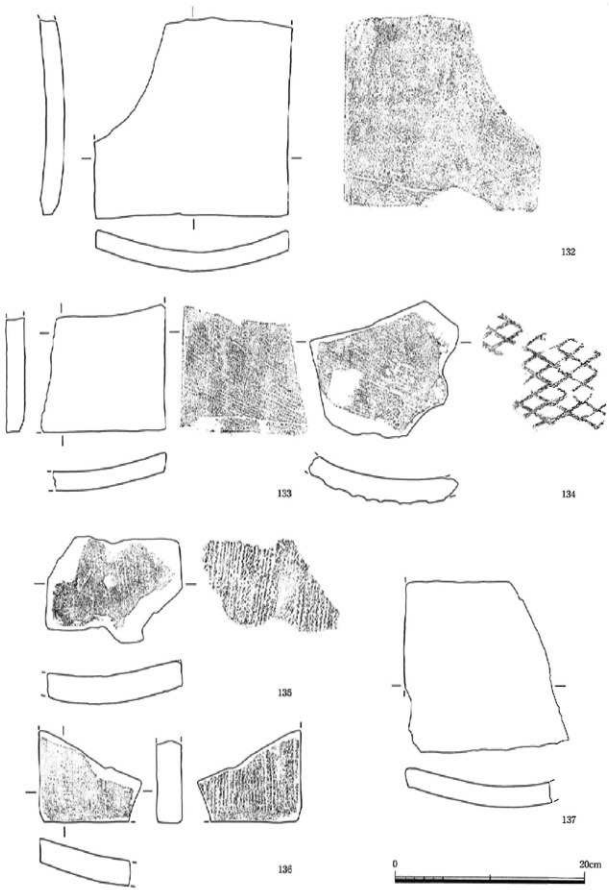


図95　第３－ａ面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑦

られる。表面にはノミ状の当たったような痕跡が見られるが、平らに加工したものと思われる。

これらの石以外に、長さ5～21cm未満、幅4～19cm未満、厚さ3～14cm未満、重さ約100g～7kgの大きさの流紋岩、花崗斑岩、輝石安山岩、砂岩、緑色片岩などが約50点出土している。

これらの内、明確な加工痕跡の見られるものは少なく、殆どが自然石と考えられるものである。

方形区画溝内用地からは直径20数cmの木の切り株（図版41－428）が出土している。

株の上面や側面の1箇所は平らに切られているのが観察された。また、焼けて部分的に黒く炭化している状況も見られた。この木の株には、鉄釘が一定範囲内に5本打ち込まれている。釘の断面形は、錆のため不明である。

以上のことから、方形区画溝から出土した遺物は15世紀から16世紀にかけての時期に集中している傾向が見られた。特に備前焼擂鉢、甕と瓦の占める割合が高く、鋳造関連と考えられる焼土塊などが出土しているのが特徴的である。

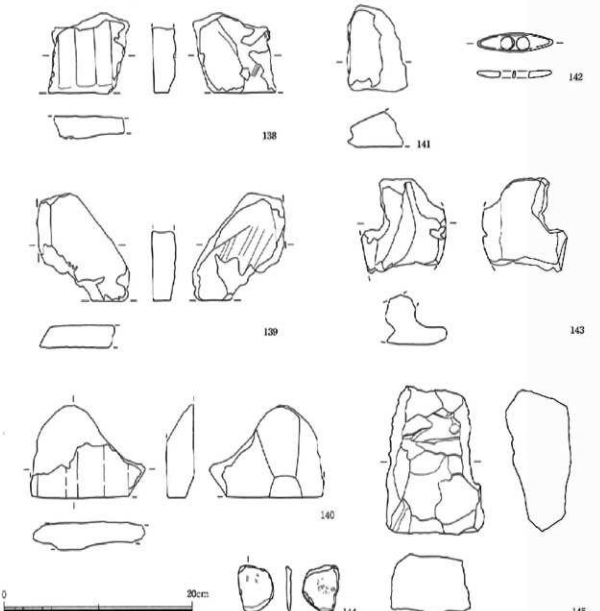


図96　第3－a面方形区画溝（遺構30）出土遺物⑧

13井戸（図80・98）

13井戸は、調査区中央部の東側で検出した、南北方向に長い楕円形を示す素掘りの井戸である。

13井戸の検出長径約1.9m、短径約1.4m、深さは約1.0mを測る。断面形はオーバーハングした部分も見られるが、すり鉢状を成す。埋土は、上層が暗灰黄色粘質シルト、中層中央部はすり鉢状を成し、黄灰色および灰色細砂混じり粘質土で土器片を含む。中層外側部は灰色粘質土と粗砂が互層を成す。

下層は灰色粗砂、最下層は緑灰色シルトで湧水層である。堆積状況から、埋没と掘削を繰り返し使用していたが、廃絶後河川の増水、洪水などで埋没したものと考えられる。

埋土内中層からは、瓦器小皿、瓦器椀片、土師質小皿、青白磁片、須恵質すり鉢片、常滑焼片などが出土した。出土した遺物から、13井戸の主要な機能時期は13世紀前半頃で、14世紀頃には廃絶したものと想定される。

13井戸は、方形区画内の北側張り出し部で敷石建物の北側に位置することから、敷石建物に付随する井戸であると思われる。

14井戸（図80・98　図版30）

14井戸は、調査区中央部の西側で検出したやや南北方向に長い楕円形を示す素掘りの井戸である。14井戸の検出長径は約1.3m、短径約1.1m、深さは約0.5mを測る。断面形は浅いすり鉢状を成す。井戸底に薄い板が見られた。井戸枠、桶などの底であろうか。埋土は、上層が灰黄色ないし褐灰色シルト、中層中央部がすり鉢状に堆積しており黄灰色砂質シルト、下層中央部で井戸底の木板上層が灰黄色粘質シルト、下層外側部が灰白色砂質シルト、最下層が灰黄色砂層で湧水層である。

井戸底の板は、底面に敷かれた状態で出土しており、廃棄などによる混入ではなく、設置したものと思われる。井戸は住居域から離れており、また、浅い点などから、渇水期などの農業用溜め井戸として使用されたものと考えられる。井戸内から遺物等は出土しなかった。

410井戸（図80・98　図版30）

調査区の北東部で検出したやや東西方向に長い楕円形を示す井戸である。

410井戸の検出長径は約1.4m、短径が約1.2m、深さは約0.3mを測る。非常に浅いすり鉢状を成す。

遺構の上面は、削平を受けていると思われる。埋土は、上層が暗灰黄色粘質土で、ほぼ完形品の瓦器椀や土師器皿細片、土師質羽釜片が出土している。下層は黄褐色粗砂礫混じり土で、5cm大の礫を敷き詰めた様な状態である。上層から出土した遺物は主に瓦器椀で、完形に近いものがほぼ上面を向いていた。おそらく人為的に埋納された可能性が高い。

井戸の底は湧水層に達しておらず、下層に礫が多く見られることから、渇水期などの農業用溜め井戸として使用されたものと考えられる。出土した遺物から、410井戸の機能時期は12世紀頃に比定することができる。

13・410井戸出土遺物（図97　図版42）

13井戸からは極少量の6世紀代の須恵器杯、壺体部片と、瓦器椀、須恵質甕・鉢、土師器皿、土師質羽釜、国産陶器甕体部、輸入陶磁器、瓦片などが出土している。図化したのは中世の遺物のみである。

146・147は土師器皿、148～159は瓦器皿、160～163は瓦器椀、164～166は輸入陶磁器、167は須恵質

鉢である。瓦器皿は148・155のように浅めのものもあるが、全体にやや深めで底部に丸みを持つものが多い。暗文が明確に観察できるものは少ないが、見込みに平行線状（148・149・152）や格子状（151）の暗文が見られる。

瓦器椀は見込みの暗文が平行線状で、高台断面形が逆三角形状を呈する。時期は、II－２～３期からIII－１～２期にあたると思われる。

164は12世紀後半の白磁碗、165は15世紀の龍泉窯系青磁皿で、碁笥底である。

166は13世紀第１四半期の白磁碗Ⅴ類の底部破片である。167は須恵質鉢で、口縁端部に拡張があまり認められない、第II期第２段階にあたると思われ、12世紀末葉から13世紀初頭になる。

168は土師質羽釜口縁部片である。くの字状に折り曲げた口縁部の特徴で河内Ｂ１ｃ型とＢ１ｄ型の中間的な形態をなし、12世紀から13世紀にかけてのものである。

図版42－434・435は常滑焼甕体部破片であり、花の様なスタンプ文が見られる。

出土した輸入陶磁器には、１片だけ15世紀の遺物が混じるが、おおむね13井戸は13世紀前半の時期に相当するものと考えられる。

410井戸からは瓦器椀、土師器皿細片、土師質羽釜体部破片が出土している。

169～171は瓦器椀である。これらはII－１～２期とII－３～III－１期のものが主をなす。12世紀に相当する。

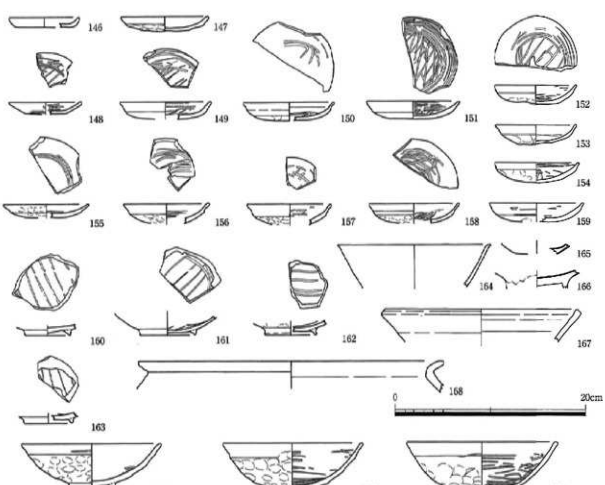
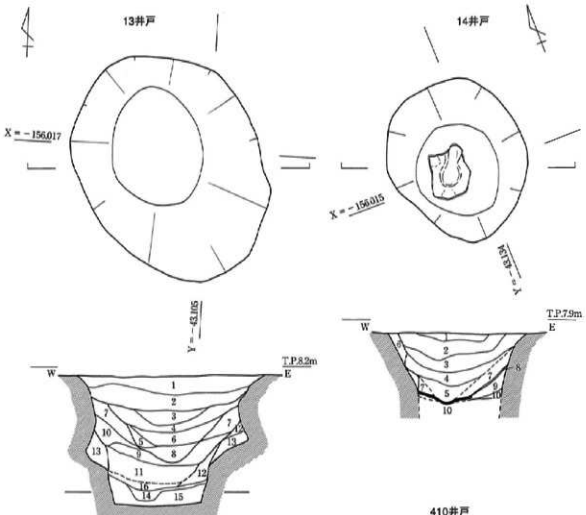


図97　第３－ａ面13・410井戸出土遺物



13井戸
1．2.5Y　5/2　暗灰黄色　粘質シルト
2．2.5Y　4/2　暗灰黄色　細礫混じり粘質シルト
3．2.5Y　4/1　黄灰色　細礫混じり粘質シルト（土器片含む）
4．2.5Y　5/1　黄灰色　粘質土（細砂混じる）
5．5Y　5/1　灰色　粘質土（土器片・炭含む）
5．5Y　4/1　灰色　粘質土（土器片含む，細砂混じる）
7．5Y　4/1　灰色　細砂混じり粘質土
8．10YR　4/1　褐灰色　粘質土（細砂混じる）
9．10YR　4/1　褐灰色　砂混じり粘質土
10．5Y　5/1　灰色　細砂混じり粘質土（土器片含む）
11．7.5Y　5/1　灰色　砂砂
12．10Y　5/1　灰色　礫砂混じり粘質土
13．7.5Y　5/1　灰色　礫砂混じり粘質土
14．10YR　6/6　明黄褐色　砂
15．10G　6/1　緑灰色　シルト
16．7.5Y　5/1　灰色　シルト
G．7.5GY　7/1　明緑灰色　砂質土

14井戸
1．2.5Y　6/1　黄灰色　粘質シルト（Fe含む）
2．7.5YR　6/1　褐灰色　シルト（Fe含む）
3．7.5YR　7/1　明褐灰色　シルト（Fe含む）
4．2.5Y　6/1　黄灰色　砂質シルト
5．2.5Y　6/2　灰黄色　粘質シルト
6．2.5Y　7/4　浅黄色　砂質土
7．10YR　7/1　灰白色　砂質シルト（下層に木質片あり）
8．10YR　5/1　褐灰色　粘質シルト
9．10YR　7/1　灰白色　砂質シルト
10．2.5Y　6/2　灰黄色　砂

410井戸
1．2.5Y　4/2　暗灰黄色　粘質土（土器含む）
2．2.5Y　5/3　黄褐色　粗砂礫混じり土（小礫多く含む）

図98　第３－ａ面13・14・410井戸平・断面図

28・29自然流路（図80・99）

調査区西部の微高地から南側の谷状に低くなる南西部で、自然流路跡を検出した。

層位的には、方形区画溝が造られる以前のものに相当する。調査区南西部の谷状に低くなる部分では洪水砂層が厚く堆積しており、幾度となく洪水・増水等に見舞われたものと思われる。

28・29自然流路は北東から南西方向に伸びるものである。29自然流路は途中で途切れるが、28自然流路は（その5）調査区へと伸びている。（その5）調査区の第3面で検出した163自然流路に続くものである。28・29自然流路の幅には振幅が見られ複雑な平面形を呈する。また底部は起伏に富んでおり、溝の深さや断面形態に一様性が見られない。自然流路の検出幅は約1.0～1.8m、深さは約0.2mを測る。検出長は約12mであるが、（その5）調査区で検出した163自然流路の検出長を含めると約85mになる。

埋土は、にぶい黄橙色系粗砂とにぶい黄褐色系砂質シルトが互層を成して堆積している。下層には鉄分沈着が顕著に見られる。幾度となく流水と堆積を繰り返した流水堆積の状況が看取される。

自然流路内からは、須恵質土器の小片などがわずかに出土している。

北側遺構（図80・100）

調査区の北東側で溝、不定形土坑、ピットなどを検出した。遺構の上層が大和川の洪水砂などにより削平をうけているため、全容を把握できるものは少なかった。また、遺構は洪水砂によって埋没したらしく、遺構内の埋土として、砂粒を含むにぶい黄褐色粘質シルトや灰黄褐色砂質シルトなどの洪水砂が堆積しているものがほとんどであった。

443溝は北北西から南南東方向に伸びる溝である。北側は削平されており確認できなかった。

検出幅は約40cm、深さは約5cmで、検出長は約4mを測る。埋土内からは土師器小皿などの小片が出土した。

445溝は調査区の北東隅から南西方向に伸びる溝である。途中途切れるが、457溝に続くものと思われる。457溝は東西方向にやや湾曲しながら伸びる溝である。

いずれも、検出幅は45～50cm、深さ3～10cmを測る。検出長は約15mになると思われる。445溝埋土内からは瓦器椀、土師質羽釜などの小片が出土した。

475溝は東西方向に伸びる溝で、両端の延長は不明である。検出幅は一部で広くなる所も見られるが、約40～200cm、深さ約10cm、検出長は約10mを測る。遺物等は出土しなかった。

いずれも溝内埋土の堆積状況から、一過的に流水した跡と考えられる。

溝の他に、周辺ではピットや浅いいびつな不定形を呈する土坑などが多く見られた。

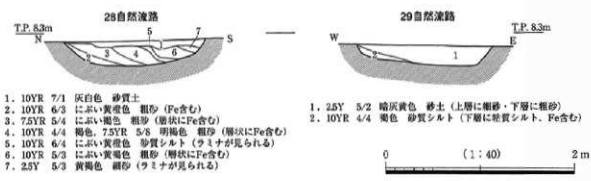


図99　第3－a面28・29自然流路断面図

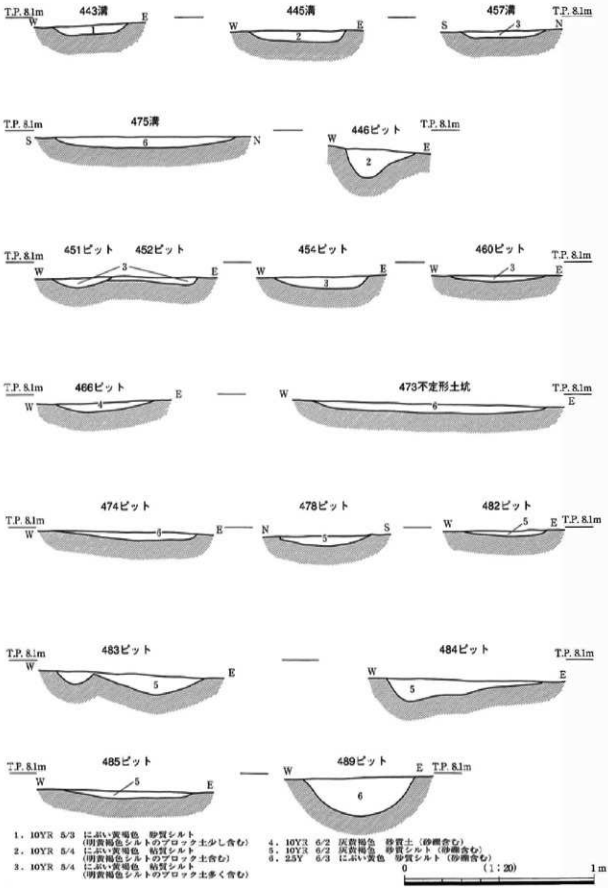


図100　第3－a面遺構断面図①

いずれも洪水砂などで上層が削平を受けているため不明瞭であるが、建物を構成するピットの可能性があるものも、幾つか見られた。

446ピットは、445溝の西側で検出されたものである。直径約40cmの円形ピットで、深さは15cmを測る。断面形はすり鉢状を示す。埋土は溝内埋土と同様に、にぶい黄褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

488・489ピットは、410井戸の周辺で検出されたピットである。

488ピットの検出径は約30cm、489ピットの検出径は約60cmを測る。深さは20cm程度である。断面形は、緩やかなすり鉢状を示す。埋土は、やや砂礫を含むにぶい黄色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

この他、建物のピットであった可能性のあるものとして、451・452・483・484ピットなどが上げられる。

473不定形土坑は、475溝に近接して検出されたものである。やや歪んだ楕円形を呈するもので、検出径は約1.2mを測る。深さは5cm程度で浅いものである。埋土はやや砂礫を含むにぶい黄色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

この他、浅いいびつな不定形を呈する土坑も幾つか見られた。検出長はおおむね50cm程度のものが多く、大きいものでは約1.0mを測る。深さは5cm程度であるが、約15cmほどのものも見られた。断面形は浅い皿状を示す。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質土などである。

地面の窪地などに洪水砂などが堆積したものと考えられる。いずれも遺物は出土しなかった。

441方形土坑（図80・101）

441方形土坑は、調査区北端中央部で検出した土坑である。

北側は削平をうけ検出できなかったが、短辺約3m、残存長辺約7mの長方形を示す。長辺は真北から東に約13°傾くものである。壁は、ほぼ垂直に掘られている。深さは約20cmと浅いが、底部には凹凸が見られず、平らである。

埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトで一連の遺構の埋土となっている洪水砂である。規則的な形態を示すことから粘土取り跡ではないかと思われる。

埋土内からは瓦器椀、土師器皿、須恵器甕片、備前焼甕片、瓦片などが出土した。

洪水砂の混入物であろうと思われるが、おおむね中世から近世に相当するものである。

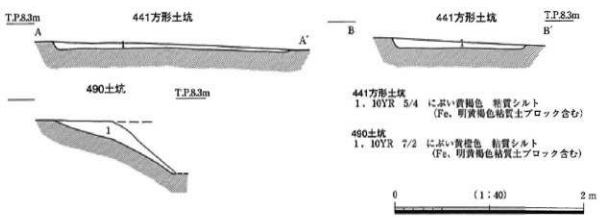


図101　第3－a面遺構断面図②

490土坑（図80・101）

490土坑は、調査区北側西端部で検出したものである。

北側は削平を受け、検出できなかったが規辺約２m、長辺約３mを測る。明瞭な角を有する三角形ないし方形を呈する土坑である。深さは北側に向かって一気に深くなり、最深部で約１mを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトで一連の遺構の埋土となっている洪水砂である。

埋土内からは瓦器椀、土師器皿、陶磁器片などが出土した。

490土坑の東辺は、真北から東側に傾くものであることから、441方形土坑同様に粘土取り跡ではないかと思われる。

近年の発掘調査で、大和川を挟んだ大阪市東住吉区刈田[6]で鋳造関連遺構が検出され、「あびこ鋳物師」の拠点ではないかと考えられている。

大和川今池遺跡の既往の調査においても鋳造関連の遺物等が見られ、（その５）調査区第２面では大河川上面で粘土取り跡が見られるなど関連遺構が検出されつつある。

今回検出した方形土坑なども「あびこ鋳物師」に関連する粘土取り跡ではないかと思われる。

490土坑出土遺物（図102）

瓦器椀が少量出土している。172～174ともにII－２～III－１期の12世紀後半頃と思われる。

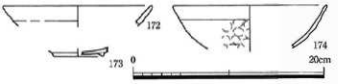


図102　第３－a面遺構出土遺物

第３面（図103）

第３－２層の暗灰黄色砂混じりシルトおよび灰オリーブ色シルト層を除去し、検出した面を第３面とした。第３面については、同一面で数多くの遺構を検出したが、同一面で時期的にも、また遺構の性格上にもやや相違が見られる遺構が見られることが判ったため、既往の調査結果と照合して、建物跡を中心とする遺構を第３面とした。

第３面は西側の微高地が高く、南側および東側に向かって谷状に低くなる様相を示す。調査区の北側に向かって徐々に低くなる。上層の第３－２層は谷状に低くなる南側および東側で厚く堆積しており、西側の微高地では第３－２層の堆積はほとんど見られなかった。

第３面では、西側の微高地を中心として多数のピットと土坑、井戸、溝などを検出した。ピットの多くは掘立柱建物の柱穴で、微高地上を中心として集落を形成していた様子が看取できた。検出面は、T.P.8.15～8.25m前後を測る。

各遺構および包含層から出土した遺物として、瓦器椀・皿、土師質皿、須恵質すり鉢、土師質羽釜などがある。第３面の時期は、検出された遺構、遺物から鎌倉時代から室町時代頃に相当するものと考えられる。

掘立柱建物（図104）

調査区西側の微高地で数多くのピットと土坑、井戸を検出した。これらのピットは浅いものが多く、また、埋土として洪水砂を含んでいるものも多く見られることから、本来の遺構面は上層の影響を受けて削平されていると推測される。

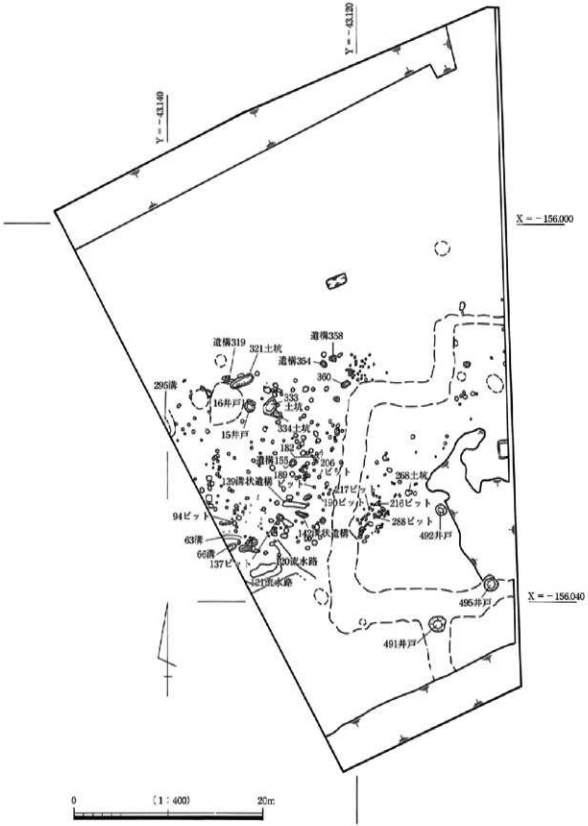

Y＝－43,120
Y＝－43,140
X＝－156,000
X＝－156,040
遺構319
321土坑
遺構358
遺構354
360
295溝
16井戸
333
土坑
15井戸
334土坑
182
遺構155
206
ピット
189
ピット
139溝状遺構
217ピット
190ピット
268土坑
216ピット
288ピット
94ピット
142溝状遺構
492井戸
63溝
66溝
137ピット
120流水路
121流水路
495井戸
491井戸
0
（1：400）
20m

図103　第3面

建物のピットとして不明瞭なものもあるが、多数のピットの中から、計17棟の掘立柱建物と柵列を復元することができた。さらに多くの建物の存在が考えられるが、復元は困難であった。掘立柱建物の棟方向には幾通りかの方向性が見られることなどから、建物の配置に際しては、規則性があったものと考えられる。建物の配置については本文中で考察を加えるものとし、ここでは検出状況を中心に記述する。

建物1（37・41ピット、P－1、P－2）（図104・105）

調査区の西端中央部で（その5）調査区と（その6）調査区にまたがって検出された掘立柱建物である。（その5）調査区では第4面で検出した掘立柱建物aにあたる。

建物の規模は東西1間（2.6m）×南北1間（2.2m）の東西棟で、主軸方向はほぼ正方位を示す。柱穴間は東西列が平均2.6m、南北列が平均2.2mを測る。建物ピットの検出形は隅丸方形を示す。長辺は約70cm、短辺が約50cm、深さは10～22cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトが主を成し、柱痕は黄褐色粘質シルトブロックを含む暗褐色粘質シルトである。37ピットでは柱穴の中に、径約10cmの柱痕が見られた。ピット内からは遺物は出土していない。

建物2（344・335・332・348・351・355・193・407ピット）（図104・106）

ピット集中域の北側部で検出された掘立柱建物である。

建物ピットが未確認な部分もあるが、東西3間（5.6m）×南北2間（3.4m）の東西棟になると思わ

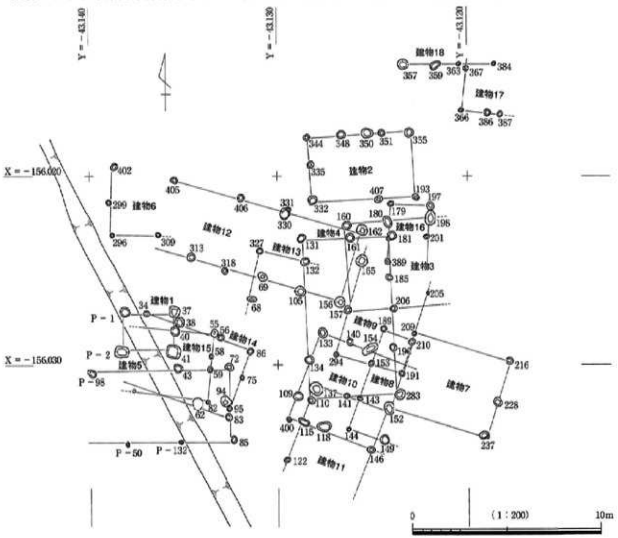


図104　第3面掘立柱建物配置図

れる。主軸方向はN－4°－Wである。柱穴間は東西列が平均1.8m、南北列が平均1.7mを測るが、柱間にはややばらつきが見られる。ピットの検出形は、方形気味のややひずんだ楕円形を呈する。建物ピットの検出長径は40～50cm、短形は30～50cm、深さは4～20cmを測る。埋土はにぶい黄橙色ないし黄褐色砂礫混じり粘質シルトが主を成す。遺物は、335ピットから瓦器椀片（Ⅲ期）などが出土した。

建物3（157・160・180・198・206ピット）（図104・108）

建物1の南側で検出された掘立柱建物である。

建物のピットが未確認な部分もあるが、東西2間（5.2m）以上×南北2間（4.6m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－4°－Wである。柱穴間は東西列が平均2.2mを測るが、柱間にはややばらつきが見られる。南北列では中間の柱穴が検出されなかったため、詳細は不明である。ピットの検出形はやや方形気味に不整形な円形ないしやや不整形な楕円形を呈する。建物ピットの検出径は30～40cm、楕円形のものは短形が40～70cm、長径は約70cmを測る。深さは6～12cmである。埋土は暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト、黄褐色礫混じり砂質土が主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物4（131・161・181・110・185・190・283・134・105・141・206ピット）（図104・106）

建物1の南側で建物3に重複して検出された掘立柱建物である。

建物ピットが未確認な部分もあるが、東西2間（4.6m）×南北4間（8.8m）の南北棟になると思われるもの。主軸方向はN－2°－Eである。柱穴間は東西列が平均1.8～2.5m、南北列が平均2.0～2.8mを測るが、柱間にはややばらつきが見られる。ピットの検出形は、方形気味の楕円形を呈する。建物ピットの検出長径は40～50cm、短径は約30cm、深さは5～16cmを測る。埋土は暗灰黄色砂混じりシルト、黄褐色砂質土が主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物5（43・72・94・85ピット、P－98、P－50、P－132）（図104・107）

建物1の南側で、（その5）調査区と（その6）調査区にまたがって検出された掘立柱建物である。

建物の西南部が一部不明瞭ではあるが、東西3間（7.4m）×南北2間（4.0m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向は正方位を示す。柱穴間は東西列が平均2.6m、南北列が平均2.0mを測る。ピットの検出形は小ぶりで方形気味な円形を呈する。検出径は20～60cm、深さは4～16cmを測る。埋土は暗

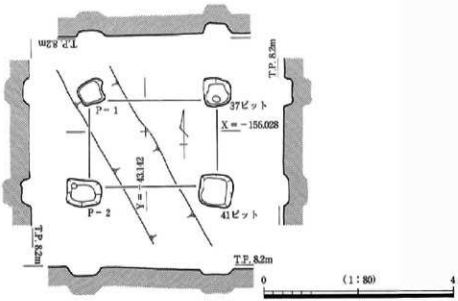


図105　第3面建物1平・断面図

灰黄色粘質シルト、灰黄色粘質シルトが主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物6（402・299・296・309ピット）（図104・107）

建物1の北側で検出された掘立柱建物である。

建物の北部および東部で不明瞭な部分もあるが、東西1間（2.4m）以上×南北2間（3.6m）以上の建物になるものと思われる。主軸方向は正方位を示す。おそらく東西棟になると思われる。柱穴間は東西列が平均2.4m、南北列が平均1.8mを測る。建物ピットの検出形は小ぶりな楕円形を呈す。検出短径が20～36cm長径は約45cm、深さは4～10cmを測る。埋土は黄灰色礫混じり砂質シルトが主を成す。

ピット内から土師質皿片が出土した。

建物7（209・191・152・238・228・216ピット）（図104・110）

建物4の東側で検出された掘立柱建物である。

建物ピットが未確認な部分もあるが、東西2間（5.2m）以上×南北2間（4.2m）以上の東西棟になると思われる。主軸方向はN－17°－Eである。柱穴間は南北列が平均2.2mを測る。東西列については中間のピットが検出されなかったため、不明である。建物ピットの検出形はやや方形気味な楕円形を呈す。建物ピットの検出長は1辺が約50～55cmの方形あるいは長径約25cmで、深さは10～30cmである。

埋土は暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト、黒褐色粘質シルトが主を成す。遺物は、216ピットから瓦器椀、土師器皿などが出土した。

建物8（189・153・143・144・149・210ピット）（図104・110）

建物7の西側で建物4、建物7に重複して検出された掘立柱建物である。

建物の北側について不明瞭な部分が多いが、東西1間（2.0m）以上×南北3間（4.8m）の南北棟になると思われる。主軸方向はN－20°－Eである。柱穴間は東西列が平均2.0m、南北列が平均1.8～2.0mを測る。建物ピットの検出形は小ぶりな楕円形を呈し、検出径は20～40cmを測る。また、一辺約45cmを測る方形気味の楕円形を呈すものも見られた。深さは5～16cmを測る。埋土は暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト、黒褐色砂混じり粘質シルトが主を成す。ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物9（165・157・294・153・191・209・205ピット）（図104・111）

建物7の西側で建物4、建物7、建物8に重複して検出された掘立柱建物である。

建物の北側について不明瞭な部分が多いが、東西2間（3.6m）×南北3間（5.6m）以上の南北棟になるものと思われる。主軸方向はN－17°－Eである。柱穴間は東西列が平均1.8m、南北列が平均2.2mを測る。建物ピットの検出形は円形ないし楕円形を呈す。建物ピットの検出径は20～35cm、深さは5～18cmを測る。埋土は暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト、明黄褐色砂質土が主を成す。

ピット内からは遺物は出土しなかった。

建物10（140・133・134・109・400・118・146・154ピット）（図104・110）

建物7の西側で建物4、建物7、建物8、建物9に重複して検出された掘立柱建物である。

建物の東側で不明瞭な部分が多いが、東西2間（5.0m）以上×南北3間（5.0m）の東西棟になるものと思われる。主軸方向はN－22°－Eである。柱穴間は東西列が平均2.0m、南北列が平均1.6～2.0mを測る。南側では柱穴間がやや狭くなる様相が見られることから、南北が2間で庇が付くものであるとも考えられる。建物ピットの検出形は、方形気味の楕円形を呈すが、小さい円形のものは柱痕の残るものと思われる。ピットの検出長径は50～80cm、短形は30～50cmを測る。小円形のものの検出径は、約20cm程度である。深さは6～20cmである。遺物は、146ピットから瓦器椀、土師器皿などが出土した。